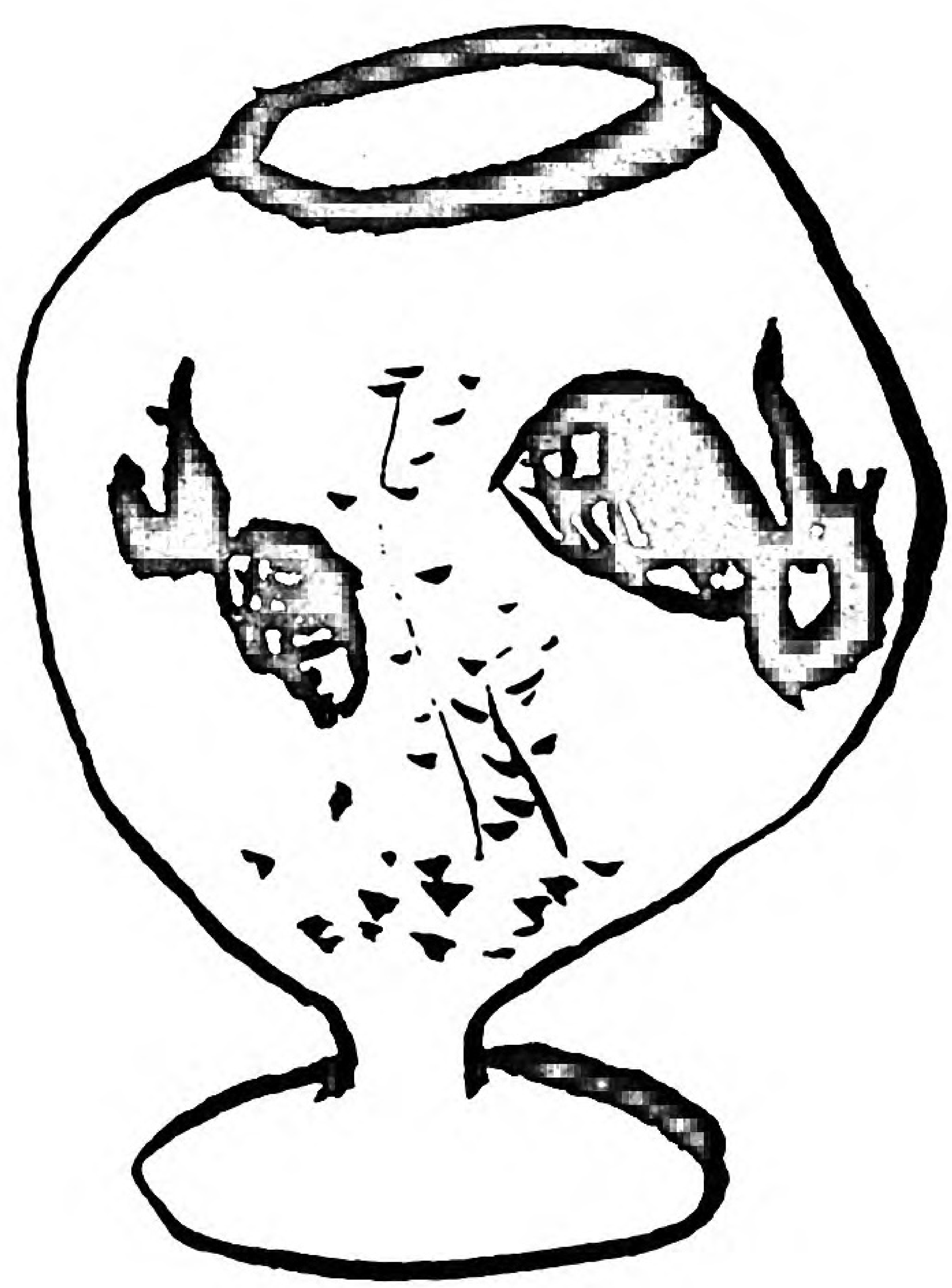
女人藝術

八月号



別冊附録「女人大衆」



天下一品
日本一
キッコーマン醤油
マンジョウ味淋
資本金三千萬圓・製造高五十萬石　野田醤油株式會社



女人藝術八月號 目次

——[illegible]——

無錢記



全女性進出行進曲再募集!!

別册附錄「女人大衆」



エル、セフリイナは一八八九年、ロシア、オレンブルグ縣に生れた。父親はタタール（韃靼人）母親は百姓女であつた。彼の女は土地の小學校、及びオムスクの中等學校で學んだ。そして教師をしてゐたが一九〇七年から二年程劇場に働いた。やがてオルスキイ郡の圖書館に行つて社會教育に從事し、縣會議員に選擧された。

一九一七年Ｓ・Ｒ黨に加盟したが、一九年、鐵道勞働者と共に脫退すると、翌年モスクワに出て、高等師範學校に入學した。

教育人民委員會から、シベリヤ地方に派遣されて、シベリア國立圖書出版部の秘書になつたのは一九二一年だつた。そこで彼女は「兒童週刊」に論文を書き、また新聞「ソビエツカヤ・シビリ」に小說を書いた。其うち「パブルシキンの一生」といふのが、意外な好評を博して、事後雜誌「シベリヤの火」等にも盛に書いた。一九二三年後モスクワに住み、現代はレーニングラードに住んでゐる。彼女の著作は一九二六年ソビエツトの國立出版所から五冊の創作集となつて出版されたが、うちでも「堆肥」、「ウイリネイヤ」、「權利の破壞者」「親無し子」等有名である。



××と婦人の自覺——ロシヤ誌より

長谷川時雨著　近刊

定價金壹圓參拾錢

長篇 處女時代

裝幀　三上於菟吉氏
口繪　池田輝方氏
挿繪　池田蕉園女史
挿繪　廣嶋晃甫氏

內容
處女時代
呪の家

「呪の家」――は古き時代の奇しき戀愛葛藤を描き、
「處女時代」――は現代の哀切なる悲戀を描く。

東京市麹町區下六番町十
平凡社發行
振替東京二九六三九
電話九段一六一六四



六月二十八日女人藝術誕生祭の集まり——小石川植物園にて　（記事參照）

前列踞んだ人向つて左から、八木秋子、英美子、北川千代、林芙美子、大竹せい子、長谷川時雨、生田花世、松村眞子、戸川靜子、林禮子、堺眞柄、西村園子
後列立つ人、向つて左から、堀江かど江、スコット沼蘋女、島本久恵、大原アヤ子、上田文子、永島暢子、素川絹子、ベツテイ・スコツト、熱田優子、小池みどり、野溝七生、神近市子、今井邦子、板垣直子、樺[illegible]千代、葵イツ子、白石清子、秋木明子、大村嘉代子、弘津千代の諸氏。



八月中旬ハワイで開催される全米水上競技大會には日本から最初の女子水泳選手が四人出場することになりました。
左から　前畑ひで子(平泳)　菊池君子(背泳)　中村由喜惠(自由型)　飯村昌子(平泳)の諸嬢です。



六月二十八日女人藝術誕生祭の集まり――小石川植物園にて　（記事參照）

前列踞んだ人向って左から、八木秋子、英美子、北川千代、林芙美子、大竹せい子、長谷川時雨、生田花世、松村喜子、戸川靜子、杉稲子、堺眞柄、西村園子

後列立つ人、向って左から、堀江かど江、スコット沼蘋女、島本久恵、大原アヤ子、上田文子、永島暢子、素川絹子、ベッテイ・スコット、熱田優子、小池みどり、野溝七生、神近市子、今井邦子、板垣直子、陸山千代、葉イツ子、白石高子、秋本明子、大村嘉代子、弘津千代の諸氏。



八月中旬ハワイで開催される全米水上競技大會には日本から最初の女子水泳選手が四人出場することになりました。
左から　前畑ひで子（平泳）　菊池君子（背泳）　中村由喜恵（自由型）　飯村昌子（平泳）の諸孃です。

第一輯

時雨脚本集



内容

ミイの生れた朝　暗夜
月に住む人　氷の雨
つくしの空　犬
業火の洗禮　手兒奈
北國藥研谷　西の空

定價金貳圓

――ある時期を一轉機として、彼女らしい甦生が努められた。そこに夢の床から離れようとするものの苦しさと悩ましさとがあり、それを生き拔かうとするものの煩ひと惑ひとが來た。僕は彼女のこの葛藤を見て來た。そして彼女はかなり十分に內省と認識とに月日を費やしたのだつた。その效果はこの數年間に徐々に現はれ、若し、性格的な宿癖に、內なるものを偶けられることがなくば、今後自然な發展を示すことが出來るであらうと信じてゐる、此の集に盛られたものは、多くこの再生期――展開期の作だ。一個の女性が、いかに生活の望みと空しさとのすがたを見たか、光りと無知との交錯を見たか、ここに讀者の興味を繫けることは慥かに出來る――

三上於菟吉氏序

發行所　女人藝術社

振替東京七五八二五

NYONINGEIJUTSU. 8



全女性進出行進曲を募る!!

――すでに女性は重き足枷を蹴放して、暗き心の牢獄を脱出した。今やわれ等の前にあるのは陽光雨の如く降りそゝぐ街頭である。轟音耳を聾する工場である。屹立して天空を摩する思想の尖巓である。あらゆる人類に伍して、われ等はすべての生き動くものの世界へと前進する。友よ、かかる時われ等の爲めに、讃め、勵まし、歡こび、突き進ませる「歌」がなければならぬ。疲憊して路傍に仆れた「母」と「娘」とをも蘇へらせる「歌」がなければならぬ。激越にして而も優雅に、燦爛として而も素朴に、裸らはにして而も賢こき「歌」がなければならぬ。本社が「女性の歌」を偏ねく募る所因はここにある。全國同性の寄稿を待つ!

I 應募者女性に限る

II 歌詞隨意 但し群衆の合唱に適するもの

III 再締切 昭和四年八月十五日

IV 賞金 壹等金貳百圓 貳等五拾圓

V 附屬賞品 1 雜誌三ケ月券二十枚・メヌマポマード三十個文藝春秋社 2 圖書券百枚 平凡社

3 同 改造社　4 同 新潮社　5 半襟百掛 高島屋呉服店　6 十字屋樂器店

VI 應募歌は十月號誌上にて發表。

VII 當選歌詞は作曲を附し、全國女學校、及工場に寄贈す。

VIII 作曲者の選定を讀者の指定に待つ。各自推選せる作曲者氏名を別行規定の欄內に記し投票を乞ふ。

選者は知名なる各階級の女人を網羅す

女人藝術社

全女性進出行進曲第一回成績發表

わが社が賞をかけて偏ねく募つた「全女性進出行進曲」應募歌稿は、締切日に至つて百數十篇を算した。社中嚴選の結果、稍上位を〆むべきものの三篇を得しのみ、美辭麗句に富むもの、內容の卓拔なるもの、もとより少なくなかつたが、それ等は日常高唱に甚だ不便で、從つてわが社今回の擧に適當せず、遺憾ながら採ることが出來なかつた。

こゝに佳作と推す三作に慰勞の意にて薄謝を贈呈す。

東京市外杉並町　米田三千枝氏
神奈川縣鶴見　坂本春枝氏
女人藝術社內　小池みどり氏



強い女

エル・セイフリナ

パアウエルが醉つ拂つたやうな風で家へ這入つて來た。顔に締りの無い微笑が浮び、眼は醉眼そつくりである。ウイルカは吃驚した。一ヶ月同棲したが一度も醉つた彼を見なかつた。それに酒を飲まぬ男と聴いてゐた。

「パアウエル、どうしたの？　誰かの家で飲んだの？」

「村長がど偉らい通報(しらせ)を持つて來たよ、それを聴いたムジツク達は丸で酒に醉つたと同然さ。ツアリを廢したとよ」

「エツ、ツアリを、は、廢したつて？　そりやどうして？　次のツアリは誰なの？」

「丸ツきり廢しちやつたんだ。俺達やツアリを戴かずに生活しとるのだ」

ウイルカは腰掛に腰を下ろした。

「パアウエル、お前さんは戯談いふ人ぢやなし……」

「戯談どころぢや無いよ。村長が紙包を持つて來たのだ、學校の女先生の處へ使を遣つたから、もう直ぐ皆集つて先生が讀み上げるだらう。もうツアリが無いのだ。一人は位を退

き、二人目は辭退するし、要するに總てのツァリを廢したのだね。明日市街地へ行つて委はしく確めることにしやう。」と言つて、また急に言葉を附け足した。喜びの余り口が辷つたのである。

「俺は知つてゐたのだ……俺達はこれを待つてゐたのだ。市街ぢやもう嗅ぎつけてゐたのだよ。俺は二人の友達と內證で話をしてゐたのだ。がね、どうだい、ウイルカ、ムジック連中少しも驚かないのだ。實をいふと俺もこりや意外だつたね。先生等もちつとも驚かないんだ、たゞどうしてツァリに勝つたかつて不思議がつてるのだ。」

この村あ寂しい處にあるから、誰に支配されたつて同じよ、けれど他の村ぢあきつと大騷ぎよ。村の人に、私にだつて、ツァリのこと言はない方が好いわ、署長はどうなるだらう？ 矢張り勤續するか知らん？」

「そんな事はないよ、署長は逃げて、巡査は地下室に禁錮された」

まあ嘘をお言ひよ?!……。けれどこりや大變ね、一體どうした譯なの？ 私のプラトックはどこに在るか知ら、何時に集會で讀み上げるの？」

小學校に集つた人數は未曾有のものであつた。窓椽も玄關も校舍の附近も人で一杯である。

若い色の白い女教師が弱い震え聲で、……大ロシヤ帝國の〇〇を退くことは……と讀み上げた。

群衆の耳には、讀む言葉が切れ〴〵になつてはつきり聽えなかつた。で、ムジック達は動揺めき出し、一人がかう呶鳴つた。

「聽えねえだ、何にも分んねえ、ムジックに讀ませろッ」

群衆の中でもそれを引き取つて、

「文字讀めるムジックに讀ませろッ」

「分り切つてるだ、女の聲はキイ〳〵で、泣くにや好えだ、けんど、はつきり、高く讀めるべえ筈ねえだ」

「村の女だらまた好えぢや。が、あの先生のは蚊の泣く聲ぢや」

「さうだ、都會のぐにや〳〵聲ぢや」

「おい、誰が俺達の中で物識りだつぺえ？」

「兵士だ、兵士を前へ出せ、兵士なら分るだ。」

「さうだとも、前にゐるだね。今兵士の座るのは一番前ほかねえだ」

「「パアウエルが好え、彼奴えら物識りだ」

「パアウエル！ パアウエル！ どこにゐるだ？」

「早く讀み上げろッ。今度あ聽けるだ、咽喉が大けえからなあ」

パアウエルは、兩肩を聳かし、いかめしい顏をして、聲を張り上げ、明瞭に、宣言書と新聞記事を讀み出した。長い間讀んだ。この間緊張した靜さが教室を支配し、百姓の男も女も厚い默した壁のやうになつて一時間以上立ち通ふした。歸る時も非常に靜かで、低聲で話をした。たゞ眉毛のない女のやうな顏をした一人の兵が、群衆の中を走り廻り、せか〳〵した聲でかう語つた。

「下士卒といふ名稱はお廢止だ。今の敬稱は兵士といふんだ。下士卒と言つちやいけねえ。俺がマノフカに行つた時にな、あのアレクセイ・ペトローウイチの息子の奴、少尉で旗手だつた。一緒に車に乘つて行く中、俺が「ステパア、煙草喫ませろ」と言ふと、彼奴が俺に「俺はたゞのステパアぢあない、今將校だ、お前は下士卒だ、軍律を知らんな」と言やあがつた。その時皆のゐる前なので俺や眞赤になつて了つただ。もう一返わざと一緒に乘りてえもんだ。若し彼奴あア言ふたら、俺どうしてくれべえ。下士卒だと、怪しからん貴樣のおふくろを嚙み殺すぞと言つてやんべえ。下士卒は有つたがもう全くお終いだ」

この夜、パウエルとウイルカは長い間眠らなかつた。ウイルカが共同生活をしに來た時、彼の家には一個の寢臺しか無かつた。で、寢仕度をした時、パァウエルはかう訊いた。

「お前はどうする氣かね？　たゞ家政を始末しに來たのか、それとも、自分の夫の許に來たといふ氣分かね？」

ウイルカは、ちよつとためらつたが、軈て簡單に靜かに返事をした。

「どうでも好いわ、一緒に暮らし一緒に寢ませう。たゞアニユットカの前ぢやどうも好くないわ、もうアニユットカは大きいですもの」

「今もう寢てゐる」

「好くないことは同じよ。私しや赤の他人で、それに評判が惡いから、お父さんの爲めに耻しく思ふでせう。最初さう思ふとなかなか頭から拔けないものよ。まあ、だん〳〵馴れるでせう」

けれど、アニユットカはウイルカの愛撫に從はなかつた敵意を挾んだ眼でウイルカの振舞を見守つた。ウイルカが物を尋ねても返事をせず、罵り返へした。父のパァウエルが市街地（まち）へ彼女を連れて行つた時など、車の上から振り返つて、二人を送るウイルカをぢつと見た。それけ子供らしくない憎々しい眼差しだつたので、ウイルカの心は長い間苦しんだ。また、アニユットカの惡意を、自分の生涯に犯した罪の酬ひとも思つて見た。五才のセムカと三才のパニカは間もなく馴れて、生みの母にまつはつたやうに、ウイルカの袴にまつはつた。ウイルカは他の女達の不思議がるほど二人の子供を能く世話した。で、アニーシヤはウイルカに出會つた時かう言つて笑つた。

「俺達は、鰥夫は婚禮せずにな、石女を子供のおふくろに雇ふたが好えと思ふだ。好いのが見つかるだよ」

しかしウイルカを嘲る聲は永く續かなかつた。パァウエルは無駄口を叩かないが、言ふ可き言葉を知つてゐる。一人二人の女をやつつけたので、皆な聲をひそめた。

ウイルカの眼差しは落ち着いて來たが、妙に動作が靜かになつた。話すことが少なく、度々長く考へ込むやうになつた。どうして人間の胸には滿足しない心がとぐろを卷いてゐるのか？　何を與つても極く稀れに大喜びする位なものだ。始終物足りなさを感じ、喜びをも辛らく考へる。

パアウエルは落ち着いた、仕事を怠らない、博識の男である。だから貧乏でも人が侮らずに敬遠しウイルカを氣の毒がつた。

アニユツトカが去つた夜、ウイルカは彼と共に寢た。パウエルは言葉で優しさを示そうとはせず、たゞその時「お前は私の愛人」だと、熱い溜息を洩らしながら言つた。そして捕へた鳩に對するやうでなく、結婚した正妻のやうに待遇した。ウイルカは喜びもし、また、何やら氣耻かしかつた。氣耻かしさが喜の情を抑えた。で、その當日から罪を犯した女の心持になり、他人の衣服を竊に着たやうで、見つけられたら、辱められ罵られてその衣服を剝ぎ取られるだらうと思はれた。かうした感情からパアウエルとウイルカの間に隔てが出來、或る時、彼女は神經をいらつかせ、耐え切れずに、例の通り飮み過し、夜中に叫び出した。

「お前さんはだね、何んで皆なの前でツアリのやうな橫柄な風をするのだよ？　私が見ないと思つてるね？　私を自分の側にひきつけて、私が喜んでゐると思ふの？　お前の物識り振りが癪だわ、厭に沈着た風が氣障で堪らないわ。私しや明日出て行く、お前さんを見るのが厭になつちやつた」

彼は靜かに革の詰襟服のボタンを脫づしながら脅した。

「默れッ、默らなきや犬を打つやうに打つぞ。醉つ拂つた女あ見られたものぢやない。ペーチカの上へ寢て動くなッ。醒めたら話をしやう。こつちから逐ひ出すかも知れんぞ」

聲を揚げはしないが、强くはつきりと言つた。二人の眼が合つた。彼の光のある眼が暗くなつた。ウイルカの眼のやうな熱がなく、ぼそ〳〵に乾いて、かゞやきが消えた。ウイルカも初めて自分の眼を伏せた。翌朝彼女は長い間室の中を步き、去らうとして去らなかつた。パアウエルは、平常の通り、話す必要のあることを話した。その夜、ウイルカは初めて男の肩に顏を當てゝ泣いた。

「私しやお前さんどういふ風に暮して行つたら好いか、自分で分らないわ。今のやうにしてゐりや、お前さんの足を洗つて上げて、その水を飮んでも好いと思ふが、また時に依ると、胸がむかついて、寂しくなつて、たゞもうお前さんの顏を見ないやうに、何處かへ逃げ出したくなるの」

彼は靜かに答へた。

「くよ〳〵考へるな、生きて居れ、生きて居れ。仕事をして、俺の子供達の面倒見て、自分の勉强もするが好い。俺やもう睡むたい。話は十分だ。俺や生れてからこんなに女の世話を燒いたことはないのだ」

二人はこんな風に生活した。親しんで褻れなかつた。長い話は話さず、夜も語らず、接吻は熱く愛の籠つたものだが言葉は極めて儉約した。

しかし、この夜は並んで寢て久しい間話し續けた。パアウエルがウイルカより多く喋つた。市街地のことや、ツアリのことや、町で

の風評などを話し、生涯のことも語り、地上の貧乏人に取り何故苦しい時代であるかを説き、彼は頗る若やいだ。ウイルカは母國語に近い語でうたはれる歌のやうに、彼の話を聽いた。歌の調子に感動するが、言葉は大分わからなかつた。

で、もう一返聽いて言葉の意味を諒解しやうと思つたが、晝間になるとまた少ししきや話さなくなつた。その時、彼は市街地へ行き二週間も家をあけ、金を使つたので、養はうとしたばかりの綿羊を賣ることになつた。ウイカルは怒つたけれども、言ひ出し得なかつた妻君ぢやなし、一時雇はれた家政婦ぢや仕方が無い、思ふ通りにするが好い。またもや、お互の間に隔りが出來た。

ウイルカは、パアウエルに對する熱情と愛慕の念を、彼の仕事の援助に打ち込んだ。

アクグイロフカ村は遠く離れてゐるので、カザック兵の暴力をまだ受けなかつた。けれども、ケルジヤック人とコジエミヤーキン及び五人の富農は、パアウエルの同志を壓迫し、カザックの陣營に行つては命令を受取つて來てゐた。村の貧農の中の十人とバラック生活者の八名は、市街へ送られ投獄された。ウイルカも亦訊問の爲め市街に召喚された。が、彼女はパアウエルに災を及ぼさぬやう控へ目に穩やかに答へ、たゞ白を切つた。

「何も知りませんわ、共白髮の女房ぢやなし、言はゞ情婦ですもの、取るも捨てるも自由でさ。今頃は、他の女とくつついてるでせう。何處にゐるのか風の便りもないのです。私しや御覽の通り身重で、それに二人の子供まで推しつけられたのです。何處にゐるか分つたら、吃度仕返ししてやりたいのです。默つてなどゐませんわ。訴へますわ。どうせ、あの男は私と一緒に暮らさないのですもの」

新任の郷の署長は拳固で卓を叩いた、

「嘘偽つけ、業つくばり女奴。お前があの男を見送つたのは皆な知つてゐるのだ」

「私しや見送つて、頼りない私と子供達を見捨てるなと頼んだのです。けれど何處へ行くのか、一と言も聽かなかつたのですわ」

三日間寒い留置所に置かれ、訊問されたが、飽くまで知らぬと言ひ通したので、持てあまされ釋放された。日を經るに從ひ腹の重さは增して行くが、ウイルカは秘密の場所で同志と逢つたり、早足に歩いたり、糊口の資を得るため勞働したりした。その時、パアウエルは二つの命令を遂行しろと言つて來た。一つは十露里を隔てた或る村へ書束を屆けること、他の一つに或るムジックを一週間かくまうことであつた。命令を受取つた時、ウイルカは嘆息したが、使者の痩せた老人にかう言つた。

「自分で行きますわ。遣る人が無い。敏しこさと、第一勇氣が必要ですから」

その村に病院があつたので、そこへ行く風をして十露里を歩いた。

歸りには、凸凹の雪道にやつと足を引き摺り、巧に痕を消して來た。

他の命令は一層困難であつたが、その男を地下室に忍ばせ近所の人にさえ嗅ぎ出させなかつた。

お互に逢ふことはむづかしかつた。村では溜息一つでさえ聽き取られ、庭に落ちてゐる新しい木片でさえ注意の目を惹いた。しかしパアウェル支隊がアクグイロフカ村に向つて進軍しつゝあるとの風評が傳はつた、と同時に、パアウェルは或る若者の口を藉りから言つて寄越した。

「若し同士諸君が後方から敵を壓迫し、暴動を起してくれたら好都合である」

ウイルカはこの通知を持つてバラックへ行つた。幾棟かのバラックは餘程以前に空屋になつたが、避難民や、浮浪人などが尙ほ住んでゐる。足早に歩いたが、耳と眼を働かして四邊りに注意した。誰にも逢はずに行きついた。大きな一つのバラックに、三人の獨身のムジックと四家族が住み、皆なボリシェヴィキーであつた。で、ウイルカは警戒せずに這入つた、けれども、直ぐに話を切り出さなかつた。

「今日は、ダリヤ伯母さんはゐるの？」

「こゝに居るよ、ウイルカ、どうしただ？」

「あのう、伯母さん處へ來たの、腹あ見てくれないか、産婆のとこへ行くさうだから分つてるだらう。何だか痛くつて息切れがするの。直きに生れるのかも知れない」

ダリヤはウフフと笑つた。

「見なくて好えだ。その腹ぢや二週間は持つだ。お前用事を話しなさろ、こゝにや他人がゐねえだ、直ぐ男達を呼んで來べえ」皆なが集つた時、ウイルカは疑ひを帶びた聲で言つた。

「さて、皆さん、仕事を初めなきやならない」と言つて咳をし、それから沈着な平らかな聲で、パアウェルの傳言を述べた。

ムジック達は、直ぐに返事をせず、暫く默つて考へたが、先づ第一に、色の白い優男のワシカ・ドレグンツオフが口を切つた。

「いゝや、タワーリシチイ、この仕事は俺達にや出來ねえだ。今、警戒嚴重だあから、起せねえだ」

白髪交りの五分刈り頭の男がそれに應じて、

「考へる餘地はねえだ。蚤のやうに押さえらるべえ」

「時機を待つが好え。味方の隊が村に近く來た時が好え。今は駄目だあよ」

ウイルカは立ち上り、額越しに睨めて、から訊いた。

「話はそれだけなの？」

「さうだ」

「これより外言ふことねえだ」

「仕事は旨く行きさうもねえ」

「同志の軍隊は向ふにゐるんだ。何んとかして俺達の方に來るが好え、その時や援けべえ。今どうにもなんねえだ」

「あァあァ、お前さん方は犬同然だ。女の私、しかも身重の私がお前さん方を教へなきやならないかねえ。無駄口ばかり叩いて、仕事をしやうとするともう餘裕が無くなり、後悔するのはお前さん方の手合だよ。それぢや駄目よ。お前さん達や私の兄弟だ、そりや本當に駄目よ。まだ命が惜しいの？　最後まで踏み止まるなんてお言ひだらう、人間の精神は恐怖の前にや弱いものねえ。お前さん達はやくざの人間だ。厭なら止すが好い。私しや他の人を集めるわ。私を信ぜずに、望めもしない運命を信じるのだね」

彼女の眼光は聽者の心を燒き且つ動かした、彼女は尙ほしつかりした聲で續けた。

「われ〳〵同志が歸つて來るでせう。その時お前さん方は顏が合はされるの？　まあ宜しい、女の私は獨りぼつちで身重だが、獨りで行つて事を起します。碌に食べ物も食べられず、ビク〳〵しても生きてゐたきやお生きなさい。もうカザックが來るだらう。カザックの足の裏を舐めたつて許されやしない。もう久しい前からお前さん方を嗅ぎつけてゐるのだ。それから同志の軍隊が來ても、どうせお前さん方はたゞぢや濟まされまい。まあ好いわ、話したつて仕樣が無いのだ」

彼女は扉の方へ行かうとした。ムジック達はふたゝびがや〳〵吸鳴り、ウイルカを罵しつたり、爭つたりしたが、結局、パアウエルの示した通り事を擧げるに決した。

ウイルカは晴れやかな顏をして外へ出た。困難な仕事を初めるといふ風でなく、大歡喜の中へいそいで行くやうであつた。白髮のガリ〳〵頭が笑ひながら言ふには、

「お前さんは女だけんど、丸で隊長か從軍僧かの代理といふものだ。えらくやつつけただ。長いお說教をしたものだ」

が、この隊長はやつと家に辿り着いた、途中腹の中で接戰が起つたのだ。けれども自分の產婆のカズリーハを呼びに行つた。

自分の家に歸つたウイルカは橫にならうとせず、强く齒を食ひしばつて室を步き廻つた。カズリーハが驚いて

「何んで默つてゐるだね？　聲出すが好え、聲出すが好え、輕くなるだ。こんな石のやうな女あ初めて見るだね。聲出さずに生まうとしとるだ」

ウイルカはちよつと微かに笑つた。そしてふたたび顏をしかめながら、切れ〳〵に言つた。

「喜んでこの世に生れて來るが好い。私しや永い間待つてゐたのだ……。聲出したくない、安々と生みたい」

そしてたゞ一度叫んだ。短く强く、痛さからでなく、喜ばしさからのやうに。生んでから、からだが云ひしれぬ程輕くなり、生れた子供の高い叫び聲を不思議さうに聽いた。

「あらッ、えら立派なのを生んだだねえ。大けえぞ、おやぢどんそつくりだ。お前さんどうもねえか？」

「いゝえ、見せておくれ！　男の子だ！
「どうして分つただね？　お前さんは賢いや。さあ凝なさろ、俺側で始末するだ」
　ウイルカが生れた男の子を見て喜んだのは束の間であつた。五日經つて同志からの通知を待つてゐた時、眞夜中に誰だか忙はしく輕く扉を叩いた。ウイルカが扉の方へ行つて、低聲で「誰」と訊いた。
　女のおろ〳〵聲で、
「早く開けて入れておくれ」
しかし聲の主のダリヤは中へ這入らずに、土間から小聲で訊いた。
「カズリーハは居るかね？」
「今日來て、泊つてゐるわ、どうしたの？」
「カズリーハはどこに居るだ？」
「ペーチカの上に寢てゐる」
「早く起して赤子を抱かせろ、お前さんは直ぐに走れ、畑を越して河の方へだよ、パルフエンがそこに待つてゐるだ」
「どうした譯なの？　私しやどうして赤ん坊を……」
「赤子どころか自分の命も無くなるだ。パアウエルに早く知らせにやなんねえ、遲れると罠に落ち込むだ。さあ仕度して早くカズリーハを起すだ。何んで立つてるだね」
「何んでそう直ぐに……」
「カザックが來ただ、今コジエミヤートフの家に集つとるだ。彼奴俺達の仕事を嗅ぎつけて密告しただ。そしてお前さんと、俺の人の名前だけ言ふたそうな。俺のはかくれた。早く走れ、あつ見つかりはしねえかな。ぢや畑通つて河へだぞ」
と言ひ捨てゝ闇黒(くらやみ)に姿を消した。ウイルカは搖籃の中から赤子を取り上げた。
「お婆あさん、お婆あさん……」
「お前さんどうした？　赤ん坊をペチカの上に？　わしの方へか？　さあ寄越すが好え」
　ウイルカ片身を割かれる思ひで酷く震えながら、赤子を老婆に渡した。顏をきつと引き締め、涙も流さず、溜息も吐かずに、手早くブラトックと半外套を被り、家から走り出した。
「ウイルカ、ウイルカ、どこへ行くだ？　おや〳〵氣でも狂つただかな」
　ウイルカが締めずに行つた扉の中へ、カザックと百姓達がどやどやとなだれ込んだ時、老婆は漸く了解した。了解して、落ち着いて見廻はし、泣き出した赤子をなだめ初めた。
「あら、らッらら、夜泣くでねえよ、シ、シ、シッ」
「こら、おいぼれ、女は？」
「何處(どこ)かへ逃げ出しただ。わしや訊きもせなんだ、わしにや關係ねえからな。直ぐ歸るだらうと思つただ。わしや年寄りだて、あと追えもせずなあ」

赤髭のカザックが刀を按じて脅した。

一言へ、言はぬと首が飛ぶぞ一

「わしの首は脆いだよ。わし何が言へやうぞ、逃げ出して一と言も云はねえだもの、腸引きずり出されたて、外に言ふことねえだ。罪もねえ魂を押し潰ぶすだぞ」

コジエミヤートフは、黒い髪の毛の將校にかう言つた。

「かうなつちや今直ぐ埒が明きますまい。女はこの婆あに言はなかつたのでせう。この家を監視するのが必要です」

古い聖像の聖徒に似た、瘠せた、いかめしい顔の、白髪のアンチプはかう言つた。

「赤ん坊と婆あさんをこゝに置くが好い、女が自分で來るさ、乳をやりにな」

それに決した。番兵が家の庭にかくれた。晝間捜したが見つからない。三晩番をした。四日目の夜中、草木も眠る頃、廂の下で赤髭のカザックが頸を長くして番をしてゐた。畑の方から女の黒い影が動いた。番兵は獸を見つけた獵士のやうに呼吸を凝らした。ウイルカもまた用心深い獸の輕い足取で歩いた。狼が自分の子供の狼のところへそつと來るやうだ。親狼が、頸を伸ばして自分の流した血の匂ひを嗅ぎながら、自分の子供に乳を與るか、救ひ出すかに來るやうだ。

赤髭が闇黑にかくれてゐた仲間に合圖をした時、彼女は土間に這入り扉の側に立つてゐた。

「つかまへろ、つかめ、あ、つかまへた。おいスイチエフ、早く將校殿を呼んで來い」

ウイルカは腸を斷つやうな聲で長く叫び、頑畳なカザックの手の中でもがいた。

「動くな、動くな、強情な尼だ。おやッ、咬んだな、畜生、じたばたするな」

ウイルカはからだを捥ぎはなし、片手が自由になつたので、えらい力でカザックの鼻柱をなぐりつけ、更に全身を屈め、片足飛ばして横腹を蹴つた。カザックは痛さに吼えて手を放した。けれども、赤髭が駈けつけて來て、彼女の兩手を背中に曲げた。彼女は、跳ね廻つて赤髭を八方に搖り動かしたので、彼は、工合惡るさうにからだを捩ぢ向け、車寄せの階段に片足ひつかけて倒れた。倒れながら、自分と一緒にウイルカをも拉き倒した。彼女は、鋭く呀と叫んで直ぐ默つて了つた。車寄せの側の板に釘着けにした鐵製泥拭で後頭部を打つたのである。その時、家の中から赤子の乳を求むるはげしい泣き聲が聽えた。ウイルカの兩眼は最後の顫動にふるえ、そして光が消えて了つた。



乳を賣る

松田解子

市電を××町で降りると、黄褐色の二階建が尨大な兩腕を枕にして眞四角な腹部を天空に曝して寢そべつてゐるのが見えた。近づくと强烈な消毒藥の臭氣や、動く眞白い人間の脈搏があつた。

『小兒科××病院。』

光枝は此の刹那唯一人敵國に踏み込んだ樣に緊張した。艶やかに磨いた長い廊下を行く。壹等室片野紫殿 ドアを開く。一齊に多くの視線が、泥まみれの母と子を射すくめる。眩しい中でどうにか挨拶を濟まして子供を背中から卸して見る。ワッと泣き乍ら顏を母親の懷の中に祕して了ふ――壓迫か恐怖かそれとも羞恥か――中央に腸を患ふ若樣。枕元に附添看護婦右手に女中。左手に夫人。白魚の樣な指を淺く組み、無關心な面持ちで新たに買入れた母乳の所有者を流し見てゐる。

『隨分瘦せてるわね。その子、何箇月だつて？』

『七箇月目です。』

『乳は澤山？』

探査の眼付きだ。

『澤山と云ふ程ではありませんけれど、段々離乳し度いと思つて居ますので。』

『そうか。なんなら牛乳でもフードでもやつたらいゝよ。……あ、たみゑ、後で此の乳母を診察室に連れてくんだよ。血液檢査をして、それから御飯を食べさせる樣にね。』

ソバカスのひどい女中が馴々しく肯いた。やがてかすかに絹の掛

布團を動かして若様が眼を覺ました。

『お乳が飲めるよ、繁。今晩からお乳がうんと飲めますよ。』

光枝は思はず寒氣を感じた。

「大抵三時間おきに搾るの。だからそれ迄乳を溜めて置く様にすればいゝ。其の子には搾つたあとを飲ませる様にね。足りなかつたら外のものをやつて。……さああくちゆ。』

今度は、猿の様に痩せ皺の寄つた息子に手を差し出した。雲母の様に輝きのない眼をみひらいて暫くは無表情だつたが、火箸程細まつた右手を夫人に委せて再び力無く眼を閉ぢた。看護婦は鼻孔の緣や眼瞼の内側まで丹念に塗り固めた白粉で白い怪物に近かつたが頻りに此の「御親子御對面」のシーンに媚笑をふりまいてゐた。

注射針が右腕の靜脈に突き刺された。刻一刻葡萄酒色の血液が透明な硝子管を浸し昇る約五糎、グイと白い手術着の袖が針を抜き取つた。長い廊下を傳つて來る子供の氣狂ひじみた泣き聲を聞き乍ら急いで帶を捲き付けた。パスしたい！　何たる態だ！　どちらもが本音だつた。夢中で駈けつけ女中の手から子供を捥ぎ取つた。

『何時頃搾るんですか。』

『お乳？　今日は搾らないのよ。血液検査がちやんと合格してから。』

『では飲ませてもいゝんですね。』

『そう。』

而し、子供はもう餓鬼の性急さで、乳房にしがみついて居た。其の儘の恰好で部屋に入ると、目を覺してゐた若様が急に泣き出した。

『あつ、いけないのよ。そんなところで乳を出しちやあ。』

女中が怒りつぽく叫んだ。光枝は再び廊下に出た。歩き乍ら、幾度も幾度も抱き換えて二つの乳房を取替へてやつた。そして低く力をこめた聲で囁いた。

『ね。鐵坊、あのやせざるが泣いてるよ。お前のおつぱいが欲しいつて！』

急に空腹を覺えた。院長、副院長、醫員、看護婦長、看護婦の物物しい行列が婦長の吊し下げた藥瓶を先頭にして、光枝の前を通り過ぎた。

『御回診』が濟んで、漸く晝食を始めやうとしてゐる處に、一人の、これも貧困に疲れ果てゝゐる様な女が前屈みに入つて來た。

『此の人が今度來た乳母さん。』

女中がそう云つて紹介した。

『まあお若いんですのね。じあ、私なんかよりずつと餘計出るでせう。宜しいんですわね。』

『いゝえ。私のそんなに澤山じやないんですの。』

『まあ拜見』

光枝は一寸面喰つたが、默つて片方の乳房を取り出した。

『そんなにふつくりしてらつしやるんですもの。』

飯屋の運んだお膳を並べて食べてゐる内お互ひの胸に一種同族の感情が湧き始めた。

『お子さんがありますか。』

『えゝ。三つになるのがゐますの。亂暴で仕樣がないんですよ。』

『さうですか。私もあんなのが居ますから。』便器柵のカーテンの下に、泣き疲れて眠つてゐる子供を指さし乍ら光枝は云つた。

『難儀しますよ。可哀さうに……。』

後で女中達の云ふ處に依れば彼女はクリスチヤンだつた。片野家に始めて來た晩に、女中部屋で本式のお祈りをやつた。外の連中が呆氣にとられてゐると憐れむ樣に――神樣はあなた方の罪をもお許し下さるでせう――と云つた。三つになる女の子は、誰のものとも分らなかつたが、彼女は盲滅法に愛してゐたといふ廉で夫人の氣に入らなかつたのだ。

『子供を托兒所にやれつて仰言るんですよだけどあんた未だ漸く三つですもの。何度も門迄連れて行つても私の手から離れませんの。』

廊下に出てから泌々と云つた。眼玉の丸い可愛らしい女の子が默つて後から飛び付いた。

『でも御心配なさらない方がいゝですね。こんないゝ子供さんが居るんですもの。』

『だけど父親の無い子は不幸ですね。……私きつとお暇だらうと思ふんです。とても一回に百四十瓦なんか出來ませんもの。それが日に七回もですよ。』

『そんなに搾るんですか。』

『えゝ、とても苦しみますよ。それに朝は五時頃に起されて夜は十一時が早い方なんでせう。乳は搾られるし……並大抵な仕事じありませんよ。私もうとても勤まらないから、何とかなりたいと思つてるんです。』

『それで、今度から私達二人から搾り合せて呑ますのね。』

彼女は聲は立てずに、強く否定した。突然ドアーが開いて女中が呼びかけた。

『乳母(ばあや)さん、搾る時間よ。』

乳房の下には五十瓦入のグラスが二つある今、三十を越えた一人の女が右の乳を揉んでゐる。疲勞を刻んだ額には更に重たい不安が垂れて……だが、力をこめて搾り始めた。十本位の乳腺から、始めは勢よく眞白い噴水の樣に。二十秒も經つと絲の樣に細くなり、やがて一滴一滴とたゞり始めた。

『かうなんですよ。お婆さんの乳は。』

そう云ひ乍ら光枝の顔を見上げた。看護婦がメートルグラスを眼の高さに上げて、嚴密に調べた。

『未だ五十瓦に足りないわね。』

ぶつてりと脂ぎつた腕を突き出して、左の乳房を掴み、力任せ

に搾り始めた。もう一つのグラスを滿たすために。
『あんた自分の子に飮ませたんぢやない？』
一應手を休めて突けんどんに云ひ挑んだ。
『いゝえ。そんなことないんですよ。』
乳母は耳迄眞赤になり、唇を震はせ、再び搾り切つた筈の右の乳房を桃色になる程揉んで搾つた。と、二三度奇蹟的に五條ばかりの乳腺が噴いた。それから右を、そして左を。だが、彼女の『神』も今は無力だつた。乳房は全く凋れ果てゝ了つたのだ。
『もう、どうしても出ません。』
無念さうに彼女は云つた。額にも鼻の兩側にも、じとじとと汗が滲んでゐた。
『じやあ又、あそこの患者さんのお母さんから貰はなくちやあ。』
看護婦が荒つぽくスリッパを引かけた。
『若様、召上れ。』
女中が、なみなみと五十瓦を湛えたグラスを捧げて、皺深い若様の口に近づけた。おゝ彼は口を閉き、滿足氣に高まつた咽喉笛を鳴らし乍ら一氣に呑み乾した。もう一つのは看護婦が捧げて‥‥。
『もう四十瓦、急いで貰つて來て頂戴。』
乳母が空になつたメートルグラスを持つて走つた。
總ては何といふ暴虐であらう！　光枝ははつきりと決意せねばならなかつた。此の敵國で自分の子を殺してはならないと云ふ事を。

眼を覺して泣き出したので抱き上げて部屋を出た。十一月の風が降り止んだ鋪道の濕潤を撫でて行く。其處に限定されては居るが清澄な空。地平線を阻むビルデングの遙かなる林を突き破つた太陽のしぶき。燦爛と大地の上は輝やいてゐる。なのに、彼女は悲しくはなかつた。唯、強く強く抱きしめてゐた。
第一の夜。光枝は何か讀みたいと思つたが若様の視神經を衞るため、五燭の電燈が天井高く吊し上げられてゐたゝめ、じつと考へに沈んだ。
嬶や子供を飢えさす奴は誰だ——留置場、其處で一人の赤い種子が踏み潰された——提灯、此の通りのさんざめき——二十九日——無數の縫ひ付けられた唇、鎖で繋いだ手足——だから！　思索は混沌として渦を卷き、焦立たしく結論を求めて、へめぐつた。無産家庭婦人は借家人組合、消費組合へ！　ただそれだけでいゝだらうか？　彼に鬪ひの自由を返濟した。たゞそれだけでいゝだらうか？　そして自分は育てゝ行く？　恥かしいと思へ。だが、明日を堪える爲めに、ぐつすりと眠らなければならない‥‥。激變した自分の運命に就て何も知らない子供は、蒼白い横顏を見せて、乳房を握つた儘眠り込んでゐた。夜勤看護婦が氷を砕く音が、沈まり返つた院内の空氣を、時々小刻みに振はせる外何の物音も無くなつてゐた。

飯屋の食物では乳の出が悪いだらうとの夫人の心配で（先からゐる乳母は此の種の心配故に、一日に幾度も屋敷と病院の間を市電で往復する事を最大の苦痛に數へてゐた。）光枝も翌朝から片野家で食事をとる樣に命ぜられた。そして、病院から電話が掛つて來る迄、乳を自分の子にやつてはならないと云ふ事は特に念を入れて云ひ含められた。が、これは母親と子供にとつての大きな試練であつた。生れ乍らに奪ひ、奪はれる二つの階級の子の血みどろの鬪ひでもあつた。埃つぽい市電を降りると、舐め廻つた樣に淸めた街道だつた。杉葉や紅白を使つた奉祝門や鳳凰をぬたくらせた幕や瑞穗を垂れ下げた中に赤球を突出した樣な圖案の提灯が、尨大な費用をその儘に曝け出した姿で、無數に、無限に並び立つてゐた。一際大きな提灯の下をくゞつて片野家の門に入つた。勝手口に廻ると惡意ある眼付きの番犬が聲も立てずに突進して來たが、側迄來て、げつそり戾つて行つた。綠陰に圍まれた、宏壯な家敷だ。紺靑を濃くした空に、クツキリと飛行機が舞ひ上つた。日本帝國の榮光を其の兩翼に閃めかして、此處からは、屋根の天頂に上つても、本所深川の煙突やタンク、貧民窟や生活のあらゆる苦慘な姿は見える筈が無かつた。——全で別世界だ。と、更めて思はずには居られなかつた。

つき當りが女中部屋だつた。廊下を通り乍ら、光枝は思はず聲を立て樣とした。豚の尻尾の樣に拗い毛をチヨコンと束ねて炊事場に立つて居た女中（實は乳母兼女中であつた）が、振り返つて『あら？』と叫んだ。『あんた方知合ひなの』女中頭らしいのがそうきいたが彼女は急には答へる事が出來ず間誤ついた足取りで女中部屋に入つた。

此處は六疊。北向きの寒い部屋。電話、御用きゝ、玄關其の他からのベルの音等々が、どうしても臺所奴隷達の耳朶を打たずには居ない樣にしつらへてある。隣りが、リーダーの掃溜みたいな炊事場——ひよつこり。先刻の乳母が顏を見せた。相變らず頓狂な眼と無智が强ひた斷念めの暗い顏……

『どうして來たの？』

『乳母よ。』

『繁樣の。』

『そう。』

もつと何か云ほうとしたが、高慢ちきなスリツパが廊下を通つたので止めた。彼女は髮と不釣合なお太皷結びの帶を見せて炊事場に去つた。

『あなたが今度繁樣におつぱい上げて下さるんですか。本統に私達嬉しう御座いますわ。今迄の乳母さんはとても意地が惡くて、出るおつぱいを出してくれなかつたんですよ。三つにもなる自分の子に飲ませて了つてね。……まあ可愛らしいお子さんね、よく眠つて……。』

おさんどんらしく肥つてゐても、中々灑洒な言葉つきで若い女中がまくし立てた。

『さあ御飯をお上んなさい。血液検査が合格したから十一時迄に來る様につて電話でしたよ。』

『あ、そうですか。』

嬉しさうに光枝は云つた。炊事場の隅のテーブルで、牛の舌程も厚いビフテキをつゝいた。だしのきゝ過ぎた味噌汁や、薄鹽のあぢの乾物等、凡て「一天國」のものだつた。が、此の滿足は、瞬間のものであつた。子供が、背中で泣き始めたのだ。

『あら、泣き出しましたね。私だつこしてゐませうか。』

『いゝえ。これもおなかゞすいてるんです。』

『じやあ飲ませたら‥‥でも、今直ぐ病院で搾るんでしたわねえ。』

『牛乳を頂きませうかしら。御飯は未だ食べさせた事がありませんし。』

長時間脊中にくゝり付けられてゐた苦痛と飢餓のため、卸すとまつしぐらに頭を母の懷に突き入れやうとするのを、無理に押へて着物をかき合せた。――覺つて了つたのだ――涙が出やうとする。だが直ぐに嘲笑してやつた。此の恥知らずな努力。

子供は不服がりつゝも、五勺に近い牛乳を呑み乾した。――それでいゝ。死にやしないんだ！ 光枝は、脂のついた唇に熱い子供の額を感じた。

パスした。鐵は牛乳を呑む。大丈夫殺す様な事、絶對になし。成る可く早く布團を屆けて下さい。

電車の中で有り合せのハガキに書いた。

『よかつた！ 遅れるかと思つてとても心配してたわ。ほら未だ五分あるでしよ。さつさと搾つて下さい。』

ドアを開けると女中が歩み寄つて腕時計を光枝の方に向けた。

『幾グラムですか。』

『百二十でいゝの。グラスはそこの戸棚に入つて居ます。』

『機械でですか。』

『いゝえ、手で。若しあんたが搾れなかつたら、看護婦さんに頼んで下さい。』

よく拭き淸められたグラスは、その儘、鋭く磨ぎ澄ましたブルジョアの牙の輝きで光枝の乳房を覗き込んだ。彼女はおんぶの紐の×印を咽喉にかき上げて着物をはだけた。厚い一個のビフテキ、上白米の二杯の飯、だしのきゝ過ぎた三杯近くの味噌汁、あぢの乾物一枚。それ等の一切が、今、百二十瓦の乳として搾出されねばならないのだ。右から始めた。息が彈む。だが一氣に純白の汁が二十瓦の線上を突破した。大丈夫だ！ 乳腺が、薄紅色を呈した乳房の上皮に蒼々と浮び上つて、苦しく張つて來るのをギュッと押しつけると、直徑半糎を越えない乳首から十數本の乳條が、精巧なポムプの様に噴出する。その間は不思議な快味があつた。恐らくブルジョア社會から思ひ込まされた『義務遂行』の喜びであつたらう。が、一つの

グラスを五十瓦で滿し、もう一つに三十瓦溜つた時、彼女の身體は急激に底知れぬ洞穴に吸ひ込まれて行く樣な疲勞を覺えた。一層のこと大袈裟にブッ倒れて了ひたかつたが、そう思へる程、意識の方がハッキリしてゐた。

『どうしても出ません。』

誰に、と云ふ譯も無く口走つた。全で、前日の、あの時の乳母の樣に。穢だ！

『一寸其の坊やを御して吸ひ出させて見るといゝわ。出て來たらすぐ離してグラスに搾つて見ると。』

看護婦が殆ど命令的に云ふ。子供は無心に寢入つてゐるらしい。だからこそ今迄かゝつて八十瓦もの彼の乳を搾り取る事が出來たのだ。

『でも、よく／＼眠つてゐるんです。起して吸ひ出させようものなら、乳房をかぢり取つても離しませんよ。此の子は！』

『じやあ…。』

看護婦は壓迫的に白いスカートを擴大して光枝を追拂ふ樣な姿態をとり、扁平な足で床板を鳴した。

『又あの患者さんのお母さんから貰はなくちや…。』

もう一人の乳母はどうなつたらう？　と言ふ事か、急に光枝に不安を與へた。もう追拂はれたのだらうか？

『あのね、乳母(ばあや)さん。今迄居た乳母さんは止めさせられたのよ。だからあんたが、出來るだけ澤山出さなくちやならないの。でもお坊樣も段々およろしくなる樣ですと、お家に歸るから、小さいお坊樣の乳母の乳も少しは貰へるかも知れないの。』

『そうして頂ければ仕合せですけど。』

ドアが開く。

『搾つて下さつた。』

『えゝ。でもとてもお氣の毒よ。』

『あら、もう十二時過ぎちやつたわ…お坊樣！　若樣！』

光枝は、自分の瞳が急に憎しみの火を燃すかと思つたが、それを其の儘若樣の口元に据えた。先づワッと泣き出した。眼尻がハの字に、口がへの字に下り、云ひ樣のないガッガッが乳を見た嬉しさと一緒に顏中を伸縮した。

『召上れ。』

先の細く尖つた舌を少しく脣からはみ出し乍ら、滿足氣に高まつた咽意笛を鳴しつゝ、次々と呑み乾して了つた。

『おいしう御座いましたでしよ。』

殆ど同時に兩側から云ふと、却つて泣き始めた。

『ぢきお母樣が見えますよ。お泣きになつちやいけませんね。』

光枝は、一刻一刻自分と自分の子の壽命が壓縮されて行く樣な重たさを感じた。此の一人のブルジョアの子と、それを守護する二人の女と、それを頑丈に掩ふ正方形の一等患者室。更にもう十數分の

後に表はれるであらうブルジョアの雌。否、ありとあらゆるものが無限の遠くにあるものも、今、現に此の部屋にあるものも彼等の滿足の爲めにのみ存在し光枝と光枝の子と、そして一切のやつつけられた階級の男と女との壓殺の爲めにある様に思へた。……忍耐の無さ、と勇敢さとは全然別物でもあらう。だが光枝は例へ等しく敵國でも、其の王宮よりも庭園を選ばざるを得なかつた。其處から空氣と陽光とを採りたかつたそして、此の屈辱こそ最後の屈辱であれよと思つた。

一日十四時間も脊中に結び付けられてゐる事と、母乳を奪はれた事と、北向の部屋と、絶え間無き喧騒とは、生後七箇月を越えない光枝の子供を先づ便祕で、それから冷込みで更に、神經衰弱（疳積とひねくれ）で苦しめた。

主人と云ふのは三十代の働き盛りで（搾取能力が正に其の絶頂に達してゐるので）三つの會社の重役を兼ねてゐた。典型的なブル腹を下肢よりも一歩手前に突ん出して歩き、座ればニタリとゴリラの面持ちだつたが、病める長男の爲めには自ら機械軍人を組立てゝやり、自動式ピエローに奇術を使はせもする。殊に、夫人の帯止めにダイヤモンドを五十も嵌めてやるからには、如何にその、上唇をもたげた二つの牙で、眞紅に熟した勞働の果實を噛み取つた事だらう。

『だから……。』

と、古參の女中が小聲で續けた。若様が退院してから七日經つた深更である。

『お正月なんか一日二度宛、七日間と云ふもの裾模様を着替えてロータリーに踊りに出るのよ。……えゝ、二人で。旦那様だつて普段よりずつと立派な洋服を着るわ、着替へる度に下着からフエルトまで私達に出させるのよ。』

『そして、あんたの月給いくら？』

『十五圓。』

『やつぱり……奥様の腰巻一枚價もないわね。』

『不統よ。』

上氣した頰の上半だけ掛布團の襟から出して、古い女中が溜息を吐いた。

『この子とてもひねくれて了つたわ。それに今日もウンチがないのよ。』

『可哀さうに。明日私が灌腸して上げるわ。』

『どうぞね……先の乳母さんはどうして止させられたの。』

『ヒス氣味だつて。そう云ふ人の乳を呑むと子供にも悪いんだつてね。おきん乳母は少し足りないのよ。奥様が心配してゐるわ。』

『お坊様ゝ足りなくなるだらうつて？』

『そうでせう。きつと……。』

『じやあお金持は、豚や牛肉の御馳走をうんと食べてるからあんな

風に腹ばかし膨れて意地きたなくなるのね。』

「そうかしら。』

三人の若い女中はもうぐつすり眠り込んでゐた。彼女達は皆、其の日はとう／＼顔を洗へなかつた。夫人の父親が朝の七時頃着京すると云ふので、殊更に掃除や炊事や用足が多忙だつたのだ。一日十七時間もの臺所勞働は、彼女達から一日毎に脳味噌を削り、深い昏睡を心にも肉にも强ひた。一つ二つ撲られてもいゝから一分でも多く眠り度い！　これが、當面の彼女達の願ひであつた。「少し足りない」乳母は、授乳の關係で今夜から主人夫婦の隣室に眠る樣に云ひ付かつたのを、半ば誇らし氣に、皆の前に擽つたい言譯けを殘して、疾くに女中部屋を引上げてゐた。婦人××會に居た頃から光枝と知合つて居たのだが、時計を讀む事も出來ない程だつた當時と比べれば可成り世慣れてゐた。牛の樣に限りを知らない勞働と、乳量の豐富な點でのみ片野家の手離し難い一人として數へられてゐた。光枝の乳はどうしても一日百瓦を越える事が出來なかつたが、不足分は何時も彼女の左乳がたつぷりと補つて與れた。第二の若樣には四時間毎に約七分間飮ませる事になつてゐたのが、他の一人が時計の番をしてゐなければならなかつた。…先づオリザニンを飮んで、兩乳首を消毒藥で拭いて…此の時だけは露はなプライドが彼女の全容を輝やかした、

『呑氣に見えても妾、隨分苦勞したのよ。』

或日、こんな調子でしんみりと始めた。酒亂の夫が行方不明になつた爲めに婦人××會の炊事婦を馘られてから、一人娘は故鄕の兄に預け、大きな孕み腹を抱えて社會事業家小野氏に女中として引取られたのだつた。が、彼は名前だけのクリスチヤンで酒は呑み女は買ひ、嫉妬深い夫人をさんざ苦しめ『見ても居られない程』だつた。其の內八箇月目で、男の子を産み落すと間もなく小野氏と幾らか知合だつた此の家數にも子供が出來たので乳母が欲しいと云ふ話がもち上り、生後二十日の子を抱えて住み込む事になつたのだつた。

『それでどうして臺所の仕事は出來たの。』

『私の子は一日中おんぶしてよ…だつて仕事が山程もあるんだもの、とても乳母だなんて座つてられないわ。月足らずで出た子でせう、とても弱つて了つてまるで今のお兄樣みたいだつたよ。』

光枝は時々夢の中で、自分の子供が蝋の樣に萎びて行くのを見て居た。

『それで死んだのね。』

『違ふわ。奥樣がかう云つたのよ。——乳母(ばあや)お前の子供はどうする？　つて。私はそう思つたの、これはきつと何處かへやつて了へ！　と云ふのだな、と思つたの。そして——婦人××會にでも預けませう、つて云つたの。』

『そしたら…。』

『そうかつて云つたきりよ。そして私は翌日、本當に泣き泣きあの

子を婦人××會に預けて來たの。それから、それでも三月も生きてゐたのよ、どんなに未練があつたか——つて思ふと、とても堪らないわ。××會から、『死んだ。』電話が來た時は泣けもしなかつたの。奥様から御暇を頂いて其の晩の内に行つて見たけど、もうすつかり冷くなつて、側には人が居ないで猫が居たわ。』

彼女はそう云つて啜り上げた。

『じやああんたの子供は小さいお坊様の身代りになつたんだわ。』

『でも私、此家のお坊様に乳をやつてゐるといくらか斷念がつくの。奥様も中々私を思つて下さるのよ。』

『でも自分の子供が死んで、殘念じやない？』

『だつてみんな運だもの。』

彼女はそう云ふと、全で別人の様にそわそわして、階段の方に走つて行つた。

朝五時頃起きると、雜多な仕事が枕元から殺いてゐた。部屋の掃除、湯殿、洗面所の垢落し。長いヴェランダの磨込。それから洗濯。其の外に光枝の殆ど關らない仕事が無數に在つた。子供を背負つて、倒になり乍らお孃様のズロースや奥様の襦袢、足袋、旦那様のズボン下等を洗つてゐると、急に彼の事を用ひ出した。布團を屆ける様にハガキを出してから十幾日も經つのに返事のないのが不安だつた。空窓を振り抑いだ。惜らしい程外は新鮮な明るさだ。——出て見たい！　高い鏡に、めつきり蒼くなつた子供が映つた。——ぐずぐずしてれば、此の子もあの痩せ猿に喰ひ盡されて了ふんだ。玄關の呼鈴が鳴つて、バタバタと女中達の草履が響く。へいつくばつて『お歸り遊ばせ。』を叫ぶ。夫人だ。バルコニーには陽光が一面にまきちらされてゐる。おきん乳母の子供を食つて丸々と肥つた第二の若様の、低能らしく膨れた頬ぺたを、夫人の舌が舐め廻す。それから第一の若様の手を握る。そして階下の居間でドライブの疲れを慰す爲めに何かを飲む。夫が株主總會から何をもたらすかを考へて獨り微笑む。寫眞を提供しておいた××社から贈つた菓子折が屆く、夕飯は何にしやう？　——妹が歸つて女中に足を差し出す。同じ年頃の一人が兩手で靴の紐を解き、脫がせる——『此れを妾の御部屋において來てね！』家庭教師が低頭する——。

漸く洗ひ終へて女中部屋に來て見ると、例の洗濯屋が光るナプキンを疊んだり擴げたりし乍ら、女中を摑まえて得意だつた。

『こんなの、全く御家數を加えて三軒位しか持つてゐませんよ——』

光枝は逃げる様に、洗濯屋の後をくゞり出た。冷えびえした風が、全で別世界からでも來た様に北向の空間を流れてゐる。だが、街道には小春日和が躍つてゐた。そして此等尨大なデコレーション——旗、紅白の幕、濃彩色した提灯の數々、無數の鳳凰。鶴をかゝげた門。二つの旗を交叉して、自動車が洗ひ清めた舗道を滑走する。孔雀の様に着飾つた女達が、悠然と袖を飜す。市電が四つの日

の丸をなびかせて、あらゆる裝置への機械人間を運搬する。

彼女は、封筒ハガキ一枚と、カルケットを一袋買つて北向の女中部屋に歸つた。

きぬさん。

乳母も中々辛い仕事です。女にとつて乳を搾られる程大きな疲勞を呼ぶものはないと思はれる程です。鐵は愈々うらなりべうたんになつて行きます。おやぢに、布團を屆ける樣に、ハガキを出してあるのに何の返事もありません。變つた事がありませんか。心配してゐます。

子供は先づ産まぬこと。出來て了つたら、合法的に殺すか、でなければ徹底的に育て上げるかの二途しかないとすれば（私はそう信じてゐますが）後のを選んでゐる私として、現在の生活は全つきり苦痛です。ブルジョアの息子が私の子を食ひ始めてゐる。これは誇張じやないんです。プロレタリヤの子は皆、此の儘の狀態では生れ乍らに彼等の牙の餌食です。『育てたらいゝじやないの。私達の子供として育てゝ行きませうよ。』ソビエット、ロシヤの孕み女はそう云つて晴やかに笑ふ事も出來ると云ふのに、私達の子供は生れ乍らに母乳さへ奪ひ取られて了つて、ブルジョアの使ひ古したサルマタの慈善の中か、不衞生な托兒所に押し込められて了ふ。それ所か留置場で餓死する事さへあるんだもの――バカに理窟を並べた樣ですが、結局、私は吾々同志の子供の共同養育場を欲してゐるのです。誰かゞ幾人かの子供を衞り育てる。階級的に（家庭的にではなく）です。それに依つて、母親達が、幾度でもしごとに歸る事が出來る樣にです。これは、プロレタリヤの病院が必要である樣に、多くの仲間達が、ひそかに求めてゐるものではないでせうか。そうだとすれば實現の可能性が更に加はると思ふのですが――餘白も無し、仕事もつかえて來ました。永く勤まるかどうか、何しろ當の若樣は全快に向つてゐるのですから、何時放り出されるか分りません。

近況をお知らせ下さい。

子供は、餘りおんぶばかりしてゐると、脚が弱くなつて、いつまでも立つ事や歩く事が出來なくなると聞いてゐたので、彼女は出來るだけ卸して遊ばせた、何時の間にか、ひどくそぐはない環境にも慣れて、其の儘小さい奴隷の樣に、炊事場の隅々を這ひ歩き、汚れた飯粒やコロッケの皮、パン切等を、本能的に拾ひ出した。すぐ口へ持つて行く手を押えては、ほうり出させて、其の度にカルケットをやる事にした。若樣は誰の故か、次第に元氣附き、野菜のエキスを吸收した重湯や、一個のマッチ箱と同體積のパンを食べていゝ事になつた。けれども人乳は未だ百瓦乃至百二十瓦宛、四時間毎に要求された。だから四時間の間は、自分の子がどんなに乳房を慕つても、手を觸れさせる事さへ出來なかつた。漸く溜つたのを二つの

グラスに搾出して鼻孔よりも高く捧げ、十八の階段を上つて八疊の子供部屋を開けると、附き切りの女中が鋭い利目で分量を檢べる。

『あら、こつちの四十六瓦しかないわね。』

つき返されたのを受け取り、搾り切つた乳房をもう一度揉んで見るけれども出ない。子供が背中で、炙つた鰯の様にしなり狂ふ。其處へ夫人が入つて來る。

『どうれ。』

差し出した指が刄物の様に冷い。力限り乳房を握つてきゆつと押し出す。

『ほら、出るじやないの。』

搾るが商賣のブル女！　光枝の唇は歪み、震へる。じつとりと背中に汗が出る。眼が霞んで來る。

『乳母さん。百瓦位は出るでせう。先の乳母だつて、あんなに痩せてゝも百二十は樂に出たのよ。』

空つぽのグラスを盆に載せて、黙り込んだ儘部屋を出様とすると、再び女中が呼び止める。

『其の新聞包みを其の儘、そつと××病院の院長様に持つて行つて下さいね。見て頂くのよ。』

ブルジョアの病める息子の消化機能をシムボルするもの、糞だ。光枝の子供に灌腸した時、彈丸の様に飛び出した糞と比べて、これは非常に軟かく、濃黃色を呈してゐた。彼の直腸を其の儘の形で七八寸ち切り出した様だ。電車の中で二重三重に包んだのを、懸命に四圍の壓力から防衛しなければならなかつた。

××病院の前で鹿爪らしく包みを解いた。

『大變お宜しいお通じですと申上て下さい。』

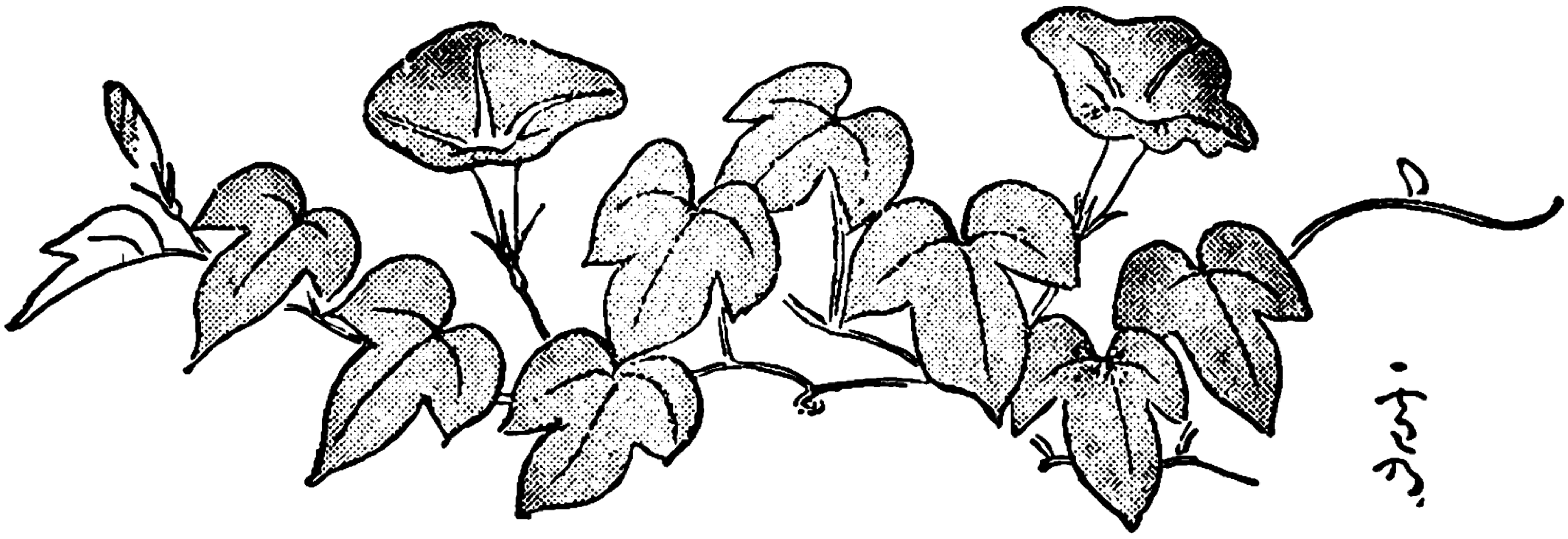
此の事以後數日して、光枝の乳が不用となり、光枝が不用となつた。彼女はガラン洞の六疊へと、漆黑を重ねた夜を市電に揺られた。永い悪夢から目醒めた様な歡喜が、子供の重壓と布呂敷包の煩はしさを打ち奔いだ。増して明朝から始まる生活に對する不安をも。

八犬傳と、土方博士の經濟學を頭目とするだゞつ廣い觀念の貯藏場や、豪奢な寢獄を横たへた絨毯の部屋部屋、香水をふりまいた便所やピアノ。五十のダイヤを鏤いだ帶止めの一切合切が、もう數軒の別莊と、それを所有する雄と雌と卵とを引くるめて、遠くへと消え去つた。然も、彼等の鼻孔から吐きかけた惡魔の息が、今も光枝の全感覺に憎惡を孳生させつゝ——吾々が力づくではむかひ起つた時、彼等に何が出來るだらう？

ドン、と入口の戸を押し開けた。ムッとする汗の臭氣が來た。襟の垢光りする彼の寢衣が長い窠巣を物語つてゐた。

家庭はブルジョアの牙に曝せ。だが、子供は育てるんだ。突如として、結論が彼女の疲勞し切つた肉體を閃めき過ぎた。

一九二九、六、一四



總理大臣

合屋梢

義一といふ總理大臣もありムソリニを眞似んとすれど無智なるはさみし

虎徹をばふり下す時の阪妻は心よからんわれも斬りたし

病める從弟

病を得て久々に歸へる從弟をばステーションに待てり若葉照る朝

燈火のまさに消えんとする如き命をさゝげて從弟は歸りし

慘虐な勞働のためにすりへせし若き命は喘ぎゐたりき

青春を忘れし如き從弟なり蝕ばめる頰のうすきさみしさ

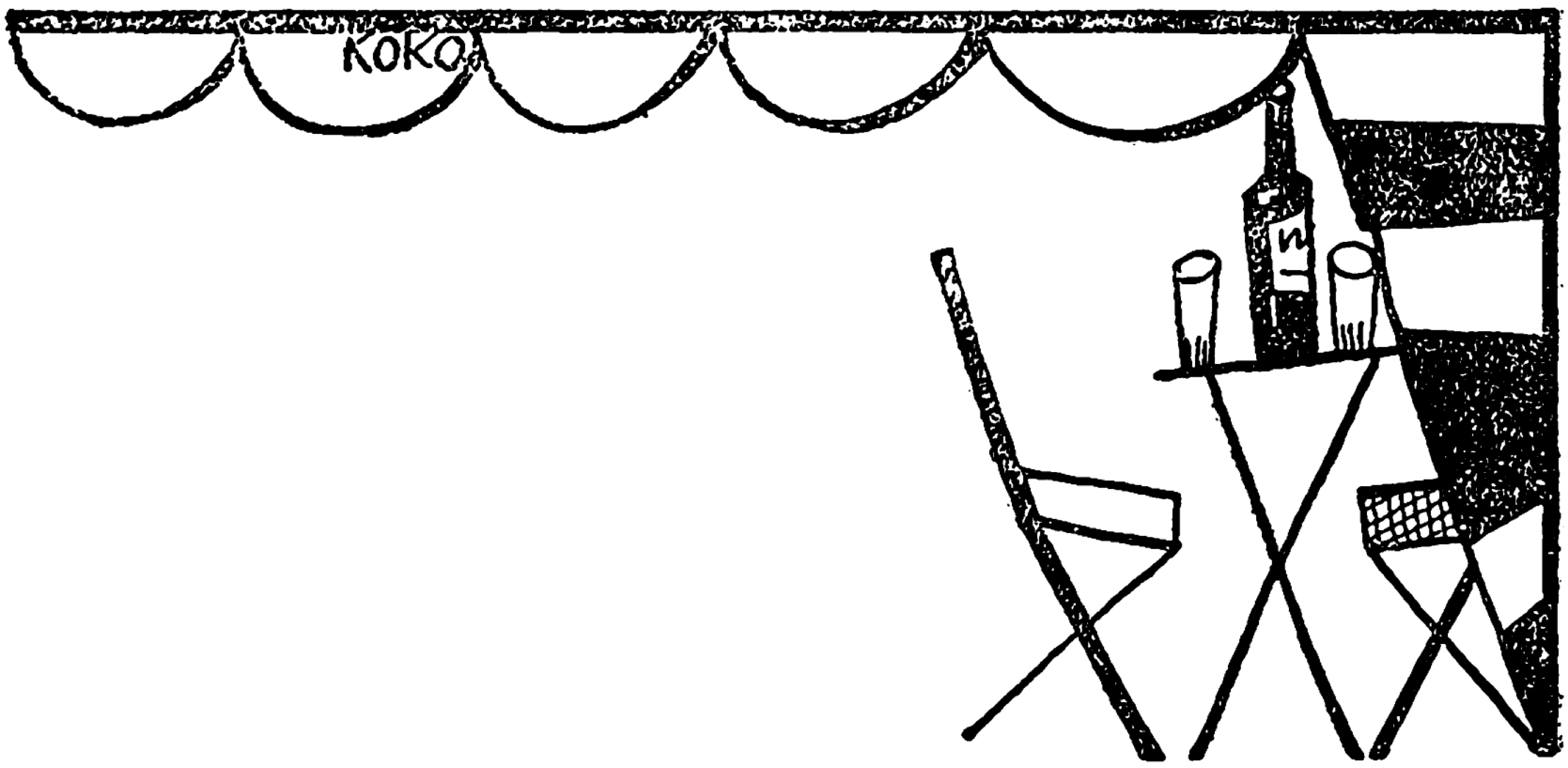
勞働

ハンマーをふり下す人の顏は好し熱火に映ゆる明王の如くに

默々と土を運べり鮮人の土工の襟は疲れて黒し

一日の勞働を了へて歸るひと心よからんわれもゆきたし

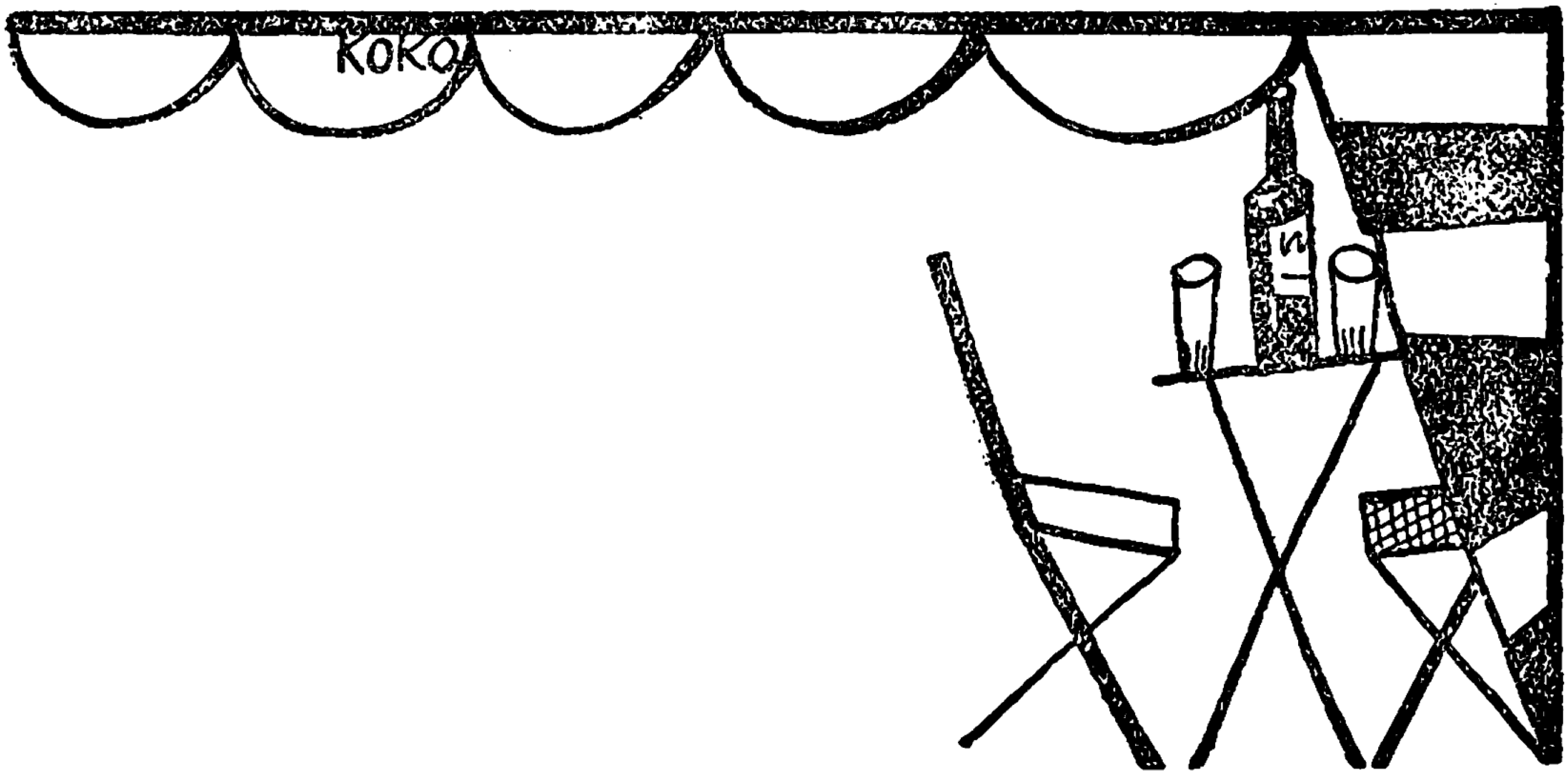
勞働に疲れし如きかの人は歸りゆくなりほ暗き家へ



若さと私と

永田壽美子

何とすばらしいシャンデリアの青春ではある
僕は貴女を愛してるんです
絶對の信の下に‥‥
‥‥貴女は私のすべてなんです
線香ハナビもすざましい勢だ
氣をつけないと‥‥そらごらんなさいだよ
人間の生活が、唯、生きる爲の生活なら
ショーペンハウエルの徒や、ハプトマンの徒や
すべての佛陀崇拜者は正しいのです、
けれど私は確信します、
私等は明らかに生て居るが
然しそれは愛に依つて生ると云ふ事を‥‥



トルストイ爺さんが悲鳴をあげるだろう
理想論者のアナクロニズムかお前の
カモフラージもちう破れたよ――だ

今日の問題は何ぞ‥‥戰ふ事なり
明日の問題は何ぞ‥‥勝つ事なり
すべてが敵です、僕は戰ひ續けます
もし貴女が僕から去る樣なことがあつたら
僕は貴女を殺して死にます
なんて可愛いゝ少年よ、お前は泣いた
事があるかい？
ユーゴーの小父さんが　あらゆる日の問題は
何ぞと‥‥大きな聲で喝破してるよ
あなたの苦しみがもし僕にあり
とするならば、僕、どんな事
でもして償(ツグナ)ひます
髮の毛を引張る頭痛膏(ヅツウコウ)の痛さだ
いとも、センチメンタルなる君よ
早合點は、失望と苦笑の母だとさ●

社會時評

永島暢子

田中内閣への弔詞

「オラが内閣」の一言のうちに、勢ひかゝる權力を見せ、民衆の要望に對しては極度に彈壓を加へ、横車を押し通す事に於ては近來の見物であつた田中專制内閣は、流石に樞密院との角力には勝てず、國民の怨嗟と反對黨の歡乎の中に遂に今月二日倒壞した。田中專制内閣にとつて、最も恐ろしいものは、貴族院であり樞密院であつた。衆議院ではその場を濁しておけばよかつたし、民衆には、マスクをかけさせ手枷足枷で自由を拘束し、即ち、極度に言論集會出版結社の自由を禁じればよい位に思つて居た。從つてその表はれる所の施政行動は、いかに民衆は憤激の聲をはなち、國會に於て轟々の紛論はあつても、水の如くあつさりと切り拔け、貴族院樞密院で問題となるに及んで周章狼狽し、七重の膝を八重に折つても、諒解これ努むる態の事は決して珍らしい事ではない。田中組閣以來、我々の目に事々しく展開し、且各方面に重大視されたものはなんであつたか？　曰く優詔問題、曰く不戰條約案、曰く滿洲某重大事件等であつた。これは議會開會當時、既に民政黨によつて持ち出され、隨分沸騰を見た所のものである。けれども政府は、この問題にして、かくまで致命的のものだとはゆめにも思はなかつたらしい。兒尾をつかまへられても、ノホヽンと切り拔けてゐたものだ。しかし一度樞密院に於てひつ懸るや、内閣總動員の對策は滑稽なほど眞劍だつた。責任逃れの爲には、多少の犧牲者を出してお茶を濁さうとした。

田中内閣は、民衆に直接關係ある問題はさしおいて、樞密院諒解運動に、日も足りなく送つた事は、當時の新聞が如實に報じてゐるではないか。また民政黨にしても、樞密院にしても田中内閣の失政を糾彈する所のものは、民衆には直接關係なきものであり、單なる技術的の問題にすぎない。不戰條約案にしても、彼等の問題としたる點は、民衆とどれ程の關係があるだらうか。一體不戰條約を提議した米國では、批准に際して、自らアメリカの自衛權を侵害せずとか、モンロー主義に影響せずとかの條件がついたものであり、我が國でも、自衞權の確保その他の諒解はついてゐた筈のものである。玄關には平和の女神の彫刻を飾り、屋内は戰爭準備に忙がしい米國

の辭禮に乘つて、之亦一日も侵略の夢を忘れず、國家總動員の軍事演習をさへ豫行してゐる所の日本、この空文に等しき不戰條約案が、かくも重大問題化された事は、誠に笑止千萬と言はざるを得ない。

六月二十四日より七月三日に亙つて大阪、京都、兵庫各府縣を中心として行はれた國家總動員演習は、各官省は元より、各關係市町村、青少年團、學校、會社工場等を擧げて、工業生産、調達、運輸その他戰爭に備へる調査に怠りない。しかもこの國家總動員演習は不戰條約案で政治當局者等が、血眼でごつた返しの最中に行はれてゐたのだ。が眞實に世界帝國主義戰爭に對して戰ひ、民衆の平和の爲に戰ふものは官憲の彈壓殊更に烈しく、一枚の傳單、半片のビラを所持しても、すぐ拷問、收監等の責苦をうけねばならない狀態だ。

滿洲事件にした所で、政府は決して眞相を發表し得るものではない。民政黨が代つて調査しても、田中政府同樣、國民が納得の行く程の眞相は發表の出來ない事は、容易に推察出來る事である。何故なら之を發表する事は、日本の侵略政策を發表するものであり、それこそ國際關係上重大問題を惹起するものであるからだ。それ故にこそ問題は單に警備問題に局限され、民政黨に言はせれば「俺はもつとうまくやるから、政權を早く俺によこせ」とその點でけしかけつて行くのである。それなのに田中首相は、いつまでも政權にかぢりつき民政黨はうるさくこづき廻し、こゝに問題は暗雲をいよ〳〵深めて來たので、樞密院も默つてゐられず、田中首相をあきらめさせたのだ。かゝる問題を繰り返しつゝあるうちに、民衆の生活はどうなつて行つたか。働く者の賃銀は低下し、失業者は市に溢れ、物價は昂騰し、小資商人は不景氣のドン底に泣いてゐる。試みに最近の統計を見るに、本年一月より三月まで、全國工場に起れる勞働爭議は二百五十六件、參加人員數三萬八千九十一人であり、これを昨年に比較すれば、件數に於て一〇五件、參加人員數は、二萬六千二百五十八人を增加し、殊に六月に入つて頓に爭議は增加し、僅か一日より十二日までに十七件程も頻發してゐる。更にその爭議原因は、解雇者の復職賃銀値下げ反對に關するもの等切實なる要求であり、深刻なる鬪爭である。また街にうめく失業者の群を見るならば、五月中全國職業紹介所で取り扱つた紹介事業は、求人數五萬八千五十六名、求職者數七萬五千七百八十名、就職者數二萬四百四十五名であり、之を前月に比較すれば、求人數に對する求職者の割合は、約一割三分を增し、求職者數に對する就職者數の割合は、約三分を減じてゐるといふ。飢ゑに耐えかねた勞働者は、一椀の飯にありつかうとして血の雨をふらし、文明の利器たる電車をさへ利用しかねてゐる。生活難にて母子心中をなす哀話も珍らしくなくなつた。而してストライキが勃發すれば、官憲はすぐ彈壓の魔手をふりかざし、尖銳分子の檢束拘留につとめて、爭議ぶつつぶしにかゝり、また强壓的に警察當局が調停に乘り出して來たのも近頃の現象である。更にこの彈壓振りは、治安維持法を改惡して、勞働者農民の革命的進出を阻害せんとし、治安警察法は極度に惡用されて民衆に迫つて來た。のみならず議會に提出された勞働者災害扶助法、その他社會立法等は資本家の御機嫌にふれて、文案のまゝ机の塵よけに供せられてゐるなど民衆は、不戰條約案、滿洲某重大事件等なくも、日常生活に於て、田中內閣の失政を痛感し、血の出る苦しみをしてゐたのだ。且無茶な人事行政は、綱紀ぶん亂を生み、例へば山梨朝鮮總督はその權力を利用して、賄賂を强要し、宮田前警視總監は、和歌山遊廓に關聯して七萬圓の不正の金を貰ひうけた。この事だけでも田中內閣

は、國民に對しその責を負ふべきであつたのに、樞密院あたりにひつかゝらない限り、早く女房役を見つけたり、總監を更てつして胡麻化す事位なんでもない。

田中内閣倒壞したといふも、それは民衆の要望の爆發の結果でなく、寧ろ民衆には邪魔者である樞密院の干渉によつたものである事は、いまだ民衆の力弱きを思はざるを得ないが、とまれ田中内閣は倒壞した。軍閥元老が自然的に消滅した結果、中間内閣などのいざこざがなく、濱口内閣が成立した。しかし民政黨が、資本家地主の代表であり、その上に成れる内閣はまた彼等の手先きである上は、民衆にとつては大した變りはない。けれど民衆は常に政治に注意し、内閣を倒す手を貴族院樞密院等に委ねず、民衆の政治を民衆自身の手に奪ひ返す樣結成闘爭する事を切望する。

市民とガス問題

幾多の迂餘曲折を經たガス問題は、遂に東京市と會社とは喧嘩別れとなつた。市會は六月十九日、完全に東京ガス會社の增資を否決し、堀切市長は、監督官廳に當て增資不承認を正式に通達した。ここに於て今後殘る問題は、ガス會社は增資貫徹で突き進むか、それに對して市は報償契約を破棄し、買收案を決行するか、既に問題は一般市民の利益をはなれて、當局者間の感情に轉化した感が強い。

ガス問題は、かくも複雜な問題であつたらうか。第三者として見る時に、寧ろこれをかくも紛糾せしめた原因は東京市並に各團體の對策の誤謬に基く事を判然と見る事が出來る。當初市民がガス會社の企圖した增資に反對し、加へて料金値下げを要求した時に、鈴木專務は、ガス會社は慈善事業でない事を放言したではなかつたか。營利事業と公共事業、慈善事業の意義關係等位は知つてゐるであらう鈴木專務が、殊更にか樣なる放言をなした事は、ガス會社は純然たる營利會社である事を宣告したも同じであつた。にも拘らず、どこまでも自己陶醉に陷り、公共事業の幻想に憑かれたる各團體は、その立場からのみ對策をたてた事は抑もの間違ひであつた。何故に東京ガス會社は純然たる營利會社であるといふか。それは徹頭徹尾、株主配當を減少せしめない計算以外には、民衆の福利は微塵も含まれてゐないのが何よりの證據であらう。されば會社は增資要求にしろ、値下げ拒絕にしろ、彼等の計數の標準は、九分以上の配當である。東京市の增資反對の理由は、若しガス會社が資金を必要とするなら、九分の配當を要する增資によるより五分乃至六分で借りられる社債にせよ、殊にガス事業は、近き將來に於て、公營にする性質のものである故、資本金二億圓となつてはます／＼買收困難となるといふにあり、値下げ要求に對しては、東京市のガス料金二圓二十五錢は、大阪の二圓八十錢、名古屋の二圓九十錢、京都の三圓、神戸の三圓四十錢に比しては廉いが、それはガスの供給量を比較するに、東京八十三億餘立方フイート、大阪は二十四億、京都八億で、京都を比較の單位にするなら、大阪は三倍、東京は九倍以上の大量供給になるから、經濟原則としても、他地方よりは廉いが當然だといふにある。殊に炭價については、大正八年五十錢値上げ當時、會社の申告に基けば、標準炭價二十二圓八十錢であつたが故に、昭和三年の炭價一噸當り十七圓三十錢に比すれば、五圓七十錢の低落であり、若し會社が今日値下げ拒絕の意味で指示する當時の炭價が十六圓八錢であつた事をどこまでも強調するなら、會社は、かの値上げに際して市をあざむき、市民を欺いて理由なき五十錢を不當利得

してゐるものであるといふ事は當を得た事である。且會社は使用炭量昭和三年に於いて、四十八萬八千餘トン、これより生ずる利益は四百二十九萬千餘圓であるが、これはガス製造法の改良の結果である。卽ち大正八九年頃には原料石炭一噸より製造されるガス量は、平均一萬四千八百餘立方フイートだつたものが、昭和三年頃には、二萬立方フイート產出する樣になつたが、この利益は會社のみが壟斷すべきものではない。しかもガス品質は、値上げ以前は、一千立方フイートに四千五百カロリー以上の熱量のあつたものが、今日では三千六百カロリーに低下してゐるがそれは市民が會社の收支均衡の犧牲になつてゐる事、設備その他についても充分に値下げの餘地ある事をあげて値下げ要求に努むるなど、公共事業としての眼目より力說してゐるのであるから、營利以外には眼のない會社と妥協の餘地ある筈がない。

更にこの間に介在し、市民の利益を代表し徹底的に、會社と爭ふべき市會はどうであるか。市民から選擧されて市會議員の職責にある上は、ロコツに尻に帆をまいて逃げる譯にはいかず、市民の眼をゴマ化す爲には、事々しく度々の會議を開いては居るが、誠意と熱意とがなければ、その對策も實行もはかどる筈がなく、いつも近日中に續開を約しては散會してゐる有樣、當市會議員が、いかにこの問題に對して誠意がないかといふ證明は、「市會議員が若しこの問題に深入りすると値下げの出來なかつた場合、市會がその責任を負はねばならぬ。むしろ理事者に一任したらどうか」と腐肉の如き軟論を吐いてゐるのでもわかるであらう。ガス問題に對して、最も眼ざましく活躍してゐるのが、婦人團體だが、これにしても決議文の手交、演說會、署名運動等に力を消費し、時にはガス非買同盟を決議するも、實行に至るまでに强力的ではない。とはいふもの丶いつにも似もやらず、ガス會社が一途に增資を斷行し得ず、市會も亦カメレオンの如く時々態度を變へるといふも、曲りなりにも市民の味方と見せかけてゐるのは何故であらうか。それは無產階級の進出と婦人の自覺とは、彼等をこ丶まで引きずつて來てゐるのであり、市民の監視を彼等が恐れての事である。曾ては物の數でもなかつた無產階級の存在は、かくも重大に進出して來た。こ丶に於てか無產階級は、一層の自己進出をはかり、最後の力を自分等にのみ賴むべきであらう。千の決議文、百の演說會より、一日の瓦斯のボイコットは營利會社にとつては大いなる打擊だ。それは地域的に結成さるべきであり、これまでの運動の如く散漫であつてはならない。ガス事業は、會社のいふ如く、慈善事業ではなく、純然たる一個の營利會社だ。勞資は常に協調せざる如く、資本主義制度下に於ては、需要者と供給者の利害は常に相反する。たゞ力と力との爭ひがあるのみである。市民諸君にして、自ら强く結成しなかつたら、いかに市會が、報償契約破棄その他を以て臨まうとも、各團體が活躍しやうとも、結局は、ガス會社の勝利となるであらう。何故なら、資本の背後には常に國家權力が燦然と輝いてゐる事を忘れてはならない。

深夜業廢止について

七月一日より行はれる深夜業廢止の實施は、保護職工卽ち十六歲未滿の者及婦人勞働者の一大福音なるかの如く一齊に喜びを以て迎へてゐる。各新聞は之を謳歌し、苟くも婦人勞働問題に關係ある團體は、凱歌をあげてゐる。けれど反對に、東京モスリン、西川モスリン、天滿紡織等ではこの喜ぶべき深夜業廢止を前にして、爭議に

血みどろの闘爭をつづけてゐるのは、どうしたのであらうか。即ち深夜業廢止に際して、工場主は、時間短縮を名目として、賃銀値下げ、勞働條件の改惡、産業の合理化による解雇を以て臨んで來たが爲に、勞働者は生優しく喜こんで深夜業廢止に直面出來ないのだ。

抑もこの深夜業は、明治十五年頃工場法が審議されて以來、問題にされたものであつた。けれど紡績産業が、我國の重大産業であるとの故を以て、婦人勞働者は肉彈として供せられ、資本家の飽なき搾取に曝されつゝあつた。が、資本主義の發展が、徒に長時間勞働の搾取より、据付錘數の增加、設備の改善、能率增進即ち勞働强化がより搾取を効果的ならしめて來た。されば大正十五年工場法が改定された當時、尚三ヶ年間の準備期間を附し、錘數が十四年には、五・四四六千錘が昭和三年六月には六・二七二千錘に增加すると共にその能率に於ても、女工一人當り出來高綿糸一・四六梱、綿布二一・〇四ヤード(十四年六月)が、綿糸一・九三梱、綿布三・四六ヤード(三年十一月)に强化され、しかも婦人勞働者は、著しく減少してゐる。

勞働時間は、今日の標準時間は十時間、一時間の休憩時間と月四回の休日が普通である。所が深夜業が廢止になれば、一晝夜の正味勞働時間十七時間、これを二交替制にすれば、八時間半即ち一割五分の減少になるので、一躍勞働時間短縮の如くに見えるが、それはあまりに單純な見方だ。何故なら、今まで月四回の休日があつたものが、深夜業廢止により二回に減少されので、操短規約にてらし、一晝夜の休業が四分に相當するといふのから推定しても八分の增産となり、結局時間に於て生産減少は、七分程でしかない。が、この減少は勞働强化によつて充分資本家が着々と利益を納めつゝある事は前の生産能率の計數によつてもわかる事であらう。

かくの如く、深夜業廢止によつて、資本家は少しも損害を蒙らないのみでなく、寧ろ搾取を强大にしてゐる。けれど、勞働者は、ともすれば襲ひかゝる賃銀低下、馘首の他に、深夜業廢止によつて完全に午前五時より始業を開始し、午前午後の十五分宛の休憩時間を失ひ、正午の三十分の休憩時に食事もせねばならず、便所にも行く、汗を拭ふのテンテコ舞ひを演ずるばかりでなく、交替時間には早や後組が待ち構へてゐるので、操業中に機械を掃除するなどの危險に臨ませられてゐるのだ。

勞働者の猛烈なる抗爭に對して、資本家側は降伏し、日給据おき、賃銀割增しで解決した向もないではない。しかし日給工は、紡績工場では小數の役付女工と男子勞働者であるために、別にさしひゞきなく、賃銀增額も決して實質的には今までと變りがないのだ。且請負賃銀の規定には種々のトリックがあり、その採算法が工場が握つてゐるので、この點でも勞働者は多分にゴマ化されて居るのだ。

か樣に、僞瞞と搾取の新形體の藏されてゐる深夜業廢止を、そのまゝ受諾する事は、勞働者の敗北でなくてなんであるか。勞働者は一歩退けば資本家は一歩前進する。勞働者はます／＼彼等の僞瞞を暴露し、七時間の勞働、休憩時間の延長、賃銀値上げ、月四回の休日、解雇絶對反對のスローガンを以て驀進しなければならない。

情けない婦人團體

ガス問題が勃發して以來の婦人團體の活躍は、頗る目ざましいものがあつた。婦人は消費經濟を掌る、その消費者といふ立場の一致より、比較的容易に提携が行はれたらしく、東京聯合婦人會十萬の會員に檄すとか、東京市政研究會ガス非買同盟を組織するとか、從來

は議會運動一點張りの如く見えた婦選獲得同盟も委員會を設けて、ガス會社と對陣した。かくも一つの問題に對して各婦人團體が一齊に起つた事は、まことに稀れな事であり、また多數の會員を擁する婦人團體が、强力に提携するに於ては、必ずや勝ちは消費者にあると思はれた所、漸次婦人團體の氣勢は低下し、婦選獲得同盟、東京市政研究會、社會民衆婦人同盟が、活動をつゞけてゐるばかりで、東京市民の爲にこそ起つべき東京聯合婦人會が、いつの間にかペタペタとなり、そして完全にその存在の意義を失くした。東京聯合婦人會は、今更繰り返すまでもなく、關東大震災の折の配給の事から、各婦人團體が連絡をとり、狀勢を知つておかねば、かゝる一大事の折に不便を來すといふ事から結成された團體である。而も創立當初より、確たる指導精神を持たず、情實の糸をたぐつて集められたもので、中には參政權獲得を目的とした團體あり、美容術、料理の研究を目的としたのがあり、進歩的なもの、保守的なものが雜然加入してゐるが故に、表面がなか〳〵えらさうに見えても、何か大事を成す場合には、いつも議論倒れとなり、强力に起てた例はなかつた。最も活躍したと稱せられる今年の市議選に於てすらが、幹部の數氏が應援演説にかけずり廻り、市政淨化の看板を所々にたてかけ、抽象的な聲名書を發表したにすぎない。それでもまづ多少の活動はなされた。しかしガス會社に對抗するに、會員の一人が五十錢の料金値下げを要求條項中に入れる事を强調した時に、吉岡彌生、木内きやう子女史等は、判然と五十錢値下げとは過激すぎる（この過激に御注意あれ）たゞ單に料金値下げ位にしておかうといふ態度をとり、遂に東京聯合婦人會は進歩的婦人のオッポリ出しを食ひ、ガス會社に降伏してしまつた。東京聯合婦人會の標語は、「團結は力、帝都を思ふ親心」であつた筈だ。借問す。帝都を思ふとは、帝都に住む市民の事か、それとも市民以外の何ものかを愛するのかとしやれたくもなるが、まづそれはおき、團結は力の前句だけは、東京聯合婦人會のお役を勤むべくあまりに可愛いさうだ。團結は、闘爭を目的としてのみなさるべきである。

　また無産婦人同盟もあまりに弱々しき婦人の力を我々の前に曝露した。無産婦人同盟は全國婦人同盟、無産婦人聯盟とが、日本大衆黨の合同が成るに及んで結成された團體であつて、その合同大會に於て、やがて之が無産婦人の戰線統一に拍車を加へるものであらう事を豪語したのであつたが、合同後幾何もなく解體したとは情けない事ではないか。解體の原因は、日本大衆黨の分裂にあるらしいが、その實は、大衆を持たざる無産婦人運動の行き詰りと、指導の任に當る幹部諸君のイデオロギーが、いまだ完全にプロレタリヤ化されてゐなかつたによるのではなからうか。元來無産婦人運動者間には、燃ゆるが如き闘志はあつても、理論を持たざる婦人の多かつた事を認めざるを得ない。夫に兄弟にアヂられ、尻押しされ、その肉身の所謂別に從ふて活動し、一度も自分の思惟の洗禮をうけさせず、そのまゝ受け入れてゐるが故に、それがどの樣にも形の變化するおそれがあつた。且感情に走りたがるのはやはり悲しい婦人の通有性である。若しこの推察が誤りないならば、折角生れた婦人同盟と雖も、その解體は決して惜かるべき筈がないが、今や無産運動の陣營が彈壓に逢ふて潜行的となり、反動思想並に社會民主々義の横行濶歩する時代に於て、このまゝに無産婦人大衆が放置さるる事は、今後の婦人運動の進展上、非常な支障を來すであらう事が考へられる。（二九・七・二）



文藝月評

中本たか子

これは先づ文藝時評として、最初に左の問題に就いて論じたいと思つた。「文藝評價の規準」と「エロチシズムとマルキシズム」と「プロレタリア文學の大衆性と大衆化」(中央公論七月の小林多喜二氏の論)に就いて。だが、甚だ遺憾ながら、それの出來ないことをお斷りしなければならない。內外共に一時に押し寄せて來た用事の爲に、落着いて夫等を論ずる暇を失つたのだ。今此處で倉惶の間にお座なりなことを云ふよりも、いつか機を得て論ずることを許して頂きたい。

中央公論

「**夜明け前**」(島崎藤村氏)序章に於て非常に好評を受け、この章に於ても世評は高いが、もはや我々の食慾を起すには餘りにかけ離れてゐる。結構の雄大、人生の深奥を穿つてゐるとは云へ、かうした作が若き時代を刺戟することはあまりに稀薄である。唯心論に立つ完成品が、唯心論を離れようとしてゐる時代にとつて何等の投影をなさないことは當然なことである。言を極めれば所謂「豚に眞珠だ」私はこの作を敬遠しておく。何故なら、かうした作は德富蘇峯氏あたりで論じられ賞讃される時、始めて作者の意圖に忠實な解釋と評價がなされるであらうから。併し、心ある者は一度はかうした作品を讀む必要があらう。益々盛なる藤村氏の藝術的精進とその熱情とを敬服することは、若き無努力な人達にとつて大きな指標である。又、常に努力する人達にとつても。

(今日のやうに、さまざまな作家がその作品を制作する動機に於て各々異つた目標による時は、その作品を評價する規準も亦異らなければならないと思ふ。だが、我々は一々その異つた規準によつてそれ等の作品を評價してはゐられない。我々は生活に於て常に必要なものと不必要なものとを撰り分ける。これは生活の重要事である。だから、我々は先づ多くの異つた立場にある作品を大別して、ブルジョア文藝とプロレタリア文藝の範疇に入れ、その二種の文藝評價の規準を定めなければならないのだ。最近、文藝作品の價値論が盛にな

つてゐるが、その多くはプロレタリア文藝に就いてゞある。然らばブルジョア文藝は問題にならないだけ沒落の過程を辿りつゝあるか、或は問題とするには餘りに當然な評價の規準を持つてゐるか。沒落と見るには餘りにブルジョア作品の生産は多く、安定した評價の規準を持つてゐると見るには、餘りに混沌としてゐる。今や、ブルジョア作品は全然その統一した目標を失つてゐる。プロレタリアの作品の牽制に足許を亂して來てゐる。この時に當つて、瞭乎りした評價の規準を定めることが重要であるが、先に擧げた理由によつて緩りしてゐられないので、此處ではそれを省く。）

「斧」（翁久允氏）三藏の犯してゆく殺人心理の描寫が如實に浮彫りされてある。二重の心理が錯綜して、巧妙な思惟の文を織る。最初のカリフオルニヤ平原の描寫はしつくり迫つて來て、雄大な景色を我々の胸に擴げる。その中で愛犬を相手に獨り寂しく老年を送るボール老人の姿は瞭りしてゐる。この地主を殺した斧が最後まで誰の手に從つたものか解決つけてないのは作者の意識的な技巧であらう。三藏の心理の錯綜してゆくことにそつはない。三藏の向を張る山崎も、いかにも殖民地にありさうな型の男である。それに排日問題を出して來たことは作品の幅を出して好いことだ。これが、唯單なる個人心理描寫のみにとゞまつてゐたなら時代的な感じが稀薄であるが、木に竹をついだやうな破綻を見せず國際問題を出したことは作者の成功であると云はねばならない。又この作品の注目すべきことは、怪奇的な幻想の隈どりである――かの若き女性の施した眼の隈のやうな。これはこの作品の魅力である。所々この作を傷つけるのは、浮き上つた感傷味のあることだ。結末は作者の好みなら仕方もないことであるが、少々臭い。唯心論的な立場でなら、かゝる心理描寫探求の作品はよく出來てゐると云はるべきであらう。

「支那」（前田河廣一郎氏）先月の力感のある後だからか、今月のは枚數も少いし、力も薄く感じられる。この雄篇にかける期待の大なるものを我人共に惜しまないであらう。たゞ何時まで經つてもテーマの瞭りしないのは、作者の考へがあまりに深遠なる爲であらうか。

「最後の墓」（和田傳氏）老衰した百姓惣右衛門が、小作を止めて隱退し、遂に死に到るまでを書いた好篇。力も這入り、地質も緻密だ。だが、發展性のない、自然主義的な臭味が全體に湛つてゐる。この作者は雅川滉氏のいふ「藝術的價値とは、政治的、社會的、階級的經濟的といふが如き固形的な價値ではなく、むしろ其等を綾なす媒介素の中に存する無形的な價値なのだ」（近代生活七月）をよく具體化してゐる。だが、現在に於て媒介素許り持つてゐる作品は、一般讀者への迫力が薄い。何故ならば現代に於て我々に必要な作品は、現代的要素たる政治的、社會的、階級的、經濟的の如きものを、媒介素によつて巧く醱酵させて與れたものであるからだ。かゝる現代的要素のないものは、もはや我々を打つて來ない。この作を救ふ唯一つの取り柄は、山氣のない作者のぶらない態度である。これが七年前であつたなら、世評を釀し、賞讃を受けるに充分な作品である。

「街の斧博士」（十一谷義三郎氏）知らないで讀んでゐたら、まだ後半が殘つてゐたのだつた。未完成なので評し難いが、近代的な商業的感覺の都市と、そこの住民の英雄的政略とが、映畫的な手法で展開されてゐる。氏の才筆は此處にも美しい近代的な色彩の束を投げる。（一體、作家には發見する型と完成させる型とがある。十一谷氏や山本有三氏などは完成させる型の作家である。）ちらちらする尖銳

な色彩と、フレッシュな香氣は、中に沈む靜的な觀念にテンポを與へる、だが、やはりこれは靜的な作品である。これはブルジョア文化の最高頂に咲いた、香氣高い花である。進歩してゆく港市——最も動的であるべきこの街が靜的に止るのは、作者の持つ觀念論に歸因するのだ。この作者の示す作は、常にさうした立場からの形式を見せる。十一谷氏は寡作で有名であるが、質がよくて量の少いことと、質がよくなくても量の多いこととは、何れが現代の社會に必要であるかといふに、私はむしろ後者の方に贊成する。漸次、プロレタリアの世界に勢力を移してゆく現代に於ては、先づ質よりも量が必要であると思ふ。少量で良質を欣ぶのはブルジョア性の通弊である。この風習はもはや脫却されつゝある。片岡鐵兵氏、林房雄氏等の多作家が、若し眞實にプロレタリアの爲に必要なる多くの文藝生產をなすならば、それは人類の爲に意義あることであると云はねばならぬ。曾ては唯心論的な立場から、さうした多作が輕蔑されて來たが、今日唯物論的な立場から見るなら、少量の生產といふことが餘りに役に立たなくなつて來た。

改造

「賴朝から貰つた島」(前田河廣一郎氏) 氏特有の話上手さからずんずん引ずられてゆく力がこの作にある。先づ賴朝から貰つた島といふ名が、疑問符を讀者の頭に投げる。その島といふのは、房總半島の突端にある、鐵滓の團塊のやうな、何の面白ろ味もない岩山の斷片であるが——」其處にも亦、策略と詭辯による搾取階級があり、自覺のない被搾取階級がありブルジョア政策の詭計があり、島と陸との鬪爭がある。この作にも氏一流のジャーナリスチックな物の見方と、興味の展開と、社會民主々義的な社會性がある。そこで出て來る人物にも日名子老人のやうな骨董品的なプロレタリアや、軍人狂の『伍長』など、氏の作品で顏馴染のものである。「犬」に出て來る大井鐵太郎と『伍長』との間にはどれだけの發展過程もない。ただ、ミリタリズムの反感を、そこに出て來る人物の偏執的ミリタリズムで野次るのが、氏の癖である。これはいつも同じ調子である。氏の作品の發展は、氏自身の內容の發展ではなく、素材である社會事象の發展から來るのである。今日のイデオロギイの尖銳なプロレタリア作品に比すれば、氏の作品は常にイデオロギイが微溫的であり、社會民主主義的な合理性がある。それだけプロレタリア作品としては尖銳を缺き、ブルジョア作品の方へ多大の浸潤性がある。かうした作品はマルキシズムには走りきれず、さりとて從來のブルジョア作品では滿足出來ない人達に欣ばれる傾向を持つものだ。特異の題材であり、其處に配せられた人物も各々個性のある面白い人物達であるが、讀後感は古いとしか殘らない。支那」に於ける世間の好評と驚異は、その素材の支那の魅力であり驚異である。「賴朝から貰つた島」で終になつて出て來る鬪爭がなければ、それは唯單なる寫生文に過ぎなくなる危險性を多分に持つてゐる。これが社會主義小說であるといふことを認めさすのは、終に於ける鬪爭である。最終の海の荒れ出す模樣の描寫は巧い。

「失樂の歌」(宇野千代氏) 良人を可憐な少女に與へた心理がよく彫り出されてゐる。たゞそれだけのものだ。曾てのセンチメンタル・ソングにすぎなかつた「稻妻」や「月夜の便り」に比べると、この作では感情の洗練された透明さを見る。心理描寫、情緒、氣分等に作品の目標を置くならば、決して劣つた作ではない。曾ての良人への

戀へとした思慕が、この作で明快な決斷を見せてゐるのは嬉しい。だが、かうした作品がいかに微笑を投げても、我々の關心はその方へ傾くことを欲しない。それは和田傳氏の「最後の墓」に就いても述べた通り、現代的要素の缺除である。政治性、社會性、階級性、經濟性等を藝術の要素に取り入れる時、そこに必要なものは氣分や感情や情緒ではなくして理智である。科學、機械、工業の現代はまことに理智の時代であり、意識の時代である。されば之等には、冷靜があり、批判があり、イデオロギイがあり、明確がある。もはや今では、過去の藝術のなした感情過多な人生が、理智によつて明朗とした機構を持つことを欲する。「失樂の歌」になされた感情の明快さは、感情の生んだ感情であり、理智から生れた感情ではない。

新潮

「生別離」(嘉村礒多氏) 緻密に刻明によく書けてゐる。まだ若いらしい平凝といふ男が、結婚前の過失を持つてゐる妻咲子にこだはり始めて、カツ子といふ女と同棲し、妻子と生別離した苦腦を描いてある。先づ第一に非常に讀み辛いことである。作者は眞劍になつて力を入れ、一切の浮游した感情を避け、地道にぐんぐん心理を探求してゐるが、かうした作風は讀むのに非常に努力が入る。月評をしなければならない爲に讀んだのであつて、さもない場合には、最初の一頁で遺憾なく放擲り出したかも知れない。かゝる感情過多な身邊描寫と、構成のよい羅列式と、偏平な筋が、統一よくごたごたと展開されてある爲に、讀んでしまつて頭に殘る感じは非常に漠然として、生きてゐるのは主人公の氣持だけである。忠實に作者の氣持に思ひ到るならば、いかに作者が苦心し、吟味し、精進して制作したかはよく解る。併し乍ら、このやうに構成のない、統一のない、立體でない——現代に超越した作品は、もはや我々に用がない。かゝる內容であるからには、形式がかくも飛躍のない、簡潔のない、統制のないものとなるのは必然であるが、それにしても今少し、メカニズムによりて形式を整理して貰ひたい。メカニズムの必要なのは、それが材料を組織し、統制し、立體化する故である。機械の持つ統制建築の持つ組織、そして之等の立體的經濟的なフオルムこそメカニズムの產物である。メカニズムの重要なのは、彼が敎へる經濟であり、プランであり、法則であるのだ。今日我々が新しい藝術の道を機械や建築に請ふのは、このメカニズムに就いてゞある。曾て構成主義者一派が機械を讚美したのはその外形的なものであつたが、今日は機械の持つ經濟に關心を傾け、今や機械の本質を完全に把握しようと努力してゐる。そこでメカニズムを多分に含む藝術であるところの建築や映畫が口喧しく話題に返り咲をして來た。即ち、建築はメカニズムの持つ形態的表現であり、映畫はメカニズムの持つ性格的表現である。かうしたメカニズムの求めるものは、作品が構成の上に立ち、男性的な能動的な美を持つことである。これが現代に於て最も必要なことゝなつた。故にメカニズムを持たないこの作品が示すのは、形式、內容にいかに不經濟であり、非効果的であり非能率的であるかだ。今一つ終りに瞭りしたピリヨードを打つて欲しい。

「森の中」(平林たい子氏) かの震災を背景にして、そこにも絕えない支配階級彈壓があるのを描いてある。木田と山下と仙子の三人が危險を犯して群集の間に主義を宣傳し、同志の危急を救ふべく奔走するのだが、遂に捉はれて銃殺されるのだ。平林氏の周到で簡潔な筆致は常にテーマを透明にし、効果を助け、テンポを統率する。寫

生風な描寫を非常に多く取り入れ、その爲幾分散漫になる惧れはあるが、イデオロギイの尖鋭はある。プロレタリア「文藝作品の價値に就いて」新潮七月號に述べられた岡澤秀虎氏の説を傾聽すれば「新舊文化の對立期、或る新興階級の社會生活が政治的段階にあるときは、常に勇まゝく、政治的概念の宣傳者となつて、直接政治の範圍に役立つのである。これは過去に於てであつたし、現代に於てさうである。」と喝破されてある。これに從つて「森の中」を檢討するにそこには充分に「勇ましい政治的概念の宣傳」がある。更に岡澤氏の同說をきけばレーニン自身の論文『黨の組織と黨の文學』（拙譯あり）を見よう。こゝではレーニンは『文學の仕事は社會民主黨の仕事の他の分野と、密接に結びついてゐなければならぬ。社會民主主義といふ機械組織の、一つの車輪であり、ねぢでなければならぬ』と云ふことと『文學の仕事は、機械的な平均、平等化及多數決に最も緣遠いものである。云ふ迄もなくこの仕事には、個人的考案、個人的傾向に對して、思想及び幻想、形式及び內容に對して、大なる餘裕を保證することが絕對に必要である』と云ふことを、兩立させてゐる。これは、精しく說明する迄もなく、藝術の理論を無視して、藝術を政治に隷屬させるのでなく、藝術が藝術の理論によつて政治に連絡し、政治的目的を理解して、藝術的活動を行ふべきことを云つてゐるのである。」と力說されてある。これによつて「森の中」を見れば、政治的目的と藝術的活動とが密接に結びついてゐる。だが何となく物足りない感じのするのは、あたりに添書が多すぎることと、木田、山下、仙子の三人の活動が展開しない中に捉はれて殺されるからであらうか。とにかく結末が殺されてしまふだけなのは、プロレタリア藝術の尖銳な向日性に反し、指導精神の乏しさを感ずる。以前の「非幹部派の日記」に於て作者がともすれば心境に墮して行く危機を見せたのが、「森の中」ではかなり救はれてゐる。最近の平林氏の作品の中では、この作は力作である。小いことだが「崖の下には、街が、搖れる地面の上に積木細工のやうにはかなげにならんで、燈火を失つてゐた。」上の中で、「はかなげ」にといふ副詞は社會主義者として、將又科學的立場にある平林氏の言としてはあまりに感傷的である。

文藝春秋

「**大カフエー時代**」（石濱金作氏）資本主義社會の舞臺であるカフエーの裏面をよく曝露してゐる。カフエーの內部のみではなく、これに附帶した社會層を加味したことも幅が出て好い。併し、この小說はカフエーの裏面曝露以上に出てゐない。曾て石濱氏はマルキシズムに轉換せられたときいたが、この作品をマルキシズムの見地から制作されたものであるなら、餘り成功だとは云へない。この程度の社會層の曝露なら、今日ブルジョア層に立つ文藝作品でもなし得る範圍である。知識階級出のプロレタリア作家が、知識階級を克服することを目的として、制作した作品であると見ても、あまりにイデオロギイの尖銳を缺き、階級鬪爭の跳躍性を失し、少し許り街頭演說を中止する官憲の壓迫位では政治的批判は不充分であるし、機關銃の音が聞えなくてミリタリズムの反語にはならない。マルキシズムの見地から見るなら全體の効果は非常に薄いと云はねばならない。

近代生活

「**寫眞**」（藤澤桓夫氏）作者は常に眞劍になつて、階級鬪爭にその尖

鋭な觀察眼を近づけて行く。この努力は實に敬服に値する。この篇はミリタリズムに關する社會悪の指摘がよく判つてゐる。闘爭意識が熾烈ではないが、眞面目な書振りがうれしい。形式に一人稱を持つて來、大阪辯を使ふのは、どうも重厚味に缺ける。一人稱で且話し法である時には、鋭截調は出るにしても、力感と權威の立法を失ひ、従つて偏平な筋の展開となるのは免れないことだ。

女人藝術

「**紫衣の挽歌**」（野溝七生氏）心境小説としてよく書けてゐる。猫に對する深い愛はよく握られてゐる。だが、我々はもはや、心境小説の陶汰を行つても好い時である。然らば心境小説を排撃して我々の取るべき道は何であるか。「問題は、飛んでいつてしまふかも知れない物質を建築すること「（エレンブルグ）から始まる。

「**緒**」（山本和子氏）美和代といふ無産知識階級者の身邊に起る社會事象を巧に寫し出してゐる。そこに展開される地圖には、或雜誌社の爛れた問題の曝露。雜誌社に伴ふ印刷所のストライキ、高層なビルデイングのコンクリートの皮を剝ぐ人夫の脆い命、等々…の社會事象だ。作者は實によく社會現象に注目し、よく記憶してゐる。併し、この作にはあまりに多くのことがらを嵌め込み過ぎてゐる。

プロレタリア小説はどうしても、透明な批判と、明確な事象の把握によるイデオロギイの尖鋭がなくてはならない。そこに必要なものは、構成による經濟と明朗と組織である。經濟に於て、不必要な感情を抹殺して理智を生かし、朦朧とした情緒を明快な感覺に代へ、冗漫な心理を統一した主智に置き換へる。明朗に於て、主觀を客觀に、病的を健康に、獨斷を分析に、現象的なものは批判的に、告白的なものを純粹意識的に改める。又、組織に於て複雜なものを統一に、羅列を構成に、反動を創造に、分析を綜合に、內容主義を形式主義に到達せしめる。政治的、社會的、階級的、經濟的な諸要素を含むプロレタリア藝術では、プランと功利と法則と均衡と充實に就いての思慮を忘れてはならない。政治的目的を認識させるのに、藝術的媒介素による確實な報告を忘れてはならない。何故なら我々の中樞神經が働く前には必らず末梢神經が働くからである。これを考慮するには、數學に於て實測を重んじ、理科に於て實驗を忘れないのと同じである。つまり、認識を深める爲には、いかに感覺活動が重要であるかといふことである。尖鋭なイデオロギイは常に尖鋭な感覺によつて效果を深めるものである。プロレタリア藝術には、ともすれば中樞神經を動かすことを急いで末梢神經の活動を忘れる弊がある。岩藤雪夫氏、小林多喜二氏の效果は、先づこの末梢神經の活動を無視しないことから始まる。プロレタリア藝術に志すものは、早く商業的認識を捨てゝ工業的認識へ進まねばならない。初期の社會主義小説と、現今の社會主義小説との懸隔に敏感でなくてはならない、従つて早く「緒」を脱却しなくてはならない。

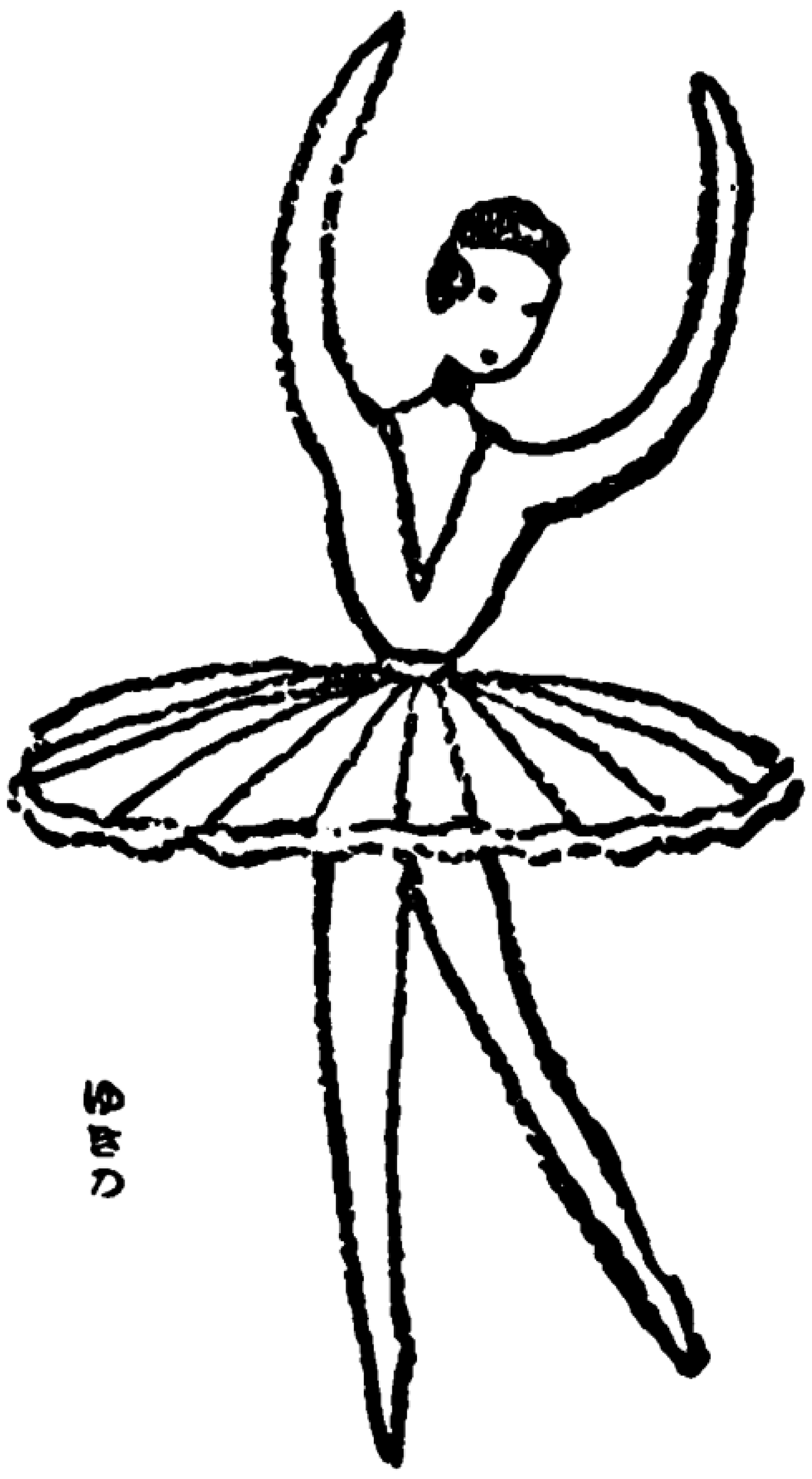
新刊紹介

天津時代の私の詩—三津本富美子著—

女性の詩はほどよき抒情味を欠かないがよい。それは丁度公園に花を植えてあつてほしいやうに。三津本富美子さんの『天津時代の私の詩』といふ詩集の中に『そのかみの吐息はるけし物皆の秋はめぐる』といふものがあり、『誰が知つてゐるあの日を、飛んで見へなくなつたあの日を』といふものもあつてこの女人のやさしい情味をたゝへてゐる。天津時代といふその天津のエキゾチックな點の乏しいのは一寸失望したが「秋風のべらんだに立ちて」とか『二匹のらば』とかは實感がこまやかでよいとおもつた。發行所市外西巣鴨民謠詩人社　定價一圓三十錢

演劇時評

上田文子



新劇の大衆化について

六月中に四つの新劇團が東京で公演した。築地小劇場の「磔茂左衛門」（藤森成吉氏作）、新劇協會の「海に生きる人々」（葉山嘉樹氏原作、金子洋文氏脚色）とクレオパトラ（前田河廣一郎氏作）、新築地劇團の「母」（ゴルキー原作、高田保氏脚色）、左翼劇場の全線、（村山知義氏作）がそれである。

この上演目錄を見られた丈で、賢明な讀者は新劇運動の大衆化、左翼化の現象を容易に看取せられるであらう。以上の演目の中の二つ、「母」と「海に生きる人々」とはプロレタリア文學の戲曲化であり、他の三つも悉く、左傾的な、同時に大衆的な、イデオロギーの明白な作品である。個人主義的な戲曲は今日の新劇壇から完全に影を絶つたといつていゝ。この現象を誘致した原因については私は先月號の「新劇運動の過去について」の中で詳説したから、今こゝに更めていふ必要を認めないが、この現時の新劇の顯著な特質となりつゝある演劇の大衆化が、必然の進歩過程であることを認識すると同時に、その「大衆化」の意義を正確に批判し、清算して、不純な一切のものを濾過しさることによつて、眞の新興大衆の武器となり推進機となる社會主義的演劇を樹立することが、演劇を批判するものゝ目下の急務であり、同時に尺度であらねばならないと思ふ。

一口に「演劇の大衆化」といふ。

しかし、現時の社會に於いてこれをいふ時、この言葉は、實に、復雜多樣な順應性を具備してゐる――と同時にわれ〳〵はこの言葉の裡に陰蔽された多くの慣俗性と反動性を意識しなければならない。資本主義社會の複雜な機構の中にあつて大衆とは必ずしも、自覺せる、（或ひは自覺の過程に置かれてゐる）新興プロレタリヤ大衆のみではない――、因襲的な惰情なモッブに過ぎない場合が多い。彼らは慣性に安んじる生活から出發して、その享樂對象となる藝術にも極力新奇な、或ひは難解な表現を嫌つて、安易な樂受をのみ求める。故に、彼らの喜ぶところの藝術は常に、因襲的であり卑俗的

であり——結局反動的である。

ブルジョア・インテリゲンチャーを對象とし、藝術至上主義の唯心論を奉戴して立つた日本の新劇運動の歴史は、幸ひにして、これらの反動的モップの勢力によつて犯されることが極めて尠かつた。(松井須磨子の藝術座が藝術二元論のあやしい標語のもとに、「復活」や「生ける屍」を安價な新派演劇に、書きかへて悍らなかつたことが、小山内薫氏を如何に痛憤させたか、「新劇復興の爲に」なる對話を讀むものは誰も明白に知るであらう。この點に於いては、われわれはわれ〳〵の先人の進歩的であつたことを深く感謝しなければならない。それと同時に、日本の新劇運動が漸く藝術至上主義の羈絆を脱して、社會進化の武器として役立たうとしてゐる現在、象牙の塔を勇敢に破つて街頭へ飛び出した新劇運動はその對象となる大衆の問題で過去の藝術至上主義者の味はゝなかつた第二の危機を持つであらうことを私は豫想する。「大衆化することはモップに墮することではない」と言へば新劇運動者の多くは失笑するかも知れない。しかしその失笑に値ひする現實が、新劇の大衆化の傾向が益々隆盛になるであらう日に、派生しないと誰が明言し得るであらうか。一例を擧げていふなら、近頃の新劇界に一つの流行となつてゐる小説の戯曲化の如き現象の中にも、私は既でにその奇機の將來すべき崩芽を見出す。

廣義な意味に於いて私は小説を戯曲化する企圖に贊成するものである。それは單に今日の劇壇が戯曲饑饉時代である理由からのみではなくして、演劇を大衆化し、普遍化し——本來の任務を完了せしめる爲には、從來の如き狹隘な潔僻はすべて除去さるべきだからである。戯曲それ自身が演劇を支配する神であつた時代は過ぎた。今日の劇場にあつては、戯曲は演劇といふ綜合藝術を構成する一要素——土臺石の役目を務めるにすぎない。斯ういふ見地から見れば、戯曲を構成する技術を有さない文學作品の中によき演劇の要素を見出した場合、それを戯曲の樣式に構成し、演劇の臺本とすることには何の誤謬もない筈だからである。私は以上の意味で、小説の戯曲化を愛するものだ。

しかし、この場合明言して置き度いのは私の是認し、奬勵したい小説の戯曲化とは、小説それ自身を、舞臺に再現することではなくして、小説を母胎として、異る一の戯曲が發生し——それを基礎とする純粹な演劇が構成されることを指してゐることである。もしそうでなかつたなら、小説の戯曲化、演劇化は、再び演劇をして文學に隷屬せしめる手段となるであらう。歐洲大戰を契機として立つた新劇運動のあらゆる新樣式が——表現派、未來派、等の——非常な努力をもつて、取戻した演劇の王座を再びあの臀の舊い文學の君主に簒奪(さんだつ)せられるに過ぎないであらう。私はその「漠然たる不安」をゴルキーの「母」の脚色にみた。「母」については後に書くから、こゝには云はないとして、兎も角、小説の形式に引きずられた脚色は演劇として非常に危險だ。それは演劇を大衆化する如くみえて實は演劇から本來の立體的、構成的要素を剝脱し、それを徒らに冗漫な、似て非なる映畫的存在に引きさげることだ。私は自然主義戯曲の樣式を今日大衆化せんとしてゐる演劇に求め樣とする程非常識ではない。近代の藝術——こゝでは演劇が、急速なテンポと、多角面な運働とを持たなければならないことは勿論である。しかし、近時の劇場にもてはやされてゐるタブローの連續によつて構成されたイージーゴーイングな演劇をみる時、その構成に起因する迫力の稀薄さに

於いて、時間的にも空間的にも、映畫のもつ近代的效果に匹敵し得ない點に於いて、演劇の様式――新興階級に呼びかけるところの新しい演劇の様式が決して斯うしたものではあり得ないことを確信する。われ／＼はイプセンにチエホフに學んだところの戯曲作法を故意に捨てる必要はない。反對にそのエッセンスを我々の時代、我々の立場に應じて、極力巧利的に活用すべきである。「小説の戯曲化」といふ名のもとに、演劇がイージー・ゴーイングな道を見出して、文學へ後退してゆくことを厭ふ點で、私はこの流行の餘り敷衍されることを好まない。

これはその一例にすぎないが、その他にも「新劇の大衆化」なる標語のもとには彼らの進歩性を阻止する種々な危險が包含されてゐるであらうことを、新劇運動者等は熟知しなければならない。大衆に墮するか、大衆をリードするか。彼等の陷穽が險阻な難路にあるのでないことは云ふまでもあるまい。

A　左翼劇場の「全線」

正月「ダントンの死」を上演して、興行的に成功した、左翼劇場は六月二十七日から向ふ七日間、築地小劇場に村山知義氏の「全線」を上演してゐる。私は村山氏の戯曲を讀むことが出來ず、初日直接、舞臺で演劇としての全線に接した。從つて檢閲の斧鉞を多く蒙つたであらう。舞臺の全線によつて、戯曲「暴力團記」を嚴密に批判することはゆるされないが、舞臺から受取つた印象を土臺にして、全線を近時プロレタリア演劇の白眉に押すことが出來る。

全線は非常に強いアヂテーションの藝術だ。全戰からアヂテーションの効果を引去つて、果してどれ丈、プロレタリア藝術としての特異性が存在してゐるか――さういふ問ひは問ひそれ自身愚問である。それ程、全線はプロレタリア藝術の普遍性に立脚して書かれた脚本である。鐵道從業員の自覺、暴力團を利用する政府の權謀、そして、爭議、罷業、彈壓と、定石通りの過程を辿つて、つひに悲壯な洗禮となり、犧牲者の刑死となる――支那といふ舞臺を借りて、巧みに表面的な彈壓を避け、同時に暴力團に興味あるローカル・カラーとユーモアを與へてカリケチアライズしてゐる點など、作者の異常な才能は隨所にみられるにしても、この作は決して、この作者のもつ、未來派的な奇拔さで、觀客を驚倒させる種類のものではない。それどころか、「勇しき主婦」や「スカートを穿いたネロ」のフアンは戯曲作法に於ける作者の後退を歎じるかも知れない。すでに私自身、この芝居を見て、この作者の才氣が深く沈潛し、怖しく正道的なガッチリした足どりに變つてゐるのに驚かされた。この戯曲の様式は、全く、ア・トルストイなどの用ひるネオ・レアリズムだ。

しかし乍ら、これを作者の後退となすべきであらうか。否私はこの様式の後退――後退といふならば――をむしろ喜びをもつて迎へる。何故ならば、作者はこゝに到つて從來の飛行旅行的な態度をすてゝ「民衆」に前驅して走る足の地についた作家となられたからである。新感覺派、未來派の作者から、新興プロレタリア大衆の作者となられたからである。

唯物論の原理を學び取つたものにとつて、藝術の神聖は完全に剝脱されてゐる。藝術は情操の社會化であり、民衆に訴へ、社會を進化へ導く武器に外ならない。社會進化の武器として藝術は常に形を變へることを强要される。新興する一の階級が政治的彈壓の下にある時と、その階級が鬪爭をなしとげて、合法的な新世界を建設しつ

つある時とでは、同一の藝術家の表現する形式や內容も恐しく變化するに違ひない。唯心的な過去の藝術家は、藝術に神聖を見樣と努めた爲に、藝術の質の變化を非常に重大視し、千古不變の人情に、訴へるところの藝術を第一義的のものと見なした。しかし、さういふ概念は、今日のわれ〳〵に一體何を意味するか。一度文藝愛好家のすべての禮讓と不文律をすてゝ、冷淡に精視するならば、シェクスピアもダンテも近松も源氏も現在のわれ〳〵にとつて何と遠いはるかな存在であることよ。彼らはわれ〳〵の祖先であつた。しかし斷じて、われ〳〵の同時代人ではない。我々が藝術を神化したるすべての習性から解放される時、それらのすべてはわれ〳〵の祖先を研究するに必要な文獻としてのみわれ〳〵に役立つであらう。シンクレアの言の如く、彼らの大部分が、圖書館の歴史部へ移動することにわれわれは決して異議を稱へない。

もし、唯心論的な觀念をもつて、「全線」に對すなら、この戲曲の所謂「藝術的價値」は決して高い評價を得ないであらうし、唯物史觀に根ざした嵐が現社會を濤掃して、コンミニズムの新世界が建設された後、もしこの芝居の如きをレパートリーに加へる劇團があつたら何とそれは氣のぬけたビールの樣に思はれることであらう。しかし以上の如きがこの戲曲の社會的價値を決定する規定にはならない。われ〳〵は現代の藝術を批判するに、過去の或ひは未來の尺度を使用する必要はない。われ〳〵はわれ〳〵の住む現在の社會を定規として藝術を尺度する、現社會に對してその藝術が何をうつたへるか？　現社會を進化へ導いてゐるか、反動へ導いてゐるか――問ひはこの點につきる。

日本の現社會を對象としてみる時、反動政府の暴壓、テロリズムの横行、よつて來る檢閲制度の横暴まですべての條件を含むるつぼの樣な社會狀態を考慮に入れてみる時、「全線」の作者が、社會に對し、民衆に對して、決定的に進歩的であることが立證される。

初日の舞臺をみた丈でも、何とこの演劇の思想するアヂが觀客に強くアッピールしてゐることよ、左翼劇場の客、必ずしもプロレタリアではない――むしろ、實際運動に關係の薄い中間知識階級が多いのであらうが、それにも拘らず、あの觀客席と舞臺の熱狂的な歡喜、憤怒の合一はどうだ！

新劇は、社會を認識したことによつて、初めて實驗室の繭を破つた。今こそ窮屈な學校ではなくて、民衆の交通する生きた社會となつた。今、何處の劇場で――淺草の安來節の舞臺を別として――こんなに觀客と舞臺が相呼應する「生きた演劇」が求められるだらう。そこにあるものは藝術的感激といふ如き「靜かな悅喜」ではない。脚本と演出と演技とうつて一丸となつて、迫る荒々しい力だ、血だ、熱だ。社會的關心だ、イデオロギーの一致だ！

プロセニアムを撤し呼應する劇場それ自身一つの演劇なのだ。觀客も又、役者の一員なのだ。

ギリシヤ劇以來の演劇の正道は今、唯物史觀の助勢によつて、長い迷路から演劇を民衆のものに取りかへした。自然主義の演劇に行止りがみえて以來、幾多の進歩的藝術家によつて企てられた演劇の民衆化は、唯心的な劇場。美術家や逃避的な未來派藝術家の手によつてなし遂げられず、唯、革命的プロレタリアートの力によつてのみ完成せられるであらう。その實例をわれ〳〵は、日本現時の劇壇に於ける左翼劇場の仕事に見ることが出來る。

この現象に對して歡喜すべきか、寛恕すべきか――そこにわれわ

れの與へられた悲劇的な乃至喜劇的な役割がある。

（六月二十七日觀劇の夜）

B　新築地の「母」

左翼劇場の初日をみた翌日、帝劇で新築地劇團の公演ゴルキーの母をみた。

私は小説の方は第一部丈讀んだのだが、世評ほど感心しなかつた。マルキシストでないゴルキーの唯心論的な思想の滓が細部にこびりついてゐて、概念に於いてはプロレタリア的であり乍ら、表現された藝術それ自身は、可成り個人主義的な色彩で塗られてゐる。これには時代の差違も影響をなしてゐるであらうか、ともかく、シンクレアやベロック、乃至小林多喜二を持つわれ／＼の時代に於いてそう隨喜して迎ふべきプロレタリア文學の典型とは思はれない。

にも拘らず、この小説が、近時日本の讀書界に可成りなセンセツションを卷き起したのは何の爲であらう。（聞くところによると、この小説の飜譯されたのは、數年前であるといふ事だ。）この現象は要するに、日本に於ける階級爭鬪の段階が、今、ゴルキーの「母」を生んだ千九百七―八年頃のロシアの狀態に接近して來てゐる一つの實例ではあるまいか。近年わが國の階級鬪爭は漸く尖鋭化され、こゝにもそこにも實際運動の悲壯な鬪志を産む――至るところに、パーヴエル・ブラソフアがゐる、――而して恐らく、彼らの母のすべては日本の母親であつてゴルキーの描くペラゲヤ・ニロウナでない悲哀がある。肉身――殊に溺愛する母の涙は如何に鬪士の心を暗く弱くさせるか、――

この意味に於いて、新興階級及びこれとイデオロギーを同じくする若き時代の暗に求めるものは何か。曰く自覺せる母である。「個」の母性愛を生かして同志への母性愛へ變化せしめることである。斯ういふ母親をもつ事ほど、彼らにとつて得易い幸福はあり得ないのだ、ゴルキーの母に於いて彼らはしなくも彼等の待望する「母」の「相」を見出した。今日の日本に「母」の歡迎される意味を私は斯う解釋してゐる。

新築地劇團がかういふ情勢を洞察して、「母」を脚色、上演したことはどの意味からも賢明である。

脚色は「生ける人形」以來おなじみの高田保氏である。「生ける人形」が、原作を單なるストーリーとして、別に構成されたよき戲曲であつた――全然、逐字譯のなかつた點で、ひどく喜ばされてゐた私だつたから、今度の「母」にもゴルキーの小説でない、芝居として別に高田氏の「母」がみられること丶期待してゐた――期待しすぎた爲か、いさゝか失望の嫌ひがないでもない。といふのは「生ける人形」に於いて、あれ程原作をアダプテーションした大膽な脚色者がこゝではひどく小説にゴルキーの小説「母」を遵奉してゐられるからである。原作でイデオロギーの漠然としてゐる箇所を削除し、或ひは改作しないのみか、細筋に至る迄原作を尊重して、成丈、遺漏なく芝居の中へ盛り込まうとした爲に、返つて芝居としての印象を稍々散漫にした嫌ひがある。これは東京朝日で藤森氏も指摘してゐられたと思ふが、言葉の點なども「眞理」とか「正義」とかいふ原作の抽象的な言葉以外今の日本にはもつと生き／＼と勞働者へ訴へる言葉がある筈だと思ふ。尤も、脚色者自身發表してゐられた通り、近來これ程亂暴な削除を受けた戲曲も少ないらしい。カットされた箇所丈で三十枚、稿を變ること三度とかいふのだから、斯うな

ると芝居をみて單純に戯曲家の手腕を是非することは到底ゆるされないが、唯、カット如何にかゝはらず、この脚色が原作を偏重しすぎた嫌ひはたしかにあると思ふ。

舞臺をみて、

私は劇場のメカニズムの活用を非常に愉快に感じた。セリ出し、廻り舞臺、――殊に、メーデーのまわり舞臺は、あれで行列と旗を使用することがゆるされたら、どんなに壯快な力强い舞臺になつたであらう。

もう一つこれもメカニズムについて感じたことだが、この芝居に限らず、近頃、新劇の舞臺にスクリーンの現れることが非常に多い。これも一つの流行であるかもしれないが私はこの現象の發展に可成りた興味と期待をもつてゐる。今これを課題にして「演劇と映畫」の關係を討究したいが、紙數の都合があるので、次の機會に譲る。

役者ではヒロインの山本安英氏、隣りの女房の高橋豐子氏、ルイビンの横田儔氏などがいゝ演技をみせた。　（六月二十八日）

讀んだ戯曲

七月號の雜誌で讀んだ戯曲の名をあげて置く。

小杉天外氏の「ちんば念佛」（改造）、宇野千代氏の「走燈籠」（文藝春秋）前田河廣一郎氏の「蔣介石」（文藝戰線）藤原誠一郎氏の「三月三十一日」今井達夫氏の「ポプラ屋敷である日のこと」（以上三田文學。）岡田禎子氏の「終列車」弘津千代氏の「加賀の千代」（以上女人藝術）――

讀みおとしてゐるものもあるかも知れないが、讀んだ範圍ではこれといふ收穫もなかつた。小說に比して一體にレベルが下つてゐる。長篇で未だ完結しないから批判は出來まいが前田河氏の「蔣介石」をよんで例のスケールの大きさと、技法の明朗さに鳥渡愉快を感じたばかり――

戯曲界は相變らず饑饉時代を脫しない樣だ。（一八二九、七、六）

讀者通信

大分　永田壽美子

女人藝術の先生方初めまして

私はプロとかブルとかさうしに言葉の意味さえ知らぬ、又解らないことに少しの不思議もない位の、山の中に居る一人の女で御座います。山中暦日なし、テンポなんてまるで無い十年一日の此處に居て、只山の色の變化を見て暮すだけでございます。

かうした中に生きて來た私も、人々は何を考へ何を云々してゐるだらうかと思ひまして女人藝術の五月號を買つて見ました。

高い所を歩く人々、私なぞわからないことばかりで御座いますが、讀んだ後何かなしに胸の騷がしいのは確に刺戟されたのだと思ひます。安閑としてゐた自分に、或焦燥をすら感じます。

心の糧にずつと續けて讀まうと存じてゐます。

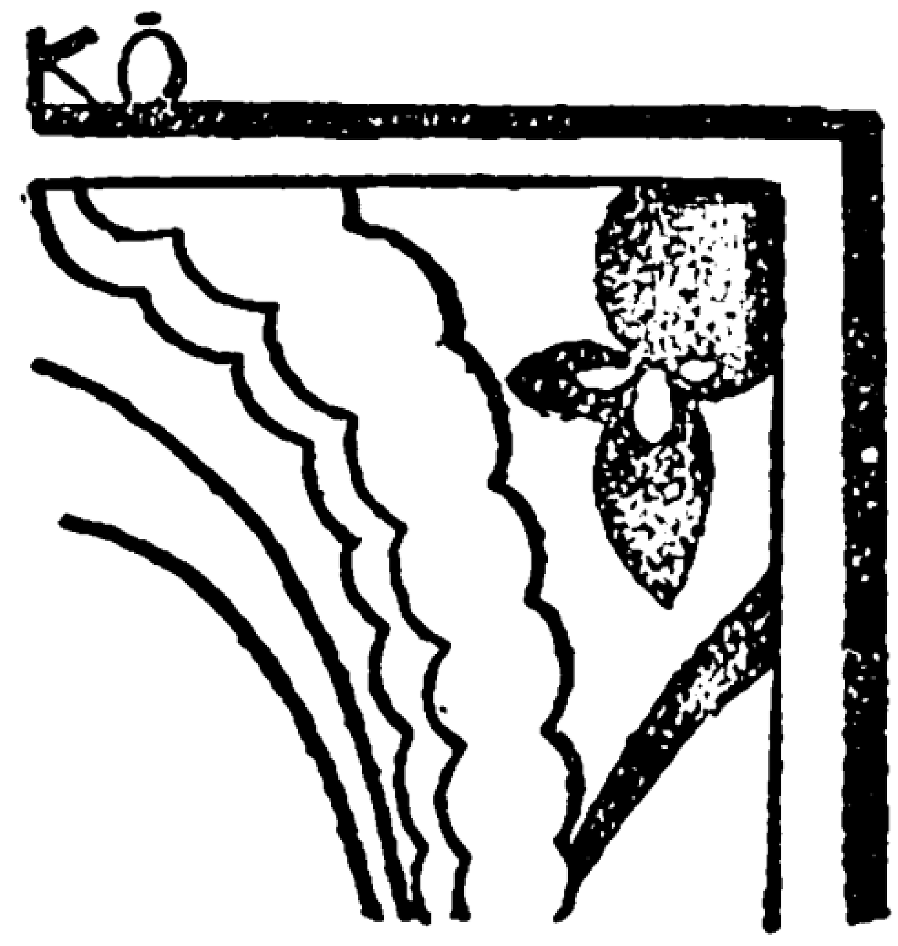
先生方の奮闘振、女だつて、私女だなんて考へを捨てなくてはと思ひました。そして女人藝術があらゆる女に讀まれ、全ての女の先頭になつてぐんぐん進んでいく樣になつたら女も向上するんだと思ひます。

益々女人藝術の發展をお願ひす。

白辰丸　杉浦早爾

拜啓夏らしく成つて來ました、女人藝術社の發展を遠い空より祈ります。私事女性ではありません。而も最も男性的な船乗りです。陳腐な婦人雜誌族生してゐる昨今女人藝術は我々マドロスの長い〳〵遠洋航路をどれ丈慰さめそして近代女性のほんとうの姿を――心を見せて呉れるか判りません。創刊號を初めて見た時私は何だか新らしいインクの匂ひを嗅いだ樣な氣がして非常に喜んだ内の一人です。それから毎月航内文庫に購入してゐる次第です。

一昨日紐育に入港しました。今當地では別紙の歌が大流行です。活動でも此曲が始まると皆小聲で觀客がコーラスを始めます。御送りしますから何かの足しになれば幸甚の至りです。



婦人の社會的自由に就いて

中島幸子

フエミニストの當面の問題は、政治的自由獲得である。此れを除いては婦人運動の目標は他に有り得ない。然らば社會的理念としての範疇たる自由に關して、明確な規定を述べることに神聖な使命を感じながら、誤れる觀念に囚はれてゐる婦人大衆の思想を啓蒙することが焦眉の急だと卒直に公言して憚らないものである。

社會の相互關係が、權力にもとづいて、並存關係より上下關係的な階級構成に分裂してより、自由は常に暴虐な支配者に對する被支配者の社會的理念であり、熾烈な欲求の一つであつた。よし、その自由が人間の頭腦と思惟に依つて恣意的につくられた原理であらうとも、自由と强權との對立、爭鬪の歷史は、吾々の關心を喚る處の最も生彩に豊んだ鐵の様な意志、焰の様な情熱を伴つた社會事象家であつた。之れ有るが故に、マルクスの階級爭鬪理論や、その他色色な輪廓をおびた幾多の自由論が生れた。自由に對する實踐的行動は、偉大なる魂の把握者たる近代人の自己意識の表現にのみ局限されたものではなく、尠くとも社會の構造が、原始共産態の崩壞から無統制的段階に移行してからの人類大衆に課せられた經驗的事實である。支配と强制の存在する處には自由獲得の理論と實踐があつた。或る場合には社會的條件の未發達に原因し、率先者の絞首臺の刑死に依つて、嵐の後の靜謐の如く禁壓を蒙つたが、又或る場合には或る程度の自由獲得に成功した例證もある。例へばフランス革命などはブルジョア・デモクラシーに隨伴した自由を享受した顯著な例である、然し革命の合言葉たる自由は、策略や嫉視に轉化したるに過ぎなかつた。資本家的商品生産の經濟關 係が現はれ初めた頃の、封建制度の終末期の自由に關する諸見解を考察するならば、彼の自由獲得が如何に社會發展過程の必然に支配されてゐるブルジョアジーの發達と關聯してゐるかが容易に認識できる。彼等の自由はブルジョアジーの理想化以外なにものでもない。此の事は當時の哲學・政治・經濟あらゆる分野の『自由』理論に妥當する。要するに、近代に於いて贏ち得た自由の重要な本質内容は、ブルジョア的自由の樹立にあつた。即ちブルジョアが、封建的制度の桎梏から解放さ

れるための社會行動に過ぎなかつた。それこそ、啓蒙哲學者の大衆に對する約束に比較しては、餘りに痛ましき幻滅ではなかつたか？所謂理性國家にあつては、ブルジョアの自由は存在するが、民衆に對しては塵溜に投げ棄てられた自由以外には自由を見ない。

吾々は、自由を論ずる際に、過去のブルジョアジーの自由は、大衆にとつては適はしいものとはしない、彼等の說く自由は支配階級の部分的意志の反影のみである。此の理由に依り疑念を挾む餘地があるブルジョアの自由こそ現在にあつては抽象的なしかもヒカラビタ主題に過ぎないのである。

だが現代にあつては自由論の肝要なことは、婦人と勞働者の自由である。此の自然的集團と社會的集團の鐵鎖よりの解放こそ究極的自由の目標でなくてはならぬ。殊に女性はあらゆる社會發達の段階にあつて被支配者群の範疇に置かれて、恰も永久的な絕對的なものの樣である。勿論、學者は婦家長制に關聯した母權制度の時代を誇りやかに古代民族の總體の社會關係內に認容する。然しそれは、婦人の自意識に依つて樹立した人爲的社會制度でなくして、寧ろ人類が非文化的狀態に生棲してゐた自然的時代の必然な結果ではなかつたか？　吾々の論考すべきものは自然的な關係でなく、社會關係である。だとすると、女性は過去の一切の社會關係にあつては束縛の狀態にあつたのである。即ち女性は、男性に對して暴力的な性的服從と、社會組織に對する必然的な隷屬の二重な奴隷狀態に置かれてあつたのだ。此れこそ人類史を貫く女性史の普遍的傾向であつた。然し假令、女性がそうであつたからと謂つて、未來もそうでなくてはならぬといふ理屈にはならない。又女性は、社會學者の謂ふ樣に、全體が生殖器だとか、性的耽溺と放肆以外には何ものもないといふのは、意識內容が社會的關係に依つて規定されたことを理解し得ない盲目な人々の速斷に過ぎない。吾々は歷史を不斷の運動、變轉及び發展の相として把束するなら、女性が一切の紐帶を斷ち切つた時には、おしつぶされた過去の理智、感情及意志は人間的なものに高揚されることは自明なことである。

今、女性は一つの解放の武器を有する。それは理論的武器としての社會科學である。殊にマルクスの該博な知識を注入した社會科學に女性解放の理論的武器を見出す、且つこの女性は、宗敎に歸依することによつて宿命的な觀念を培つて、活動的な社會を逃避し樣とする。或ひは稍ゝ進步的な女性は、空虛な理論に依つて陰鬱な生活を打解せんとした。かくの如きことは、單なる遊戯に過ぎない。

社會にあつて究極に解放さるべき要素は、勞働者と婦人である。殊に女性は凡ゆる形態の從屬と壓迫を負はされてゐる時、峻烈な裁斷は、何に依つてなされねばならぬか、其れは社會科學の透徹した理論に基づいてのみ完全に遂行せられる。眞の科學的理論なくして女性一般の革命はあり得ない。

婦人の社會に於ける人間的自由の確立は、だが誤つてはならぬ。現代の社會的秩序の存續する間は、決して徹底的に解放されるものではない。婦人參政權といふ政治行動に據つて數百千年以來の傳統的障壁の極少部分は、排棄し得ても資本主義的生產方法が世界經濟を決定的に支配してゐる限り、資本主義社會にあつては決して女性一般の包藏する矛盾は、消滅するものではないのである。

ブルジョア社會では、浪漫主義者の纖細な戀愛遊戯は、行はれても婚姻締結の自由などは實現され得ないのである。イブセンやズーデルマンの如き比較的理解ある文學者の一人や二人が論壇に華をさ

かせても、資本主義の永續する限りは女性の悲劇は終焉するものではない。

女性は轉換期に立つ。殊に何處へ往くかを自ら問ふた時、何をなすべきかを明確に決定しなければならぬ。女性が社會の必然的な法則を認識して、社會の運動法則に順應した社會行動をする時、初めて女性の自由、換言すれば眞の人間自由を建設し得るものである。吾々が男性を仇敵として激烈な抗爭をした過去の行動は、素朴的な形而上學的な仕方であつた。吾々がユートピアンでない限りは、鬪爭の目標は個々の男子でなく、醜惡なる內的矛盾を有する資本家的社會秩序の排棄にある。此の過程が、成果をもたらして、萬人が平等の權利を享有し得る樣な社會狀態を實現し得た時、女性の自由――又これは人類一般の眞實の自由でもある――を實現し得る筈である。過去の自由主義者の「自由論」が例へばミルの如く鋭い批判と、深き暗示を與へながらも、今は文獻學的に意義を有つに過ぎないのは、即ち社會の階級關係を解剖することなく、抽象的な自由を論考したことにあるがためである。それ故に吾々は、其れ等を再吟味して、まだかくの如き空漠な理論に陶醉してゐる女性の暗愚を啓蒙しなければならぬ。生產手段の××が存在する限り女性の自由を念願するのは、プロレタリアの客觀眞理を把束し得ない者の空言である。女性に對しても、男性に對しても、社會に搾取の可能性のある限り到底壓迫された女性の解放を望んでも駄目である。此の意味に於いて、虛僞な自由論とは徹底的に相反するものである。吾々は、女性の解放と云つても理智に於いて、感情に於いて、意識に於いて、本質的に鋭く對立してゐるブルジョア婦人を問題としない。資本主義の棘の道を切り開いて、歷史を推進させながら、婦人の眞實の自由を獲得するものは、勞働婦人以外にはないと信ずる。婦人相互にも階級對立のある限り、吾々の說く自由の槪念は、ブルジョアジーの意味する自由とは、異つてゐなければならぬ。

（一九二九・六・十七）

應接室

八木秋子氏へ（公開狀について一言）

藤森成吉

僕の公開狀拜見しました。

僕の言葉に從つて「國家と革命」を御よみになつた事をよろこび、然もあなたの飽くまで小ブル的な見解が打破されなかつた事を悲しみます。今更「人間の自由」（あなたは決してプロレタリアートの自由とは云れない）だの「權力」（あなたは決してブルジョア政權とプロレタリア政權とを區別しない）だのと云ふ問題で、「アナ」のあなたと論爭する氣はありません。ただ、あなたがもつと勉强され、小ブル的意識を拋棄される事を望みます。あなたがたは、非常に完全に小ブル的である危險がある。

ただ一言、僕の云つた言葉として、引用なさつた文句を、「マルクス主義とアナアキズムとは、究極に於いて國家と權力を否定する一點では、全く同じだ。」と明瞭にして置きます。誤解を避ける爲めに。

（1929、6）

新築地の『母』を見る

神近市子

帝劇に於ける新築地劇團の『母』を三日目に見た。

非常な大入りであつた。そして毎日さうだと聞かされて一寸ビックリした。がその驚きは芝居そのものを實際に見た時に倍加された。

何故と云つて、そこに展開されて行くものは、大凡そ從來の帝劇あたりの觀客の趣味と階級性とは全然背反し相對立してゐるものであるからである。そこでは美の標準は惜しみなく置きかへられてゐる。個人の幸福、個人の悲喜哀樂は全然問題の圏外に押し出されて、大きな集團の幸福、集團の未來の勝利が、こゝに活躍する一團の人々の行動を決定してゐる。そしてかうした抽象的な希望とロマンチックな鬪爭とが、大小ブルジョアの巣である帝劇で全觀客によつて熱狂的な歡迎と喝采とを博してゐるのである。考へて見ると實に興味ある現象である。

高田氏の脚色は、わたくしには成功したものであるとは思へない。物語の全長を舞臺に於いて再現しやうとする意圖が重複と散漫とを生み・演劇の全部を通じて好ましき力強き熱情にまで燃燒することを許さない。しかし氏が原作に忠實でありプロレタリヤ興起の正義と社會的必然性とを主張する作の精神を傳へやうとする點では、用意周到であり深切を極めたものであつたことは認めなくてはならない。

山本安英氏の『母』は、八十點の出來であつた。肝甚の第一幕を見落したので充分比較することは出來ないが、やゝ一本調子で彈力を欠いてゐた。農婦になり切らうとする努力は、細かな動作にまで反映しそれが半ば成功はしてゐたが、その頽廢的で小柄な容姿がともすると落ぶれた上流階級の未亡人と云つた感じを與へ、農婦がもつ無智と、單純性と精力とを欠いてゐた。それで思想的に轉換後の活動が、明るさと力強さを現はすことが出來なかつた。

横田氏のルイビンは、全部を通して第一の出來榮えであつた。次には二人のニコライ、ツヴエレヤーコブ、隣の寡婦コルスノワなどが印象に殘つた。パーヴエルと小說中では、最も愛すべき單純さと友情の主『小ロシヤ人』とは、どんなに贔負目に見ても言葉以外にその人らしい力強さと熱とを見出すことはできなかつた。特にセリフのまづさは、この人々が或はこれ迄は新興階級の意氣と精神とについて一度も關心を持たなかつた結果ではなかつたかを疑はせた。

個々の演出者がこの通りに、さして見るべきものはなかつたのに、觀客は隨處に湧いた。特に集團的の鬪爭、反抗、メーデーの行進、××に對する侮蔑——等々の場面は、熱狂的な拍手を誘つた。

演藝の世界は新しい傾向をうけ入れるに最も困難な場所である。しかし新しい日は遂に來た。今日以後は演劇もその社會性によつて人氣不人氣が截然と分れることゝなるだらう。そのこゝに來るまでには、プロレタリヤ劇團の努力もあづかつてゐることは事實であるが、民衆の經濟的事情と昨年來の日本××事件によつて捲き起された多くの波瀾が、民衆を異常に刺戟したこととの結果であることも見落せないと思ふ。

× × × × × × × ×

六號雜評

桂八重

衆生のためにと苦行した佛は末世の今日まで後光で飾られてゐる。大衆のためにと珠數つなぎになる人々の餘光もやがて照らねばならぬ。去るにても惡思想檢擧の手柄をお褒めにあづかる警官四百名の內功勞記章、特別賞與三百圓以下七十圓迄が十一人、特別賞與が二百八十二人、賞詞が百五十人だとある。此際親分宮田前の總監殿がゐないのは變なものだ。岡目には田中反動氏の最も忠實な命令執行官のやうに見えたのに、僅か一旬の差でその名譽にあづかれなかつたのは、親分、大親分ともに殘念ぢやつたであらう。しかもその親分こと、七萬圓の口がばれて、大親分が失職の日に、檢事局によばれ——編笠はかぶらないのだから、公明正大に、大手をふつてとらせばよいのに、新聞社の寫眞の包圍におそれ、見苦しくも天井から拔出しの一奏を案じだし—— 天竺德兵衞は蛙だし仁木彈正は床下だが——ともかく袋の鼠の窮策をおこなつたは、積善か積惡か、終におごるもの久しからずの感がある。この親分の失意ぶりが、大親分の失落とおなじ形なのも因あり果ありの氣がする。

◇

民政黨內閣は具合よく出た、この際であれば、大概なのは不評判ではない、然し中間內閣などではたまらないから誰でも手を振つてむかへる。內閣がかはつたといふことより何より、反動內閣の瓦解で稍人心が明るくなつたのだ。ちよいと此處に、その日見當つた新聞の見出しの一號及初號活字

積惡ここに報ひ來て悶死する田中內閣。園公も遂に見放す——(東京朝日)

憂鬱なりし政界より解放された國民の歡喜。總辭職と地方の聲——(東京日日)

組閣後滿二年二ケ月、遂に野垂れ死の悲運裏面に動いた大きな手——(報知)

今は絕體絕命の政府、總辭職決行は七月初頭。必死の延命策も見込立たず、退却の名目を作るに腐心す——(時事)

見苦しい田中內閣の最期。後繼內閣も始末に困る滿洲某重大事件——(報知)

不死身內閣が野たれ死ぬまで——(大毎)

いま書きながらさう思ふ、こんなに面白いのなら、もつと〳〵並べられたであらうに、その氣で集めておけばよかつたがと——

流石にこのゴタゴタまぎれにも、ガスの增資はスーッとゆかなかつた。矢つ張り市會が新らしくなつてゐたからである。鐵道の方は大急ぎでパスさせたが。通してよい筈の日電の電力輸送は不許可になつた。

◇

東京市のガス問題では各婦人團體も力を盡してゐられるが、どうも使用しながらの抗議では弱い。といつて市民は便利に馴れすぎてゐるので、ピッタリ止めてまで爭はない。それには何か他にかはる燃料を補給しておかなければ充分な押しはきくまい。こんなをりにこそ電化宣傳にはもつて來いで、電力を安く供給し、器具も賃貸にでもすればよいものを——電氣會社を說きおとす迄もなく、先方から進んで出てこなければならないのに出ないのは、いふ迄もなく、大會社の株は多く同一人の手に收められてあつて、どつちが惡くてもいけないといふ、共通の惱みを株主たちはもつてゐるのであらう。が、競爭會社があればさうはいつてゐられない筈だ。ありあまる電力を安く賣らうといふ會社があるのなら、

充分に引入れさせてもよいわけではないか。ガス會社もう一軒もあつたら、冬になつて熱の入るころ、ボー／＼音ばかりたてて火力は低くメイトルばかり昂る不良ガスを、高いお金を出してつかはないでもすむやうになるだらう。

◇

若くて未亡人になり、つとめて世間に折衝しまいとした人が、二人の男の子が成長したので今度は社會を知らなければならないと痛切に感じだした。夫は軍人だつたから、傍目もふらぬ帝國主義で貧乏してゐたが、消費組合にはいつてから、ふと何にも知らなかつた自分を疑ひだしたのだ。それはさておき、消費組合の發達と共に當然考へなければならないのは小賣商人であらう。一體市内の小賣商人はどの位あるものか。日錢がはひるから繰廻してゆけやうが、俸給生活者や、勞働階級の人達の率にくらべて、やがて苦しくなる時がくるに違ひない。百貨店は益々大資本をもつて壓迫してくるであらうし、消費組合は非常な勢ひをもつて發達するであらうから、一日は／＼と小賣商人の立場はせまくなる。七月一日に委員會を開いた、商品券を禁止せよといふ實業組合聯合會の決議も、大資本の店に對する反抗と見られる。

◇

七月號文藝戰線で面白く（面白いといふ意味が違う）よんだ、石井安一氏の「牢獄斷片」は、窓の獨り言もよし、ハタキの伴奏もよい。隣房で勇敢に眞似るハタキ運動に至つては其音が手に取るやうだ。あゝいふ場所にも机があつて、お掃除の道具のある事をはじめて知つた。看守長面會室の櫻の花を一つちぎつてたべてしまつたといふことは胸にしみた。戰旗では「獄中の婦人同志からの手紙」の×野節氏からお母さんへの手紙は立派な覺悟を語つてゐる「つるみのおかみさん」への夫からのたよりも、そのいづれもが眞情あふれてゐる。

◇

國民の選良を議會開會中に、自分と主義が違うからといふだけでさし殺してしまつた男の求刑が十二年である。立派な辯護士が――政友會勅選議員もゐる――澤山ついてゐるからもつと低くもならう。思へば安き人の命である。病める母のために、父を迷はせる娼妓を無中で殺して、檢事の求刑無期徒刑であつた貧乏な少年があつた。この正直な少年は人を殺せば命はないものと思つてゐたので終身懲役ときいても呆然とし、判事の同情でグツと刑期が短くなつた時涙がとまらなかつたといふ。無論辯護人は官選の形式だけだつたのだ。

◇

左翼劇場の「全線」を見る。七日間興行で毎夜此通り一ぱいだときく。風通しの惡い場内プロレタリアのにほひで一ぱいだ。ものの發酵する力强い香である。舞臺もまた力强い熱技を示した。反動ゴロツキ團と爭議組合員との生活、及人間をクツキリと對照させて見せたところに、昔の人の言つた「芝居は無學の學問」といふ言葉を味深く嚙しめさせる（今日左翼劇場を見る人に無學のあらう筈はないからその意味は違つたものにとつてもらひたい）しかしながらあの「綠黨」の演出は、觀る方と演じる方とに熱のない時はかなり田舍芝居式に墮する怖れがある。張額信をした人よ幕あきたチラと扮裝しない自分の顏を見せるのはいけない。無意識にではあらうが、前に見た時もこの人は表面をキリすぎると思つた。大なる顏面をもつ周平甫佐々木孝丸はじめ暴力團員の態度すべて、あまり支那すぎるほどであり、總工會員は支那ばなれがしてすつきりしすぎてゐた。とはいへこの劇壇の成長ぶりは實にめざましく誰彼なしに巧くなつた。帝劇で見た新築地劇團の「母」にしてもさうだが、見逃せないのは、プロレタリアの母、妻を重くあつかつて來たことである。



平塚雷鳥氏の肖像

——らいてう論の序に代へて——

富本一枝

私は一つの畫布をもつて、こゝに一人の女性の肖像を描かうとしてゐる。性格的なものを描くとき天才はしばしば奇異な方法をとつた。ルツソオがアポリネエルの肖像を描くときに仕立屋が寸法をとるやうにその詩人の肩巾や胸巾をきちんと計つて帳面に記入して置いて、正確な數字に空想をしむけて描いたと言ふことである。

この肖像はギヨーム・アポリネエルに少しも似てゐないと言はれた。しかし本人に似てゐないと言はれてゐるアポリネエルの肖像をみて人々は口をそろへて「詩人アポリネエル」を描いたものだと言ふことを知つてゐた。畫題には「詩人に靈感を與ふるミユーズ」と記されてゐるだけであるのに。

私は全く空間である新鮮な畫布を眺めてゐるうちにこの話を思ひ出して愉快になつた。

似てはゐない。しかしまぎれもなく彼である。その人間のもつ本質だけ全部的に掴み出して畫布へ浮び出してこさせることが出來たら。それでよいのではないか。

ところで天才に出來ることを凡俗が眞似ることは危險がある。ルツソオは一人である。この奇異な方法でやり終へたのはルツソオである。私はやりきれなくなつて室をぐるぐる散歩する。

私の描いてみたい女性がマリイ・ロオランサンであつたら——と想像する。私の描いてみたい女性がシエリイを愛したレア！ であつたら——と私は熱つぽい肩をゆりあげてみる。私の描いてみたい女性がアリヨーシヤを眞紅な薔薇に咲かせて一生胸にかざつて泣いたナターシヤであつたら——すばらしいことだ！ 私は飛びあがつてよろこんだ。

が、これはみな散歩の途中で摘みあげた私の多感性な雜草である。畫布は依然として空間である。苦々しい私との凝視。私とはこんなばらばらな空想でむだに空氣と太陽を喰つて暦の針を動かしてゆく人間である。ところで、私はこれつきり私の想像力に休止符をつけて——描かねばならない一人の女性を熟視しなければならない。といふのはこの女性は私が全部的に缺乏を感じてゐる叡智や明

哲さを私とは反對に實に多量に總和的にもつてゐる。この女性は、それ故、繪畫をもつて現すよりも彫刻で表現した方がいゝのかも知れない。神經からいつてもそうである。末梢的なところがまるでない鐵製の殆んど太い神經が完全なパイプになつて彼女のなかを突き拔いてゐる。かぼそい針金の私の神經はかつて以前このパイプにむかつて鋭尖をからましたが――

私は自分のあらんかぎりの智慧の力で彼女をねらつてゆくなら、私は間なしにゆきづまりを感じやう。私の智慧は私の神經と同じに末梢的でありすぎる。もしも私がこの末梢的な理性と感情に制限なく勝手な方向まで進行させたら綜合的な彼女の像を眼も眉も鼻も手も肩も腰もばらばらにさせてしまひそうに思へる。私は彼女の全部を欲しる。だからこの方法もいけない。空間にのびひろがる溜息の白々とした煙幕。

彼女の智慧は深い。蒼海のはてしない廣さである。彼女の値うちがこゝにある。私の大好きな、この希臘型のすばらしく立派な氣品のある實にまれにしか人間に與へてくれぬ美麗な容貌をもつこの女性を智慧でつつんで描くことは至難なことである。

なぜ、彼女はペルシヤ猫をもたないのであらう。なぜ扇の骨の間に美しい馬が後脚で立つために彼女の扇をさらさら開いてはくれないのであらう!。

セザンヌは「塊」を畫面に描いて見せたではないか。

セザンヌはこの上なく嫌がつて俗人共には大禁物な藝術的感能、といふ言葉を使つた。その大禁物な藝術的感能が私に媚びて私はまいつた。だが、今は赤面してゐる。私は温なしくなつてから嘯く。

「モデルを熟視せよ、さうして正確によく感じよ、然るのち明快と力とをもつて表現せよ――」セザンヌの言葉である。

「煙の如き迷想」にさて私の時計はゆれだした。

原始人間は天體を崇拜した。人は天體のしめした方向でなにも思はず暮してゐた。彼等の運命を支配するものは高いところにあつた。力はそこからやつてきた。素朴であつた吾等の祖先は星辰から生活への新鮮なる形式を受けて徐々に生存を生活へ移してきた。それは原始民族について書かれたものを見るなら直ぐに知ることが出來やう。わけても太陽は炎々とした熱焔をもつて彼等を全部抱擁しつくした。太陽の歸來を初めて知つた時彼等は頭腦が新鮮に働きはじめたことを氣づいて踊りあがつた。智慧がその殼を破つた。彼等の生活の前に廣々とした展望が與へられた。太陽の歸來――それは宗教的なものではない全く別なものを、智識を、認識を直接生活にもたらしたではないか。大きな火焔の運行は吾等の古い祖先の生活に整頓を教へた。

過去は消えた。やさしい、しかし暗愚な過去は消えた。世界に變化がきた。出發! 人間の生活の話は大きな眞紅な火焔の眞中から走り出した。

かんばしい焔が燃えあがつた。東ローマ帝國の豪華が散りしかれた。黄金いろの王冠はかんばしいほのほのなかでめらめらと消えてしまつた。さうしてそれまで人間の腕をささへてゐた基督教の

世紀的な權威は焰の破片になつて空にたち迷つた。

自由の太陽は再び吾等に歸來した。何人も眞實にふれた。自由の正しさにひざまづいて禮拜した。

あつちへゆけ、歪められた一切のものよ。

文藝復興はしかし意志の戰ひであつた。劍をもつて黃金の冠と黃金の玉座に最後の挨拶を告げた――がそれはまだまだ人の世界を生き生きとさせきれなかつた。自我にわれらは眼覺めた――自覺の階段の第一階程に走りのぼりはした。しかし、知識は古典の形式をかなぐり捨てても擬古主義に心をひかれた人間共はたんねんに愛惜の情を唄ふのが習性である。「過去の殘骸」それはいつもどこにでもつきまとふのがあたりまへなことである。過去に義務をもつ殘證――感情と呼ぶはげしい生きもの――が、かんばしい炎のなかに消えはてる過去をしみじみと眺めやつた。おそらく彼等は刺殺されて死んでゆくまでそうしてゐやう。つねに、つねに、つねに。

私の好きな好きなジャンジヤックルッソオ！　眞夏の强い碧空に炎々と輝きつくす太陽！　そこに生命と生命のとりあひがあつた。ルッソオは笑止すべき彼等殘骸を刺殺した。人生にまことがきた。

クラッシズムの頭上に燦然と偉大な光を與へた。ルッソオは人間を廣々とした靑い原野に放ちやつた。そこに浪漫主義の華が匂つた。その華に「世紀の癇疾」が憂鬱な影をつくつた。懷疑的思想の噴水もつくられた。「偶像破壞」の庭園もしつらへられた。科學的精神の椅子に腰をかけたものもあつた。やがて個人主義の花が咲いた。その花こそ偶像破壞の庭に咲いた、社會主義的思想の夜明までも咲き誇つた見事な花である。

偶像破壞以後、人間の義務感が變つてしまつた。これは嬉しいことである。弱い理性は負かされた。あらゆる方面で自我の意力を信じ、自我の生活に精神の一切を集注させることが義務の定義である。自我を離れては眞理はない。權威だつてその通り、極めて自然的な、あくまでも自我的であつてこそ權威を生じる。個人主義は人間を本能的に自覺させ自我の解放にむかつて激しい波の運動をまきあげた。

月日は流れて人々は時間と共に新生した。

ニイチエとイブセンは、そこで個人主義の兩極にたつた。東洋と西洋は、ひとしく近代精神の翼下にかけあつまり、人類のために提出されたこの眞理の前で太陽の花を摘んだ。そこに忙しくも忘れて置かれたものは吾等の飼ひやすい溫順な牛馬、犬豚、山羊、羊、鷄といふ家畜とわれわれ女性であつたといふ事はなんといふ素晴しい皮肉であつたろう。

後世の人間共は嘆息の虹を近代風景のあざやかな空にかけるであろう――幾度もかうつぶやきながら――

「はんぱな個人主義精神よ。文藝復興、浪漫主義、疑古主義、科學主義、そうして近代個人主義に至るまで女性に太陽を與へなかつたといふ事は人類の恥辱であつた。男性の自我發展の歷史に底ぬけの暗愚と迂鈍をつけ加へなければならないことはやつかいである。人間から心臟を抜きとらなかつたら――世界はもつと幸福に廻轉してゐやうに……」

が、女性は彼等の哀れなる仲間――家畜から解放される時がきた。女性みづから彼等の上に日輪の正しき歸來を感じた。暗黑を迫

ふ太陽！　太陽こそ强者であつた。情意のすさまじい大火焰であつた。眞正なものゝ姿であつた。

女性よ、汝の肖像を描くに常に金色の圓天井を撰ぶことを忘れてはならぬ」これこそは私の描かうとする一人の女性の言葉であつた。個人主義の豪華が世界一面さきこぼれてゐるのに女性だけのろくさと歩む牝牛に長々とさせて日影につないであつたそのときに、

「原始女性は太陽であつた！」

かくわれらに呼びかけて日本の女性のために、いな世界一面の女性のために目映ゆる黄金の大圓宮殿をこの國の東の水晶の山の上に營なもうとした一人の若き女性の昔日の面影を想ふとき、私は涙なくしては耐えきれないほど胸せまつてしまつた。

原始人間は太陽を女性と見た。それは正しい見方であつた。約束はそのときすでにわれらと手をかたく握りあはせてゐたのであつた。まことに女性こそ太陽であつた。

「彼等のどこに自由解放があろう。あの首枷、手枷、足枷はいつ落ちやう。彼等こそ自繩自縛の徒、我みづからの奴隷たる境界に苦しむ憐むべき徒ではあるまいか。

私は無暗と男性を羨み、男性に眞似て、彼等の歩んだ同じ道を少しく遲れて歩もうとする女性を見るに忍びない。

女性よ、芥の山を心に築かむよりも空虚に充實することによつて自然のいかに全きかを知れ。

然らば私の希ふ眞の自由解放とは何だらう。云ふまでもなく潜める天才を偉大なる潜在力を十二分に發揮させることに外ならぬ。それには發展の防害となるものゝ總てをまづ取除かねばならぬ。それは外的の壓迫だらうか、はたまた智識の不足だらうか。否それらも全くはあるまい。然し主たるものは矢張り我そのもの、天才の所有者、天才の宿れる宮なる我そのものである——」

「我は總ての女性と共に潜める天才を確信したい。只唯可能性に信頼し、女性として此世に生れ來たつた我等の幸を心から喜びたい」

「私共をして熱烈なる祈禱と精神集注を不斷に繼續せしめよ。かくて飽迄も徹底せしめよ。潜める天才を產む日まで、隱れたる太陽の輝く日まで。

其の日私共は全世界を、一切のものを我ものとするのである。其の日私共は唯我獨在の王者として我が踵もて自然の心核に自存自立する反省の要なき眞正の人となるのである。

そして孤獨、寂寥のいかに樂し　、豐かなるかを知るであらう。

最早女性は月ではない。

其の日女性は矢張り元始の太陽である。眞正の人である。」

彼女を讃めたゝへよ！　彼女は女性のためにかくの如く無比な朗朗として目映ゆい賞讃を歴史に與へてくれたではないか。思つてゐても及ばぬ思ひとあきらめてゐたものを、かくまであきらかに披瀝しつくして生命に更生を與へたではないか。花束を投げよ、讃美せよ、近代女性の光榮は彼女の魂からうまれたことをよろこばねばならぬ。

玲瓏としてしかも優婉な容貌をもつ彼女の肖像をわれらの手で描きあげ、「日出る東の國の水晶の山の上に目映ゆる金色の殿堂」に高くかかげる——これが花束のなかの花束である。

「最早女性は月ではない」

期せずして立ちあがつて東西兩洋の個人主義思想が婦人問題に於て彼等の手を堅く結び合せその思想に更に新しき一線をひいて底邊をつくり、はじめてここに完全に立體的なものとなし得た。西紀千九百〇七年、この國の明治四十四年前後。かくして女性の太陽はわれら若きもの丶爲に歷史にまたがつて見事な夜明の空に曉紅を放つて昇天したのであつた。

太陽、それは一人の眞性な女性であつた。

一切の舊きものを敵とし、一切の新しきものの味方であるこの女性の誕生はあのルネッサンスの大運動より、フランス大革命より、個人主義の勝利より、いつそう大きく精神的の大革命を日本に惹起させ、女性をして過去への破壞をなさしめ、歷史的に意義ある祝福された誕生であつた。誰が太陽の光耀をさまたげ得やう?。だが幾百の風俗はその恐るべき勇氣をもつて太陽に向つて石を投げ擲つ野蠻をあへて行つた。そんな野蠻がかうして現在あるところより、格別距離のない時代で行はれ、衆愚の滿足をかち得ることは、おそらく現代の若い女性には解くことの出來ない馬鹿馬鹿しさであらう。しかし彼等の投げる石は直に垂直に落ちて惡い頭腦の淺い皺をうちのばした。今頃となつてはこの地上から深く深く掘りさげられた濕泥のなかに無數の砂利となつて埋沒されてゐやう。或は多分、それから後急激に進出した若き現代の女性の踵でひしがれて——だが彼等は美しいその殺戮をあくことなく身にうけてよろこんでゐるかも知れない。邪魔以外、何物をもわれらに與へなかつた彼等の最後にはまだかなりの幸福ではあるまいか。

唯物史觀は近代の社會に直接な影響を與へ、唯物主義は經濟的生活に於て、政治に於て、その他社會の全般にむかつて强大な力をもつて激流となりわれらの中を奔流する。

生活の標準は眞理の價値と共にどしどし進んでゆく。そこに新しい思想は昨日にかはつてその芽胎をさかんなる力で培ふ。未來をつなぎ過去の歷史をつくる思想の發芽、この盛んなる生長の呼吸が間違ひなく聞えてくるよろこばしさ。

後(うしろ)をふりむくな、うしろは死である。
正面をみろ、正面へ進め
われは生きてゐる。

私はこゝで、永遠に通じ永遠に流れるすさまじい火焔をもつ一つの生命を描くことに躊躇を感じないわけではない。しかし私は、そのためらひを一思ひに飛び越へやう。そうしない限り、いつまでたつても彼女の肖像を描きあげる勇氣に飛躍を與へる機會はこないことも知つてゐる。唯描くことである。私の描く彼女の肖像は恐らく彼女に似ないものであるかも知れない。ルッソオがアポリネエルの肖像を描いた時人々が面白がつて惡口をとばしたよりもつと澤山の惡評を受けることは勿論のことであらう。しかし友人は——私の尊敬するこの友人はきつと私に日頃と變りのない寛容をみせてくれやうと思ふ。それだけでよい。私はあらんかぎりの熱情を良心を最後までもちつづけて畫布とむき合ふ。業々しい讃詞、眞實のものを蹉跌しがちな惡議論、數理的な記錄、そんなことは私の資格ではない。

ただ深甚なる愛を協力してゆくだけである。私は再び繰りかへそう――「唯描けばよい。モデルを熱視して、正確によく感じて、しかるのち明快と力とをもつて表現せよ」と教へたセザンヌを思ふて――

私の描かうとする一人の女性、それが平塚雷鳥氏であることは、すでに言ふまでもないことであらう。私は、私の仕事に没頭する前、かつてあんなにもほめ、あんなにもたゝへて熱情のかぎりをささげてきたこの友人をいまかぎりなく靜かな思ひでながめやれることをよろこんだ。いまとなつてみれば、ただ激しい感謝があるばかりである。日あたりのよい丘の上でかうやつてこのよき友をともかくも全部的にながめられるやうになつたことは私がただ大人に變化したばかりではない。とがめることがあんなにも澤山あつた過去であるのに、氏は今日の時まであくまで私に對して寛容であつた。私は深く感謝する。ただ私がおそれるのは、この友人を熱愛しつくした私の情熱がもしやとんでもないところに花をさかせ出すやうなことをしたなら、私の異様な感情はいやな繪具をなすくるやうな不行儀をしでかさないだらうか！ そんなことがあつたら――と、私はただそれをおそれるものである。

――一九二九年六月――

讀者通信

東京 **松本 勝枝**

女人藝術が夫々色彩のはつきりした、新時代の方々のもの――殊にマルキシズムの觀點に立つて居られる新しい方々の評論、劇、創作のために自由に頁を割いて居られることに感謝いたします。創刊當時にくらべて、だん〳〵鮮明な色彩をもつて來たことはこの上ない喜びです。

それが赤であれ、靑であれ、ともかく新時代にある女性の自由な、鮮明な思想、意見の發表機關であり、討論機關であつてほしい。種々雜多な色は新時代の進展と共に、やがて統一され淸算され、眞に時代と共に歩む最後のものが殘ることになりませう。

なにはともあれ、かくも新人女性の顏ぶれがずらりと並んだ所は、たしかに現文壇の偉觀であらうと思ひます。新時代の女性の爲、既成文壇、男子專制の文壇への一大デモを行つてほしいと思ひます。

編輯者諸氏の御健闘を祈ります。

金澤 **岸本 一枝**

私は女人藝術の創刊號からの愛讀者です。今日もその七月號を手にしました。その從來の婦人雜誌に見られない「眞卒に自分等の仕事を高揚」される態度をよろこんで居ります。そこに見られる進歩的なところは近き將來に於て種々な思想的夾雜物を淸算して現在婦人解放運動の一翼として階級的な雜誌にまで發展される事を期待してゐる。

デボーリンの云つた樣に「階級社會に於て階級性のないものは存在しない」のですからこの點を無視するならば意識無意識にかゝわらず社會的には反動的存在でしかあり得ないでせう。

盛岡 **立花はな子**

前略 みなさまの御ふんとう、影ながら感謝いたして居ります、「女人藝術」一週年を記念にこの私しも何が書かゝして頂きます。「女人聯盟」にも大いに努力いたしますからどん〳〵具體的活動をしてほしいと存じます、私しの兄は當地方のプロ文學運動並に雜誌商をやつてゐる關係上「聯盟員」を得るにも割に容易です、只今七人の讀者がありますが他の讀者とも加へて岩手縣支部をつくりたいと存じます。

「藝術祭」さぞや大盛會とはるかこの北國からさうざうして居ります。一寸考へつきましたが「藝術祭」を女人藝術祭とした方よかつたやう思ますがいかに、此秋には所謂「女人藝術祭」を私しら聯盟員で催したいと思つてゐます。その折はぜひいらしてほしいのです。

良妻業者

葵イツ子

昨日の新聞に求婚廣告を出した。すると、午後になつて二十歳位の美しい女が訪ねて來た。一時間ばかり雜談をして歸つた。どうも自分で調べに行くのも變だから、暇があつたなら、北品川の斯ういふ所へ行つて、その女の環境を見て來て欲しいといふのである。

それは舊知の松岡といふ青年が、突然今朝來ての話。

その夕方である。市電の終點から京濱に乘り換へて、地圖で見てをいた通りの道をぐるぐる歩いて、遂々その番地を探し出した。

豫感が無いから行つたのだ。あつたら誰が行くものか！

目的の女の名は、石村方中井きぬといふのである。石村といふのは小さい新しい家であつた。開けやうとして見ると入口の格子戸に外から錠が下してある。留守では仕方が無い。まあ暫く待つてみやうと思つて其處に佇んだ。

立つてばかりゐるのも退屈になつてぶらぶら歩いてみた。もう一人矢張り退屈さうにして、子供を脊負つて、先刻から、此邊に居る女があつたが、ふと聲を掛けて吳れた。

「何處のお家を探してらつしやいます」

「あの、中井きぬさんといふ方にお目に掛り度て來ましたが……あの方は石村さんには長い間居られるんでせうか」

「えゝ、そんな人、聞いたことがありませんね、石村さんは夫婦切りですよ、……さうさう、間借りしてゐる女の方なら、このお隣りに居ますよ」

「さうでせうか、確かに石村さん方と聞いたやうに思ひますけれど」

「何かの間違ひでせう、石村さんでは間貸しをなすつたこともありませんから……お隣りにならおきくさんといふ方が、もう一年位も一人で間借りをして居ます」

「おきぬさんじやないのですか」

「さあ、瞭りは知りませんが、一度聞いて上げませう」

その人は隣の家へ行つて吳れた。私も蹤いてゆく。

「お二階のひとはおきくさんでしたね」

「さうですよ」

「逢ひたいと言つて來られた人がありま

すが」
「もう出掛けて留守です。毎晩七時頃から出てゆきますから」
私も這入つて聞いてみる氣になつた。
「お歸りは何時頃になりませう」
「明け方にならんと歸つてみへません、勤め先があるさうですから」
「ではその勤め先へ伺つてみたいのですが、所はお判りになりませんでせうか」
「さうですね、誰にも言つて居ないやうですが」
「どうしても今夜のうちにお目にかゝりたいのですが、何とか聞き合せは出來ませんかしら」
「おきくさんの心安いお婆さんが一人ありますが、名前も聞いたことが無いので…ではお風呂屋で聞いて御覽になりませんか、脊の高い、よく喋舌るお婆さんと言つたら大抵判ります」
私は急いでお禮を言つて、敎へられたお風呂屋へ行つてみた。お婆さんの家は直ぐ判つた。川岸に添つてかなり歩いて橋を渡る。
時計は九時を過ぎた。お婆さんのところへ行つてみると迚も要領がいい。
「おきくさんですか、あの人は、この向ふの廣い通りを五丁ばかり行つたところの小櫻樓といふ貸座敷で…えゝ仲居をして居りますよ、私が御案内をするとよろしいが相憎く風邪を引いてをりますので」
これ丈け聞けば、もう何の必要もない、だが、少し好奇心も手傳つて、行つてみることにした。お婆さんの家を出ると直ぐである。
「可怪しいね、どういふ人だらう」
と後の方でお婆さんの聲が聞えた。
向ふの通りと言はれたところを歩いてゆくと、妙な家が澤山にある。はじめはお風呂屋かと思つたがそれは貸座敷であつた。家の外に紺の暖簾が掛けてあつて、これが牛太郎といふ職業であらうと思ひ當る男が、羽織を着て前掛を掛けて立つてゐる。人間を商品にしてゐる街があるのだ。野蠻な國だ。
小櫻樓といふのにも牛太郎が立つてゐた。
「おきくさんといふ方は居られませうか」
「へえ居ります」と言つて振り返ると
「おきくさん、ちよつとお客さん」と呼んで呉れた。
現れた婦人は、粋な人であるが、二十歳位と見た松岡の話とは違ふ。どうしても二十七八である。
「ようこそ、私おきくでムいます、まあ彼方でお話させて頂きませう」
おきくさんは別に私の名前も聞かうとしないで薄暗い路次の方へ伴れて行つた。
「忙しうしてゐまして、こんな所で何ですけれど」
「松岡さんから頼まれまして、一度お逢ひして御樣子も伺ふつもりで參りました」
「さうでムいますか、まあまあ遠いところを」
「隨分思ひ切つて境遇を變へてみ樣となさいましたのね」
「あの、ほんとに濟みませんが、どの松岡さんでムいますでせう」
「あの松岡俊夫さんです…新聞の廣告を見ておいでになつたさうですが」
おきくさんは少し訝かしさうな表情に

電話の聲

大井さち子

なつた。

「私、さういふ方をちよつと思ひ出せませんが」

「あら、あなた中井さんと仰言るのでせう」

「いゝえ村田きくでムいます」

「さうでムいましたか、まあ大變失禮致しました。どうしたことでせう、××番地で中井きぬさんといふ獨身で間借りをしてられる方と聞いて來たのですが」

「お隣りの石村さんの奥さんもきぬさんとか呼んでられるやうですよ、一度あの方にお聞きになると判るかも知れませんね」

「ありがたうムいました。ほんとに失禮しまして」

酷い失敗であつた。私は元の道を引返した。

可なり夜も更けて靜かになつてゐる。以前の石村といふ家に行つてみると、今度は錠が無くなつて家の中に灯が點いてゐる。直ぐに訪れてみる。二十二三の婦人が出て來た。

「私でムいます、直ぐに參りますから」

と奥に這入つた。そして大きい聲で、

「日本橋の嫂さんの妹さんが來ましたからちよつと出掛けますよ」

突然の嘘の中に私は卷き込まれた。逃げやうかと思つてゐる間に、私には何の挨拶も無くその嘘が續けられてゆく。男の聲で

「此方の金入から少し持つてゆくといゝよ、何か御馳走をして上げなさい」

「いゝのよ、私持つて居るわ」

その婦人は外に出て一緒に歩かうとした。私は怒る氣にもなれない、

「あなたが結婚生活をしてゐられる方だと判れば、もう何の用事もありませんからこのまゝお別れします」

「待つて下さいましな、ねえ、こんな場合を考へてみて下さいませんか。私は「良妻賢母主義」で敎育されて參りましたの、その他に何にも知りませんし、今の夫はお酒ばかり飮んでゐてちつとも向上心がありませんから、斯ういふ人と一緒に居ると將來が不安でムいますの、ですから、他の良い夫を見附けたうムいますわ」

妻といふ職業の專門家であつたのだ。問題は饑餓である。一度失業した上で更に求職すべきだとどうして私が言ひ得やうか、月の光も明る過ぎる。私は返事に窮して仕舞つた。

出無精のために賑やかな場所といへば精々銀座と新宿、靜かな場所といへば麴町邊しか知らない私にとつて、この根津の空氣そのものが甚だ奇妙に感ぜられた。その上、青苔の中から誕生したやうな汚ない雜貨屋の店頭に立つたのだから滑稽を通り越して愉快にもなつた。

爽かな初夏の午前十時。

街路は夜前の雨の名殘りを止めて、まだしつとり濕つてゐた。お買物は懷紙一帖。私と私の同伴者、澤美彌子は「横山正則」と達筆で書かれたお邸の前をうろ〳〵すること十分後、それから勇敢にこの雜貨店に漂流したのであつた。この店へ私を突き入れたのは美彌子の入智慧である。

「何處かでそれとなく聞いて見ませうよ」

「さうね、だけれど煙草やへはいるのもおかしいし……」

「ぢやあ、紙を買ひませう。うつかりして忘れてしまつたから」

美彌子は出澁る私を無理やりに連れ出して來たことはけろりと忘れてこんなことをのめ〳〵といふ。正直なところ私はいつになく大變元氣で彼女の申出を受入れたのだが、外面はさも迷惑さうな顏ばかりしつゞけたのである。

「へえ、お待ちどほさま」と無格好な手つきで釣錢をさし出した四十がらみのお神さんの手を一寸さえぎつて私は訊ねた。

「あのう、この先きの横山さんに會社へつとめてらつしやる方がお出でせう？」

「會社に……。あゝそれは二番目の坊ちやんぢやありませんの？」

「えゝさうよ。その方にちがひありません。ではそのかたこの頃でもこのお家の前をお通りになりまして？」

「さうですね。つい氣をつけませんけれど大抵毎朝お見受けするやうです。」

「ねえ、そのかた暮れがたのおかへり時間は何時頃なの？」

「あたしんところは、十時には店を締めますが、店の開いてるうちにこゝをお通りになることはめつたにありませんのですから、きつとこの頃でもおかへりは遲い方でござゐませうよ。」

年若い女が二人も連れだつてゐることが既に人目を引く。それが戸口調査の警官以上に變な質問をするので、お神さんの氣持ちがたちまち顏に反射して來た。烏渡、横を向くと美彌子は眞赤になつてうつむいてゐる。もつとこのお神さんの疑惑を解いて、うそ八百でも好いから根のあることを聞きたいと思つたのだけれども、こゝで私は、どうもありがたう」ととつてつけたやうな挨拶をして店を出た。

こんなところで切りあげるなんてと、少し腹立しい氣持ちになつた。このくらいのことなら想像をしたつて出來ることなのだから、なにもあんなお神さんになんか頭を下げなくとも好いにきまつてる。私は邪慳にぐむ〳〵歩き出した。

その日の朝早く宵つぱりの私がまだ寢床にゐる時刻に美彌子が訪ねて來た。

「私ね、相談があるのよ。力になつてちやうだいね。」彼女の相談といふのは――××會館の音樂會でとても美しい男と知り合ひになつた。親切で、快活でその上有名な男性であるといふのだ。「有名」をきくとも

と K大學の陸上競技の選手をして、新聞紙面なんかで可成名の知れてゐる横山秀郎といふことがわかつた。家は金持ちで別にあせつて勤人になる必要もなかつたが、世間體といふものゝ手前、今のところ父親の關係してゐるF・R外國商館につとめてゐるといふ。それまでは平凡だがその人と結婚の約束をした上彼に百五拾圓やつたところがそれから彼が自分によりついて來なくなつたといふような妙な話を聞かすのであつた。大した金持ちでもなく、それかといつて貧しすぎるといふでもない父親の手一つで育てあげられた美彌子にしては應揚すぎて少々間が抜けてゐた。こんな問題は私にとても形づけきれないのだが强請まれるままに、一度はいつもの出無精を楯にすねても見せたが内心は可成興味があふられてしまつたのが到々根津くむだりまで出張して來たやうな始末になつてしまつたのである。家は——門だとか塀だとか植込みだけの外見からいへばお邸と立派にいひ切ることの出來る家——を無事に發見したのだが、扨、この十日あまりは病氣で籠つてゐるといふあの人の美彌子に對する音信の一節がわからなくなつてしまつた。といふのは××雜貨店のお神さんの言葉から歸納して横山秀郎ハ近頃デモ毎朝出勤シ居レリ、といふことになつたし近頃デモ歸宅ハ概シテ夜更ナリといふことが確立したから…。

「日本橋の三六七〇番。」美彌子は自働電話で横山の勤先きを探がした。だが 外出」との事ですぐに受話機がかけられた。

追分から正門前へかけてあてどもなくぶら〜歩いてゐるうちに咽喉がひりつくやうに渇いて來た。

カフエ・リラの階上には學生が二三人ゐただけで閑散を極めてゐる。

「ね、ね、今度はあなたが横山さんをよび出して下さらない？　あのひと、きつと病氣がなほつてもう出てゐるんだと思ふわ。」

美彌子は堪らないやうな顔をしてゐる。私もいゝ加減うんざりしてゐた矢先きなので勢よく席を立つた。

「もし、もし、F・Rですか。横山さんへお願ひします。」

「横山さんはまだおかへりになりません。」朗らかな聲が答へる。

「何時頃おかへりになるでせう？」

「今日は皆さん、横濱の稅關へお出でになりましたから午後二時頃になるでせう。貴方はどなたですか？」

「私、澤の代理の者です。」

「あゝら嫌だ、よく知つてゝよ、貴女はよし子さんだわ。」

「いゝえ、私、澤の代理の者です。」

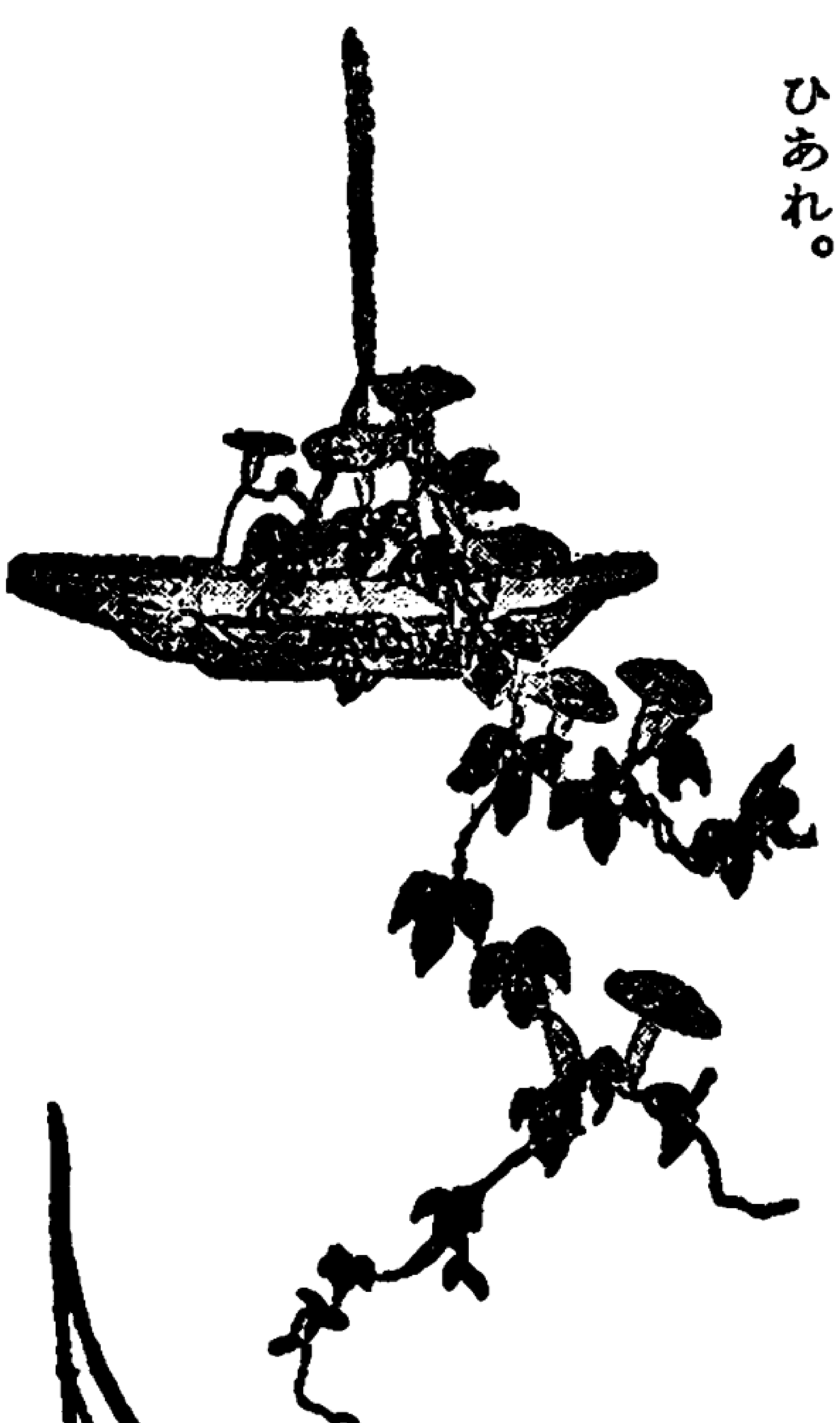
「駄目よ。いくらかくしたつて、あなたは平野家のよし子さんよ。」

私の惡戯心が潑溂と目をさました。えーどうでもなれ！

「とう、とうあてられたわね、」

「さうらごらんなさい。私達は朝から晩まで人の聲ばかりきかされてゐるでせう。だから聲に對してとても敏感なのよ。私達はね、昆蟲學者が美しい蝶を採集するやうに、美しい聲、歪むだ聲、赤い聲、靑い聲なんか勝手に分類して樂しむでるのよ。だから、とし子を胡麻かさうたつて無理よ。それよか、よつちやん！貴方も

うい〻かげんに横山さんから離れなさいよ。あんな人とても駄目よ。」
「えゝ、あのう――」
「まあ、ごめんなさい、あなたもう泣いてるの？だけれども私、あなたが氣の毒だからいふのよ。今日はみんなが留守だからいはすだけいはして頂戴、でも可愛いさうね、あなた！よさうかしら？ね、あなたつたら泣くのお止めなさいよ。」
「えゝ」からうなると私は傍で眼をぱちぱちして不完全ながらも洩れて來る交換手の聲に聽覺をそばだてゝる美彌子のために聞いてやらなければならなかつた。でなるべく內氣に返事を隨時にすることにした。
「ね、あんな男のために泣くなんつて勿體ないわよ、あなた！　私、まだ貴方にお目にかゝつたことないけど、貴方の聲でお顏が想像できるわ、ね、泣くのお止めなさいよ。あなたはおとなしいのね、日米ホールのベッシーなんかとはまるで違ふわ。そのベッシーに横山さんが無中なのよ。いゝ加減無中だといつたつてあの人、なか／＼凄いのよ。いゝ加減になると金を捲きあげて新しい人と仲よくするんだから。あんた、鎌倉の話、知つてるでせう？あの大松閣の娘をどうしたとか……知らないの？話してあげたいね、こんだ、いつかあはない？あつて話してあげたいわ、それも結局最後は手切れ金を取つたのですつて！とも角あんな人、ちつとも誠意なんかないのよ。いくら交換手だつて女だもの、義憤を感ずるわよ。それもベッシーみたいのはどうなつたつて好いけど、あんたは別よ。あんたはいつも本名さへいひきらないのだもの、たまらなくいぢらしくなるのよ。いくら男がよくたつて――ね、あなた、少しいひ過ぎたかしら？悪い奴でも好きなのは別だから……」
「いゝえ、そんなことちつとも……」
「ごめんなさいね、私はね、あなたのためを思つていつたのよ。」
「えゝ、いろ／＼ありがたう、あたしもあなたにお目にかゝりたくなつたの、お名前をもう一度はつきり敎へて下さらない？」
「とし子といふのよ、こゝにもう一人とし子といふ人がゐるから背の高いといつていたゞけばいつでも解ることよ。
　私は美彌子に出來るだけ細かくとし子の話しを繰返へした。しかし、これは交換手の話だから餘り氣にかけないやうにといひ足して……
　美彌子が横山秀郞にADDIOをしたことは勿論である。



　以上はある有閑女性の經驗した懐かしい探偵的實話である。私とあるからといつて直ちに作者を想像する讀者に禍ひあれ。

ピアノの教則本

小池みどり

一九の娘で、美しくて、ピチピラと健康だつた經子は裕福ではない軍人の未亡人の母と妹との三人で暮してゐた。が二十六のお坊ちやんの實の心を左の紅指であしらふ樣にいつもひつぱつてゐた。

在學當時から不良だといふ事はしつてゐたが、その經子が世間で云ふ程又、親類の者達が反對する程いけない女だとは、實自身少しも思つてゐなかつた。

それで實は經子と結婚する事にきめてゐた。實がその事を家に發表した時に、(實は東北の或縣の生んだ、そして刺客の爲に殺されてしまつた處の、大政治家の一人息子であつたので、反對するものはあつても、絕對を强ふる事の出來るものはないといふ境遇を持つてゐた。)……たまたま、經子はレプラの血統だ……といふ噂が耳に入つた。若い情熱と、人道的潔ペキ性を持つた實は、はらひ切れないユウウツを頭一ぱいつめこんで、鄕里にとんでいつた。二人の鄕里は同じだつた。

往きの汽車の中のユウウツは歸りの汽車の中のどこにもなかつた。女の祖父ができもののために死んだことはたしかであつたが、決してレプラではなかつたといふ事が、實の心を安心させた。しかし彼の心に燃えてる經子に對する情熱の火が、一邊、はや、水をかけられたものである、といふ事を實はまだかんじてゐなかつた。

何のための歸省か、何のためのユウウツか、經子は別にききもしなかつた。

この人は私を愛してゐる。自分はこんなに美しい。私の貧しい家は、私は、この有名な父親を持つてゐた男と結婚することによつて、どれだけの幸福と、どれだけの名譽を得るだらう。私の美しさが、この男も幸はせにし、私をも對世間的に廣げてくれる。……それで經子はほこらしい氣持だつた。

散步の後の疲れが、のみものと椅子を思ひ出させて、フルーツ・パーラーのテーブルの前に二人をすわらせた時、實は經子の持つてゐたフロシキヅツミをかんじた。

「それなに?」

「これ? 妹のピアノの教則本」

オレンヂエードがあつらへられた時、經子は便所に立つた。何心なく「何をひいてるのかな」と置かれたフロシキ包を取上げた。

ダンマリこくつて、オレンヂエードをのみ、だまつて時計をみ、一言

「出ませう」そして下をむいたまゝさよなら。

いつもと違ひすぎる程違つた態度で行つてしまつた實を「何をおこつたんだらう、あのお坊ちやん」

經子の自信には何の動搖もなかつた。

何度電話をかけても、何度手紙を出しても、うんともすんとも、實はそれつきりだつた。あんなに好きだと思つてゐたのに、經子の事なら何でもいい、何でもゆるせる、と思つてゐたのに、不思議に、何の未練もなくなるとは——

今迄どれだけの樂しい未來の夢の箱であつたかしれない實に、自分自身が何の價値もないものになつてしまつたと知つた時、經子はずい分口惜しがつた。

「私にまいつてゐる」と思つてゐた、たかぶつた好きさは、愛犬なものを逃がしたと思ふ心で、ギリギリとくやまれた。つま先から頭の先まで、もうだめだ、と思ふ氣持が、すつぱいものをはしらせた。「慰しや料請求」しかし經子は實に精神的以外にはそれを要求する權利を持たなかつた。

喜んだ親類の者達は實に、いくらでも手切金を出してもいいと云つたが、實は返事もしなかつた。經子の美しさと才氣と、實の熱度を知つてゐた友人達は、彼の不思議な變化に驚いた。「一時の氣まぐれで、經子をすてるなんて、」「經子の失望は三面記事の下の段をぬるかもしれない」‥‥でも實はかんしやく筋を二三度ピクピクさせるにすぎなかつた。

經子のこの "Broken heart and Broken happy" はピアノの教則本イコール、タイプライターの教則本であつたといふ、たつたそれだけの虚榮心によるのだつた。

香としらみ

しの・たけじ

前世は探偵犬の生れかはりでもあつたのか私の鼻はばかに敏感だ。——そのくせ三世相で見ると、お寺の坊さんで油を三升盗んだので牛に生れたと書いてあつたが——鼻のキクのは

好いやうではなはだ惡い。死んだ小山内さんがあんな高い鼻なのに鼻がキカないで、匂ひは皆無いけないといつた。ばらの香も、美人の薫りも？——鰻は半分匂ひで食べるのにお氣の毒さま！と食ひしんぼが同情したことがある。

お香の會の焚き合せに、酸つぱいのは佐曾良、ちつとなまぐさいのが眞奈盤、伽羅より瀟洒なのが眞奈伽なんぞとなまいきに一ツもはづさない厄介ものの鼻は、口をぬぐつてゐる旦那さんに對して誠に工合がわるい。こつちが白をきつても鼻が先刻承知してしまうので、浮氣の速度がはつきりとくる。

はは、おつな香水ですね。はは、この女粗つぽい氣質だかすかに洗濯しやぼんが殘つてゐる。——ほ、この粉白粉は？等、等、等……

まして體臭はごまかせない。一間にこもりつきりだと、男の髪の毛にまでしみこんで、持つてかへつた手巾はまだいいが、着物の入れ場處は一個所だから誠に迷惑する。素人、玄人、まじりもの……

旦那さんも苦心がいる。お歸り——風呂をこしらへておけ！ まづ全身洗ひあげて、何もかもすつかりぬぎかへる。たまにはジャズにしてめんくらはせやうと畫策する。あつちこつちとテンポを早めて風車のやうに迫つてくるが、カクテルだつてもと〳〵合せたものだから味はへばわかる道理で、匂ひのジャズも、巧なら巧みなほどほほゑませる。

以上。もとより我から好んで鼻をヒコつかせるのではないが、鼻さきをかすめる風はかがないわけにもゆかない。

ところで、その私は、ほのかな風の香か、草のかをりも懷かしむたちゆゑ、自分はなんにも香料をもちひない。なるべく香の淡い品を選んでゐる。——嗅ぎだす便利のためだと思つては困る。

困るといへば、それは自分の方が困るわけで、萬一身近かに他の人をよせたら、すぐに知れてしまうわけだ。不便な好みであるが、それも仕方がない。

ずつと前に、私は一疋大きなシラミを身につけた。拾つたのかわいたのかしらないが、平日潔癖性であるゆゑに、わいた方には誰も贊成しないで、もらつた方に疑ひをかけられた。何處で？ 誰に？ そんなにも親しめる人があつて貰つたのなら嬉しかつたらうが……いくらせんぎされてもなかつた。で、その時分大變弱つてたので、おほかた死じらみだらうといふ事になつて、大事におしと哀れまれた。

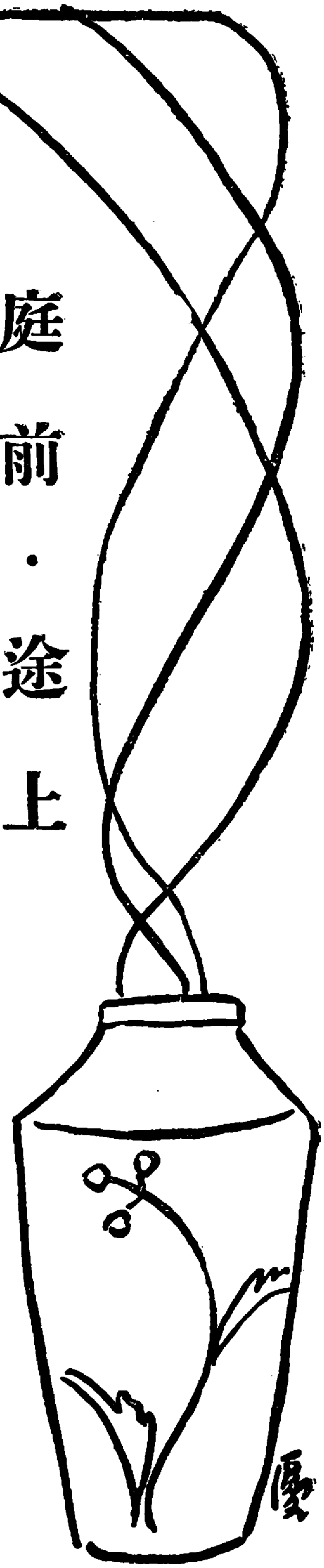
右、たばねて、された話、したのではないが鼻が知つてゐた話。

暑中御見舞

編輯一同

庭前・途上

岡本かの子



わが庭にひとつ咲きたるあぢさゐの花のおほきさ諸手にあまる。

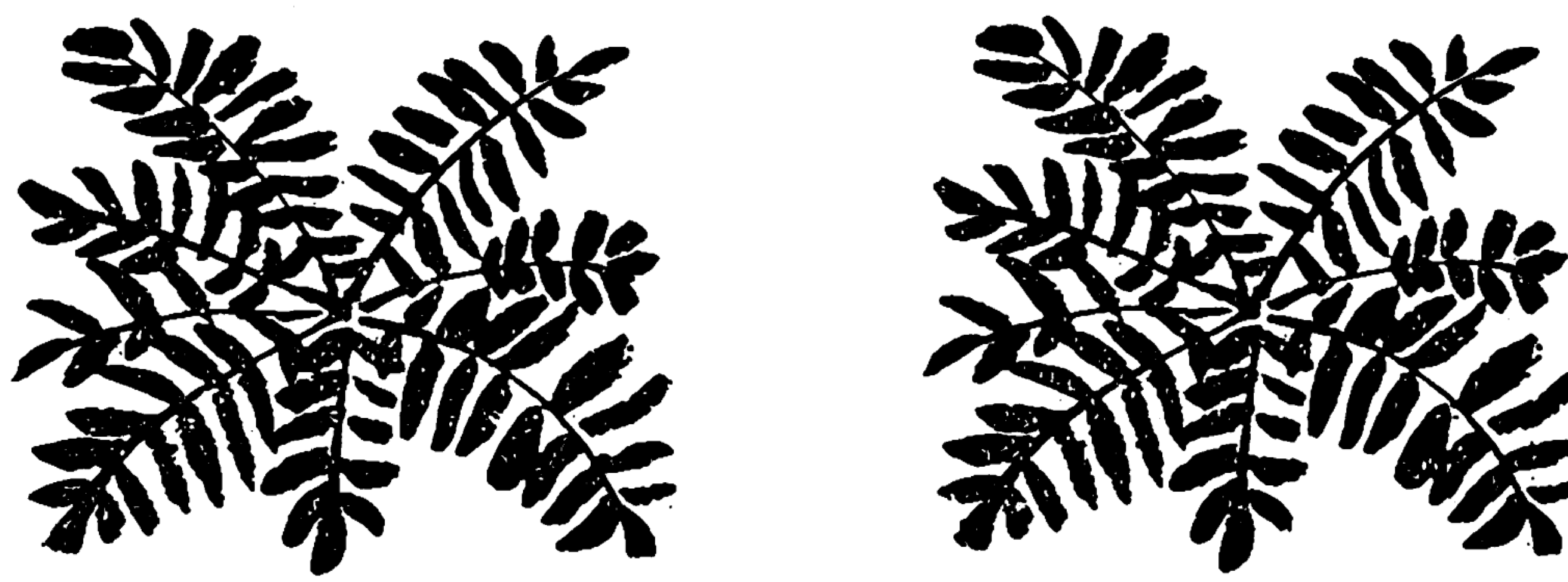
あぢさゐの珠なす花はむらさきに色變りつつ眞陽にかゞやく。

降る雨にしたたかうたれあぢさゐの球なす花のかたちは歪む。

ひるすぎの街路樹の蔭聲高に若き工夫はもの云ひ合へり。

ひるすぎの風にざわめく街路樹を見やる工夫のまなこは赤し。

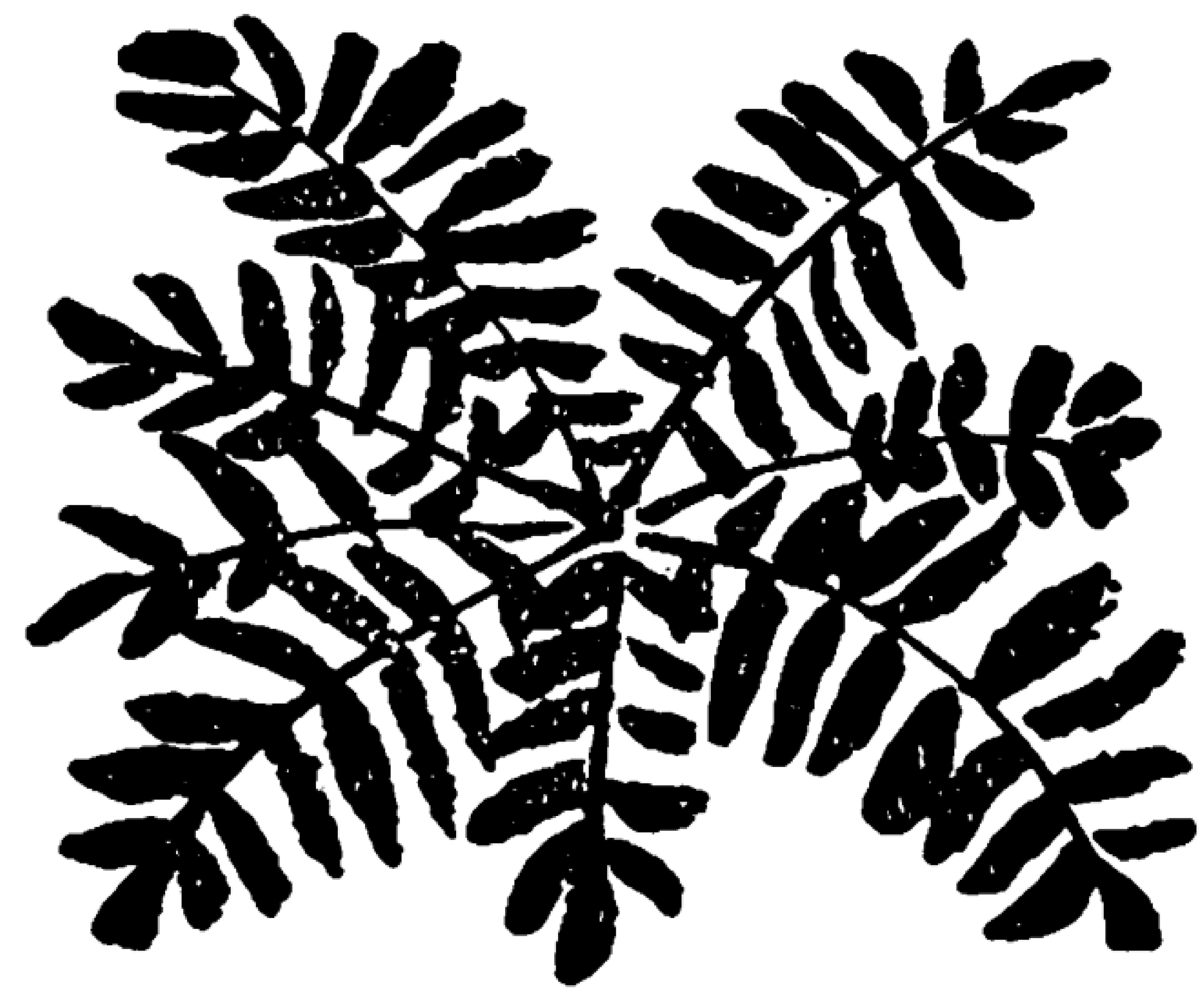
走り行く自動車の脊に寫りたる道路工夫の影は歪めり。

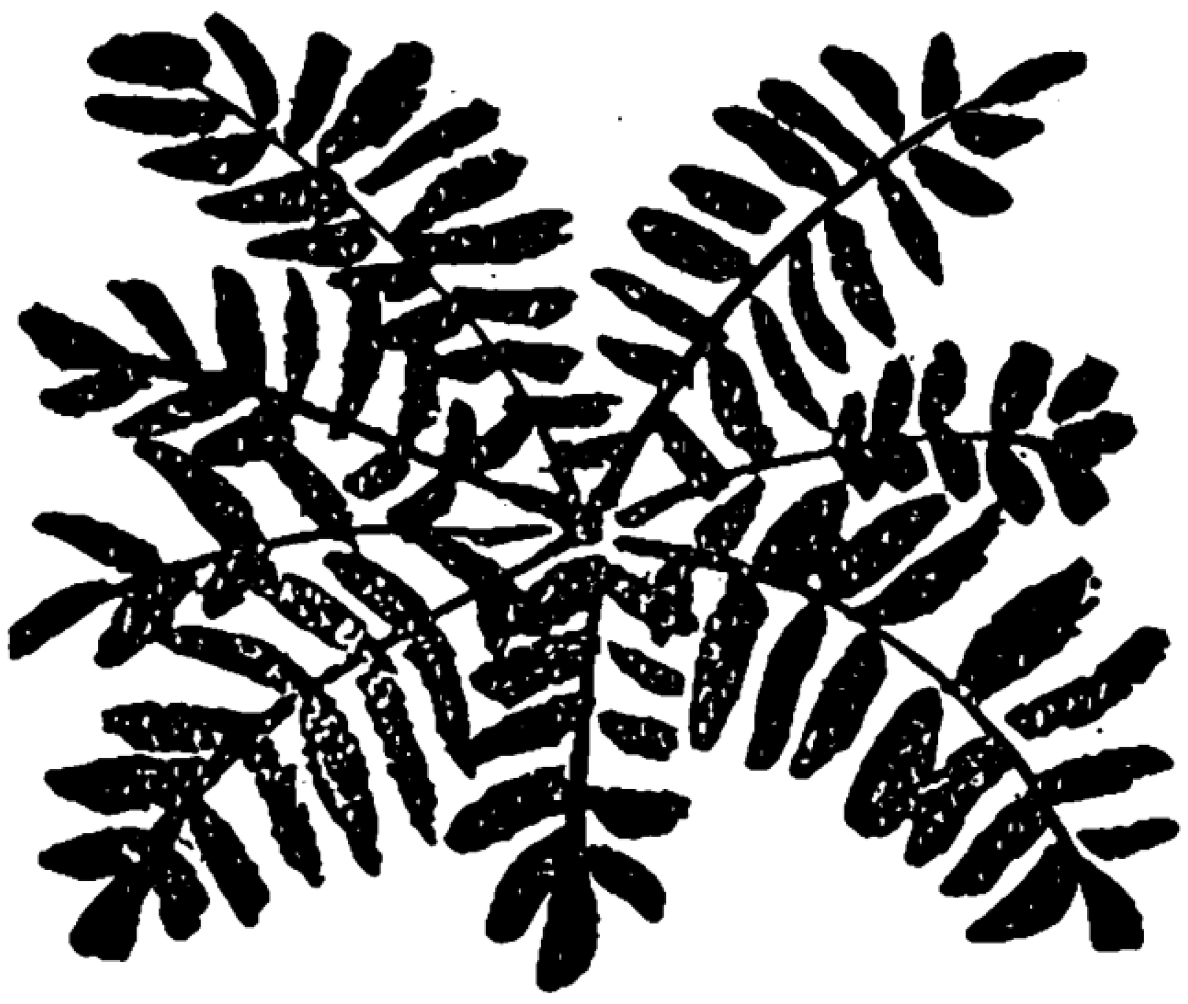


忘れてゐた風景

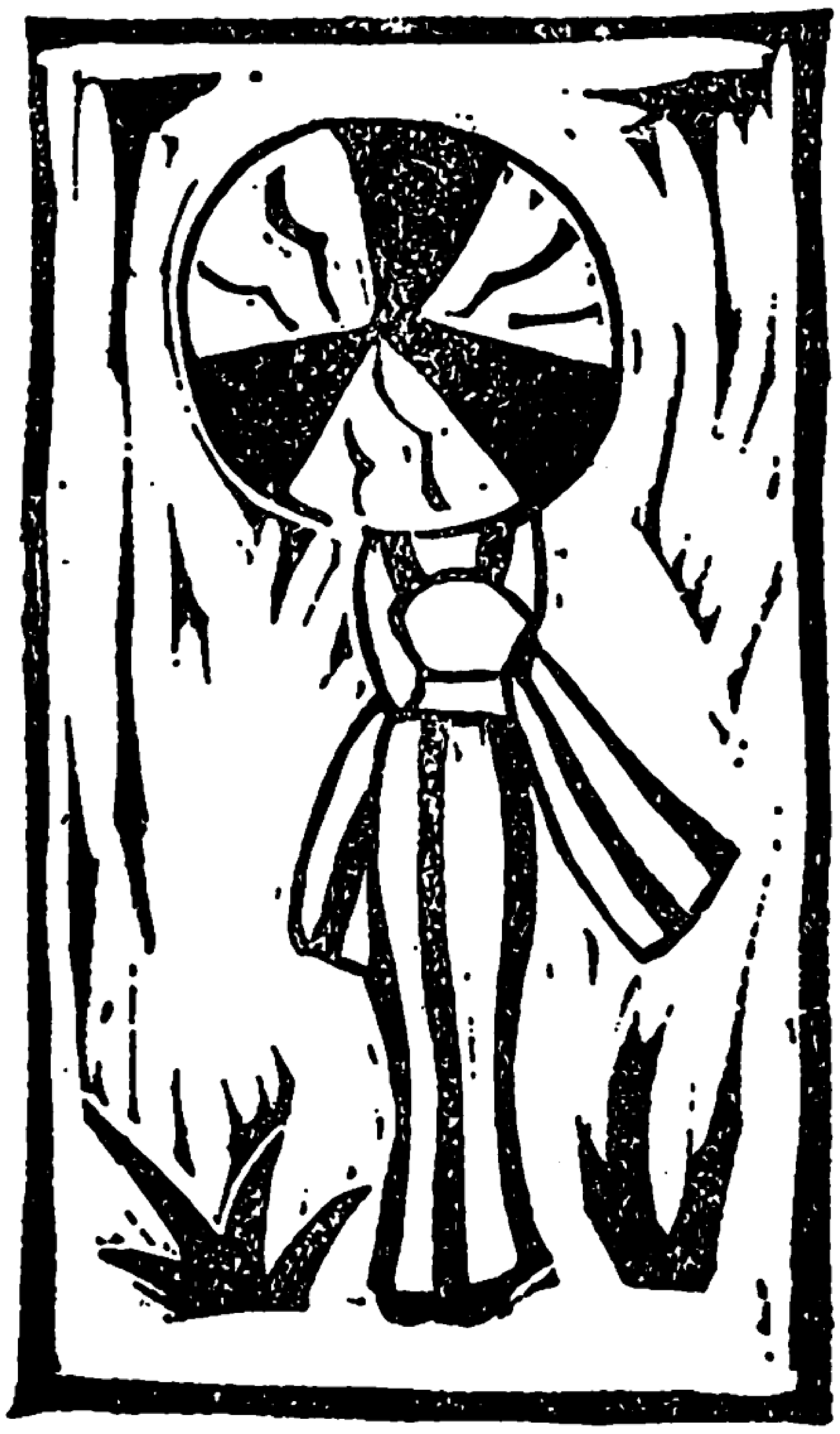
石井あつ子

煙つてゐるのは晝の空、原つぱの向ふに
私は東京を見續けてゐる。曇つてゐるのではない
晴れたのでもない
そんな日の午後は演習も終り機關銃はさらに
鳴らない
かういふ展望を私は故郷へ書かうか知ら
夏
青紫の山を掩ふ雲の脂肪質





全反射裸體の團塊のうねり
假睡を悲しむ夢もあらう
强烈な酒精に醉つてゐる閃光をはらんで
澱んでゐる乾杯の後の疲勞にも似た
ヴァン・ゴッホオ
風景の核心に架せられた鐵橋
視野へあつまる撒かれた觸感はみだれない
私は暑すぎる避暑地を知つてゐる
冷された食慾の過剩を知つてゐる
私は故鄕へ歸らない
汗ぼつたい胸は職業の壁にとざされてゐる
なんといふ古めかしい象徵だらう
なんといふ拋物線の描出だらう
都會の呼吸ぶきである夕暮が迫つてゐる



酒屋の二階

―放浪記―

林芙美子

十二月×日

「飯田がね、錢でなぐつたのよ…厭になつてしまふ…。」

飛びついて來て、まあ芙美子さんよく來たわ！　と云つてくれるのを樂しみにしてゐた私は、長い事待つて、暗い露路からショボショボ出て來たたい子さんを見ると、自動車や、行李や、時ちやんが、非常に重荷になつて、來なければよかつたんぢやないかと思へた。

「どうしませうね、今さらあのカフエーに逆もどりも出來ないし、少し廻つて來ませうか、飯田さんも、私に會ふのがバツが惡るいでせうから…。」

「えゝ、ではそうしてね。」

私は運轉手の吉さんに行李をかついでもらうと、酒屋の裏口の藥局みたいな上りばなに轉がしてもらつて、今度は輕々と、時ちやんと二人で自動車に乘つた。

「吉さん！　上野へ連れて行つておくれよ。」

時ちやんは、ぶざまな行李がなくなつたので、キッキッとはしやぎながら、私の兩手を振つた。

「芙美ちやん！　大丈夫かしら、たい子さんつて人、貴女の親友にしちやあ、隨分冷たい人ね、泊めてくれるかしら…。」

「大丈夫よ、あの人はあんな人だから、氣にかけないでもいゝのよ。大船に乘つたつもりでゐらつしやい。」

二人は、でもおのおの淋しさを噛み殺してゐた。

「何だか心細くなつて來たね。」

時ちやんは淋しそうに涙ぐんでゐた。

「もうこれッ位でいゝだらう、俺達も仕事しなくちやいけないから。」

十時頃だ、星がチカチカ光つてゐた。

十三屋の櫛屋のところで、自動車を止めてもら　と、時ちやんと私は、小さい財布を出しあつた。

「街中乘つけてもらつたんだから、いくらかあげなきやあ…。」

吉さんは、私達の前に汚れた手を出すと、

「馬鹿！　今日のは俺のセンベツだよ。」

吉さんの笑ひ聲が大きかつたので、櫛屋の人達もビックリしてこつちを見てゐた。

「ぢや何か食べませう、私の心がすまないから。」

私は二人を連れると、廣小路のお汁粉屋にはいつた。吉さんは甘いもの好きだから。

――ホラお汁粉一杯上つたよ！

――ホラも一ツあとから上つたよ！

お爺さんのトンキョウな有名な呼び聲にも今の淋しい二人には笑へなかつた。

「吉さん！　元氣でゐてね。」

時ちやんは吉さんの鳥打ち帽子の內側をクンクンかぎながら、子供つぽく目をキロキロさせてゐた。

歩いて本郷の酒屋へ歸へつた時は、もう十二時近かゝつた。

夜のカンカンに冷たい舗道の上を、グルグル湯氣にとりまかれた、支那蕎麥屋の灯が通ほつてゐるきりで、二人共沈默つて白い肩掛を胸にあはせた。

二階に上つて行くと、たい子さんはゐなくて、見知らない紺がすりの青年が、火のない火鉢に、しよんぼり手をかざしてゐた。

戀人かな…私は妙に白々とした空間をみやつてゐた。寒い。齒がガチガチふるへる。

「たい子さん歸へられなければ寢られないの？」

時ちやんは、私の肩にもたれて、心細げに聞く。

「寢たつていゝのよ、當分こゝにゐられるんだもの、蒲團出してあげるよ。」

押入れをあけると、プンと淋しい一人ぐらしの匂ひをかいだ。たい子さんだつて淋しいんだ……大きなアクビにごまかして、袖で瞳をふくと、うすいたなの下に時ちやんをねせつけた。

「貴女は林さんでせう…。」

その青年はキラリと眼鏡を光らせて私を見た。

「僕山本虎造です。」

「あゝそうですか、たいさんに始終聞いてました。」

なあんだ、しびれの切れた足を急に投げだすと、寒いですねと云ふ話からほぐれて來た。

色々話してゐると、段々この青年のいゝ所がめにたつて來る。

――私は一生懸命あいつを愛してゐるんですが…。

山本さんは涙ぐむと、火鉢の灰をかきならしてゐた。

たい子さんは幸福だなあ…私は別れて間もない男の事を思つた、あんなに私をなぐつてゐたあの男に、この山本さんの純情が十分の一でもあつたら…時ちやんはスヤスヤゐびきをかいてゐる。

「では僕歸へりますから、明日の夕方にでも來るやうに云つて下さいませんか。」

もう二時すぎである。青年はコトコト路を鳴らして歸へつて行つた。たい子さんは、あの人との子供の骨を轉々持つて歩いてゐたが、どうしたらう、折れた鏝が散亂してゐる。

十二月×日

雨がざんざん降つてゐる。
夕方時ちやんと二人で風呂に行く。
歸へつて髪をときつけてゐると、飯田さん來る。
私は袖のほころびを縫ひながら、カフエーでおぼへた唄をフッとうたひたくなつた。
あゝ厭になつてしまふ。
別れてまでノコノコ女のそばへ來る位なら飯田さんもおかしい人だなあ……。

「こんなに雨が降るのに行くの……。」
たい子さんは佗しそうに、ふところ手をして私達を見た。

淺草へ來た時は夕方だつた。
ざんざ降りの中を一軒一軒、時ちやんの住み込みよさそうな家をさがして、きまつたのはカフエー世界と云ふ家だつた。
「美美ちやんどつかへ引越す時は知らしてね、たい子さんによろしく云つてね。」
時ちやんには、眞實いとしいものがあつた。
野性的で、行儀作法は知らないけれど、いゝところが多分にあつた。
「久し振りで、別れのお酒もりでもしやうか……。」
「おごつてくれる……。」
「體を大事にして、にくまれないやうにね。」
都壽司にはいると、お酒を一本つけてもらつて、私達はいゝ氣持ちに横ずはりになつた。

雨がひどいので、お客も少ないし、バラックでも、落ちついた家だつた。
「一生懸命勉强してね。」
「當分會へないね、時ちやん、私もう一本呑みたい。」
時ちやんはうれしそうに手を鳴らした。

時ちやんをカフエーに置いて歸へると、たい子さんは一生懸命書きものをしてゐた。
九時頃山本さん來る。
私は一人で寢床をひくと、たい子さんより先に寢る。

十二月×日
フッと眼を覺ますと、せまい蒲團なので、私はたい子さんと抱きあつてねむつてゐた。
二人ともクスリッと笑ひながら、背をむけた。
「起きない。」
「私いくらでも眠りたい……。」
たい子さんは白い腕をニユッと出すと、カーテンをめくつて、陽の光りを見た。

トントン梯子段を上つて來る音がする。
たい子さんは無意識に、手を引つこめると、
「寢たふりをしてませう、うるさいから。」
私とたいさんは抱きあつて寢たふりをしてゐた。
やがてサラリと襖があくと、寢てゐるの？　と呼びかけながら山

本さんはいつて來る。
山本さんが私達の枕元に座つたので、一寸不快になる。
しかたなく目をさました。たい子さんは、
「こんなに朝早く來て寢てるぢやありませんか。」
「でゝ務め人は、朝か夜かでなきお來られないよ。」
私はぢつと目をとぢてゐた。
どうなるものか、たいさんのやり方も手ぬるい。

　厭なら厭ぢやと最初から、云へばスットトンで通やせぬ….。

と云ふ唄もあるではないか。

今日から街は諒闇である。
晝からたい子さんと二人で、銀座の方へ行つてみる。
「私ね、原稿書いて、生活費位出來るから、うるさいあそこを引きはらつて、郊外に住みたいと思ふわ…」。
たいさんは、茶色のマントをふくらませて電氣のスタンドをショーウインドに見ると、それを買ふのが唯一の理想のやうに云つた。
歩ける丈け歩きませう。
銀座裏の奴蕎司で腹が出來ると、黒白の幕を張つた街並を足をそろへて歩いた。
今日は二人のおまつりだ。

　朝でも夜でも牢屋はくらい…
　いつでも鬼メが窓からのぞく。

二人は日本橋の上に來ると、子供らしく、欄干に手をのせて、漂漂と飛んでゐる、白い鷗を見降した。

一種のコオフンは私達には藥かも知れない
二人は幼稚園の子供のやうに
足並をそろへて街の片隅を歩いてゐた
同じやうな運命を持つた女が
同じやうに瞳と瞳をみあはせて淋しく笑つたのです。
なにくそ！
笑へ！　笑へ！　笑へ！
たつた二人の女が笑つたつて
つれない世間に遠慮は無用だ
私達も街の人達に負けないで
國へのお歳暮をしませう

鯛はいゝな
甘い匂ひが嬉しいのです
私の古里は遠い四國の海邊
そこには
父もあり
母もあり
家も垣根も井戸も樹木も…

ねえ小僧さん！
お江戸日本橋のマークのはいつた
大きな廣告を張つておくれ
嬉しさをもたない父母が

どんなに喜んで遠い近所に吹ちようして歩く事でせう
——娘があなた、お江戸の日本橋から買つて送つて下れまし
たが、まあ一ッお上りなしてハイ……。

信州の山深い古里を持つ
かの女も
茶色のマントをふくらませ
いつもの白い歯で叫んだのです。
——明日は明日の風が吹くから、ありつたけのぜにで買つて
送りませう……
小僧さんの持つた木箱には
さつまあげ、鮭のごまふり、鯛の飴干し
二人は同じやうな笑ひを感受しあつて
日本橋に立ちました。

日本橋！　日本橋！
日本橋はよいところ
白い鷗が飛んでゐた。

二人はなぜか淋しく手を握りあつて歩いたのです。
ガラスのやうに固い空氣なんて突き破つて行かう
二人はどん底を唄ひながら
氣ぜはしい街ではじけるやうに笑ひました。
私は食物の持つ、なつかしい木箱の匂ひを胸に抱いて、國へのお歳暮を樂しんだ。

十二月×日

「こんやは、庄野さんが遊びに來てよ、ひよつとすると、貴女の詩集位ひは出してくれるかもわからない、福岡日々の社長の息子ですつてよ……。」

たいさんと二人でいつもの夕飯を食べ終ると、二人は隣りの部屋の、軍人上りの株屋さんだと云ふ、子持ちの夫婦者のところへ、まねかれて行く。

「貴女達は呑氣さうですね。」

たいさんも私もニヤニヤ笑つてゐる。

お茶をよばれながら、三十分も話をしてゐると、庄野さんがやつて來た。インバネスを着て、ゾロゾロした格構だ。

此人は酔つぱらつてゐるんぢやないかと思ふ程クニヤクニヤしてゐた、でも人の良さそうな坊ちやんだが。

こんな人に詩集を出してもらつたつて仕様がない。

私は菓子を買つて來た。炬燵にあたつて三人で雑談する。

飯田さんと、山本さん二人ではいつて來る。たゞならない空氣だ。

「××××！」

飯田さんが最初に投げつけた言葉はこれであつた。たい子さんの額に、インキ壺が飛ぶ、唾が飛ぶ、私は男への反感がむらむらと燃へた。

「何をするんです。又たい子さんもどうしたのこれは……。」

たいさんは、ボウダと涙をせぐりあげながら話した、飯田にいじ

められてゐると、山本のいゝところが浮ぶのです。山本のところへ行くと、山本がものたりなくなるのです。
「どつちをお前は本當に愛してゐるのだ！」
飯田さんは、惡黨だ。私は二人の男がにくらしかつた。
「何だ貴方達だつて、いゝかげんな事してるぢやないかッ！」
「なにッ！」
飯田さんはキラリと私を睨む。
「私は飯田を愛してゐます。」
たい子さんはキッパリ云ひ切ると、飯田さんをジロリと見上げた。
私はたいさんが憎らしかつた、こんなにブジョクされて‥‥山本さんは溝へ落ちた鼠のやうに、しよんぼりすると、蒲團は僕のものだから持つてかへると云ひ出した。
すべてが渦である。
たい子さんはいち早く山田淸三郎氏のところへ逃げて行つた。
私はブツブツ云ひながら三人の男たちと外に出た。
カフエーにはいつて、酒を呑む程に、醉がまはる程に、四人はますますくだらなくなつて來る。
庄野さんは、下宿へ來て泊れと云ふ。蒲團のない寒さを思ふと、私は庄野さんと自動車に乘つて、舌たらずのギコウにまけてなるものか、私は酒に醉つたまねが大變上手だ。
二人はフトンの上に、二等分に帶をひつぱつて寢た。
「山本君だつて飯田君だつて、たいさんだつてあとで聞いたら、關係があると云ふかも知れないね。」
「云つたつていゝでせう。貴方も公明正大なら、私も公明正大ね、一夜の宿をしてくれてもいゝでせう。蒲團がなけりや仕様がない一
私は出もどりのヴアージンだ。どつかに、一生をたくす男がある筈だ、私は、私に許された領分だけ手足をのばして目をとじた。
たいさんも宿が出來たかしら‥‥目頭に熱い涙が沁いた。
「庄野さん！　明日起きたら、御飯食べさせてね、お金もかしてね、原稿を新聞にかくから‥‥。」
私は朝まで眠つてはならないと思つた。男のコオフン狀態なんて、政治家と同じやうなものさ、駄目だと思つたらケロリとしてゐる。
明日になつたら、又どつかへ行くみちをみつけなくちやあ‥‥。

十二月×日
ゆかいな朝だ、一人の男に打ち勝つて私は意氣やうやうと、酒屋の二階に歸へる。
たいさんが歸へつてゐた。疊の上で何か燒いた跡らしく、點々と焦げて、たいさんの茶色のマントが、散々に破られてゐた。
「庄野さんとこへ昨夜泊つたのよ。」
たいさんはニヤリと笑つた。
私はもう捨てばちである。
たいさんは結婚するかも知れないと云ふ。うらやましくて仕様がない。
今は只沈默つてゐたいと云ふ、淋しかつたが、たいさんの顔は更生に輝いてゐた。
みじめな者は私一人ぢやないか、私はぺしやんこにくづ折れた氣持ちで、片づけて行くたい子さんの白い手を見てゐた。



長流記 （その十三）

今井邦子

大井緑葉氏が水木さんの家に來てごろ〱してゐるやうになつたのはそれから間もない事であつた。

「大井がごろ〱してゐると鮪がころがつてゐるやうで僕はおそれる」

水木氏は時にこんな事を言つて嘆息した、身長六尺有餘の緑葉氏は郷里から送つて來るお金を大抵飲みつくして大學の方へはろくに顏を出さなかつた、一度訪問して話の合つた水木氏の家を一番居心地のよい處にして一旦歸國して再び上京してからはそこを宿と定めてしまつたかのやうになつた。それをそのまゝいれてゐる水木氏も水木氏なら何ヶ月でもごろ〱してゐる大井氏も大井氏だと人は笑つた。佐千子も笑つたけれど佐千子の笑ひのなかには、さうした現世的には笑はれる互のしまりのなさのなかに、浮世人には一寸まねの出來ない呑氣さがあつて佐千子の心はそれに好意の微笑を向けてゐるものがあつた。

「大井さんがね、近日貴女に說法に來るんだつて、水木夫人になり代つて‥‥」

友達は來ておもしろさうに言ひはやした。

「ヘエ、何の說法なんでせう‥‥バカにしてゐるわ。あべこべにこつちから說法してやる‥‥大井緑葉なんか即座にまゐらせてみせる‥‥」

佐千子はきそひかゝるやうにこんな言葉を出した。

大井氏が佐千子に會見を申込んだのはそれから間もなくであつた

佐千子は即座に承知してやつた。何と言ひ出すかとやゝ好奇心の期待を持つた佐千子は大井氏に會つてたゞはにかんだ青年を見たゞけであつた。豪放な人と聞いて一寸心が手ぐすね引いてやりかへしてやらう、と待つてゐた力まけがして物足りなさを感じた。大井氏は一寸木乃伊とりがミイラにとられた形で佐千子にひきつけられて來た。大井氏がその居間に西洋の或る名高い女優の寫眞額をかざつて「佐千子さんに似てゐる」と友人に洩らした事によつて噂がひろがつていつた。

佐千子がしつくりゆかぬ家庭生活のなやみ、子に對する若い母のなげきなどを投げつけるやうに書いたものによつて佐千子は方々からさま〲の反響を受けた。或る人々は佐千子を酷評し、或る人々はさういふ佐千子に興味をもつて近づかうとし、又或る人々は苦しい嘆きのなかに流れる佐千子の眞心に同感した。そしてしばらくはそれらのさま〲の聲の渦のなかに佐千子は上げられたり下げられたりしてゐた。

然し佐千子にしてみればそれらの日は決して浮いた日ばかりの生活ではなかつた。一見おもしろさうに見えるにぎやかなそれらの日のなかに、息もつけない程の憂鬱な、どうする事も出來ない悲しみにとざされる日がまじつてゐた‥‥ いや佐千子にしてみれば心の底ではさうした寂寥の連續とひとしい思ひがあつた。空想を追ひすぎるのか運がわるいのか、心から敬服すべき人に出會ふ事もなく、落ちついた家庭生活も望んでそれが出來ない思ひがあつた。

蚊柱がいそがしく軒をめぐつて物寂しく暮れてゆく夕暮に何か片言で話しかける伊津子に愛想の笑ひ顔も出來ない程心が重くなつてゐて、刻々暗くなつてゆく部屋のなかにじつと座つたまゝ、こんな母親を持つた子を可哀さうに思つて涙を流したりする事があり、又或る時はじつと炬燵に突伏して物思ひに沈んでゐる‥‥お末が伊津子をおんぶして向ふの灯のない八疊間の方を行つたり來たりしていつもきまりの子守唄をうたふ。

よい子吉郎の千本櫻こゝを渡れば涙橋、その聲は忠實に可憐に佐千子の憂鬱に響いて來るのであつた、佐千子はたゞ切なくなつて理由のない涙をながして聞いてゐた。そんなに何をなげく‥‥何か特別に犯した罪でもあつたのか‥‥さうではないさういふ形をとつた物の結果の苦しみではない‥‥愛情の一致しない家庭生活、切らうとして切れないそのつながり‥‥假りのやうなそのやうな氣持の上にずん〲重なつてゆく日月の時流が一日は一日と增してゆくばかりで天とう樣に壓迫されるやうな、さうした苦痛と嘆きであつた‥‥。

「こんな無駄な日をすごしてゐたい自分ではない、ワア〲言はれてそんな事にいゝ氣になつてゐる自分でもない」

お慶さんの處では川端さんの病氣が思はしくないといふのでいろ

いろ方法をたてゝ一時鎌倉に轉地してみる事になつて簞笥や行李を一時佐千子の家にあづけて身軽に引移つていつた。そして鎌倉へ行つてからも相變らず兩家はまだ親戚同樣で一ヶ月に二三度上京してくる二人の宿は大方佐千子の家であつた。まだその頃はどつちの家にも客蒲團にまで手がまはらない頃で佐千子の家では由井氏のふとんを川端氏夫婦に分けて佐千子のふとんにこちらの夫婦は寐る事にしてゐた。夜の一時頃までも遊びほけて窮屈な一つの床に一人の枕の方へ一人の足がゆくやうな寐かたで夜を明す…佐千子たちがぐつすり寐こんでゐるさうした部屋のなかへお慶さんはかまはずはゐりこんで來てその六疊においてある自分の簞笥の着物をより分けたりして、

よく寐てゐるから此まゝおいとまいたします、又次ぎにお目にかゝつて

などと書き殘して歸つてゆく隔てのない交際であつた。

川端氏の健康がやゝ回復した處でいま一度代々木にお慶さんたちが歸つて來て今度は少しはなれた草原のなかの二階家にお慶さんたちがおち付いた處で或る日佐千子はその家で曾て番町の家で手ひどく彼の戀を退けた青年小說家E氏に久しぶりで出會つた。E氏は相變らず小ざつぱりしたカスリの着物と羽織を着てゐたが風邪をひいたと言つて白いハンケチを首にまゐていたのが佐千子にいやな感じを與へた。

お慶さんは世話女房式の處のある人であんなやうで別れになつた二人を理由もなく手うちをさせたい氣持があつてお茶をいれたりして話をつないだ。

佐千子はお慶さんのその氣持に對して出來るだけ快活に過去の感情を忘れたやうにつとめた。話は白樺の小說からロダン、ゴッホの藝術などにうつつた。E氏は相變らず詩張澤山で藝術家ぶりをふりまはしてゐたがその言ふ處は以前自然主義ばりの暗いものではなくバザロフ讃美に代つてロダン、ダビンチ、それからトルストイ、ドストエフスキー、ストリンドベルグなどに傾倒してゐる心を語つた。それがお慶さんは健實な自然主義小說の奉戴者だけにまだ白樺のその氣運に同化出來ないでまじ〳〵してゐたが、小說家でない佐千子は頭腦だけの解釋で氏と話をしたのでその話がはづんでいつた。

「おどろいた、貴方がそんな處まで來てゐやうとは思はなかつた…」

E氏はさう言つて先輩ぶつた。お慶さんは立つてお臺所でお茶をかへた。

その日佐千子は氏に對して持つてゐた嫌厭の感じをよほど和らげられてゐた。だが氏が讀みかけの橫文字の小册紙をひらいてそこにはさんであつたレースのしほりがほろりと落ちたのをひろひあげながら

「藝術家のしほりはかういふものですよ」

と一寸示したのは相變らず鼻をつまみたい氣持をおこさせられた。

春の光がまばゆいやうにさしてゐる枳殻垣の道を佐千子はお慶さんの家の方に向つて歩いて行つた…と向ふから鳥打帽をかゞやかせながらE氏がこちらに歩いてくる

「貴女をむかへに來たんです、僕今朝からお慶さんの處に居ました」

人なつつこい佐千子の心は此時氏を少しも憎んでゐなかつた。二人は話しながらお慶さんの家に來た。そしてそこでお晝飯を食べて又しばらく話しこんだその日も氏は前の日のやうな話をした。その話は誇張があつても、その當時の新しい藝術論であつた。佐千子は由井氏水木氏などと遊びほうけてゐる生活に決して滿足してゐないあへぐやうな智識慾は、藝術の事となると敵の前にでも膝を折つて聞き度い學び度い心が常にあつた。あれ程も厭いであつたE氏、輕蔑もしてゐたその靑年小說家を通して聞く新らしい藝術のいろいろの話は佐千子の智識慾を少しづつ滿足させてゆくやうに思はれた。E氏はその頃はもう一人の愛人があつて、その婦人は親も許して許婚の間とお慶さんに聞いた事も佐千子のE氏に心やすく交際出來る氣持を與へた事であつた。

「本鄉のEさんの家へ一寸行つてみやうと思ふけれど貴女も一緒にいかない？」

お慶さんは或る時さう言つて佐千子を誘ふた、佐千子はすぐ承知して二人は本鄉の道具屋の二階に居るE氏の書斎をたづねた。然し折あしくE氏は留守の時でそれでは又と言つて二人はそこを出たがお慶さんは先きにたつてずん／＼その家の裏に廻るので佐千子も樣子は分らないがついてゆくと裏のきれひに掃除の行き屆いた細い路地の處に立ち止まつて

「こゝがEさんの部屋よ」

と上の方を指さした、そこの小さい窓に白いレースのカーテンがすいて人氣のない靜かな光をつゝましく見せてゐた。

「Eさんも眞面目になつたわ」

お慶さんはかう言つた。

「ほんとうね、そして大へん勉强してゐるやうですね」

二人は話しながら本鄉の通りへ出たがE氏とよい友達になれさうな氣が佐千子にはしてきた。駄じやれや遊戲にはあきはてた氣持それが誇張であつても藝術にふれ、新味を持つたものを聞く事の方が佐千子の心をひきつけた――よし受け賣りの論にしろ……。

白雲綠風

夕方になると廣い物干に出る。そして空をながめる。そして呟く。あゝ旅がしたい。物干は大家さんの部室の先にある。山の手の坂上のはづれにたてた家だから、天空全く觀望自在だ。そこで皆があゝ旅がしたいと云ふので大家さんそのため息に惱まされて、昔學生時代に、勉强に疲れると行つてよく知つてゐるといふ靑梅街道奧多摩方面に行つて、よければ武州御嶽に登つて、旅か散歩かの氣持を味はほうと協議されたのが五月下旬。

日は六月二日の日曜日、集合は午前八時三十分迄に新宿驛。ときまるといきなり悲鳴をあげた素川さん まさか八時半ぢやあ、ねえ大家さんお起きになれますか？社長さんも」自分がお起きになれませんとは一言も云はないところさすが〳〵。そこで九時半ときまつて小池みどりいきなりお辨當は？ときいて「この食慾娘は、いつも食べる事ばかり心配する、どこにだつてたべるものはあるよ」と叱られる。

お天氣のよい日曜日の新宿驛は大變だ、人だ、人だ。白粉の匂ひ、口紅の色、ポマード、體臭、パラソル、瞳と瞳の合圖、おじぎ、ひんぱんに振かへりみられる時計。

九時半すこしすぎ。ちこく。發車。おいてけぼり、なきつつら。つまらなさ。どうしよう。飛込んだ新宿驛に誰も見えない。泣きたいような氣持で見廻はした視野のはづれに、



古屋島七兵衛

——日本橋——5

時雨

古屋島といふ名は昔の武者にでもありさうだし、明治維新後の顯官の姓名にもありさうだが、七兵衛さんといふと大變心安だてにきこえる。葱を賣りにくる人にも、肥とろやさんにも、薪屋さんにもありさうな名だ。この名を覺えてゐるのは、あたしの家の書生さんだつたから——といふより、道十郎めつかちを思ひださせる顔だつたからだ。

道十郎めつかちといふのはキシヤゴの遊びで、つぶの大きなキシヤゴを二つもつて、上からふると、片つぽひつくりかへつて、貝殻の背でない方を出す、それが道十郎めつかちで、なんのためにさういふ名がついてゐるのか知らない。それとも江戸から續いて有名な役者市川團十郎の代々が、大きな眼玉で通つてゐるので、片つぽひつくりかへつて團十郎めつかちが轉化したものかどうか、それとも他に由緣があるのか知らない。

それはどうでも好いとして、古屋島氏の顔に、汚ないキシヤゴの道十郎めつかちがついてゐるのだつた。おまけにそれがばかに大きい、濁つて、ポカンと開いた黄色い中に、眼球が輝きもなく一ぱいに据つて動かずにゐる。盤臺面で、色が黄ばんだ白さで、鼻が妙に大きい。ザンギリで、下を向いてゐて、ヘエ、サヨ〳〵といふ時だけ眼球を上にあげる

古川賞氏のきどつた鳥打帽子のはじがうつるとうれしくなつてひよいとんでゆく。

「誰れもまだ」大家さんが蒼い顔で出て來る。前日の講演會で社長さんとは別々。十時熱田さんがのんきな顔で開札口から出てくる。大家さんの憤慨が聞えはじめる。「皆な遲い。」十時三十四分の松本行の汽車にきめる。

十時半前、素川さん、「ううん九時半に起きちやつたもんでもうみんないないだらうと思つて來てみたんだけど、顔を洗つてとんで出てきたから……」熱田さんと二人でサンドウイッチを買ひにゆく。その後に社長さん、さて汽車に乗ろうとすると素川さんと熱田さんがみえない、時計も汽車も待つてくれない、みんなぢりぢりしてるとのんきな顔で二人は三越から出てくる。地下道をヒイヒイ云つてはしつて、汽車にのる。あたしと熱田さんと古川氏だけ、目的の車に乘つたが皆は間に逢はないので後の方の三等車にとびのつて、はこを通りぬけてくる。何てのんびりした樣ないそがしい樣なで變だ。一通り腰かけると顔だけ洗つてとんできた人のおなかゞグーとなりだした。そこで西村夫人持參のパンとソセージでサンドウイッチを作る（三越にはなかつたつて）むしやついてゐるのをみてた大家さん、ほつぺたの横の方で笑つて、「素川さんよく食べますな」三つ食べたのを七つ位にかん定してる。

立川で汽車を降りる。いきなり大家さんと古川氏　今日の汽車はどうも左へ傾いてゐると思つたら君が腰をかけてゐたのか」どうも

書生さんといつたからとて、五十近かつたかもしれない。黒い前掛けをしめて、角帶に矢立をさしてゐる時もあつた。

「あれはなんなの？」

アンポンタンがさう訊いたことがある。

「あの人は分事師といつて、訴訟がすきで——三百代言…」

アンポンタンは子供心にから理解した。代言人のとこへくるから三百代言？

三百人は來はしないが、さういふ通ひの書生さんは大勢來た。よく考へて見ると、自分達の手におへなくなつたものを擔ぎ込んできて、便宜上、先生〳〵とやつて來たものと見える。其うちに、小さな仕事——差押へ解除だとか、書翰の寫しだとか、公判の延期だとか、相當の用をもらつて、彼等はもぐりでなく、大手を振つて裁判所に出入する特權を、幼くもよろこんだのであらう。

日本橋區馬喰町の裏に郡代とよぶ土地があつて、揚弓や吹矢の店が連なつた盛り場だつたが、德川幕府の時世に、代官のある土地の爭ひや、旗本の知行地での訴訟は、この郡代へ訴えたものとかで、その加減かどうか、馬喰町には大きな旅籠屋が多く殘つてゐた。おかしなことに、古屋島七兵衞さんは、郡代の裏の、ずつと神田の附木店によつた方の、小いつぽけな、みすぼらしい木賃のやうな宿屋の御亭主であつた。

ある日、眉のあとの青いおかみさんが女の子を連れて來て、祖母にポソ〳〵言つてゐたが、またあとから白髮の黄ろいのを振りこぼしたお媼さんが來た。二人はシメ〳〵と呟き訴へてゐたが——道十郎めつかち氏が浮氣を してゐるのだと——其處へヒヨッコリ七兵衞氏が歸つて來たので、稼業にせいを出さなければいけないと祖母に意見され、ヘエ、サヨサヨ、ヘエ、サヨサヨとつゞけざまに上眼をしてお辭儀をしてゐたが、子供と三人の中へ

憎まれつ子世にはびこるでいけない、大家さんの口をつねるべし。驛前でのんきにお茶をのんでるまに、二俣尾行の電車は出てしまふ。そのあとで大變だ行つちやつたとさわいでみる一通りさわがないと氣が濟まない。次の電車までには一時間半位そこでドライブとしやれる。大家さんと古川さんと、社長さん素川西村熱田さんとあたしの七人、田舎には珍らしい大きい車だつたがふつうではのりきれない。そこで後のクッションに女四人前の補助いすに男二人、一番大きいあたしは助手になつたつもりで運轉手の横にこしかける。ところがこの滿員自動車、お客様の所より助手たちのいる所の方がはるかに特等席・段々はしる内に、後ではおしりがいたいの足がつかえるのと大さわぎ、それをどこ吹く風とき ゝながしてすまして兩側の景色をみてゆくあたしをお客様たちが口惜しがる。このところちいつといい氣持でふんぞりかへる。

十一里をすつとばして、おしりと腰をさすつておりたのが二俣尾の驛前、そこから暑い日ざしの中をあるく。河がみえる。河原へ降りてゆく。のどがかわく。大家さんが立川の驛で買つた夏みかんの何とうまかつたこと。一緒に買つたおせんべをかぢりながら歩く。熱田さんがばちやりと石をふみすべらして、水にぬれる。少しやすんで又路に出て、テクリテクリドタリドタリと歩く。大家さんと古川さんはとてもスマシテ上衣をぬいで左手に持ち、ハンテイングを風に打たせて、つつつつと進んでゆく。照りつける六月の日ざしに

はさまれて、角帯に矢立をさした年老いた書生さんは、夕暮の小路をうつむきがちにブツく小言を云ひながら歸つていつた。

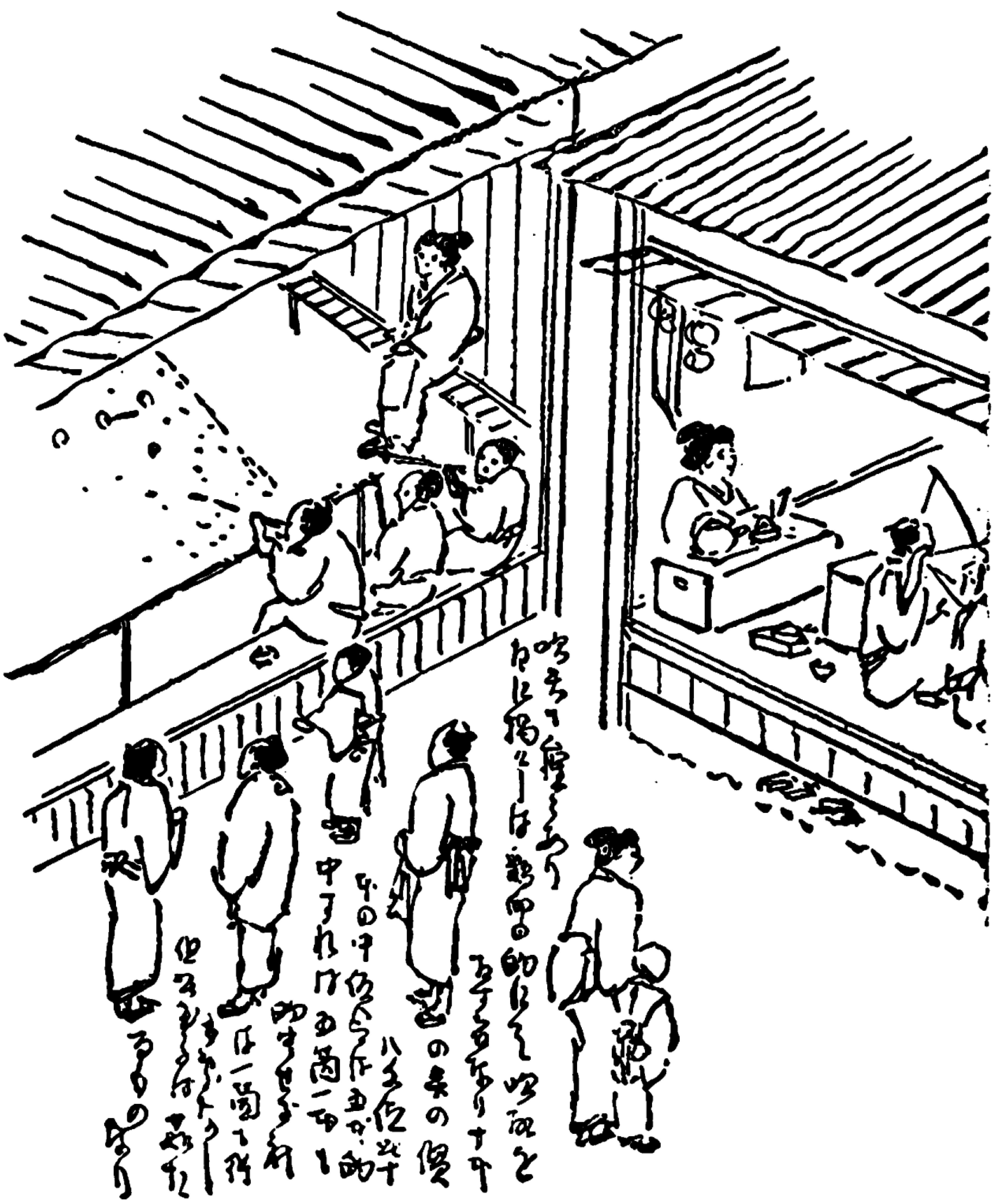
「爭はれないもので、どうしてもポン引だ。」

と七兵衛さんの後姿を見ていつたものがある。

「あれで中々ひつかけるのださうだから、あのかみさんもその手で引いたかな。」



傘のないのがうらめしい。道路工事をしてゐるので自動車が御嶽口の方までゆかないのを残念がつてた社長さん、途中の茶店でお茶をのんでた時にみつけた自動車を行く所までゆかせてくれといつて女だけのつてブーとはしる。一人前の賃銀十錢。「あれ安いわねえ」と感心して、すまして歩いてゐる大家さんたちをぬいてゆくとすぐそこでおろされてしまつた。「之より先はゆきません」と皆「あーら安いはづだわ二分間ものりやしないわ」今ぬいたと思つた大家さんたちにもう追着かれる。そこで又てくりだす。あゝお腹がすいた、何かたべたいなあ。二時すぎ、まだおひるごはんをたべないんだもの、チョコレートはとけてべちよべちよ。仕方がないからおせんべをかゝえてたべる。ボリボリボリボリ、しまひにはそれもめんどくさくなる。すまして歩いてる大家さんたちのはなしを内じよできくと、どんな文學談か旅行のはなしか、景色のはなしかと思つたら大變、食慾はそつちのけ「今朝からめしらしいものをまだくわないが、いまここで何かめしがくえたらうまいだらうねえ」そこであたしも一安心。社長さんの足の强いのにも驚く。かゝとの高い靴で、すまして歩いてゐる。もうずい分歩いたのに平氣、暑いのとおなかのすいたのとでしよげて、やつとつり橋の所についた時先に渡つた大家さんが「古川はねこれが大嫌いなんだつて、下を見ると腦貧血でクラクラとして倒れちやふんで、どいてくれといつて　まつすぐ向ふの山をみてつつと走つて行つたよ」と云つて笑



この會話は聞いてゐたアンポンタンを困らせた。早速質問すると、言つたものは困つた顔をして、繰返して自分が教へたといつてはいけないといつて教へてくれた。

――ポン引といふのはお客を釣ることで、七兵衞さんは、門に立つて夕方になると宿り客をひくのだ。手前、何々屋でございます、いかゞさまです、お安くお宿めします、お座敷は至極奇麗ですと――

ってる。嘘だらうと思つて渡つてみると古川氏まつさほな顔をして汗をふいてゐる。どうしたつてほんとと思へないのに御本人は本氣でまじめでまつさほである。そこであたしはすつかり喜んでしまつた、之は[illegible]打が出來るぞつて。何故ならば古川氏は常に私の體が大きいのでムサシノ館に行つても、自動車にのつても、いやしくも何かに腰かけるときつと大家さんと二人で椅子が椅子がと心配する。年頃の娘さんが氣取つて活動をみてるのに、「小池さん椅子は大丈夫ですか？」すまして汽車を降りれば「今日の汽車は左にまがつてレールが一寸ほど喰込んだ。」これだから時こそ來たれといぢめる決心をしたのである。

　御嶽行は足はいたくないんだけど靴がいたいので止めて、つりばしをわたつて、河鹿園でやすんでごはんをたべることにきまる。そこでつり橋のまんなかにきて、古川さんの足が橋にかゝつたときにゆすぶりだした。

　あたしと熱田さんと素川さんと三人でエッサエッサとゆする、渡りかけて足をふみ出して少し來た古川氏、まつさほになつてそれ以上進まない、社長さん心配して、およしつたら、こらいたづらものたち、およし、およしみんなところがなかなかやめない、古川氏はふら〳〵になつて元來た方へ歸つてしまつた、それでかたきうちはやめにして、向側に渡つて待つてゐると、まつすぐに棒をたてた樣につつぱつて、上をながめたまゝ渡つて來る。まことに珍らしい病もあるものと今更感心し、いぢめたのがちよつと可哀相な樣な氣

七兵衛さんに急用が出來て使ひがよびにゆくとき、あたしはコッソリ連れてつてもらつた。門に立つてお辭儀してゐる七兵衛さんを豫想したが、おそろしく不機嫌な御亭主面をした七兵衛さんが、薄つ暗い家の中から出て來た。大きな顔が用向きをきいて笑つた。黄色い粗い長い齒が目に殘つた。

七兵衛さんはそれだけだが、大同小異の書生連の中に（通ひの三百代言上り）壯士――其實遊人上りが一人、その子が一人、旗本のおちぶれ兄弟が三人。仕立屋さんが一人。

壯士荻野六郎は達磨のやうに赤黑く、毛虫眉で、いがくり頭で、デップリと肥つて、見てくれの强さうな、胸をふくらましてヨレ〳〵の袴を穿いてゐた。あんまり字は讀めないのだが、腕組みをしてだまつてゐると兎も角强さうだつた。强い方の役目をするのかと思ふと、さうでなくつて、一番奥のものに摺り込んでゐた。競賣に立會つて、せりおとしてきた細かい裝身具を賣り込まうとしたりして、

「嫌だなあ、そんな、娘子供のものはとるな。」

と父からよく言はれてゐた。ばかに强くなる時があつて、對手は百人でも怖れない、先生を守るのだと力んでゐたが、あたしの從兄の肺病の藥を自分の家へとりにゆくと、あたしを連れていつたが、自分のうちの門口へくると、

「おつかさんや〳〵」

と猫のやうに優しくよんだ。どんな年寄りが出てくるのかと思つたら、色の淺黑い、顔の長い、ひつつめのいてふがへしに結つた、額に靑筋の出てゐる、お齒黑をつけた、細二子の袷に黑い帶をひつかけ（おかみさん結び）にした女が出て來て

「なんだ今時歸つて來て――」

もする。河鹿閣について座敷に坐つてもまだ冷汗をふいて、青い顔をしてゐるのだから、まことにはやはやである。

みんなくたびれてごろ〳〵と芋の子の様にねころぶ。運動と空腹のあとのごはんのおいしさ。

舟で二俣尾まで下らうとしたが舟がとうしても出ないので中止して、自動車の來る處まで歩く事にする。河原づたひに大きな岩や石のある險阻な道をゆくので、社長さんすつかりまいつて、熱田さんと素川さんにたすけられてゆく。大家さんはトップをきつてすましてどん〳〵先にゆく。古川氏は殿りをつとめて、西村夫人と共に何かと植物の採集をしてゐる。小池みどり一人ではしやいで岩の上にのつたり、とんだりしてゐる。やつとの思ひで自動車にのり、夕暮の路を落日を背にして立川まで又ドライブする、行きと違ふ路をとつて河のふちをずつと下る。何とも云へないよい氣持で、あゝと一つため息をはく。夕暮の風がピユンピユン耳をかすめる。まつくらになつた街でお茶をのむ。歸りの汽車はあゆ漁一日のピクニックの人達で大變だ、へとへとになつて立つてゐる、行きに見たのと同じ顔振を又み出すのも面白い。みんな日にやけた顔をしてゐる。解散八時半。(みどり)

太つちよのお姫様

——菊五郎の樂屋訪問——

生れたての赤坊のやうに好奇心の强い社の

と突然どなつてつゞけた。

「なまけものめ！」

「そ、そんな事はない。」

荻野六郎はドンモリになつていつた。

「藥が來てゐるだらう。」

女は返事なんぞしないで、困りきつてゐたあたしには猫撫で聲で、

「まあ孃ちやん御一緒だつたのですか？ 爺におんぶしてらつしやればいいのにさ。なにかまうものですか。お藥とりにいらしつたんだつて？ まあ、まあ！」

そしてまた六郎にはどなつて睨めかへした。

「わかつてるよ、藥なんぞ、今時分ノソノソ取りに來たりして！」

彼女はニヤ〳〵と笑つて、キユツ〳〵と長刀ほうづきを嚙みならしながら、

「孃ちやん、ようく覺えてらしつて、祖母樣に申上げてください、あたしが晩にもつてあがらうと思つてをりましたつて――ひよつとこが餘計なことを言つちまうから……」

それでも縁側まで藥をもつて來て渡してくれた。

「嚴夫、嚴夫。」

面胞が一ぱいな、細長い黑い顔、彼等の一人息子で、父六郎と同職業のいささか新智識であるところの少年と青年の合の子が、母親讓りの細い小さな眼をもつて、赤いシヤツを着て出て來た。

「孃ちやんのお供をして、お前、おふくろさんに藥を一度お見せもふして、それからすぐに御病人のところへもつてつておあげ。」

閑却されて、使者の役目まで忰に奪はれた壯士は、憮然として忰に命令した。

連中、一日社長さんのお尻について、歌舞伎座の樂屋を覗く。濃い化粧ときらびやかな衣裳、もつてまわつた人情ぶり、かぶきの舞臺がお伽噺なら、傳統と因習の壁に囲められた樂屋は過去の夢の國だ。と實はそう思ふくらひ今の私たちの生活とは遠いものだ。私たちが、餘り夢の國に興味を持つて嬉しがるので、社長さんがおかし相な顏をする。斷髮と歌舞伎劇の樂屋、まあ少しはおかしいかも知れないが、みんなは、見學團のやうに眞面目な顏をして奈落を行く。頭の上の花道がこんなにあつたか知ら、と思ふ程ながい道だ。重い衣裳をつけてこゝを行き來するのは中々大變なものだと思ふ。人氣のないうつろな不思議な靜寂がこもつてゐる。

左に曲り右に曲つて、階段を上ると突當りが菊五郎の部屋左手が羽左衛門、右手は宿屋の二階のやうに長い廊下があつて、兩側に幾つかの部屋が並んでゐる。一眼にパッと來る華やかな色彩もない。コンクリート建てに、襖障子をつけたところ、どうやら同潤會のアパートへ行つたくらゐの感じで、どうして夢にはまだ遠い。みんなが靴を脱いでゐる間に、社長さんはさつさと菊五郎の部屋へ入つてしまつた。餘り明るくない次の間には、白足袋をはいていやにしんなりした若い男が二三人ひかえていさゝか場違ひの闖入者を呆れ顏にじろ〳〵見る。

「みんな早く入らないから脊物を着てしまつた」と社長さんはいたづらつ子の眼つきで、如何にも殘念さうだ。あの舞臺の上でのいゝ

「いちどきでは、せいが強すぎるといふんだぞ。」

「よけいなことをお言ひなさるな。」

彼女はグッと睨めた。あたしが歸る時はもう、彼女は物干棹で庇の上の猫どもを追ひはらつてゐた。

巖夫は道々、半紙を四つ切りにしたのに包んだ、一服の藥について、いかにそれが靈藥であるかを話してきかせてくれた。多分の誇りをもつて、さうした靈藥を手に入れる苦心を繰返していつた。

「我々が忠義なんだね。」

彼は子細らしく額にたらした、油でピカピカ光つた毛を振りあげた。

「どうして手に入れたかとなると話が大變だが、我々は若先生にしやうと思ふ、大學に學んだ人を、あのまま殺すに忍びないからね。もう半年で卒業つていふんぢやないか。」

それから言つた。女の子なんか、鰻ならメソッコみたいなもので話にならぬと——それからまた藥を祕めていつた。

肺病には死人の水——火葬した人の、骨壺の底にたまつた水を飲ませるといいんだが——それもまた直にくる事になつてゐる。これは腦みその燒いたのだよ。」

あたしが眞青にでもなつたのであらう、彼は近々と顏をよせて、小さな眼を凄めに細めて、怪談じみてゐた。

「僕の母は——お寺の隱坊と知つてゐるのだ。」

巖夫は十六位ででもあつたのだらう。兩親がうまく取入つてゐるので、玄關の書生は絶對におかない家なのに、何時の間にかゐるやうになつた。神田あたりの法律學校へ通ふの

男振りや、太つちよの綺麗なお姫様が、黒い毛脛を出してゐるところを見たら、みんなうんざりするだらうと面白がつてゐたのに——といふ顔付きだ。

　赤い衿のついた樂屋襦袢を着て、鏡の前で眉をつぶしてゐた六代目の、手傳人が去ると額丈振り向けて、

「いらつしやい」と得意の眼をぎゆつと上げて挨拶しながら一渡りじろりと見る。

　床の間にお燈明が上つてゐるだけで、格別裝飾らしいものもない部屋だ。

「何故時計を二つおくか知つてる？」社長さんだ。成程、鏡臺の側の臺の上に、紅皿と一緒に小さい時計が二つ並んでゐる。いかに兄弟に時の宣傳家を持つてゐるとはいへ……。

「このごろあ幕開きでもなんでも時間決めでせう。時計が一つぢや危いんだ。二つあれば一つが違つてても判かるからね」その場合違つた方と違はない方と、どつちを信用するんだらう等と、聞いてゐて私は心配する。

「今ぢや舞臺が全然見えないからね。昔は座頭の部屋からは舞臺が覗けるやうに樂屋が出來てゐたんだが　コンクリートになつてから火事の要心に、舞臺と樂屋をすつかり別物にしちやつたのね」社長さんの說明。

　白粉を一杯含ませた大刷毛で、黑い顏へぺつたりやる度に見てゐる方がぎよつとするくらゐ濃化粧だ。ふいにこつちを向いた菊五郎

「おや、みんな同じしやつぽぢやないか……
…」それでまたせつせと首を塗り初める。

「女人藝術社のお揃ひの帽子なのよ……私だ

に、例の赤いシャツ、夏は白シャツ一枚で小倉の袴を穿くので、横つちよから黒い肉が覗きだすので子供たちが笑ふと、小さな眼をとんがらして怒つた。なまけ學生だつたに違ひないのは、本箱に入れてあるものは、三亭圓朝作の人情咄だつた。時折女中たちに目つかつて喧嘩の時に言ひだされてしよげてゐたが、子供たちに威張るときは、圓朝の凄味で眼をしかめたり、聲を低くしたりした。

　旗本加頭一家、三人兄弟は、一番上の義輝が凄かつた。それこそ、巖夫が圓朝の怪談ばなしでやるより眞の凄味だつた。ある日、あたしはお稽古がおくれて、日が暮てから歸つてきた。そのころ、まだ燈火の種類がさまざまだつたので、花瓦斯が店の屋根にチカチカ燃てゐるかと思ふと家の中は行燈であつたりする。あたしの家も洋燈の室もあれば行燈もあるし、時によると西洋蠟燭をたてた硝子のホヤのある燭臺も出てゐたりした。

「ただいま。」

といつて奧の間へ行くと、行燈の横に座つて、うつむいて御飯を食べてゐるものがあつた。あたしは何の氣もなく藏前にいつて、階段に足をかけながら振りむくと——正のもののお化かと思つた。

　キヤツともスツとも聲が出ないで、びつくらして見詰めてゐると、ニヤとしたやうに赤い唇を歪めて、上の方についてる片つぽの眉をピクリと動かした。

——その鼻は、お茶腕の中を突つくほど高く、のめつてゐた。長い長い瘦せた青い顔、額に深い大き痕あとがあつて、其ために片つぽの眼がつりあがり眼玉が飛出してゐる。髮の毛が額にぶるさがつて、細つこい肩——證なんぞは消てしまつて顔ばかりしかないやうに見えた。大きな飯櫃の蓋を幾度もあけて、山のやうに飯を盛ると、すぐにまたよそつてゐる。やつとそれがすんでしまうとお膳を押出して、だまつて、吃驚してゐるあたし

つて洋服の時はかぶるのよ」
　と社長さんが云ふと
「そいつはやめた方がいい。おかしかないかなあ！」口を歪めて感歎したやうな駄々つ子のやうな顔が鏡にうつる。名優菊五郎は自分がゴルフをやつたり、洋服を着たりすることを忘れたのぢやないか知ら！。
「先月こゝで一圓均一をやつたでせう。あゝいふのこれからも時々やる氣がある？」
「いやだ！。一圓なら一圓で、初めから安いんならそれでいゝんだ。僕あやるなら無代だな。そして自分の好きなやうに踊る。」
「今夜の島千鳥なんか演つて、自分に面白い？」
「面白くねえ、明治の初めのもんなら、何もかもその時分で演りやいゝんだ。それをチヨボで……情を知らぬ强盗も……とくるんだからね。いやになつちまふ。」
「那須野の今井さんのお琴はどう？　少し華やかすぎやしない。うかれ坊主の方がいゝ氣持でせう」
「何しろ興行主と俳優とは全然考へが別なんだ。」躊躇のないてきぱきした言葉で小氣味よく答へる。併し折角の夢の國にも、資本主義萬能の不平を聞く。
　衿首の後が思ひ切つて大きく三角に塗り殘されて、今度は眉だ。
「何しろあつしやこの頃お役所みたいなんだ。內閣官邸から何だかだつちや呼び出される朝八時半から電話がヂリ〳〵だからね」
　みんなが笑ひ出しても御當人はちつともお

の顔をギロリと見た。
　それが鎗一筋の主だといふ加頭義輝だつた。眼の强い、おなじやうに長い顔だが色の黒い輝夫といふ人が、紬の黑紋附きを着て來てゐたが、大變理屈ずきで、ぢきに格式を言出してゐた。あたしが脅へきつてゐると、怖くはない、加頭の兄さんで、おとなしい人だと家の者がいつた。あたしは、武士だつた人たちだから刀疵であらうと思つて凄いけれど敬意をもつてゐたら、あの人はあんまり遊んでばかりゐたのであんな顔になつたのだと言つたものがあつた。
「いや、怖い筈です。」
　と親味の弟でさへ言つた。
「私たちでさへ、見なれてゐてもギヨッとする時がありますからな、好い氣持に寢てゐてふッと目を覺すと、知つてゐながらよくはありません。一ぱい機嫌で歸つた時なんか、お世辭なんぞいつてくれない方がいいと思ひますよ。」
「行燈のそばに、立ひざをして、横むきだつたら、菊五郎の庵室の清玄だね。」
　と父でさへいつた。
　末の弟は特長のない、それだけ普通の人だつた。この一家は中の弟が家長になつて、兄貴の方が居候だつた。女たちは封筒を張つたり、種々の內職をしてゐたが、時々男たちは殿樣氣分を出して威張つた。三番目のあたしの妹を可愛がつて、自分の家へ連れていつてしまうこともあつた。あたしたちは幼いお丸ちやんによくかういつて聞いた。
「あの顔こわくない？」
　名の通り圓滿なおまるちやんは首を振つて笑つてゐた。

かしくもなさ相だ。
「ぢやこのごろ反動になつたのね」と社長さん
「反動て？」と半分は口の中で目をぐるり。
「忠君愛國になつたのねといふ事」
「それで何だか知らねえが、わつちに勳賞をくれるといふんだ」菊五郎どうやら反動といふ言葉を知らないらしい。
「何の勳賞なの、グロスター公の時に踊つたから？」
「何だか知らねえ、今までに社會事業に寄附した金がつもりつもつて十六萬圓ばかりになつてゐるんださうだ。えらいもんだね。そんな事やなんかだらうが、わつちやちつとも嬉しくねえんだ。これが藝術賞なら有がたいがそんな××は貰つたつてつまんない」
其時舞臺裏でヂリ〳〵と開幕のベルが鳴る
「おや、ありやベルぢやないか。おい〳〵どうしたんだ、早く〳〵」と次の間へ大忙しに聲を掛けて立ち上る。
「仕度が出來ねえのに仕様がないぢやないか」
するりと浴衣を脱ぐと一人が眞赤なお姫様の下着を着せかける。ほんとに眞黒い毛脛だ
見るまに一人が着物を着せ、一人が帶を持ち、一人が鬘を運んで來た。びら〳〵の一杯ついた鬘だ。すつぽりかぶると、どうも大きな時姫が出來た。
「もうあれで手と足に白粉をつければいゝのよ」と社長さんが云ふと、
「手だけで足はつけないんだ。出さないから手もこれつきり。」

アンポンタンと妹のおまつちやんは上野のお花見に、父に連れてつて貰つた時――もう夕方だつた。多くの人が浮かれながら歸つてゆくあとを、父は子供の方は忘れたやうに櫻を見ながらブラ〳〵歩いてゐた。二人は手をつないで後からついていつたが、そろ〳〵暗くなりかけた時、賑やかな一團が、間は離れてゐたが摺れちがつた。鉢巻をした男の頭に肩車をして縋つてゐる小さな女の子がゐる。よく見るとおまるちやんだつた。赤いはだぬぎで、おんなじやうに鉢巻きをしてゐた。それをとりまく男女の一群は、みんな片はだぬきで、赤や鬱金の木綿の鉢巻きをしてはしやいてゐた。

「あゝおまるちやんだ。」

彼女の小さい姉たちは聲をかけた。

「おまるちやん　―」

彼女は男の頭の上から答へた。

「龜の年だあい。」

そして、キヤツ〳〵と悦んで男の頭を叩いた。叩かれてゐるのは理屈やの輝夫だつた。

「さうだ、さうだ。」

と男女は陽氣に合づちをうつて行きすぎてしまつた。

父はちよいと振りかへつて笑ひかけたが、聲はかけなかつた。あたしたちは、振りかへり〳〵して、おまるちやんが自分たちの方へこやうとしなかつたのをさびしがつた。ひよいと方向が違つてしまつたと見えて、大木の根をグルリと廻つて見ても、そこに父の姿は見出せなかつた。

迷兒になつてしまつたのだつた。二人はベソをかくのを隱しつこをしてウロ〳〵したが上野の山は櫻が白くこぼれて、山下の燈があかるいほど猶さびしかつた。鐘つき堂の鐘が

男が腕先三分ばかりに刷毛で白粉をぺつとりなすりつける。
「たしなみがいゝんでね」と菊五郎は笑ふ。時姫と菊五郎とがごつちやまぜになつた氣味の悪い笑ひだ。
「そつちでいやあ世話がない」
腕つきり、膝つ切りの連中を引卒した社長さんは、早速應しゆうする。
俄かにキンキラの甲冑に身をかためた毫のない三浦之助の羽左衛門が入つて來た。
「合羽が……」といひ乍ら洋服の連中を見まわして「いらつしやい」と目尻りに艶をふくませて挨拶する。照明が青いんでどうとかかうとか云つてゐる三浦之助の甲冑が、五月人形のやうに美しい。
「羽左衛門て人はあゝいふ茶氣があるの、自分の方からみんなを見に來たのよ。」と後で社長さんの笑ひ話。
「道をふさぐから先へ出てゐませう」
とみんなが靴をはいてゐると お引づりの褄をぐいととつて出て來た時姫、階段の上で裾をくるりとまくり上げてタタヽヽ、駈け出す。その早い事、みんなおや／＼。やがて舞臺でチョン／＼／＼と木が鳴つてゐる。
私たちは舞臺裏の時姫がしやなり／＼歩いてゐるのまで見屆けて座席へ行くと、菊五郎と時姫が、完全に時姫になつてしまふまでには菊五郎の至藝をもつてしても相當時間がかゝつた。
――樂屋なんか見なけりやよかつた！――
とは異句同音の歎。(素子)

鳴つた――
ふと、青石横町の、母方の祖母の家で、寝ざめや、寝ぎはにきいた、三ツは捨て鐘で、四つめから數へるのだときいたことから祖母の家を思ひだした。おばあさんの家へいつてゐたら、父がたづねて來てくれるかも知れないと氣がついた。青石横町にゐると、五月雨の雨上りの日など、抄ひ網をもつて、三枚橋の下へ小蝦や金魚をすくひに來たから、石段をおりれば道は知つてゐた。おさないはらからは、手をつないで、ぼんやりと、暗くなつてからやつと辿りついた。
おまるちやんが「龜の年」といつたのは、よく諸方で可愛がられる子で、近所の――そばや利久の前の家――酒屋で、孫娘のやうに大事にしてよく借に來た。お酒がすきで、龜の年といふ甘いお酒（瀬戸物の大きな瓶のかたちの器にはひつてゐた）をのませたのでその名をよく覺えてしまつて、ある時、お前は卯の年、お前は巳の年と年寄りが言つてゐたらば、
「あたしは龜の年。」
といつて、それから自分の名にしてしまつてゐたのだつた。
この加頭一家は、十一月の酉の町には吉原土手へ店を出した。熊手の簪を賣つたこともあつたが、篠に通したお芋を賣つた。がりがりの赤目芋だつた。それを一家中が前の日の夕方から擔ぎだして、戸板まで運びこんでゆくのだつた。新智識の代言人の書生さん一家が、黒紋附きで、或はカンゼよりの羽織の紐で、或は古新聞で疊んだ十二煙草入れをもつて、酉の町の際物師となる。へらつしやい／＼と景氣よく呼ぶのださうだが、あたしにはどうしても勢ひのいい景色が思ひうかばなかつた。

小サロン

婦人毎日新聞社が主催でつひ先日、野田醤油の工場へ六十人ほどの知名婦人が見學にいつた。その翌日林芙美子さんは編輯室へ飛びこんで一きのふは面白かつたの、お土産だつて會社からお醤油とお味噌の饅頭頂戴よ」と。

七月初めある日の午後、野田醤油東京出張所の應接室に、支配人兩島氏は沈痛な表情で、「どうも近頃の婦人は、殊にあなたの社の方は勇敢でゐらつしやるですなあ」といはれる。ほめられたのか、けなされてゐるのか、こちらは少々むづがゆい。きけば——

「見學に行つて下さつた婦人方が、婦人毎日新聞へお書きになつた記事といつたら、それは全くどうも——この美味しい御馳走も、職工の涙が籠つてゐると思ふと悲痛な氣がして喉へ通らない。とか、庭の噴水が犬の小便のやうに一とか、設備の點はいゝが、その爲めに時間の短縮で賃銀を下げるのは會社の巧妙なごま化しだ、とか、それは實に誹謗のための誹謗としか思はれません」。

「それはどうも、うちの社の人にそんな勇敢な方はないと思ひますが……」

「一にも二にもプロレタリアを叫ばないと流行におくれる、その若いお氣持に理解は持てますが、然し會社としてはあまり愉快ではありませんでしたね」

「御馳走はたくさんなさいましたの？」

「はあ、どうもその、御馳走があまり多すぎたんぢやないかと、私には思はれるのですが、」

◇

雨の大川の對岸に灯がうるむ、林芙美子女史の眼がうるむ　亭六さんの御出席ないのを

後にアンポンタンが十六の時祖母が死んだが、その時、この兄弟がたてた葬式のプランがなんにも知らない町娘のあたしをさへふきださせた。

彼等はいつた。昔の士分の格式にして、この家の生活はいくらか！

甲論、乙駁、なか〳〵にまとまらない。長い長い巻紙へ書き出してきたのを見ると、あたしが馬車へ乘つて白無垢を着る——

まだ、そこまでは、まづ好いとして、おさげ髮、額に黛！

ばか〳〵しくなつて腹が立つた。江戸つ子のおやつちやんは浴衣がすきだ——ともいへなかつたが——

さういつたも無理がないと思つたのは、仕立屋で博識で、やはり三百の組の井坂さんが話したことだが、この加頭一家の輝夫が死んだ時——もう家の書生はしてゐなかつた——陋巷に死したのだが、例の格式で、借りものの白むくの三枚重ねを女たちはみんな着たが肝心のやかましやがさきへ死んだので、細君——昔の旗本何千石かの奥方は、結びがみのまゝ、しかも下駄を買ふのをわすれて、古びた日和下駄をはひていつたと——

井坂さんは類まれな世話やきの親切ものだつた。向ふ新道の、例の角のおいもやさんの後の、大丸のおあぐさんの家の塀の前に住んで小僧さんと職人の三四人がゐた。暮になると人を増してゐた。いつも綿を入れたり、火熨斗をかけてゐる女房さんは、平面ではあつたが目に立つ顔で、多い毛を、太い輪のおばこに結つてゐた。岩井松之助といふ、その頃の女形の役者に似てゐる氣がした。親方井坂さんは腕の好い仕立職人だが、どうもぢつとして仕事がしてゐられないと見え、町内のことから、何からかから、成田山の講元でもあれば裁判所のことにも興味をもつてゐた。だから、ある時は、修驗者のかける大きなつぶ

みんなが惜がる。君はいま駒形あたり時鳥なんて、郊外の雨の夜にクチズサンでお出でせうと言ふ人がある。だから折角の七夕も、星合の空が降りだしましたといふものもある。賑やかにさんざめく。景氣をつけてくれて、川を流してゆく屋根船から鳴りものがはひる。まあ昔の通りだと悦んで手を叩いて招くと、なんのこと、カルケットと灯入りで船の屋根に大きな廣告文字が出る。誠に近代化された風景だ。御廐橋の向ふに高い塔が見える。震災記念塔である。

頁の都合でたい子さんの話が（出版紀念會の方に）削られてゐるが、それは放浪記の裏をすつぱぬいてゐて皆をよろこばせた。

―私の一枚しかない着物を恣て芙美子さんが原稿料をとりにゆくのです。其時分二人に一枚しか着物がなかつたので――羽織を直したきものです。それを着てゆくのを二階から見て、あたしの着物もずい分いい着物だなアと思つた。――最初芙美子さんを訪ねた時、髪の毛を肩まで下げて二階から下りて來るのを見て大變きれいな人だと思ひましたが、あくる日見たらそんなでもありませんでした。

―芙美子さんが女給をしてゐて桃割れに結つたのを見て、その翌日から私も一緒に女給になりました。私が御飯もなくてゐた時。お新香を奇麗に鉢に入れて、傘がけでもつてきてくれて嬉しかつた。

―私が結婚した時芙美子さんは私も誰かみつけやうといつて、男から來た澤山の手紙の中から一番長い、一番親切な人のところを訪ねて行きました。

―その翌日他の、やはり芙美子さんに手紙を送つてゐた運轉手が荷物を運んで來てくれました――等・等・・・

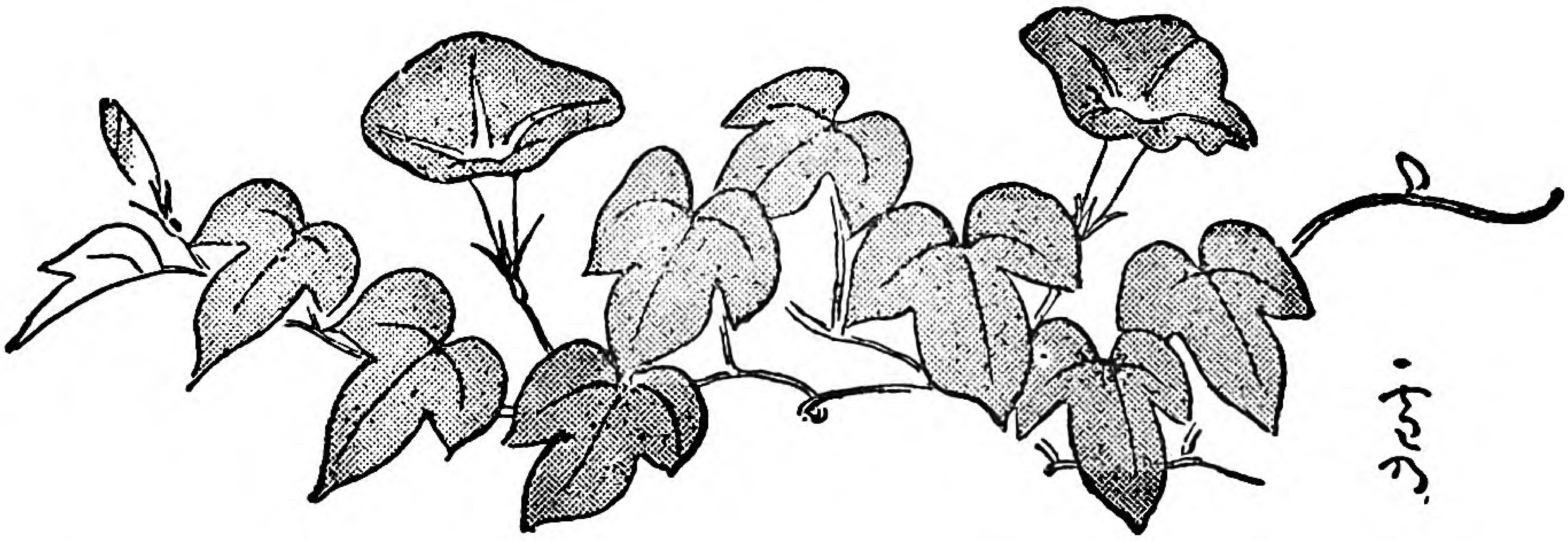
の珠數を首からかけて、みけんへ深い立皺をよせて、眞言秘密、九字の咒文をきつてゐることもある。あたしの父が、惡太郎の自分からの知りあいだ。

仕立やの店は、その實女房さんのお稽古所だつたのだ。常盤津のおしよさんだつた文字春さんの家が仕立や井坂さんになつたのだ。惡太郎の父は、ませてゐたその頃の小若衆、井坂の濱さんが文字春さんのところへくる夜、格子の敷居に犬の糞をぬつておいた。濱さんが意氣な姿で格子をくぐつて、おしよさんの前に座ると、おや、いやな匂ひだといつたので、笑ひ出しておつかけられた――そんな不良どもが、法律の先生になつたのだから、仕立や濱さんが袴をはいて、三級選出區會議員を望んだのは尤な向上である。

彼には妙な癖があつた。「先生」とよぶと、ちよつとお耳を拜借と傍へいつて、掌をひろげて扇がはりにして何かひそ〳〵と囁く。別段の用事でなくても誰にでもさうだが、ちよいと見にはいかにも腹心の者らしく見える。曾呂利新左工門を講釋から學んだのではないだらうが、其癖は母などをいやがらせた。

そこの店にスリで有名になつた仕立屋銀次が居た。そのころ、親方濱さんも大たぶさ、銀次も大たぶさだつたかと、うろおぼえではあるが覺えてゐる。銀次といふ職人は青い顔の、眼の横に長い、刀のやうな目附きの人だつたと思ふ。祖母が言つたことがある、あの職人は、鼠小僧によく似てゐると――鼠小僧は神田和泉町にすんでゐたが――區はちがつても和泉町は近かつた――祖母けよく見て知つてゐたといつた。引廻しの時も、前のうまやから馬が出て大通りを通つたが、結城の着物をきて薄化粧をしてゐたといつた（つゞく

――挿繪　故父渓石翁筆　實驗畫錄より――



太陽の情熱(パッション)

小野春子

百姓するのだもの片輪でさへなければいゝとして蚕子の世話を賴んでゐる母親
太陽の情熱(パッション)で血のやうな初夏の花を吹き出したこのすばらしい地上
そつと脱け出てゆきたいものだこんな大きなねんねには住み心地のわるいゆりかご
もうながいことわらつたことのない顔だ無表情な顔だ鏡をにらめてる顔だ
とやかくと不足をいはれる屈辱を忍むでまでもひと妻にならねばいけないのか？
世の中のあらゆる寳を積んでみても消せないだらうあたしのかなしみ
星がみんな化石する世も來るだらう戀だの名だのといへる幸福
死ぬことゝ生きてることに大差ない――土に埋つてるあたしのくらしは
たつた一人生きてく事さへ難かしい所お互ひによりかゝりあつて生きてる所

道化役者の入獄

大竹せい子

ロシヤ人は話好きだ。コップ一杯のお茶を前にして彼等は何時間でも、手ぶり身ぶり入りで話し込む、何であんなに話の種があるのかと思ふほど、一と口噺や落とし噺などは手に入つたもの、流行役者の眞似などは誰でもが上手なのでみんな舞臺に立てそうだ。一種の專制政治のソヴエット國のことだから、出版物では勿論のこと、大きな聲では反政府的言辭も弄されないが、諷刺的な唄や一と口噺は口から口へと膾炙され、いつの間にやら誰でも知るといふ有樣である。

身ぶり入りの洒落や流行歌の深刻なのは、寄席（ミニヤチユール）が本場である、こゝでは勿論反政府的の言辭はもつてのほかであるが、ぽつ〳〵ないこともない。

これはもう數年前のことであるが、かけあひ噺で鳴らしたビムとボムとは、身振り諧謔であまりに政府を彈劾したのでとうとう捕縛されてしまつた、が、雨後の筍の如くビム・ボムはいくたりでも出て來る。

この道化役者の思ひ切つた扮裝ときたら、いくらふき出しても足りないくらゐだ、うどん粉の樣なまだら白粉と、猿の樣な頰べに、ガリ〳〵の頭髮、だらしの無いだぶ〳〵のヅボン、おまけに怒つた時には手で秘密に糸をひつぱつて頭髮を突立てるしかけ、その時の顏の表情等は、まさに見ものである。

ビム『おーボム出て來いよ』
ボム『何だ！　何だ！』出て來る。
ビム『レニンとトロツキーとおれと、どちらが偉いだらうな』
ボム『きまつてゐるぢやないか？』
ビム『どうきまつてる？』
ボム　堪らなくふきだす……。
ビム　頭髮を突立てゝ怒る。
ボム『レニンとトロツキーは勞農政權建設者だつてことは、世界中誰だつて知らない者はない……だがお前は……』
ビム『だが待つてくれ、レニンやトロツキーは、永い間かゝつて、命がけで勞農政權を建設したが、この切れ樣はたつた今、このお客樣方の目の前で勞農政權を建設してお目にかける。』
ボム『そいつあ剛氣だ、だがほんとうのことかへ？』
ビム『ほんとうとも、何なら賭けてもいゝよ』
ボム『賭けよう、ぜひとも賭けよう』

そこで二人幾ルーブルかを賭ける、

ビム『うまい〳〵この金はみんなおれのものだ…誰よりもお客様方が證人だ、さてぼつ〳〵、勞農政權の建設にとりかゝるとしよう。おーいワーシカ出て來よ』

聲に應じて文字通りぼろ〳〵服の勞働者が、ハンマーを手にして痩せほゝけた體を、ひよろ〳〵と運んで來る。

ビム『皆樣も御覽の通り正直正銘の勞働者にござい…おーいステパン出て來ねえ…』

今度は、髯から顏が微かに見えるような百姓爺が、汚いルバシカを着て鎌を持つて出て來る。

ビム『即ちこれが農民とござい…勞と農とにござりまする』

ボム『フン…それから政權はどこだ？』

ビム『おーイスライル出て來いよ』

誇張的に鼻を大きくとんがらした男が、猶太人特有のちよこ〳〵した身ぶり面白く登場する。

ビム『これ政權にござります』

ビムはわし掴みに賭金をさらふ、見物席では湧く樣な拍手がおこる。

このことから、少數民族侮辱の廉でビムとボムとは監獄へつれて行かれた。

時は流れて皮肉にも、トロツキーは失脚し配所の月を眺める身の上となり、カアメネフ、ジノヴエフなどといふ幹部猶太人が相ついで失脚してしまつた。ビム・ボムの感慨やいかに？

だが、ビム・ボムよ、勞農政權は一朝にして倒れはしなかつた、革命十週年の記念祭も友邦諸國のお客樣を招いて大々的に執行された、聞く所によれば國内の情勢も段々と好い人間生活に向つて進みつゝあるといふ今日、ビム・ボムよ、さしあたり、お前さん達も新しいかけあひ噺を創り出さなければなるまい。



略歴

太田洋子

廣島に生れ、私立の高等女學校を、十一年に出ました。それから明くる年、高師を受けたのですが、は入れませんでしたので其の年いつぱい、江田島の小學校へ勤めました。

六月號へ載せて頂いた『聖母のゐる黄昏』は、此の島の風景の思ひ出へ、幻想を掛たものなのでございます。

その頃、廣島中國新聞や、藝備日日新聞の文藝欄へ、歌や、詩や、小説を書きました。

十五年春から、暫くの間、文藝春秋社で、菊池先生の御厄介になりましたが、病氣して歸郷いたしました。

それから現在までは、心にもなき放浪の生活を續けております。どんな生活をしてゐる時でも、私には此の生活が目的ではなく、絶えず、心に燃えて動かないものは、藝術に對する、夢と、憧憬だけでございます。

アップルパイの午後

尾崎翠

懶い日曜

兄
妹
友達

兄、机で讀んでゐる。
妹、向ひ合つた机で書いてゐる。

兄 (讀んでゐた雜誌を投出し、手を伸ばしていきなり妹の頭を打つ)
妹 何。
兄 莫迦。
妹 譯をおつしやいよ。
兄 恥さらし。
妹 譯をおつしやいてば。
兄 (雜誌を卷いて机を叩く) 何だ、これは。
妹 知らないわ。兄さんが何を讀まうとお勝手だわ。兄さんの讀書で私の打たれる理由が何處にあるのよ。譯をおつしやい、譯を。
兄 打つ理由があるから打つんだ。(雜誌を投げる) 見ろこれを。醜態のありつたけをさらして。
妹 何なのよ、これが。私の校友會雜誌ぢやないの。(語調を變へて) ああ、雪子さんの名文があつたでせう。おめでたう。
兄 名文どころかい、この際に。
妹 さうお。(雜誌を机の抽斗にしまひながら) すばらしい月夜の溜息ね。
兄 何が月夜の溜息なんだい。
妹 ほんとに讀まないの。夜露に濡れた足があつて——四本よ——、足のぐるりにこほろぎの彿曳があつて、こほろぎの上に二つが一つに續いてしまつた肩が落ちてて——月光の妖術で上品な引きのばしよ——、遠景の丘に文化村のだんだんになつた灯があつて、その一ばん高いのは月光の抱擁に溶けこんでゐて、低いのは夜露に接吻してゐるの。それで、四本の足は月夜の溜息なのよ。
兄 (てれて) 莫迦。もうすこし人なみな物言ひを稽古し

ろ、代名詞使ひめ。お前の言葉と來たら年中謎謎なんだ。

妹　私雪子さんの文章をおさらひしただけよ。解らなきや謎謎を解くわ。妹に對しては唐辛子のはいつたソオダ水のやうな男が歩いてるのよ。夜。お揃ひで。この男はお揃ひだと——月光があればなほのこと、お砂糖のすぎたチヨコレエトになつてしまふの。そして熟れすぎた杏子畑の匂ひの溜息を吐くの。何もわざわざ說明しなくたつて解りきつたことだわ。

兄　莫迦だな。見せろ、もう一度。

妹　（抽斗を抑へながら）もう一度讀んでもう一度ひとの頭を打たうといふのね。見せますか。

兄　見せろつたら。打たないから。

妹　譯をおつしやいよ、さつきの。

兄　（抽斗から雜誌を取つて貪り讀む）

妹　（雜誌を奪ふ）何處までチヨコレエトなのよ。ひとを打つた理由も言はないで月夜の溜息を讀むなんて。譯をおつしやいてば。私今後は拳骨一つだつて理由を糺さずには留かないことよ。お人好くしてればきりがないわ。今までだつて理由なくいくつ打つたと思つてるのよ。ちやんと日記につけてあるから、私、何時かは總決算をするつもりよ。

兄　（雜誌を奪ふ）見ろこれを。（讀む）

「私は不幸にも唐辛子のはいつたソオダ水のやうな兄を持つてゐます。そしてこの四月からソオダ水と一緒に暮らさなければならなくなりました。この意味では私がこの學校に入學したことは大きい不幸です。兄の癇癪は手近に一つの頭を必要とします。そしてその頭を打つか、髷をつかんでおさげにするか二つの方法によつて鎭まることが出來ます。私ははじめヘヤネツトを使ひました。けれどネツトはおさげの防禦としてはさう役立ちませんし、遲くも三日目には新らしいのと取換えなければなりません。私の參考書はネツトに侵されてしまひました。それで私は髮を切りました。私の机に實驗心理學や邦譯つきナシヨナルや言語學概論が積まれたのは、私の髷が失くなつた後のことです。私の斷髮は事情の切迫からで、はやりからではありません。」莫迦。何だつて堂堂と「變態趣味からです」と書かないんだ。

妹　變態趣味。何なのよ、それは。

兄　自分の趣味を考へてみろ。趣味だけならまだしも、お前のことときたら何もかもに變態といふ字を冠せて丁度なんだ。變態感情。變態感覺。變態性……

妹　何が、何が變態感情なのよ。好いかげん汚ない名を並べて。何處がどんなんだか說明なさいよ。

兄　說明の代りに次を讀んでやるよ。これが何よりの說明なんだ。「私はあと一ケ月かからなければ言語學の遲れを取返すことが出來ません。言語學は鹽もお砂糖もない學問です。考へながら歩いてゐた詩人が煉瓦塀につき當つて鼻眼鏡をこわしたとしたら、彼は自身が足と同時に頭を働かしてゐたことに腹を立てるより、煉瓦塀に腹を立てる筈です」ふん。僕が作文の先生だつたら、「火星きつてのへぼ詩人だつてこんな文章は書かない筈です」と評を入れて突返してやるよ。言語學と詩人の煉瓦塀とどうつながりがつくといふんだ。

妹　私がその作文の先生の先生だつたら、

「聯想の飛躍を知らざる者に死あれ」と書くまでよ。

兄　それくらゐなことは平氣で書いてるさ。（讀む）「桑木博士の哲學概論ほか三四はまだ買へませんので、神田の古本の豫算を立ててゐます。哲學は思つたより愛嬌のある横顏をしてゐます。鹽と砂糖でかくし化粧をしてゐます。正面の胡椒粉はこなは白粉にすぎません。煉瓦塀で眼鏡をこわした詩人は、こんどは

新調の鼻眼鏡の中ですこし眼を細めました。今彼の眼鏡の前にある横顔がかくした化粧のためとはいへ案外美人だつたからでせう。しかし私は相變らず惨めです。何時揃ふか解らない私の古本參考書は、日光消毒に日曜を四つつぶさなければならないペエヂ數を持つてゐます。そして、そして、斷髪は私の打たれる防禦までは兼ねてくれません。私の兄は當のなくなつた頭をも打たずにはゐられない癇癪もち……」見ろ、恥さらし。僕の名譽はどうなるんだ。

妹　野蠻人に名譽がありますか。

兄　いつたいどつちが野蠻人なんだい、雜誌に發表する作文に、私、兄、なんて言葉を使ふ奴と、それを打たずにゐられない方と。

妹　無論打つ方が野蠻人よ。それに私ほんとのことを書いたまでだわ。兄さんのふだんがふだんだからこんな作文にもなるのよ。

兄　お前が打つだけの原因を與へるから打つんだ。すこしでも妹なみな妹だつたら誰が好んで打つものか。それに何だい、白粉の名前も知らないくせに哲學の化粧法なんか書いて。

妹　知つてゐますよ。ナハチガル化粧液の匂ひだつて知つてゐますよ。

兄　だから變態感覺だと言ふんだよ。戀ぬきで詩人の修業をしてみたり、机の上で哲學の横顔をぬすみ見したり。確實なのは經驗なんだ英迦。

妹　また循環だわ。幾度繰返したら好いのよ。經驗のお説教だつてちやんと日記につけてあるから。

兄　千度でもつけろ。

妹　何のためにつけてあると思つてるのよ。こんど國へ行つたらお父さんに見せるためですよ。

兄　勝手に見せたら好いぢやないか。おかつぱと一緒に見てもらつたら好いだらう。

妹　月夜の溜息も一緒だといふことを忘れないで頂戴。（机に向つて書き始める）

兄　いつたいお前は何しに東京まで來たんだ。

妹　勉强しに來たんですよ。兄さんに打たれるためぢやありません。

兄　（ペンを奪ふ）英迦。何が勉强なんだ、兄に反抗することばかり覺えて。いつたいお前くらゐ男に似た女はないぞ。頭を切つたり、靑い靴下をはいたり。衿頸ときたらバリカンの跡で蒼くなつてゐて、その下が栗つかすのやうな肌の粗い頸なんだ。その下がにこりともしない洋服の衿だ。のどぼとけはとび出してゐるし、肩は骨でこちこちなんだ。見ろ、靑い靴下の中味を。何處に女らしい丸みがあるんだ。牛蒡の莖だつてお前の足より柔かいぢやないか。

妹　薊の花だつてお前より四倍も女らしい。――解りきつたことお止しなさい。

兄　いつたい女が三週間に一度づつ床屋に通ひだしたらおしまひだよ。

妹　ネットを破いたのは誰なのよ。ネットの數だつて日記につけてありますよ。

兄　千度でもつけろ。お前が小間物屋に行くのはネットを買ふ時ぐらゐのものさ。

妹　（兄の口調で）僕だつて一週に一度づつは行く。（自分の調子に還り）雪子さんはライラック水の空瓶を一つも捨てないでしまつて。毎週のを日附入りで。鏡臺の抽斗に這入りきらなくなつたつてこぼしてたわ。それから先週のナハチガル化粧液はライラックよりよけい月夜の溜息に近い匂ひなんですつ

て。獨逸ものだけに深刻で。こんどの號には「ウェルネル、クラウスの厚味とナハチガル液の芳香」といふ論文を書くんですつて。（別なペンで書き始める）

兄　ああ。僕はこの妹のためにどれだけ生活を亂されたら好いのだ。いよいよ手紙だ。親父に迎ひに來させるんだ。僕はこれ以上の方策を考へることが出來ない。

妹　お書きなさいとも。お父さんに來てもらへば私だつて好いわ。私だつてこれ以上打たれてゐなくたつて好いわ。お茶の出し方がまづいつてば打つし、電氣の笠にほこりが溜つたつてば打つし何處にこの年して頭を打たれる妹があるのよ。元來別々に下宿するんだつたわ。兄さんがどんなに野蠻かつてことは小さい時から十分承知してて一緒に住むなんて、私自分のお人よしが嫌になつてしまつたわ。

兄　お前をすこしでも女に近づけろつて親父に押つつけられたから僕だつてこんな不愉快な日を忍んでゐるんだ。好んで一緒にゐるかい。にも拘らず頭は勝手に切る、指のペンだこは大きくする。何處に手のつけやうがあるんだ。（ペンをつきつける）第一この萬年筆を見ろ。男の僕だつて五分間も書いてゐたら手がだるくなりさうな男持ちぢやないか。銀行屋の出來損ひめ。これがお前の好みといふものなのだ。無細工で、バスで、鹽つからくて、衿頸そつくりなんだ。だから哲學の化粧法も論じたくなるんだ。

妹　目方を量つてごらんなさいよ。細い軸に銀のすすきの穗が絡まつてゐるのと、これと、どつちが重いか。

兄　そんな女らしい持物があるんなら出してみろ。目の前で量つてやるから。

妹　ライラックの空瓶の部屋に行つてなさい。それまでこの男持ちのも貸してあげるから。いつたい何だつて今日はぐづぐづしてゐるのよ。日曜ですよ。（腕時計をみて）定刻を過ぎてゐますよ。

兄　他の知つたことかい。（腕時計を見ていらいらと部屋を歩く）

妹　早く行つて頂戴てば。勉强も何も出來やしないわ。一週一度の靜かな半日が臺なしだわ。

兄　御都合通りに行くかい。今日は改めて意見することがあるんだ。

妹　私もう我慢ならないわ。すぐお父さんに來てもらつて下宿するから。

兄　虫の好いことを言ふな。こん度こそ親父に來てもらつて國に引込ませるんだ。頭でも伸ばしてさつさと嫁に行つちまへ。元來お前は一族中の型破りなんだ。二十にもなつて嫁に行かない女が一族中の何處にゐるんだ。お花叔母さんは十六で嫁に行つて十七でお母さんになつた——

妹　（兄の口調で）貞子は十八でりつぱな細君になつた。

兄　二十三の忠太君が十九の芳子と婚約したし、何處に嫉捨山なんかうろついてゐる女があるんだ。いつたい二十にならないまでに嫁に行くのが僕達一族の女性の誇りなんだ。おかめ坂の上り下りで足を棒にした奴があるかい。まだ十五の邦子だつてお前ほど乾燥した頸は持つてやしないんだ。

妹　さうですとも。あの頸は白粉漬けですよ。

兄　お前も國へ歸つて白粉の選擇くらゐは出來る修業をしろといふんだ。

妹　（抽斗から賴信紙を出して書く）

兄　（腕時計を見ながらいらいらと歩きまわる）

妹　（賴信紙を持つて出て行かうとする）

兄　何處へ行くんだ。まだ話は濟んでないのだぞ。（賴信紙に



氣づく）誰に電報を打つんだ。

妹　他の知つたことですか。

兄　だしぬくつもりだな。（頼信紙を奪つて讀む）莫迦、莫迦。何だこれは。何時僕が發狂したんだ、何時。

妹　その通り氣ちがひぢやないの。

兄　きさまこそ氣ちがひ病院に行けば好いんだ。（頼信紙を掴んで捨てる）怺えてたつてきりがない。僕は斷行する。（頼信紙に書き、出て行かうとする）

妹　（頼信紙を奪つて讀む）いつ、いつ私が發狂したのよお。

兄　現在さ。乾燥狂で貧血性ヒステリイなんだ。

妹　（頼信紙を掴んで捨てる）何なのよ、その貧血性ヒ、口にするのもいやな病名だわ。

兄　貧血性ヒステリイさ。解らなければ幾度でも敎へてやるよ。

妹　何の根據があれば私にそんな病名を被せれるのか説明なさい、説明を。

兄　心臟に手を置いて考へてみろ。お前の心臟ときたら血液どころか水だつてありやしないから。いつたいお前は二十歳の今日まで誰に、誰に戀をしたことがあるんだ。どんな女だつて二十歳までもし獨りでゐたら、心臟に二つや三つの孔はあいてるんだ。これがほんとの女なんだ。ところがお前のときたらかすり傷一つないぢやないか。だからのどぼとけがとび出して來るんだ。男、女。男、女。男、女　これが健全な世界の正體なんだ。お前なんか桁はづれの、存在理由なしなんだ。

妹　螺旋狂の男ヒス。（机に向つて書く）

兄　桁を外したのが何と言つたつてかまふものか。（歩きながら）だから男も女も存在理由を獲得するには戀なんだ。リイベ、こひ、ラヴ。何處の國だつてだからこの事實には美しい言葉を當てゝゐるんだ。お前の靑靴下と正反對な美しい言葉を。（足許を瞶めてゆつくり歩きながら、だんだん獨語的になる）詩を作るより戀をしろ、だ。哲學の横額よりリイベの音に醉ふんだ。こひ。ラヴ。リイベ――。（急に妹の書いてゐるのに氣づき）また電報を書いてゐるのか。斷じて電報は打たせないよ。

妹　やかましいわね。すこし靜かになりかかつたと思つたら。（頼信紙を全部投げ出して）書きたければ幾枚でもお書きなさい。（書きつづける）

兄　（歩きながら）だからお前が人間として存在して行くには、やはり戀なんだ。聞いてるのか。（妹の机の側に來る）何を書いてるんだ。戀をしろと言ふのだよ。

妹　（書いてゐた紙を伏せて）誰に言つてるの。

兄　お前自身に言つてるんだ。こ、ひ、を、し、ろ。

妹　いまに月夜の溜息を吐くわよ。どいて頂戴、私忙がしいのだから。何だつて今日は三時にもなるのに出かけないのよ。雪子さんが存在理由を失くするわ。他のおせつかいはたくさんよ。（書く）

兄　（腕時計を見ていらいらと歩きまわる）親父もお母さんも貧血性ヒステリイの治るのばかり待つてるんだ。今から戀を始めれば頭を切つたことでさうお母さんを悲しませないで濟むんだ。遲くはないよ。（時計を見る。目立つていらいらする）聞いてるのか。（妹の側に來る）何を書いてるんだいつたい。

妹　（紙を伏せる）忙しいんですつてば。

兄　原稿紙だな。また校友會雜誌に恥さらしをしようといふのか。見せろ。

妹　（紙を庇ふ）さうぢやないのよお。

兄　見せろ、ともかく。今後原稿紙に書いた字は一行だつて僕の檢閲を經なければならないんだ。

妹　原稿ぢやないんですつてば。

兄　何しろ僕の名譽のために檢閲の必要があるよ。（紙を取る）「だつてきまりが惡るかつたんですもの。でもお怒りになつちやいやよ」何だいこれは。お前の作文にしちやしほらしすぎるぜ。

妹　返して頂戴てば。

兄　（默讀して）へええ。誰の作品なんだい、これは。

妹　一葉全集の寫しなのよ。返して頂戴てば、急ぐのだから。

兄　（妹を遮りながら）面白いな、女らしくて。「でも今日いらして下さらないのはお怒りになつたからぢやなくつて。もう一時すぎたんですもの。私おひる前から不安で、おひるは御飯を一つしか食べませんでした。それで、慘めな氣もちでこの手紙を書いてたら、ソオダ水がいきなりひとの頭を打ちましたの。たださへ慘めな物思ひで一ぱいの頭を」何だ、今日のお前の記錄ぢやないか。

妹　さうよ、ほんとは私の手紙。

兄　お前の手紙。それぢやお前は戀をしてるのか、え、戀を。誰がこの手紙の受取り手なんだ。僕は嬉しいよ。話してくれ。

妹　でも、受取り手のない手紙なの。

兄　隱さなくたつて好いよ。僕は時時は癇癪もちだけど、こんな時には好い聽き手になるよ。

妹　――ただね、私、女としてあまり殺風景だから、こんな手紙の作文を書いて女らしい氣持を味ははうと思つたの。

兄　さうか。しかし惡い傾向ぢやないよ。そんな心がけなら今に受取り手が出來るよ。そしたら衿頸だつて美しくなつて來るんだ。人工で乾燥さしてるだけで、元來はさうみつともない頸ぢやないのだから。

妹　兄さんてば一しんに書いてる最中に、いきなりひとの頭を打つんですもの。

兄　濟まなかつたよ。僕の惡い癖なんだ。（手紙をとびとびに讀む）「あの時、私がちよつときまり惡るがつたために、もうアツプルパイにも逢へないかと思つて、私悲しいんですの」本物とすこしも違はない氣分が出てるよ。お前だつてこれだけ書けるんだ。惜しいなこれに受取り手がないなんて。――松村に出してみたらどうだい。松村ほど適任者はないよ。兄妹だけあつて横顏が雪子さんにそつくりなんだ。隣り合つて講義を聽いてると、講堂にゐることを忘れるよ。

妹　さうね。私だつて雪子さんと並んで講義を聽いてると、講堂の氣分ぢやない、かも知れないわ、未來のことだけれど。

兄　さうなるのがほんとだよ。それに、今のアツプルパイで思ひだしたけど、松村もお前と同じにアツプルパイが好きなんだ、濃いお茶で。

妹　さうお。（手紙を折りながら）ともかくこれから時時お稽古するわ。（時計を見る）

兄　それで初めて目的觀に添ふんだ。（時計を見る）

友達が這入つて來る。菓子の包みを持つてゐる。兄、友達に何か言はうとして口籠り、蒼くなつて立つてゐる。

妹　いらしたわ、やはり。（友達の手を取り、机の側につれて來る）怒つていらつしやらないのね。（菓子の包みを取る）アツプルパイ。怒らなかつたのね。

友達　（兄を氣にしながら）何を怒らなかつたんです。アツプルパイがどうしたんですか。僕は小野君に用事があつて――

兄　雪子さんは何と言つたのだ。早く聞かしてくれ。どつちにしたつて運命なら、僕は――

妹　さうぢやないのよ兄さん。お稽古なのよ。（友達に手紙を渡しながら）大丈夫よお稽古なんだから。兄さんが戀の稽古を

しろつて言つてるところに丁度あなたがいらしたんですもの。早く讀んで頂戴。私いま速達で出すところだつたの。

友達　（まだ兄を氣にする）

兄　どつちなんだ雪子さんの言葉は。

妹　（兄に）お稽古なのよ。（友達に）早く讀んで頂戴。

友達　（手紙を讀み始める）

兄　どつちなんだ雪子さんの返事は。

友達　（手紙から眼をはなさない）

妹　私今朝から初めておなかがすいたわ。（包みを解く）やはりアップルパイね。（兄に）お稽古よ、兄さん。

兄　勝手に稽古しろ。（友達に）どつちなんだ。

友達　（漸く手紙から眼をはなす）妹がね、忘れるとこだつた、お待ちしてゐますと言つたよ。

兄　來いつて。雪子さんが、僕に、來いつて言つたんだね。

友達　「お待ちしてゐます」

兄　間ちがひないね、「お待ちしてゐます」だね。

友達　間ちがひなく。

兄　さうか。「お待ちしてゐます」。僕は——電報を打つんだ。（頼信紙の一枚を拾つて書く。一字づつ切りながら讀む）コンヤクシタスグキテクレ。間違ひはないかよく聽いてくれ。幸福すぎる時は妙なことを書くものだから。コンヤクシタ。スグキテクレ。

友達　何のことだいそれは。

兄　僕が婚約したんだ、雪子さんと。君が承諾の使者なんだ。

友達　ただ「お待ちしてゐます」だよ。

兄　暗號なんだ僕達の。僕は先週の丁度今日雪子さんに申込みをしたんだ。お待ちしてゐます、承諾　太陽は沈みました拒絶。そのどつちかを持つて今日君が來ること。僕達の打合せは素朴なんだ。僕はこの一週間、さつきまで、婚約と失戀の中を泳がされたけれど（急に立上つて入口に行く）

妹　お待ちなさいよ。今電報を打つてどうするの。

兄　親父を來させて結婚するんだ。

妹　惜しいわ。月夜の溜息が一つ減つてしまふんですもの。

兄　松村とお前で埋めたら好いだらう。お稽古でなく本物で。

松村、妹を姨捨山から狩り出してくれ。男くさい衿頸を君の接吻で洗つてくれ。お稽古でなく本物で。（出て行く）

妹　（お茶の支度のために部屋を出入りした後）駄目ね。湯わかしのお湯がみんな發つてしまつたわ。お午からずつと懸けてたんですもの。すこし待つてね。

友達　お茶なんかどうだつて好いから、おかけなさい。

妹　でもお茶が濃いほどあなたはやさしくなるんですもの。（パイを切る）

友達　（パイを舐めながら）パイだけの方が好い。お茶に醉ふとまたお口を拜借したくなるから。

妹　（パイを舐めながら）まだ怒つていらつしやるの。手紙にあんなに書いたのに。

友達　「だつてきまりが惡るかつたんですもの」か。だからお茶は入れないで下さい。

妹　この手紙なんて先週のことよ。（立上る）またお湯が發つてしまふわ。

友達　お湯なんか勝手に發たしておけば好い。僕はもう濃い奴を飲んだ氣もちになつてしまつたんです。

妹　反射的に手巾を出して口邊を拭く）

友達　（性急に）そのまま。何て惜しいことをするんです。甘いほど好いんだ。

蒼醒めた錯覺

英美子

彼女は、息づまるほどの抱擁の中で、彼の鼓動を數えた。唯それだけが、今彼女に許される凡てゞあつた。

……彼女の耳の内で、彼のハート型の心臟は素晴らしい翼だつた。聖天地の創造主よりも、來世地獄の王者よりも、その一と響が彼女に絶對的な權威を以て、彼女の全靈魂を照明し跳梁しつゝあつた。

――こんなにも愛されていゝものかしら。私がこの人を熱愛してる、それよりもまだこの人から私は戀されてゐるのだわ。

彼女は、被戀愛者の立場で有頂天だつた。

はてな。――彼女は自分の聽覺を確めやうとして、もう一段彼の胸に強く深く耳を埋め直した。其處には最早、あの素晴らしい羽搏きは無くて、幽かに潮騷が響いて來るだけだつた。

――おやッ、貴方の心臟は、右の方にあるやうだわ。

彼女の白熱的官能は、其處で鳥渡、戸惑ひして終つた。

――僕の心臟かい？ それはね、君のゐる方にいつもある譯さ。

彼は、又何と痛快に彼女の錯覺的創造を征服し去つたことだつたか。

彼女はもう彼の爲ならば、生命も惜しくないと考へた。浪のやうに高まつてゆく彼への思慕を、どうしていゝかと持て余した。

そこで、彼の方は？ 彼は心の中で、――今日限り彼女を離れやう――と、冷靜に決意してゐた。彼はもはや、彼女の凡てを知つて終つたのだ。彼は「戀愛」とは、より深く相手を識りたいといふ自然の要求心理に他ならぬ。と、いふ持論者だつたから。

で、彼は次から次へと、異性を漁つてゆかねばならなかつた。

鮮かな月が、森の上にかゝつてゐた。田圃の方からまるで經でも誦むやうに蛙の聲が流れて來た。

彼女は、ふと、戀の絶頂で自分に脊負投げを喰はせた男のことが想ひ出された。憤りと恥とが絡み合つて、靜かな夜空を泥のやうに搔亂させた。

あ、――彼女は叫びと倶に無意識に、自分の胸を双手でしつかりと押へた。月が、突然、蜈蚣のやうに、自分をめがけて飛びついて來たから。

月、――は遠い〳〵昔の戀人の心臓だつた。而して又、彼女自身の蒼醒めた錯覺であつた。

訪問

×

獨身の女、O子

「Kさん、今日もお一人ですか？ どうして夫人さまと一緒にお出下さりませんか？」

K「彼女は、男の相手だとずつと伸びて談話をしますが、相手が女性だと曲り迂つて不愉快だから一緒には伺ひません。」

×

彼女は、いつもO子に親切に注意する。

――男といふものはね、必ず何か野心か好奇心かなければ、決して女性の許を訪問するものではなくつてよ。――

×

或日、Kと彼女とは散歩した。

彼女「ねえ貴方、烏渡O子さんのお宅へ寄つてみませうよ。」

K、「うむ。」

K、垣の外に待つてゐる。彼女、小走りにO子の玄關に立ち、ハンドルを引いて極めて小聲で一度だけ。

「ごめん下さい。」

返事がなくて、臺所の方で頻に食器を洗ふ音が聞える。彼女、いそいでそつとドアを閉めて拔足で門外に出て來る。

彼女「留守よ。もつと歩るきませうよ。」

K、「うむ。」

×

O子獨語、――誰か來たやうだつたが、……郵便かしら。――

エプロンで手を拭き〳〵O子、臺所から出て來る。玄關に誰もゐないので緣側に立つ。庭の垣根越しにK達の後姿を認める。O子、はゝあといふ思入れにて足を爪立て眺めてゐる。彼女、O子の門の方を一寸振り返へり、垣の上に出てゐるO子の頭の先を認める。O子、周章てゝ首を引込める。

×

Kと彼女、野路を歸つて來る。彼女はもうO子のことは忘れてゐる。

K「O子さんへ寄つてみないか？ もう歸つたろう。」

彼女「え？ まだ歸らないでせう。」

K「戸締がしてないんだから、もう歸へつてるよ。」

彼女「貴方一人で寄つてらしつたらいゝじやないの。」

彼女、ヒステリックに言ひ捨てゝ、さつさと歩き出す。K、苦笑ひながら從いてゆく。

×

數日の後、O子と彼女が道で出遇ふ。兩人異口同音に

「しばらく。――」

「まあ、しばらく。」

彼女「逡、忙しいものでご無沙汰ばかりして、」

O子「どういたしまして、お互さま。」

彼女「近いうち、又お邪魔に伺つてもよくつて？」

O子、「えゝ、またどうぞ。」

双方、反對の方向へ歩みながら、各々微苦笑。



病床より

竹内てるよ

私は、又してもモルヒネがほしくなつた。

實際、背骨の痛みは、どんなに人生に對して希望を持ちたいと思つても、次の瞬間からすぐに生に對する私の信仰をみじんにする。

一包の白い粉末にすべてを託して、混沌としたねむりに入る、その時の樂な自分を思ふことは、せめてもの逃道であつた。

「ゲルト、いくら殘つてゐる?」

私は友達にきいた。

もう二週間も、持病の心臟がよくなくて、仕事に行けない友達は、近頃初まつたリユーマチのために、痛い足をバスケットの上にのせて本をよんでゐた。

「二十錢位なら……」

そうして、からだを起して机の引出しをかきまわしてゐた。

「十八錢……何か要るの?」ときく。

私は十八錢では、あの高價な藥の、一包をも買ふことが出來ないのを知つて默つた。

二人は、もうこれで二日食べなかつた。

仲間の銀座裏で小僧さんをしてゐるHさんが、先だつてビスケットを持つて來てくれた。

それが無くなつてから、何もなかつた。

ひもじくなると熱がずゐぶん出た。ならべて書いたら、自分でもぞつとする位に私のからだにはいろ〱の症狀がある。

「僕、足が立てるようになつたら、東京へ行つて何とかする……」

友達は云つた。

「えゝ、だけど無理しない方がいゝわ」

二人は、それなり默つた。

暗くなつて來た部屋の中に目をあけて、私は、こゝへ――こんなにも東京から遠いところへ――引越して來た時のことを思ひ出してゐた。

私達がこゝへ家を持つたのは、去年の大晦日であつた。

それまで、私は去年の二月に家を出てから露店商人になつたり、行商のパン屋になつたりして、漸くの思ひで食べてゐた。

私は、からだが弱いといふ理由で、成立した離婚を、決して不條理とは思はなかつた。

思想的の離反もあつた。併し、そのとき私はすでに、女としての責の一切を自分から解き放されるのが何よりも安心であつたのだ。

今、考へてみれば、よく乘り切つたものだと思ふ。

とにかく、決意の前に行動は速になされた。

私は一つの信念をもつて社會に反いた。

切花賣り――行商――三年保たないと云はれたからだで、それらの仕事は苦しかつた。

そのとき、見かねて私と一緒にくらすことにしてくれたこの友達は、その頃もう一人ではおけない位に惡くなつてゐた私のためにせめて夜だけでも靜かに横はる床をみつけてくれた。

初めのうちは大ぜいで一軒持つはずであつた、併し、いろ〱の事情でとう〱一人になつてしまつた。

家をかりた時、家主のお婆さんは友達に、

「お入りになつてから子供さんのお出來にな

る分にはかまひません」
　と云つたといふ。
「すつかり、寃罪を着ちやつた！」
と友達は笑つた。
　大晦日――元旦――二日――三日――
　友達が家の方へ行つてゐる間、みぞれ降る寒さの中で、火もなく、灯もなく、食物もなく、夜具もないガランとした家になじみのない土地に私は一人で横になつてゐた。
　金がなくて荷物を驛から取つて來れないのだつた。
　四日目に友達はあはてゝ歸つて來た。
　二人は二十錢をもつて町へ食べに出かけようと思つた。
　併し、私は立てなかつた。

　二人は兄弟のように暮してゐる。
　二人の結合は自由聯合である。
　私達は戀愛を持つてはゐない。たゞそれ以上のものを持つてゐる。
　家を持つても、私達は何もなかつた。
　ほうきが無くて掃除をしなかつたら大家さんから屆けて來た。
「これで一つ、はき出して下さい」
　二人はよろこんだ、友達はその次の日から忠實に掃除をした。
　おとなりから、庖丁をもらつた。
たわしも……ざるも……
　只一つ私の持つてゐた鍋は、引越しの荷物の中でどうしたはづみか穴があいてしまつた。二人は洗ひおけで、お汁をこしらへた。
　親切な友人達の情けや、わづかの原稿のかせぎで、私達は辛うじて生きて來た。
　併し、もうこの先の見込は立たなかつた。
　からだの弱い、この反逆者達は、決して自慢にならないどん底の貧困の中で、夜を徹してクロポトキンを讀んだり、いろ〳〵の本をあさつたりした。
　――食べるものゝ無い時には、金が入つたら食べものを買はうと思ふ。併し金が入るとふだん買ひたい買いたいと思ふ本を先に買つて、みす〳〵明日困ることが判つてもつひ本を買つてしまふ。――
　友達の手紙にいつかこんなことが書いてあつた。
　併し、その本だつて、三十錢均一をあさる位だ。空腹よりも苦しい知的欲求だつて、十分の一をさへ滿されない。
　友達はよく、半分は歩いて、神田へ本のにほひをかぎに行つた。そしてかへつて二三日はきつと床についた。
　食べものが無いとき、私達はよく、せりをつんで來て食べた。
　いつでもせりをつんでゐるのをみて
「まあ、それぢや殘つて殘つて仕方がないでせう……」
　と近所の人は云ふ。
　殘るどころではない。中味のないおつゆを三日位食べた後、せりをつみにゆく私達であつた。
　私達は、貧困を矜とは思はない。
　背に汗して正當に働きたい。勞働の中にその一生をがつちりおいて、汗と血の中から、ぶつさいて上る叫びを叫んでゆきたい。
　併し、私達に……友達は具合のよい時には或仕事を見習に行つてゐるが……私には、とてもどんな勞働も出來ない。
　女中、事務員、タイピスト、婦人記者、花賣り、パン賣、袋張り、筆耕、祕書、家庭敎師、交換手、賣子――淫賣をのぞいた他の職業、十二年來の立たない祖父さんと、胃病でねてゐた祖母さんと二人の義妹を食べさせるために、十三の年から生活の戰ひに立つた

私は、殆んどあらゆることを仕事として來た。いま、不治の病體を横たへた私に、たつた一つ、貧しい筆で書いて食べる至難な仕事が殘されただけだ。併し私は何も書ける女ではない。

嘲笑は甘んじて受ける！　一丁の町を歩くに困難な今の私に、餓死をさけるための生業である。

思想は私を張りとばす。無爲にひとしい日日を苦しくはないかと問ふ。それを嘆いてどうならう‥‥泣いてどうならう‥‥悲嘆は決して前進ではない。

『私は見た、
くびれて白い肥つた足首と‥‥
ピンポン玉のようなかゝと、
端正にならんだ五本の指、
子よ！
お前の成長は父と母との決勝である。』

貧困と病苦——これらにもまして私を苦しめるのは、別れた子供への愛であつた。

「ね、昨夜も徹也ちやんの夢をみたの‥‥白いアブチャンして‥‥」

私は首をとなりの部屋に向けて云つた。

「‥‥‥‥」

「おもちやの馬を買つてつてせびつた夢」

センチメンタルになつたな‥‥とはつきり感じた時、檢温しなくても、今日も三十八度になつてゐる日暮熱をはつきりと感じた。

子供の幻想は、私を苦しめ、私を涙ぐませ併し、また必ず私に生きてゆく希望をあたへてくれた。一つの方向にとつたまつしぐらを約束してくれた。

「ね徹也ちやんは‥‥」

云ひかけて私は聲をのんだ。

小さいすゝり泣きをとなりの部屋にきいたのであつた。

——五、二六——

新刊紹介

薄暮の都會（鷹津和郎著）

筆無性の作者が始めての大作だ、急速なテムポで推移する東京生活の精寫だ。かゝる時代に有閑知識階級の若い男女が、どの樣に戀し惱んだかの記錄だ。モデルとしては著名な文學者、畫家、音樂者、女優のたぐひが一讀それと推量される所に、文學以外の興味がある。裝禎は箱張まで著者自裝、近來のぜいたく本。

發行所東京麹町大森書房　定價二圓

新支那訪問記（村松梢風氏著）

梢風氏が去年の秋、三年ぶりで訪れた支那についての印象記だ。氏が支那——主に南支通な點について何人も異存はあるまい。文識、「支那漫談」に比べてはるかに高く且つ深く、現代日本人が民族的に　分を知るために是非一讀すべきだ。「南京三多」「陣六の博士」「蘇州游託」の如き甚だ徇ぶべし。

發行所　東京　騷人社書局　定價一圓五十錢

東西文藝評傳（高安月郊氏著）

大近松、出雲、宗祇、芭蕉、星巖、靜軒、バイロン、バルザック、ワグネル對ニイチエトムプソン、廣重、江漢、ルソウ、ベートフエン、等數十天才の概觀及び明治大正の文化研究を收めて一卷を成してゐる。蘊蓄と經歷とに於いて氏ならではの著書である。特色は豐富な材料を極端な省筆で語つた點にある。氏の省略に就いて讀み得る讀者は多くはなからうが、この位のものを讀みこなす智識と熱情もモダアン諸氏にあつてもいゝだらう。近來の佳著。發行所　東京　春陽堂　定價參圓

一週年記念の藝術祭

一九二九・六・二二日——素晴しい快晴。夜來の雨は綺麗にあがつた。輝しい陽が青葉にとまつた露の一つひとつに光りをおくつてゐる。

女人藝術が創刊一週年記念の藝術祭を催ほす日だ——。私達の胸は高鳴らずにはゐられない。十日も前から市中の日ぬきの場所や郊外の青葉の蔭に藝術祭のポスターが下つて行人の足をとめてゐた。切符の賣行きは上乘だといふ快報がはゐつて、社内ははち切れるやうな元氣であつた。

午後三時ごろ、社の同人は會場である日比谷の音樂堂へ先發することゝなつた。素川さん、熱田さん。西村さん、小池さん——少し遲れて行つた私は、切符賣場のボツクスに陣どつた永島さんの甲斐甲斐しい姿を見出した。入口の用意は手落ちなく出來て人々を待つてゐる。會場は直線的なコンクリートの建物を中心にしてたくさんの椅子が後上りに半圓を描いて展がつてゐる。五六千人も、もつと座することが出來るであらう。とほいローマの劇場をでも想像されるやうな廣い座席は周圍を深緑でとり卷かれ、舞臺には見事な蔦が掩ふばかりに絡まつてゐる。頭上には青い透明な空、——汗ばむほどに輝く陽——。

控室にはもう、第二部の舞踊をする石井小浪さんがお弟子さんや照明の人達と來てゐた。新築地劇團の人々はけふの午前、こゝで早くも舞臺稽古をすませたといふことで、お化粧道具やらトランクやらが卓子の上に置かれてある。午後四時、座席には早くも三人の婦人が入場者に魁けて、腰を下した。みな一層元氣づく。陽がやがて薄れるころ、望月さんを筆頭に、中本さん、上田さん、林芙美子さん、それから松村喬子さん、ぞくぞくと控室へ姿を現した。林さんはめづらしくも黒い服に白レースの襟といふ可愛らしい、粋な姿だ。遺憾なことにこの夜の講演者神近市子さんは突然の事故のために講演を斷つて來られた。平林たい子さんもなか〳〵見えない。

聽衆は、次第に增してくる。約二千くらゐもあらうか、會場の七分を埋めた。薄暮のせまつてくる午後六時半ころ開會の振鈴は高く鳴り響いた。舞臺の上には一時に電燈がパッと花のやうに點いた。

開會の辭、——一場のあいさつと、そして神近女史の缺席されるに至つた事、ならびに今夜この會場で高らかに合唱する筈であつた全女性進出行進曲の選歌が得られなかつたことゝ、二つの辯明が述べられた——八木秋子——

生產文學について——中本たか子。

落ちついて、原稿を前に話し出される。唯心論の文學の沒落と、未來の文學はスピードと建築學的構成をもち理智と新らしき形成によつて生產されなければならない。そして、それはどこまでも唯物論的立場に立つものだといふ。聽衆の四割は男子で「音樂的にやつてくれ」だの「形式主義者しつかり頼みます」などといふこゑが飛んでくる。

新劇運動雜感——上田文子。

上田さんは、文字どほり生れて始めての講演である。「だから一番私は條件がわるいのですよ」といはれたが、どうしてなか〳〵。流暢にしかも落ちついて話を進められるのには、感じ入つてしまふ。過去の新劇運動が犯した誤謬を指摘し、未來の演劇は民衆のものであり、然も新らしい社會へ進む共同目的のために爲されなければならぬと述べる。聲がよく通らないやうで旺んに大きく〳〵と註文があつた。

女性よ何處にゆく——望月百合子。

「皆さん」と劈頭第一にこゑ高く呼びかけた。斷髪に青い服の小柄な。颯爽とした姿。「講演といへば大抵の場合は灰色の壁が高くめぐらされてゐる窮屈な場所でやりま

す、これは不愉快なことです、だのに、今晩はひろびろとした野外で皆さんに呼びかける——私達の頭の上には限りなく自由で大きな青天井があります。私達の未來はかうした自然の中で思ふことを憚らず自由にお話出來る社會がくるでせう」嵐のやうな拍手と、歡呼が一しきり湧き上つてあたりの樹立へこだまする。一語から二語とよく透つて聽衆を魅して行くのである。原始時代の太陽であつた女性はどうして男子の奴隷となつたが。男子の手と社會の不合理な壓迫をふみ越えて、女性よ立て——。

「頭上の青天井」のころから臨監のこはい小父さん方の眼が光り出し、男子の横暴のあたりになると日比谷署の高等係が汗をふき〳〵飛んできて、控室へ抗議を申込んだ、すぐに辯士へ注意しろ、さもなければ中止させるといきまく。仕方なしに望月さんの横へ出かけて行つて、「なるべくおとなしくね」と囁くと、「うん」と頷く。だが聽衆が承知しなくて、「司會者横暴！　やれ〳〵ッ」と叫ぶ。

白帆を呼ぶ。林芙美子。



向つて左から熱田優子、西村圀子、長谷川時雨、平林たい子、中本たか子、林芙美子、上田文子、井口愛子、四家文子、八木秋子、松村喬子の諸氏

自作の詩、今度出版された詩集を手にもつて、少し横向に體をふり〳〵　朗讀がはじまる。海のみえない街、白帆を呼ぶ、いとしいカチューシャなど六篇をよんだ。旺んに應援のこゑが上ると、林さんは體をふつて、「皆さん、私の詩は一生懸命作つたのですから、默つて聞いて下さい」などといふので、いつさう拍手の音が湧きたつ。

だが、望月さんで極度に神經が鋭くなつた官憲はまたしても飛びこんできて、不可ないといふ。理由をきけば、「腹が空つて飯がたべたいの、男に別れたの、ストライキだの留置場だのつていふぢやないか、直に中止させる」と眞赤にいきり立つ、またしても林さんの所へのこ〳〵注意に出かけると、聽衆はきかない。横暴々々！　といきまく。平林さんが汗を額に滲ませてこの時控室へきた。高等係と正服は、あとの松村さんと平林さんの講演は絶對に許さない。と斷言した。林さん降壇、このころは日比谷署の署長が嚴めしい金筋の服で臨監席につき、白服の姿がずらりと林立する。

無産婦人と廢娼――松村喬子。

だが、完全に口を封じられた松村さんは、「聽衆に挨拶だけ」といふことはりで演壇に立つた。自分の暗い過去を省るにつけても、今日なほ多くの姉妹たちが同じ境遇に苦しんでゐるのを默視することは出來ない。その運動はよろしく無産階級の婦人達によつて爲さるべきものである。と、實際運動に携はつてゐる人だけに落ちついた堂々と透る聲と態度で、何となく聽衆の襟を正さしめる感があつた。質素な飾り氣の何一つない姿。

　官憲が中止！　と叫んで舞臺へ足を踏み入れ樣とする、同時に松村氏は降壇した。たうとう平林さんは許されなかつたのだ。この事は主催者側のみでなく來會者全部の遺憾な事實でなければならない

　意外な結果になつた。官憲は、社會と云ふ言葉から不可ないが…同時に、聽衆の彌次が不穩だといふ。そこで、第二部の餘興がはじまる前、暗い舞臺へ長谷川さんは立つて、「どうぞあまり彌次を飛ばさないで下さい」と丁寧なあいさつがあつた。いかにこの場の空氣全體が緊張し、熱したかは想像される事であらうと思ふ。

　第二部へ移り、四谷文子さんのアルトの獨唱が、井口愛子さんの伴奏で始められる。いつともなしその中に魅せられて會場の空氣は次第に和やかになつた。

　つゞいて石井小浪さんの舞踊。

　色とりどりの光りの中に踊り舞ふ小浪さんの姿は全く夢現の世界へ人々を導き入れずにはおかなかつた。表情の美、なよやかな四肢、そして燦やかな裳！　それ等は音樂と調和して生れ出る情緒の世界！

　最後の演劇、金子洋文氏作の「牝鷄」は新築地劇壇によつて演ぜられた。東北辯をそのまゝの臺詞がよくとほつて、一羽の牝鷄を中におこる農家の氣分がよく表され輕いものではあるが效果的であつた。山本安英さんの可憐な娘、細川ちか子さん、高橋豐子さんの二人の母親もよく力演した。

　これ等の女性の出演者の人々に花束を贈り、盛會のうちに幕をとぢたのは九時少しすぎ、申分なきむしろ豫想以上の藝術祭は成功であつた。これで官憲の鋭い眼さへなかつたなら。

　歸りは長谷川さんを先頭に銀座へ歩いた。そしてモナミの二階に大卓子を囲んで、みんな樂しさうな愉快な顔を並べて歡談の花が咲く――あゝ、記念の藝術祭は終つた。

（秋　子）

女人藝術の誕生日を迎へて

初夏の風が流れて睡蓮の花が赤く白く浮ぶ植物園に二十八日の午後、一年間御世話いたゞいた諸姉に御集りいたゞいて――早いものだ――さゝやかながら第一回の誕生日を迎へる。あいにく其日は各種の會がかちあつたので、會する者約五十名。去年の今頃生れ出たばかりの創刊號を手にしてよろこびあつた私共は今日又創刊記念號を手にしてそれ以上の喜びに躍りあがつた。

　わづか一年の間に進歩した其のあとをたどれば實に不思議な程である。體裁に、内容に實にめざましい育ち方だ。併し私共は未だこれで滿足する事は出來ない。それで又此の日を振出しに更に進歩する事を希望して居る。此の日皆様と御一緒に將來について語りながら過すのも意味ある事ではないだらうか。

　睡蓮の池を前にこんもりと刈こんだ庭木の繁る築山をひと目に、昔の大名の豪奢振りを今更の如くしのばせる御殿風の廣間。これこそ千姫の白山御殿とか。植物にめぐまれた場所柄テーブルには鉢植がフンダンに置かれてあるのもうれしい。先づ長谷川先生の御挨拶に始まり、自己紹介、神近市子、生田花世、今井邦子、英美子諸氏のテーブル・スピーチ等あり、又水町京子氏よりの祝電の朗讀あり、後一同外に出て明るいうちにと記念撮影をする。

スコット沼蘋さんの可愛らしいお嬢さんも一緒に肩を並らべて。此の頃夕暗は次第に迫つて睡蓮は一つ二つと花を閉ぢて眠り始める。おだやかな夜に燈が灯つて御殿の大廣間がパットあかるくなる。今度はおすしやサンドウイッチをつまみながらかくし藝の番になる。一番遲く來た罰にと先づ輕部女史の田園行進曲の御紹介。節は東京行進曲と同じだが、あの偉大な體軀から出る聲量は皆樣の御想像にまかせる。英女史の謠曲。かねて聞き及んで居た生田女史の御詠歌。最初に巡禮の風俗を説明をされて、チリン／＼と間にはさんで歌つて下さる。望月百合子さんの甲州音頭も面白く、小池さんの「君とわかれて松原ゆけば」これ又お得意と聞くが柄にもなくはにかめば、男性の前ではいやに大膽で、女性の前では小さくなるとは近頃の女性の傾向か等とからかはれてしぶ／＼歌ひ出す。何度も拍手を爆發させつゝかくし藝が進行するにつれておそれをなしてかポツ／＼と退却する方もあり、皆自由に庭に降りて散歩する。一方ではこれは又珍。時雨女史と花世女史の鬼ごつこ。林詩人も百合子さんやみどりさんを相手に、追いつ追はれつ、全く子供にかへつた樣に喜々として戯れる。月見草がポツカリと花を開く。山の上のあづまやは木々に圍まれて居るが、蚊一つ居なくてよい心持だ。こゝに泊つてしまひたいと編輯長の言葉。四日はいやだが二日ぐらゐあの廣間に座つて庭を眺めながら「近う」等とやつてみたいな、だと、余くこゝから見おろすと燈の灯つた横びろの建物がどうしても芝居の舞臺の樣に美しい。今にも着かざつた姫君がしづかに現はれそうである。

愉快なさゞめきはなか／＼に盡きない。しばらく思ひ思ひの雑談に時を過した後九時頃名殘惜しくも散會した。一同來る年の今日を又約しつゝ。（優子）

反響——4

板橋　八木　綠子

藝術祭!!　あんなにも盛會であつたことをお慶び申上げます。何から何まで女人の手でこれだけの會衆をとすつかり嬉しがつてしまひました。時雨樣を初め皆々樣もお疲れ乍らさぞ御滿足のいつたことゝ存じ上げます。

記念講演會は女人藝術社特色のものとして私は非常に期待をもつて參りました。神近市子氏に初り平林氏に終るこのプログラムは、確かにあの場内の過半を占めた男性の會衆をも集めた原因となつたに違ひはありません

ところが愈々開始が告げられ、八木秋子氏の御挨拶があつて後あれほど私をひきつけたプログラムの第一番は、その題する未定の講演者は出場不可といふ甚だ殘念なお斷りを伺はなければなりませんでした。折角の中本、上田兩氏の講演にさへ興味を半減させられる始末になりました。

しかしやがて輕やかな青衣の望月氏がさつぱりと演壇へ上られる頃、私も段々藝術祭にふさわしく明るい心となりました。ほんとうに望月氏は快適な存在でしたけれどもそのど快いお話し半ばに、その筋の御注意が八木氏を煩はして演壇に達し望月氏をまごつかせることになりました。このことは實に官憲のむだな神經過敏を現したもので私は可笑しくてなりませんでした。官憲横暴?　こゝらから聽衆が騷ぎ立てます。このあとを受けて林氏にはお氣の毒でした。放浪記の愛讀者である私はあのぶり／＼として驅け込まれた氏に同感を持ちました。

次の松村氏のお話しはもつと聞きたかつた!　近親に彼の地獄の世界にあえぎ傷つき死んでいつた婦人をもつ私は、同じ世界を苦しみそこを闘ひ拔いてきた女性、そして現在其處に殘されてゐる幾多の同性達の爲に闘ひつゝある女性松村喬子氏の姿を熱い心で眺めました。氏に許された時間は僅か數分間に過ぎませんでしたけれど、氏の涙の叫びは私共の決して忘れることの出來ないものでありました。官憲の干渉は松村氏をして充分語らしめなかつたばかりではなく、プログラムの最後を飾る平林氏をも遂に封じて終ひました。

平林氏は何を語らふとしたか!　この不當な壓迫は笑止とばかり考へては居られないものがあります

かくして記念講演會は實に本意ない講演會として幕を閉ぢました。

「蒼馬を見たり」評

上田文子
尾崎翠
八木秋子

芙美子さん

皆がさう呼ぶから、私も眞似して呼んでみる――私がふみ子さんと呼ばれる時とまるで違つた感覺が――貴方の影像が、はつきり浮び上つて來るから不思議です。たつた二三度しかあはないのに――戀人の樣な言葉使ひをしますね――莫迦に親しい感じをあたへて下さる貴方が私はとても好きで尊敬したいのです。

私なんかゆめにもしらない生活の渦を越えて、越えて、――そして、貴方は何と明るく、强いこと！

蒼馬を見たり、一卷、

悉く貴方の裸像を感じます。

貴方の目、貴方の口、貴方の鼻、貴方の耳――貴方の手も足も、身體のあらゆる部分をそこに感じます、一つ一つの詩を讀み乍ら、その時々の貴方のデッサンが描けさうです。

赤裸の詩、貴方の身體貴方の頭それ自身、すばらしい發光體です。私には詩のテクニックは解りません、しかし、貴方の内にわれわれの時代の詩を感じ――それ以上にわれわれの時代の詩人を見出すことは私を喜ばせます。

貴方の詩のおもしろいこと、樂しいこと、怖いこと！　文字の遊技に溺れてゐる新感覺派の詩人達のどこにこんないきた血の通ふ、新鮮な詩が見られるでせう。

生活、生活！

貴方の詩集は狭い窓ののぞき眼鏡に額をおしつけてゐるチッポケなお孃さんに腦貧血をおこさせます。

芙美子さん、

彼女の頭に水をぶつかけてやつて下さい！

（上田文子）

好い詩に向つた時人は理屈ぬきになることを私はこの著者から敎へられました。ただ心臟を打たれて作者の世界に沒入する作用だけが其處に在ることを。この一卷を手にする私は、作者が泣けば泣き、嗤へば嗤ひ、餓えれば餓え、追憶すれば追憶します。

「あなたもか。私もこのふかしたてのパンが、ね」――私は「苦しい唄」の作者に言ひます。

「紫の羽織に黑いボアのうつるお孃さん。まつたくあなたと私の距離は臺灣から北海道まで以上です」――私は「醉ひどれ女」の添景人物に敬禮しなければならないのです。

この沒入は何處から來るか。（この際となつて私は考へなければならないのです）作者が心臟のまん中でものを感じ、感じたままを太い素朴な線で大地に投げだしてゐるところから。――ごく大雜把な答へはからです。まことの心臟は第二の心臟を打ちます。

作品の年代順が解らないのではつきり言へませんが、作者は陶醉、反抗、追憶、自己抱擁、放心（これ等年代的順序不同。何への追憶、等。何からの放心、等はこの集に心を潜める人々の容易に解するところですから省きます）等から、つひに靜觀、内省へ向いたと思はれます。集中の最近作自序「黍畑」がその方向を仄示してゐるやうです。

延びあがり延びあがりたる
玉蜀黍は儚なや實が一つ

この自己凝視を私は一卷中でもつとも愛します。さきに擧げた陶醉、等の境を經て到つた境地であるだけよけい尊く、頭のさがる心地がします。そして此處が第二の世界への起點かと思はれます。

（尾崎翠）

この詩は林さんの赤ごである。林さんのお胎はこの兒のゆえに祝福さるべきであらう。それは、この詩は林さんのお胎からでなければ生れ出る運命をもたないから。

林さんの詩は全く林さん自身のものだ、明るさと朗かさと奔放と。涙のうちの笑ひ――白い飯と戀愛と、その中に純粹な人生への憧憬が光り、詠嘆と反抗が溜息をし叫んでゐる。

林さんはすべての惡と不幸への憤りを、滲み出る涙を、大膽な强ひ線でカリカチエアライズした。そこで吾々は哀しみを超えたあるものを感じる。人生にあつて裸は常につよいものだといふことを。

林さんよ。一いきついて更に自由にゆつくり出直して下さい。下手な理屈がどんなに詰らないものかを吾々は知るでせう。

（八木秋子）



中央菓子鉢の前林芙美子氏、左り隣平林たい子氏、其の他――駒形橋畔前川

「蒼馬を見たり」の會

愛する酒仙女史、林さんの詩集の出版記念會を、七夕の祝ひと共にやらうぢやないのといふので、七月七日の夕、駒形橋際のうなぎや前川の二階に集まつた。いまや滿々と夕潮の上げて來る大川に向つて、青笹が一本、折鶴や五色の吹き流しが風になびく。お客樣方のいらつしやる前にと社長さん初めみんながせつせと赤や青の七夕紙を切つたり結びつけたり。肝心の林御主人公が姿を見せないので心配してゐると絽の着物に亭六の描いた黑襦子の帶をしめてすましてやつてくる。どうしたのと浴びせると

「だつて何だかてれくさくて……」と頭を掻く。本の後記に初めてお嫁入りするやうで恥かしい、と書いた人だもの。寫眞に見るやうに、如何にも林さんに親しい人ばかりが集まつて御酒が運ばれ、御馳走が並ぶころ、凉しい川風が吹き上げて笹を鳴らす。

今井邦子女史の司會で「林さんの十年の苦勞を盛つた詩集のために祝ひ度い。テーブルスピーチの出來ない方は隱し藝を願ひます」といふ事になつた。

眞先きに詩集に序文を寄せられた石川三四郎代が、何にも云はないで御得意のしやつちよこ立ちをされたのには一同呆氣にとられて拍手、女房が病氣で代りに來られた西村陽吉氏は、「あの詩集を三度讀み返し、身體を以つて書いた詩の苦惱に深い同情を寄せ、詩なんか書けなくなつてもいゝから芙美子さんの生活そのものが豐富に藝術化される幸福を祈ると結んだ。芙美子さんの「白山詩　」時代の親しい方も喜びを述べられた。長谷川社長さんは、西村氏の言葉にばくして、「芙美子さんの生活はいま、亭六先生があつて非常に幸福だといふから、今後はコンチクショウが少なくなるだらうが、いつまでも〳〵いゝ詩をかゝれるやうに……」といはれる。

中途に瓢然とやつてきた辻潤氏は「昔私は芙美子さんと一夜同〇した事がありました」と一同を笑はせる。芙美子さんの放浪時代を陰に陽に共にしたといふ平林たい子氏は親しみをこめて時々の印象を物語る。たい子さんの訥々の辯で語られるのが放浪記の裏をなすのだからまた面白い。芙美子さんはいゝ人だ。感激して涙をほろり〳〵膝ににじませながら聞いてゐる。眞實芙美子さんはいゝ人だ。さつき遲かつたのね、といつた時に側へ來て小聲で

「だつてこの着物を質から出して來るやら、亭六に描いて貰つた帶が乾かないし……」といつて笑つた人だ。おそく、明日巴里に歸るといふ武林夢想庵氏が、辻氏の令息と水島氏の令息とを連れて參會、愈々賑やか。

夜が更けるにつれて大川端の灯は冴え川風さつ〳〵。空は曇つて今宵織女ものこり殘しからう。引潮に五彩の七夕を流してやがて散會する。（素子）

地獄の反逆者＝人生記録＝5

松村喬子

四十の遊女

會場は檢査場の隣りの室で、樓主連の會合の場であつた。立派とは云へない迄も、床の間もついて、二宮尊德のかけじが下つてゐた。

一時間の後には、榮樓全部の娼妓が竝んで待つてゐた。二時間、三時間、と待つ間は、長いけれども、署長の姿は見えなかつた。始めの緊張した氣持もやうやくうすれて、足を投げ出す者や、廊下を歩く者等も出てきた。

「長いナ、いつ迄待たすのやら早くから人を呼び出しておいて警察の人なんか割合に嘘つきやナー」

「ほんまにナ、どんな話か知らんけど、あんまりぢらさんと、早うきて、話してきかしてくれたらエエのにナー、かるたさんのおかげで、と苦勞させられるナー」

彼女等は一時もじつとしてゐる事はきらひであつた。寢てゐるのだつたら、いつ迄でも出來るのだつたが――。

帶の間から櫻紙をぬきとり片方の手に敷島を持ちながら、紙を口で二三枚キヨウに吸ひ取つて、その上につばきでぬらして、煙草の灰を落した。彼女等の灰皿はいつも即製に之を用ひた。やけに煙草ばかりふかしてゐるから、こんな紙くづが、あつちにもこつちにも多くさん出きた。煙草を吸はない人は、櫻紙で「待人」の辻占をして遊んでゐる。歌子達は、始めの元氣はなくなつて、何かしら不安な氣持さへ起つてきた。いら〳〵として落付かない氣持は四人の顏に表はれてゐた。さんざ待ちくたびれてゐた時、

「きやはりました―」

との知らせに、雀の如くさへづつてゐた人々も口をつぐんだ。廓の取締の星と交番の巡査が付いて、威嚴を備へてやつてきた××は、先づ椅子に着いた。取締りの星が机の前に立つた。××は取締りの星より話は下手であつた。

「皆サンに長くお待せして濟まなかつた。もう少し早く來ようと思つてゐたのであつたが今日は陸軍の聯隊で集まりがあつて私はそこへどうしても出席しなければならないので、一寸行つたが、大へんひまどつて、こんなにおそくなりました。それに私の體は非常に忙しい體でいつも、寸分のすきもないのを、今日は無理に都合をつけてきたのです。それで餘り長くはお話してゐられませんが――」

それで一寸口を切つて服のかくしから金時計を出してみながら、言葉をつゞけた。

「で――、此度び、運惡くもあなた方の居る樓では、營業停止になりましたが、この機に乘じて、無頼漢なんかがあなた方を甘言にのせて一儲けし樣と謀んでおりますが決してこんな甘言にのつてはいけません、そんな奴はうまくあなた方を欺して樓から連れ出して他へ賣り飛ばしてその金を自分の懷に入れ樣とする惡い奴ですから充分注意してもらはねば困る。それから亦、この中にこんな考へを持つてゐる人もあるかも知れません。この際こんな樓は駄目だから、他へ住替し樣とか、或は三ケ月間も休んでゐる間榮樓に居るのはいやだから、親の家へ歸してもらはう！

と云ふ樣な蟲の好い了簡でゐる

人、それは間違つた考へですから、早速そんな考へはすてゝ、おとなしく譲んでゐる事、樓主とあなた方は親子も同樣、お互ひに助け合つて不幸な事があれば心配し合つてこそ始めて美しい主從關係が成立つのです。それに今度のかるたの樣に一々××へ持ち出したり少し位の不平を根に恨んだりしては主人の方で憎しみを持つのは當り前でせう。主人の方に落度が有れば、主人に、どこが悪いから氣をつけて下さい、こゝに不平があるからこゝを改めて下さいと云ふ風に主人に當つて見て主人が聞き入れなかつたら、その時は廓の取締りもある事だから、取締に一應相談すると云ふ具合にしてもらはねば困る、そう一々警察へ持ち出されたんでは、忙しい警察だから困る。そんな小さな問題を、この忙しい人達が、一々關りあつてゐられない。だから、今度からは、そんな事を云つてきても、警察では取りあげませんよ」

成かく的に皆の顔をながめた。四人の者は勝手がちがつた樣な氣で、それでも最後に一言でも何か期待する言葉を心待ちした。

一元々、あなた方が娼妓になるのには、あなた方の家が貧しくて食ふに困つて、どうにもならぬから、あなた達の親が金のかたにあなた方を賣つたのでせう。それであなた達には多くさんの金がかけてある。主人の方では、働いてもらひ度いから莫大な金を出して連れてきたのに、少し體の具合が悪いからと云つては國へ歸してくれ、いやになつたから借金はポツ〳〵返すから、この商賣はよさしてくれ等と蟲のいゝ事を言つてはあまり義理がなさ過ぎる始め娼妓になる時は、是非共稼いで借金は返しますと云つて金は借りた、借りて了へば、そんな事云つて、それでは、人の道にはずれる。世間はそれでは通れぬ。それで世の中が通れる位なら私も自分の妻も娘も女郎にさしてしばらく經つたら「親が病氣だから歸してくれ」とか娘の體が弱くなつたから返してくれと云つて連れてかへる：：それでは世の中は渡れません。この中に主人も見えてゐることだと思ふから一言云つておくが——」

後の方に、遠慮がちに座つてゐたおかみは、始め、小町のかげで、どうなる事かと、おづ〳〵してゐた、處が話は一言一言、自分の方の形勢が好いので、感謝の意をさへ表はして、熱心にきいてゐた。そして、その最後の言葉に心持頭をさげて目で禮を云つた。

「主人の方も、多くさんの金をかけて連れてきてゐる娼妓の體だから、病氣したらすぐ醫者にかけて、養生をさしてやらねばならん、一人當三千圓としてもその金額は大したものだ、それだけの金を儲けるには、どれだけ苦勞をしたかを考へて、…………もし病氣でもして、死んだらどうする、だから、病氣の時には注意していたわつてやらねばならぬ……」

それが主要な話で、外に自己紹介手柄話自分の地位などを說明して、最後に金と云ふものは一番大切なものだと云ふ事で結びをつけた。四人は無言のまゝ、來る時の元氣はどこかへ消えて了つて、こそこそと一番先に場内を出た。理屈ぬきに××に對しての反感を持つて、——一體この××は、樓主ぢやあるまいか？　それ共、わざわざ雇われてきたのぢやあるまいか？　と四人の頭には一樣にそのヒラメキがあつた。

この話をきいて皆はどう思つてゐるであろうか、かるたのやつた事もほんとうに悪い事だと信じて了つて、より以上にかるたを憎むであろう。そして益々樓主の方では、皆を壓迫してこき使ふことをたやすくするであろう——歌子もそう考へて來ると悲しくなつた。

人に顔を合はすのさへ氣がひけて、玄關にあがつて四人が歌子の室へ集つてからも、歌子はいつもの樣な明論がはけなかつた。

四人が室へ着いた頃、小町とおかみは、娼妓達の去つた後を最後迄殘つて、××の出て行く足元に、丁ねいに、頭をたれた。

榮樓へ歸り着く時のおかみの顔は、この事件が始まる前の晴やかな顔になつてゐた。

新高は、人さし指と親指で圓く輪を作つて同時に云つた。

「あれはキット之をつかまされてるのやナー」

一アンナ話がどこにあるものか、

××のまゝで、よくもあんな話しよつたナー、悪い方の味方をしてさ、あんな奴の云ふ事なんか、きいてたまつたもんやないわ」

主人の居間に、今しがた大阪から帰つたばかりの木浦をかこんで、同業仲間や親類等が集まつて挨拶をかねて今後の善後策を講じる為めに來てゐたのであつたが、木浦がまるで猛り立つた猛獣のやうに、どうする事も出きないので、一時親類筋だけ残つて、他は帰つてもらつたのであつた。

一旦云ひ出した事は、たとへ間違つてゐても、出來ない事と承知してゐても我を通さねば承知しない木浦の性質を、親類の人々は、云ふが儘にさすより道がなかつた。

「皆さんお父さんの室へ來て下さい、お父さんが呼んでみえます」

「下へ皆、集つて下さい」

仲居達がそう云つて室々を歩いた、その聲に再び恐怖に慄いた娼妓達は、ビク／＼しながら、主人の居間へ……なるべく先の者のかげにかくれて。

歌子と高奴がその室へ行つた時はもう半數以上もそこにうつむいて座つてゐた。

酒をひつかけてゐるらしいその顔、底光りのする一瓣も二瓣も有りそうな眼付、一目でゾッとする様な顔付は、大きな聲と共に、そこに立すくませる位であつた。

「寶太夫は何處に居る、寶太夫出て來い。ようもようも三ケ月間の營業停止を喰はしたナ!! あいつが警察で有る事ない事みなシャベッタばつかりにこんな事になつたのだ、俺の樓はまだ三ケ月も營業停止を喰ふ様な悪い事はしてエへん、あんな奴、八ッ裂にしても飽たらん奴や、俺の前へ出て來い…

威猛高になつて腕をふつてどなつてゐるその聲に往來の人は足を止めた。

寶太夫!! それは若浦のかつて一と昔以前、静岡からこの名古屋の古い廓で賣つた娼名であつた。今はその俤(カゲ)もなく、四十に手がとどいて、無理なつとめに、病氣がちではあつたが、それでも、年をとつてゐると云ふのと、借金があるからと云ふので、無理にも店へ出て稼いでゐるのであるが、先をみこーてか、この人にも、何かと、敵のやうにつらく當つてゐた主人を、今度のかるたの事件で呼び出された時、自分の受けてゐる待遇を細かに語つてきたのであつた。常に虐げられてゐるだけ、親切にやさしく次席に問はれては、涙なくては話されなかつた。

丁度猛りくるつた狼の様に吠えてゐる木浦の聲に、臺所で御飯を食べかけてゐた若浦は、食べかけの御飯をそのまゝ來たのであつた。若浦の顔をみた木浦は一段と怒りに聲を高くした。

「コラッ!! 寶太夫、こゝへ來い、俺の前へ出て來い、今俺が貴様を切つてやるから、俺の前へ出てみろ!! 俺は村正の名刀を持つてゐるぞ!!」

後におろ／＼してゐた娘二人、おかみは、泣きわめきながら父親を止めてゐる。

何の涙!!

若浦は、帳場の氣轉で二階へあげられた。

木浦の怒聲は方向を轉換した。

「今度のこの事件を引き起した奴は、俺はチヤンと知つてゐる、歌子は居るか!! 出て來い、こゝへ、外にも三四人居る、今日はそいつ等は、腹の中で哄つてゐるやろ! おれはよう知つてゐる。そんな奴は今に俺がどうするか?」

一わたり、顔をあげてゐる者の面に、射る様な鋭い目は向けられた。外の者は、ことごとくが下を向いてもらい泣きしてゐる、高奴も歌子も川柳も、小波も、なぜか、涙は出ない、……………

「お父さんもうかんにしてやつておくんなはれ、……………お父さん、おとーさん」

二人の娘が一生懸命に左と右の腕にすがつて泣いてゐた。獰猛な狼も我子だけは可愛いかつた。二人の娘に泣きつかれて、少しく聲を静めた時、おかみは泣ヂヤクリながら娼妓にともなく夫にともなく云つた。

「今日の事務所での署長さんのお話をきいて皆サンも解つてくれはつたから、もうあんた、かんにしてあげとくんなはれ、署長サンは正しい方の味方をして充分お話をして下さつたよつてに……」

歌子も山田が袖を引いて二階へ連れて行つた。

「怒らないで下さいよ、少し今日はお父さん昂奮してゐやはるよつて、氣にしないで下さい、すぐ忘れてしまふのやから、云つてしまへば後はないのやさかいナ、ナ、解りましたか」

室へ落付けておいて出て行つた木浦の聲はやゝ低くなつて行つたが、なか〳〵怒は解なかつた。

「俺はナーこの絹子が可愛いのや、目の中に入れても痛くない大切な娘や、この娘がいつも『お父さん、もうこんな商賣はやめて田舍へ行つてのんきに暮さう』と云ふのや、それでもうあと一年か二年もすればやめるつもりやつたが、俺はもう廢めんぞ、いつ迄〳〵もこの商賣をして、キサマ達を苦しめてやるのだ!! キサマ達四人か五人は一生この樓から出さんのやそして肉を喰ひ血を吸つて骨までシャブつてやるからそう思へ」

恐ろしい言葉に皆はゾット寒氣を覺えた。小町だけがおかみや娘と一緒になつて、樓主をなだめた。

馬鹿、犬奴、自分だつて、苦しい境遇に逢つてゐたら、どんな氣持がするか——唖でもはきかけてやり度い樣に歌子は思つた。

三日の後再び主人の居間へ呼び出された娼妓達は、そこに木浦の居ない事をたしかめてホッと息ついた。第一榮樓の主人と稻川樓の主人とおかみが座つて居て、如才ない第一榮樓の主人が挨拶をして稻川樓の主人は

「皆サンも此の度はまことにお氣の毒でした、主人も一寸この騷に少し心をつかつたので頭を惡くしておりますから家に居ても面白く行きませんので、皆で薦めて温泉へでも行く樣にと無理に昨日出しました。その不在中を私達で、この榮樓をあづかつて、皆樣の爲めにも相談しました。皆サンもそれを喜んで下さる事と思ひます、こうして三ケ月間も遊んで居つては、借金も減らないし困るでせうから警察の方も奔走して漸く許可を得ましたから、一時、どこか他の樓へ行つて働く事にしました處が、この樓は大勢の事ですから、之だけの人數をあづかる處がないのです、それで、色々と奔走して、揚屋を二軒お願ひして借りる事にしましてそこへ二派に分れて行つて頂くことにしました皆サンに異存のある方はありますまいナー」

話上手な稻川樓の主人は、人を使ふ事も要領よくやつてのけた。年は若いが、太つ腹で、小さい事には餘り口を入れなかつた。だから稻川樓に抱えられてゐる娼妓達は餘り不服を口に出さなかつた。けれど半面からは、それだけ、自覺がおそい事にもなつた。

苦しみ悶えて、苛酷な扱ひをされてゐる丈け、反抗心も强くなり鬪爭心も芽生へて來はしないか？ まして無智な彼女等は、現實に目前で事にぶつつからなければ何事も解らないのぢやあるまいか、こんな稻川樓の主人の樣に、口先ではあるがやさしく云はれたり、一寸した親切をされたら同じく使はれて搾取されて居ても滿足して了ふであろう、榮樓の樣な樓に居ただけかへつて、「苦しめられて居る」と云ふ事に早く氣がついたのであらう？ そうしてみると、他の娼妓達の云ふ如く、「稻川樓へ行つてゐたらよかつた」とか、「稻川樓へ始めから行つてたら、どんなに幸福だつたろう？」と云ふ事は間違つてゐる。少なく共、私達は、こゝに居つた爲によつて、こんな事件にもぶつつかつたのだし、之からもこれを動機に、多少でも目覺られるなら、その方が幸福だ。

春駒の手記

稻川樓の主人から話のあつた翌日に、半數づつ、三つ輪家と、西谷と云ふ揚屋へ、かり住居をして、そこで商賣を始めたのであつた。

何しろ三ケ月間遊んで居なければならないところを、たとへ遊び半分にしろ、そうして商賣する事になつたので、主人の方でも喜んだし娼妓の方でもなじみ客の多い者は喜んで、一時の引越しをやつた。商賣道具のふとんと鏡臺、身のまわりの品々は、臺所の男衆や掃除番のおぢさん達によつて、一日がゝりで運ばれた。早速客の處へ電話をかけたり、手紙を出したり皆忙しい目をしてその日は終つた

榮樓とちがつて、揚屋は、娼妓が居ないので、一室づつ持つ事は出きなかつた。一つの室に全部がかたまつてゐて、客のある娼妓が二階の室へ行く事になつた。それ

でも、榮樓のおかみや、主人の居ない氣樂さに、皆、うき〳〵として遊び暮した。

歌子と高奴とは是非一所に居たいと思つてゐたが別々に分けられて了つた。そして、高奴と川柳は、笑福を總指揮に愛之助を副指揮に西谷へ行つた。歌子の方は、まだ小波は少し體も惡いので、そのまゝ後に殘つて、小町を總指揮にして三つ輪家へ行つた。

その間、三ヶ月間、榮樓は全く關係ない事で娼妓の稼高は一錢も榮樓へは入らないと云ふ事に發表されたが、どんな方法で、どんなカラクリがそこにあるかは、娼妓のすべては知るよしもなかつた。娼妓達の朝夕の食事は全部榮樓から運んでは居るけれど……。

一人二人は體が惡い爲め殘つてゐたのであつたが急に寂しく、ガランとした處に居て、下に樓主達の家族と顏をみ合してゐるのも心苦しいので、一人行き、二人行つて、殘つてゐたのは、かるたと若浦だけであつた。

かるたは淋しい、心細いおもひで取り殘されてゐたが、朝夕の洗面へ來たおかみや、保養に行つた管の主人等に、あらゆる皮肉やら痛罵をあびせられながら、どうする事も出きない不自由な體で、がまんして、時々歌子や高奴が歸つてきてくれるのを待つてゐた。そして、毎日の新聞での公娼制度の改正や、撤廢問題を何よりの土産として、歌子がもたらす事は、疵のなほる事より嬉しい事であつた。

毎日新聞には續づいて松村警保局長の意見が發表されて、娼妓は大部分その新聞の記事をよろこんで、歌子の讀んで聞かすのをジツトおとなしく聞いた。形勢の好い方へばかりついて、どつちが正しいかと云ふ事さへ解らない彼女等も、自分の身の有利な規則になると云ふ事を嬉しい事だとは知つてゐた。一時も早く制度の取締等がよくなればよいと思つた。

それから婦女界には吉原から目覺めて勇敢に飛び出した春駒の手記さへのせられてゐる。歌子が客に送られた婦女界を手にして、それを讀んだ時の氣持は、その後かるたに話す時、亦新高に川柳に讀ませる時に、話の下手な表情のない顏に、活々とした、熱があつたといつも皆に冷かされる位であつた。それ程彼女はその春駒の手記を讀んでショックを與へられた。××××の話を聞いて、すつかり悄氣て了つた彼女も亦、一道の光りを見る事が出きた。

――私達もやつぱり進む道はあつた。救ひを求むる處はあるのだ……決して、このまゝで死んでよいものか？　今に、必ず光りのある世界へ……

川柳も泣いてこの記事に共鳴した。感激して、一句讀んでは一言返して、高奴や小波を驚ろかせた。かるたは自分の事の樣に喜んだ。力強く歌子にも誓つた。

「歌子さん、少し足さへ自由になれば、私もやります、今度は決してあなた方に御迷惑はかけません、それ迄、どうか今迄の御迷惑ついでに、みすてないで下さい」

醫藥の效と云ふよりも時日の經過に依つて、足も大分癒りかけてきた。全快しても、元の完全な足にはなるまい、と醫者でさへ云つてゐるのに、毎日花柳病の專門醫が、濕布して塗藥をつけに行くだけであつたが、それも二ヶ月にもならない中に、來なくなつて、こつちから催促して行かなければ藥もよこさなかつた。

それでも自然は、快方に向いた足を遲々としてではあるが、惡い方へは向けなかつた。皆が歸る頃までには、どうしても步き度い

――それが一番の望みであつた。

二タ月たち、後幾日も殘す日がなくなつた頃には、新しいもの好きな娼妓達は、かるたの事も餘り噂にしなくなつてゐた。それは餘り又突然の出來事に出逢つたからでもあつた。

十日も經てば榮樓へ歸れる――そう云ふ希望で皆、てんでに、慌て者は早や自分の室の掃除に歸るものもある若葉の薫るセルの頃であつた。相變らず、なじみ客のない者は、下の部室で二人づつまだ、夢路を辿つてゐた。初夏の朝の氣持を知らない娼妓達は、朝日が、軟く庭の植込みに照りかけてゐるのに、一人も目を覺まして居なかつた。それに、客の居ないこの部室でポツ〳〵と話をしてゐる者のあるのに心づいた歌子は、ソ

ーッと薄目を開けてみた。
そこには、西谷の總指揮をやつてゐる、笑福と愛之助が、小町に何かさゝやいてゐる、すぐにも起き様とした歌子は、直感的に何か起つた事を知つたのでそのまゝで話を聞いてゐた。
「それが私もうつかりしてましたんで、少しも知らなかつたんだんネ。隣りの果物屋の二階に、厩のゴロツキのおかみさんが見つけてすぐその亭主に話したので、後をつけて行つたら、大門の前のタクシーで二人がどこかへ行つたんで、怪しいとみて、運轉手の歸つてくるのを待つて行く先を聞いてみたんだんネ。そしたらその運轉手もなかなか行く先を云つてくれへんので、そのゴロツキが外の運轉手と一しよになつて、打つたり蹴たりして、やうやく先を云はして榮樓へ行つて、まだ朝早いので寐てゐたのを叩き起して、知らしてゐた時、熱田の方の警察から電報で通知してきたんで、第一榮樓の旦那はんが迎ひに行つたはりまんネやは」
聞き終つた小町は、これも他へはばかる様に小聲で、
「そうだつか、しようがおまへんナー、あの川柳はんときたら、大阪に居た時もそんな事やつて捕まつた癖に、またそんな事やつたんだつか」
「エヽ何しろ、相手が惡ふおますからナー」
口數の少ない愛之助がそう云つて笑つた。歌子は再びかるたの時受けた感じをこの時もくりかへさせられた様に思つた。
私達に　何も話さずにやつた――それは亦歌子サンに迷惑がかゝるといけないから――との高奴の計ひであろう事はよく解つてゐたが、いつかはやろう！　このまゝでは居られないと四人はお互ひに云ひ合つてゐた事だし、する氣持は持つてゐたが、捕まつた時の恐ろしい事を想像したり、あづかつてゐる家に迷惑かけてもとの、いらない義理立や、せめてかるたさんの病氣が快くなつてから、あの人も連れて行き度いからと云ふ歌子の言葉を待ち切れずに、高奴や川柳が、飛び出して不幸な結果を生んだのであつた。三人は話をして、コソコソと出て行つた、榮樓へ行つたのであろう。
後に小波と歌子と、後の方に作榮が眠つてゐる限りであつた。小波は眠つてゐる事と思つてゐた歌子が、かへつて小波から言葉をかけられた。
「今の話聞いたか？」
「えゝ聞いたワ、どうして捕まつたのだらうね」
だが二人はそれつきりで、打切つた。小波は、寢返りを打つて、もう一度眠りに入つた。歌子は後の事が聞き度くて、とうとう眠れなかつた。
殘す七日でいよいよ三つ輪も西谷も引あげると云ふので、四人三人の娼妓が室の掃除に歸ることになつた。歌子も掃除する爲めばかりでなく、高奴や川柳の様子を聞きたさに歸つて見た。自分の室の一つおいて隣りの川柳の室からは、粋な爪弾の音が聞えてゐる。歌子は自分の室へ入るのを忘れた様に、その三味の音のする室へ引きつけられた。
「ナーンダ、のんきだネー」
そこには高奴が川柳の枕許で、三下りの、ピンホソを小聲で唄ひながら彈いてゐた。
歌子が入つて來ると、すぐ手を止めて、待つてゐたとばかりに、
「まあ、どうしてきてくれへなんだのや、毎日待つてまちくたびれてゐたのに」
と云つて側の客用の赤の皮座ぶとんを出した。川柳も、すぐ起きて床の上に座つた。
「早く來様と思つてゐたんだけれど、小町のうるさいのに皮肉を云はれたんで、癪にさわつて來なかつたの。それに二三日、小波さんと大學病院へ行つたりなんかして」
「そう、そんならエヽけど、」
一寸氣ぬけした様に後は何も云はなかつた。そして、二人で始めから、話しておこうと思つたが、もし捕まつた時に、亦あんたに迷惑かけてはいかんと思つたからと、歌子が想像した通りの事を云つた。
「どうして亦、捕まる様なヘマをやつたの」
「いや、とてもうまくやつたのやけど、夜警の非常線に引かゝつたのでナー」
如何にも殘念そうな聲で高奴

は、逃げる時には、チャンと一番目ざとい笑禍に洒をのませて、酔ひつぶして二人は出た事や、まつすぐ一本筋の大門迄を行けば見付かるといけないと思つて、仕舞多家のある細い露路や、藝者の家形の處を遠まわりして、やうやく自動車に乗つた事も名古屋驛ではすぐ追手がついた時一番不利だからと云ふので、郡部へ二三日かくれて様子をさぐつてからにし様と思つて、熱田の方へ行く途中を非常線にかゝつて警察へ連れて行かれた事等、そこの警察でも、さんざん怒られて、樓主に引渡されたのであつたと話した。

「非常線なんて、蜘蛛の巣と一所だネ」

歌子が、話を聞いてそんな事を云つたら、すぐ川柳が聞き返した。

「なんでやネー、蜘蛛の巣とは？」

「だつて、あんなものには大きなものはかゝらないのだもの、クモの巣だつて、そうでせう、大きな鳥や蝙蝠は、一つだつて懸りはしないわ、破れて切れて了ふのだもの、たまに木の葉の様なものか、蚊だとか蠅位なものしか蜘蛛の巣に懸つてゐるのはみた事がないわ、それと一しよで、大物は金の力で自由にしてゐるし、大犯人は、懸らずに、小さい、コソ泥位が非常線には、關の山よ」

高奴は、如何にもと云つた顔してゐた。

「ホンナラあたし等はコソドロか？」

川柳の聲は、頓狂な聲で響いた。

「辛いから他へ住替させてくれと云つてもやつてくれないし、それなら、も少し樂になる様にしてくれと云つても、やつてくれないのだから、警察へ出て、眞面目な商賣をして、たとへ少しづつでも、借金は入れると云つても、それも許さないから、逃げる外なくて逃げたんだわ、それで借金はどうかして拂ひ度いと思つてゐると云つても許されないのだもの」

歌子はまるで自分自身の事の様に憤慨した。

「ほんとうやナ」

二人共溜め息をついた。捕まつた時の口惜しさ悲しさ、再び暗い陰鬱な處へ連れ戻される事を拒んで、いろ〳〵と署長にも依頼したのであつたが、娼妓の依頼を聞き入れてはくれなかつた。

「兎に角、當分の間はがまんしてゐる様、その中にキット機をみて、やるから、その時は、もつと上手に、決してこんなヘマをやらない様にしませうね、それにしても、何か參考になる書物でも讀んでおきませう、私榮樓へ歸つてきたらキット、手に入れますわ」

二人は何かしら頼もしく思つて

「頼むわナ、よく調べておいとくんなはれ」

「そりやそうと、かるたさんはどうしたか知ら」歌子は立ちかけた。

「國元の兄さんとかゞ今日來てはつたが、どうしたかな、私等が歸つてきたので急に元氣が出てはいるけれど」

高奴と川柳が、同じ運命で歸つた事は、申しわけないと思ひながらも、何んとなく、友達の殖えた事で嬉しい様な、力丈夫な氣がした。それからのかるたは、時々心から笑ふ事があつた。二人が捕まへられて歸つてきてからの態度は、自暴自棄の誰にも恐れない、どうなと勝手にしやあがれと云ふ態度であつた、おどしてもきかない二人に對しては、買收策を講じた方が利目がありそうだとにらんだ樓主の方では、小づかひをソット握らせたり、魚を御飯時には、二人にだけ持たしてやつたりして御氣嫌を取つた、けれども、二日目の夜の二人の態度に、買收の手にさへのらない二人の堅いちを、主人は持て餘し氣味になつた。――

――「こんな奴は、どこかへ思ひ切つて住替させて了ふか？」とも思つたのであつたが、身一ぱいの借金では、まして足ぬきをする様な前科者は、相手がよほど安い借金でない以上受取らない事は解りきつてゐる。一そ借金をまけても――

――だが、それでは他の多勢の娼妓のしめしがつかない――

今に、ジリ〳〵といぢめてやるから、と樓主は、一時撲つてもやり度いのをジットがまんして、さわらぬ體にしておいたのであつた。

「川柳の方は、まだ、昔の事から恩に着せて攻めて行けば、どうにかなるが、新高つて奴は、なかなか喰へない奴だ、何しろ、臺灣三界まで渡つてきてゐるし、大阪の

博徒の媽にもなつた事のある奴やからナー」

木浦の思案に餘つた顔付に對して、おかみは「あんな奴には、五圓か十圓、損したと思つて握らしてみなはれ、キット解りまつせ、その方がよろしいわ」

何事も只金によつて、意志のまゝになると考へ、信じて、夫に口をそへた。

「そうやナー、まあ、五圓位ではなんやからふんぱつして二十圓位握らしてみようか」

だが、二人の顔を見た時、その氣持は飛んで了つてゐた。常に牛か馬かの如く、意のまゝに動かしてゐるものが、彼に反して、裏切つたのである。出來る事なら、思ふさま、打つたりけつたりしてやりたかつた、けれども一つでも娼妓に手をかけたら、借金は棒引になると云ふ事だけは、いかに昂奮してゐても忘れてゐなかつた。いつもの聲でおどす事になつて了つた。そして云ひ度い事丈け口から出まかせに云つて、二人を帳場の所に座らせておいたが、二人共、泣しい顔をしてゐる、そして、あべこべに、口返答をするのでカッとした、それから、いつになく態度をガラリと變へて、夫婦で相談した買收の方にかゝつたのであつた。けれども、三千圓と二十圓では、どんなに珠算の出來ない女でも、割の惡い事位は知つてゐる。二十圓の買收には乘らなかつた。

歌子がかるたの室から歸りかけ時、川柳と高奴が入つてきた。

「兄さんはもう歸らはつたの?」

「エ、、エライ怒つて歸つたワ、もう兄妹の緣は切つて了ふとか云つてゐた樣やつたが、私、よくは聞いてゐなかつたの、若者の、堅意地やから、し樣がおまへんわ」

かるたは突然兄の來訪した譯を話して聞かせた。それは、かるたが、今度の事件を引起して怪我をした事を、あらかじめ、國元の母親と兄へ手紙は出してあつたのだつたけれど、その時は一寸した見舞狀しか寄こさなかつたのに、國の方に少しばかりの地所と自分の住んでゐる家だけは、かるたが娼妓になる時金のかたに人手に渡つてゐるのを、取り戻して今でもそれを大切に持つてゐる事をよく樓主の方では知つてゐたので、今度の問題で、もし樓主の方の云ひ分を、全部聞入れなかつたら、すぐ家と地所は差押へするから、そのつもりで居て貰ひ度いとの意味の手紙を受取つたので、母親と兄は、餘り突然ではあるし何の意味だかよく飲み込めなかつた爲め、それを聞きかた〴〵、妹に意見をしにやつてきたのであつた。

田舎者の律義さで、御主人に申し譯がないと云つて、妹の室へ來た時、幾年ぶりかで逢ふなつかしさも、平生のやさしさも消えて了つてゐた。疵の安否さへ尋ねる事を忘れてゐた。

「お前は大それた事をし出かしてくれた。祖先に對しても濟まぬ、あんなに毎日新聞にのせられて少しも恥しいと思はぬか。國で母さんがどんなに心配してゐるか、そんな事は少しも思つてみた事はないだらう。それに、お前が惡い事をして勝手に拵しらへたその怪俄さへ、御主人が、こうして三ケ月も醫者にかけたり、藥をつけたりして下さつた。ほんとうに罰あたり奴が！ 御主人の云はれるには、お前が惡いのではない、友達につつかれてし出かした事だから、今度の事はしかたがないが、本人も、こんな事になつて、世間へも顔出しが出來んだろうから、借金は半分にまけてやるから、どこかへ住替する樣に、私から云ひ聞かせてくれと云はれた。勿論、私の方からは、どうのこうのと、云へた義理ではない、だから、よくお詫をして、私は承知してきた、お前も、こうなつたら、もう何んにも云はずに、御主人の仰る事は何ごとも、聞いてくれるだろうナー」

ポツリ〳〵と樓主に云はれた事を話した。

「まあ兄さんも兄さんやナ、私の云ふ事も聞いてからにすればよいに、何も主人の云ふ事ばかり聞いて勝手に何事もきめて了ふと云ふ事がおますか。兄さんは田舎者で何も知らんけどナー、今迄に、どんなに私が苦しめられて來たか。六年間もこの樓へ來てから月日は流れてゐます、その間に、私は死のふと思つた事は何べんあるか解りまへん、一そ一思ひに殺してくれたら……とも思ひました。それ

だけ苦しんでゐるのに、あなたは何も知らずに、主人の云ふ事ばかりほんとうにして餘りだ……」

「それに、この樓が營業停止になつたのも、第一この樓が不正があつたからで何も、それ迄私の罪ではありません、昔とちがひます。今は立派に私さへ申し開き出きれば、自由廢業も出來るのです。借金をまけてもらつて、亦、他へ住替する、そんなそんな事は私には出きません」

三時間も、そんな事で、問答をして、堅苦しい兄は、御主人に對して顏を合せないから、國へ歸つて、たとへ千圓でもこしらへて來て、妹を他へ住替させると云つて歸つたのであつた。「自由廢業」なんて、とんでもない、家が、たとへ人手に渡ろうが、一家が明日食べる米がなくつて、飢えて死ぬ樣な事があつても、そんな不義理は出來ない」と云つて歸つた。

三人は終りまでそれを聞いてゐたが、かるたが話し終つてから、いかにも口惜しさうに高奴は、

「なんて、ゆうづがきかんのやろうナ、田舍の人は――、私のお父さんも、そんなやろうと思ふわ、それを好い事にして、あのおやじの事やで、うまい事云ふて、まるめ込んで了ふのやわナ―」

「それで、今私もその話をきいて、かるたさんに云つたのですが、すぐ半紙を出して、母さんにも、決して、こつちが惡いのではないから心配せん樣にそして、これから先、必ず、他へ住替させ樣として、親の方へ手をかへ品をかへて印を捺させに行くから、それにのつてはいけないつてそれは早い方がいゝからすぐ出す樣に云つてゐたとこよ」

川柳と高奴もすぐ贊成した。それで、兄の歸りつく前後には屆く樣にかるたは手紙を出しておいた。

けれども、國元の母親からは、かるたの手紙には反對して、兄と同じ意見の手紙が來た、かるたは、もう母も兄もない、私は勝手に思ふ通りの行動をとりますから、私にはかまわずにくれと、手紙を出しておいた。兄からも、それに答へて、「そんな妹は、今後、兄妹の緣は切るから左樣御承知おき下さい、母も娘ではないと云つてゐる」との文面であつた。

それを、高奴や歌子に見せて寂しく笑つてゐた。

藝術祭に參會して2

麻布　宮島久子

去る六月二十二日　日比谷公園音樂堂に於ける女人藝術創刊一週年記念の藝術祭に參會させていたゞきました。

女人藝術を始めて私が買つて讀んだのはたしか今年の二月號だつたと思ひます。しかも九州のはて、熊本の地にて、それを手にした時どんなに嬉しかつたことでございませう。

學校卒業するや否やすべての障害を排して上京致しました。學生々活から、結婚生活へ、そうした道程から脫して職業へと志した私の社會への第一步は大都會の渦の中に始められたのでしたが働くことの喜びを知り働くことの苦しみにあへぎながら志す文藝の方面には殆んどかへりみるひまもない忙しい生活、つかれた體を電車のつり皮にブラ下げて家へと運ぶ土曜日の午後、日比谷公園の入口で、女人藝術一週年記念藝術祭立札を眺めたのでした、義姉と二人で會場へは入つたのは、もう七時過ぎてゐたでせう。

白い服の警官がいかめしくならんでゐるのが殊に目につきました。聽衆もかなり緊張してゐた樣でした。上田さんの劇評、林さんの「白帆を呼ぶ」は聲が聞きとれず惜しい事にはよく味はひ得なかつた感がありました

望月さんの「女人よ何處に行く」は大いにふるつてゐたと思ひます。私もまた大いに共鳴させられる所がありました、かなり彌次がとんだ樣でした、「ボーイだ」「ボーイだ」と云ふ聲も聞えてゐましたが、あの位反響があつてもいゝと思ひます。

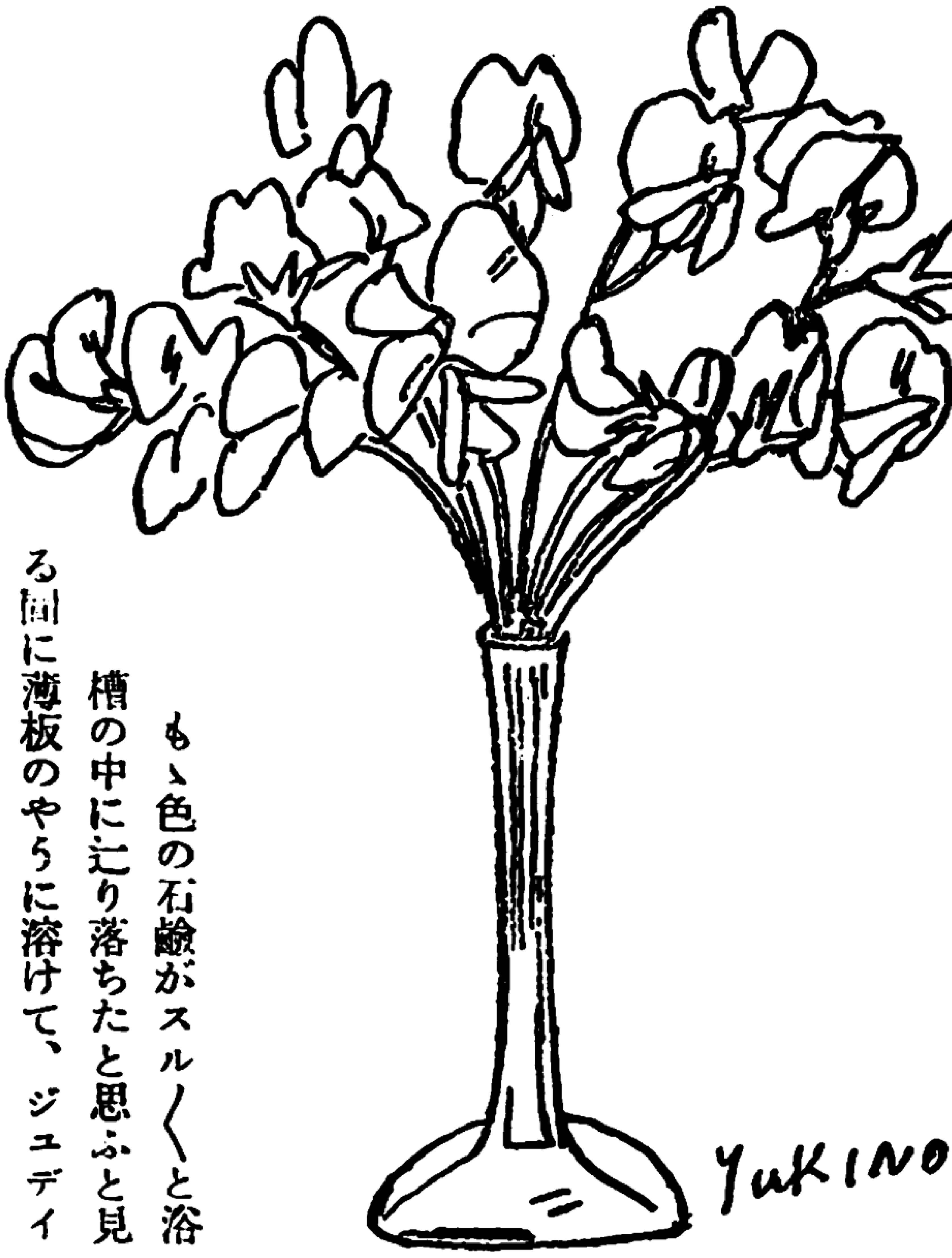
松村喬子さんの「無産婦人と廢娼」あの經驗に基いた「眞の叫び」こそ最も深く聽衆の心をとらへた事を疑ひません。只その筋の注意によつて、云ひたい事が云へず、聞きたい事が聞けないのが情ない氣がしました。

平林さんの感想も私が期待してゐた一つでした、藝術祭の名のもとに、舞踊、音樂、劇も隨分結構でしたが私は實のある講演をこそのぞんだのです、しかもその筋にはその講演が問題になつてゐた樣でした。

浴用香水

——シルヴア、ソオンドラリイ作——

松本恵子譯



もゝ色の石鹸がスル／＼と浴槽の中に辷り落ちたと見る間に薄板のやうに溶けて、ジュディの指先をすり抜け足の方へ遁げていつて了つた。

『まア！』ジュディは輕い叫聲をあげた。そしてやうやくジュディの掌中に殘つたのは、最早いたづら者の小鬼ではなく、安つぽい石鹸の塊りであつた。ジュディはそれを赤錆の出たエナメルの石鹸箱へ入れた。彼女が浸つてゐる浴槽もその石鹸箱と同じやうに、古びて薄黒く汚れてゐる。宿のお内儀さんはいつも、

『浴槽のエナメルを塗りかへさせなくてはならないと思つてゐるんですよ。』と口癖のやうに云つてゐる。

ジュディは發育のいゝ伸々した足を浴槽の縁にかけた。それは彼女が入浴中に行ふ得意の藝當の一つであつた。湯氣が徐々に立籠めて、龜裂の入つた鏡や、擦切れたリノリユムの敷物や、南アメリカの地圖を描き出したやうな汚點のある天井などをみる／＼曇らせて了つた。ジュディは湯の中に、のんびりと浸つてゐるうちに凡ての現實を忘れて、夢の世界へ入つていつた。その夢といふのは、聖書と鉛管屋の商品目錄とを並べたやうなものである。

『浴槽は海草のやうな色の緑玉石で出來てゐて、ニッケルの——いけないわ、矢張り銀製の金具がついてゐなくては……床にはカルシドニイを敷いて——カルシドニイつて、どんなものだか知らないけれども、リノリユムなんかよりは遙かに上等らしく聞えるわ。壁には碧玉が鏤めてあつて、厚いガラスの棚には、薔薇、ラベンダー、ヒヤシンスの香水などを入れた素晴らしい大きな壜が並べてあつて、其日、其日の氣分に應じて、どれでも好きな匂をたつぷりお湯に入れて、——先づ疲れた夏の夜の入浴には、薔薇の花の心に浸り、冒險的な勇しい氣の時には南の海のやうな紫色のラベンダーの匂を浴び、春の宵のやうなうら悲しい氣分の時には、胸を刺すやうなヒヤ

シンスの香をかぐのよ…』ジュデイはそんな空想に耽りながら、すんなりとした頸筋からふくよかな胸にかけて石鹸を塗つてゐた。去年の降誕祭(クリスマス)に、彼女は菫の浴用香水を贈物に貰つた。それは彼女に取つて、最初の最後の香水であつた。何故なら一週二十圓貰つてゐる給料の中で、食費と部屋代と、折々靴の修繕費などを支拂つてゆくとなると、それだけで一杯で、なかく香水などを買ふ餘裕がないのである。浴用香水とか、絹の靴下とか、胸に飾る菫の花束とか自動車などといふものは、若い人の生活をまるで異つたものにして呉れるものであるが、さて、斯うした生きる上に實際必要でないものを求めるといふ事は、彼女の收入が到底ゆるさないのである。

世間には自分の腕一つの働きで、人造絹糸の靴下位はいてゐる婦人はざらにあるが、本物の絹を身につけてゐる人は何人あるであらう！　世間の人はよく「シャンパン標準」といふ事を口にするけれども、鼻の頭を赤くするやうなつまらないお酒など買へなくてもいい、せめて浴用香水位は使へる身分でありたいものである。兎に角浴用香水は贅澤な生活の表象である。

ジュデイは頭腦の中で一生懸命に計算を始めた。一體一週いくら給料を貰つたら、毎日浴用香水を使へる身分になれるであらう？今日を最後として、此美しい夢を誘ふ匂高い入浴に終局を告げなくてはならぬと考へるのは、彼女に取つて堪え難い苦痛であつた。然し何と云つても浴用香水の壜は今日で空になつて了つたのである。若し一週に六十圓貰ふとすれば、一ヶ月二百四十圓になるから、香水代位は樂に出る。これから毎年十圓づつ昇給してゆくとすると、もう後十六年忠實に勤めなくてはならない。すると今から十六年後でなくては、香水の入つたお湯は使へない事になる、

『一寸待つて頂戴！　十六年經つた私はいくつになるかしら…おゝ大變だわ、三十六！そんなお婆さんになつてから香水なんか買へる身分になつたつて、もうつまらないわ…どうかしなくては一層支配人に談判してお給金をあげて貰はうかしら…あの人だつて人間ですもの、よく私の心持を説明したら了解(わか)つて呉れるでせうよ。さうだわ、私明日會社へ行つたら直ぐに、パウネイさんのところへ行つて、香水の事を話して見ませう。——奥様に御聞きになつて御覧遊ばせ、きつと私の申上げる事を道理だと仰言つて下さいますわ。貴郎だつて、葉卷(シガア)や、ゴルフや、自動車が無かつたら、決して愉快な人世を御送りになれないでムいませう。生存するといふ事と、生活するといふ事は異ひます。私は眞實に女らしい美しい生活を享樂したいのです。それで——』ジュデイの空想はそこで破られた。誰か扉を烈しく叩いてゐる。

『ジュデイさん、貴女お風呂の中で眠つて了つたんぢやないの！後がつかへてゐるんだから、いゝ加減に出ていらつしやいよ。』それは同宿のダフヰンの聲であつた。

善は急げ！ジュデイは翌日會社へ出勤すると早速支配人室にパウネイ氏を訪ねた。然しいよく斯うしてパウネイ氏の前に立つて見ると浴槽の中に浸つて考へたやうに容易には香水標準主義を切り出すわけにはゆかなかつた。その上生憎な事には、パウネイ氏は多忙の餘り少々虫の居どころが惡くなつてゐた。彼はジュデイが入つてゆくと不機嫌な顔をあげて、

『何か用ですか？』と訊ねた。ジュデイはおづくしながら、

『私、お願ひがあるのですが…それを説明するのは一寸むづか

しいので…それは私が…』と云ひかけて見たが、どうも思つてゐる事がピッタリと舌の先へ乘つて來ないので、到頭一足飛びに、

『パウネイさん、私があと十年會社に居たとしたら、一體どれ位の給料を頂く事になるんでせう…』と切出した。

『十年ですね…無論會社では出來るだけ社員を優遇してゆく方針ですから、貴女が十年も勤續して呉れたら、確かに一週六十圓の給料にはしてあげられますね。』

『それは精いつぱいの標準なんでせうか』

『まア、會社としては最高標準ですね現在貴女に支拂つてゐる一週二十圓の給料だつて、實際他の會社に比較したら、非常に割がいゝのです。その他にまだ何か云ふ事がありますか？』パウネイ氏は少々苛々して來た。

『え、ムいます。私は今日限り退社する決心をいたしました』。

『何か會社でいやな事でもあるんですか？』

『いゝえ、そんな事ではないのです。只私は僅かばかりの給料に縛られてゐるのがいやなのです。私は何處かお金持になれる機會を摑むにいゝ場所を探さなくてはならないのです。私は自分の收入の標準を――』とまで云つたものゝ、流石にジュデイも、浴用香水の件を茲に出す勇氣はなかつたので、

『詰りあの…まア貴郎方の仰有るシャンパン標準といふやうなもので…』と訥りながらいつた。

『詰りビールの收入で、シャンパンを味はふといふ不平ですね。そいつはごくありきたりの古い云ひ草です。不平をもつて働く人には決して滿足な仕事は出來ないものです。會社といふものは、大勢が集つて協同の利益を分配してゆくところですから、さういふ不平をもつてゐる人には居て貰ひたくないのです。』パウネイ氏はきつぱりと答へた。

ジュデイは膝から全身の力が拔けていつて了つたやうに感じたが、それでも新生涯に向つて、第一槌を打下した心地で勇ましく會社を出た。

『勿論、貴女自身の生活なんですから何をしやうとも勝手かも知れませんけれども、少々向ふ見ずではないかと思ふわ。あそこなら隨分確實ないゝ仕事だつたぢやありませんか。』

『でも餘り確實過ぎるからいけないのよ確實に地位を保つてゐるといふ事は、云ひかへれば如何に働いても一週六十圓以上の收入は得られないといふ事になるんですもの…而もそれまでに漕付けるには、五年や六年の辛棒ぢやアないのよ。それでは私は永久に自分の求める生活が出來ない事になるわ。貴女のやうに二三年すれば結婚するにきまつてゐる人は一週四十圓位で辛抱してゐてもいゝわ。ところが私みたいに許婚のない女は、一生獨身で暮さなければならないかも知れないでせう。だから將來の事も考へなくてはならないわ。フラムレイ商店では私位の年頃の女が月に二三百圓も取つてゐるつて云ふぢやアありませんか。私だつて探したらきつともつといい口が見付かると思ふわ。』とジュデイはダフキンの忠告に對して反駁した。

『貴女は餘り世間見ずで樂天家過ぎるわ。貴女の何とやら云ふ標準なんて、まるで赤旗みたいなものよ。』

赤旗が危險信號といふ意味だとすると、ダフキンの云つた言葉は實に當を得たものと云はねばならない。一日一日と時は過ぎてゆく

が、ジュデイの前途には新職業が影も現さなかつた。彼女はあらゆる方面へ照會して見たが、何處からも彼女が夢みてゐるやうな就職口は降つて來なかつた。

ジュデイは眼前に迫つて來る窮乏に對して、烈しい恐怖を感じた。彼女は前夜洗つた手巾を窓ガラスに貼つて皺を伸す事や、紙を丸く切つて靴下の底に入れて穴を塞ぐ事や、質店では、品物の價格の五掛より貸して異れない事、八錢のお金で、胃袋を充滿させた幻覺を誘ふには、レモネードとドウナッツに限るといふやうな悲慘な智識を増す許りであつたけれども彼女は依然として、浴用香水を標準にして職業を探し求めた。

或日、フラムレイ商店への紹介狀を手に入れたので、彼女は早速支配人に面會しに行つた。支配人は若し雇ふとなると最初三ヶ月間は見習として、一週三十圓づつ支給する規定であると告げた。

『三ヶ月の見習期間が過ぎたらどうなるんでせう』ジュデイは恐恐訊ねた。

『三ヶ月目には、三倍の給金になるか、或は馘首になるんですな。兎に角貴女を見習として採用するや否やは二週間後に御知らせします。』

『もう少し早く御返事を頂けないでせうか。私は大變に急いでゐるので厶いますが……』

『それは不可能です。貴女ひとりの事ではないのですからね、毎日のやうに斯うして紹介狀を持つてくる人が澤山あるので、それを順々にかたづけてゆかなくてはならないのです。』

ジュデイはすつかり氣を腐らせて、重い足を引摺りながら、燒付くやうなコンクリートの道路を横切つて公園へ入つていつた。公園の中には新綠と初夏の光が溢れてゐた。ジュデイは涼しい樹蔭のベンチに空席を見出して、ホッとして勞れた身體を休めた。眼をあげると、目映い日光と、强烈な色彩とが渦を卷いて、五色の玉のやうにクル／＼廻り始めた。

『私はきつとこのまゝ氣絶して了ふのかも知れないわ。』ジュデイは顳顬に手をやつて、ぢつと氣を鎭めた。

やがて日脚が傾いて樹木の影が延びてくると、一人去り、二人去りして、人々はそれ／＼家庭のある者は樂しい食卓へ、懷中に金のある者は料理屋へ晩飯を食べに行つた。塵埃をあげてわめき騷いで居た兒童達も、空箱の上に立つて、御用聞の小僧を聽衆にして政談演説をやつてゐた男も、いつか影を潜めて了つた。ガランとしたベンチに唯ひとり殘つてゐるのは、先前から書物に讀耽つてゐる、青年だけである。彼の靴はもう修繕しなくてはならぬ程、酷く破損むでゐた。自分がぼろ靴で我慢しなくてはならぬ境遇に墜ちると、不思議に他人の靴の破損が目に付くものである。ジュデイは此青年も矢張りお金に困つてゐるのかしらなどゝ漠然と考へてゐた。

遠くで時計が八時を報じた。四邊にはそろ／＼夕闇が迫つて來た。青年はふと立上つて、公園の大理石門の方へ歩き出した。ジュデイも何といふ事なしに、その後からついていつた。彼女は電車賃さへも節約しなくてはならぬので、ケレジントン街にある下宿まで可成の路程を歩いて歸るのである。

公園の外へ出ると、ジュデイは珈琲屋臺の前に足を停めた。彼女は晝食に丸パンを一個食べたきりであつた。

『レモネードとドウナッツを一つ頂戴！』ジュデイは思ひ切つて註文した。

『誠に御氣の毒さまですが、ドウナッツはもう賣切れになりました。最後の奴(やつ)をあの旦那にさし上げて了ひましたので……』白い前掛をした亭主がレモネードをグラスに注ぎながら答へた。

彼女の筋向ふに、公園で見かけた例の青年が、最後のドウナッツを前に置いて、片手に珈琲のカップを持つて立つてゐる。

『あらまア！』ジュデイは、まるで聖ピーターが、天國の扉を鼻面(はなづら)でピシャリと閉ぢられた時に出しさうな聲を發した。彼女は自分の顔中の筋肉が失望の爲めに縮むでゆくのを覺えた。今の場合、ジュデイに取つてドウナッツが賣切れたといふ事は國が亡びて了つたよりももつと重大な問題である。

青年は彼女のさうした表情を見て取つたと見えて、周章て珈琲を下へ置いて、ドウナッツの皿をジュデイの前へ差出した。

『何卒これを召上つて下さい。 僕は今燒パンを貰ふ事になつてゐますから……』

『いゝえ、それは貴郎のドウナッツですもの……』

『そんな事はありません、僕が只一足先に來たゞけの事です。 そら燒パンが來た！ 僕はこれを食べますから、貴女はドウナッツの方を御取り下さい。』青年は氣輕に燒パンを食べ始めた。

『まア、まるで「麗はしの都」の中に出てくる聖アントニイの最後の蠟燭みたいですわね。』と云つて了つてから、ジュデイはハッとして唇を閉ぢた。そんな事を云つて、相手がドウナッツを犧牲にして呉れた事に對して、自分がロマンスを胸に描いてゐるやうに取られはしないかと思つたからであつた。

『僕もあの物語を讀みましたよ。』青年は瞳を輝かせて答へた。いつの間にか若い二人の腦裡から珈琲屋臺に居る事など消えて了つて、立派な料理店の特別室にでも居る樣な愉快な氣持になつてゐた。

『お互が、斯うしてドウナッツを介して知り合つた以上は、七面倒くさい作法なんか超越して、自己紹介をしてもいゝでせうね。僕は二ヶ月前まではリード市にある伯父の鐵工場で働いて居ましたが、今では御覽の通りの、クリストフア、メドウエイといふ失業者です。』青年は失業者である事を喜ぶやうに云つた。

『私の名はジュデイ、ブラッドフオードと云ひます。 以前は或會社でタイピストをしてゐましたが六週間程前にやめましたの。』

『どうでせう？ 暫時御一緒に歩かせて頂けませんでせうか。』

二人は屋臺を出て、西の方に向つて、悠々と歩き出した。

『貴女はどうして會社を御罷めになつたのです？』

『私は自分の主義の爲めに退社したのです。 詰り或標準收入の下に働かふといふ事を考へたのですが、説明しても解つて頂けるかどうか判りませんわ、』と云つてジュデイは浴用香水の件を話した。

『成程、よく解りました。 人間は誰でも自分の生活を向上させてゆかふと努力するのは、正當な事です、それは貴女御自身に對する義務ですからね。僕は大いに貴女の主義に共鳴します。』

『では貴郎も何か主義があつて、 伯父樣の工場を出て御了ひになつたんですか？』

『まアさうですね。 最初からの經緯(いきさつ)をお話すると、大變に長くなりますが、兎に角伯父は僕の事を「つむじ曲りのわからずや」だと云つてゐます。若し僕が伯父のところへ戻るとすると、それは伯父に取つて非常な勝利になるのです。無論僕は石に噛り付いても、そんな屈辱に甘じない決心ですがね。』

『世間の人は誰でも私達の事を聞いたらきつと「つむじ曲りのわ

いゝからずや」だと云ふでせうよ。でも私はフラムレイ商店へ入りさへすれば、萬事がよくなるのです。只時間の問題で、二週間の間だけかうして中ぶらで待つて居ればいゝんですわ。』

『すると吾々は一種の革命家ですね。どうです二人で「つむじ曲り結社」といふのを組織して各自の主義を貫徹させる爲めに協力しやうではありませんか。』

『賛成ですね、さしあたり貴郎が會長で私が副會長といふ事にしませう。』

『では黨員は毎日一定の時間に、公園のアキレスの像の下に參集する事、吾々結社の標語は「二週間は閏年と雖十四日以上はない」といふ事、吾々は飽くまでも己の主義を保持して、一週六十圓以下では決して働かぬといふ決議をしませう。ぢやア又明日、左様なら黨友(カムラード)ブラッドフオード！』

『左様なら黨友(カムラード)メドウエイ！』ジュデイは勇ましく答へた。

第十三回「つむじ曲り結社」の會合は、正二時三十分、ハイドパークのベンチに於て開催された全黨員が參集した。と云ふのはジュデイとクリストフアとが同じベンチに腰かけて、深遠な空想を語つてゐる事である。

『いよ〳〵明日はフラムレイ商店から何とか返事があるんですね。貴女の就職口がきまつたら、僕はどんなに安心するか判りません。』クリストフアがしんみりとした口調で云つた。

『貴郎にまでそんな御心配をかけては眞實に濟みませんわ。』

『濟みませんなんていふ言葉は吾々の仲間では禁物です。黨員はお互の幸福を心から祈るのが當然ですからね。』

『さう云へば貴郎の咳(せき)は如何です？』

『先づお寺の庭といふところですね。よくもならず惡くもならず…。』

『肝油を試して御覽になつて？』

『いや、まだ買ひません。』ジュデイは、何故クリストフアが咳の藥を、買はないかといふ理由を、余りに明白に知つてゐるので、それ以上追求しやうとはしなかつた。

『私は明日の朝九時半きつかりに、フラムレイへ行つて見ますわ。若しきまつて呉れたら——』

『僕もそれを祈つて居ます。あの店は非常に待遇がいゝさうですから貴女があそこへ勤めるときまれば、萬歳ですね。』

『貴郎の方はどうなつて？』

ジュデイはクリストフアが近頃時計を持つてゐない理由、それから何處で食事をしたか明白に答へない理由等々を推察してゐるので、暗い氣持ちになつた。

自分が空腹を堪えるといふ事は、可成り辛い事であるが、それよりも更に苦痛なのは、誰か——殊に魅力のある瞳と、痛々しい程頸筋の細く美しい人が——僅かばかりの香水に困つてゐるのを知つたり、或はその人に花束を贈りたがつたり、新しく靴を買つてやりたかつたりした場合に貧乏な爲にどうする事も出來ない時である。クリストフアはジュデイの窶れた姿を見ると、全人類の苦惱を自分の雙肩に荷つてゐるやうに感じた。

『僕は明日の朝十時にフラムレイの入口で貴女を待つてゐますよ。僕も明日(あした)は十二時に或る人に會ふ約束になつてゐるのですが、自分の事よりも、貴女の事の方が餘計に氣がかゝりなのです。ねえ

ジュデイさん、若し世の中に神様といふものが眞實に存在してゐるなら、きつと今にいゝ事が來るでせうよ！』彼の言葉には心の底から溢れてくる親切が籠つてゐた。

翌朝九時四十五分にクリストフアは、フラムリイ商店の前に立つて、造花で飾られた飾窓を眺めてゐた。

九時五十分に、ジュデイは蒼白(まつさを)な打ち拉がれた樣な顏をして建物から出て來た、クリストフアは彼女の泣き出しさうな表情を見て、

『奴等は貴女を斷つたんですか！』と急込んで訊ねた。

『それよりも、もつと惡いんです』ジュデイは情なさうに云つた。

『もつと惡い？　世の中にそれよりも惡い事があるでせうか？』

『支配人が病氣なのですつて、それでもう二週間待たなければ、どうなるか判らないんですつて…』と云ひ終ると同時にジュデイの眼から涙が溢れ出た。

『可哀相に！　可哀相に！』クリストフアは幼兒を賺すやうに云つた實際彼はジュデイに對する同情をそれより他言葉に現はし得なかつたのである。彼はジュデイの腕を取つて近くの喫茶店へ連れていつて、最後の十圓をくづして熱い紅茶を註文した。そしてジュデイが自分の分を支拂はふとして出した十二錢を無理に押返へして、

『いゝんですよ、これは結社の基本金から出費した事にしますから…それに一面から云ふと、此一杯の紅茶は、非常に經濟的な効果を齎しますからね…さうでせう？　これで吾々は家まで歩いて歸るだけの勇氣を養つたから、電車賃の節約になります。殊に今日のやうに天氣のいゝ日に歩くといふ事は貴女の健康の爲めにもいゝ事ですからね。』と云つた。

二人は初夏の暖い日光を浴びながら、無言で忙しく行交ふ人々の中を歩いてゐた。誰も彼もが一定の職業をもつてゐる！　ジュデイは、一週二十圓を貰つて暮した當時を回顧してホームシックに似た感を味はつた。たとへ幾許でも定つた收入があつたなら、クリストフアの肩から重荷を下す事が出來るであらう！　彼は自分の事を心配して、日毎に瘠せてゆくのが眼に見える。彼は男だけに自分を保護する責任を感じてゐるらしい。ジュデイは自分がクリストフアに苦痛を與へてゐるといふ事を考へるのは堪え難く思つた。

『僕はこゝに用があるのです。では結社の會合は明日十時半といふ事にしませう。お互にいゝ話をもつてゆきたいものですね。まア元氣をお出しなさい。サヨナラ黨友(カムラード)！』

クリストフアは勢よく建物の中へ入つていつた。彼の窄らしい洮が階段の上に消えて了ふとジュデイは急に足を早めて歩き出した。若しも彼女が以前のやうに就職してゐたなら、クリストフアの爲めに色々と盡す事が出來たであらうに…たとへば咳の藥とか雞の肉とか雞卵などを、田舍からの到來物だといふ事にして相手の自尊心を傷つけないで贈る事が出來たものを…さう思ふと、ジュデイはつくぐ〵と自分が職業を棄てゝ了つた事を後悔した。

『やア！　ブラッドフオードさんぢやアありませんか、その後如何です？』と不意に聲をかけられて、びつくりして顏をあげると、彼女の前に立つてゐるのは以前の會社にゐたグラデスであつた。

『相變らずです。』

『昨日も會社で貴女の噂が出たんですよ。貴女の後に來たタイピストは昨日暇を出されたものですからね…何しろその女といふの

は、てんでタイプライターなんか打てやアしないんで、さつぱり役に立たないものですから、パウネイさんが癇癪玉を破裂させて了つたんです。なかなかいゝ人を探さうたつて、急には見付かりませんからね、パウネイさんも弱つてゐるのでせう。』

『では又誰か人を探してゐるのでせうか？』

『無論ですとも……然しなかなか氣に入つた人がないやうです。貴女が他へ勸めて了つたのは、實に殘念ですね。』

『私はまだ何處へも勸めてなんかゐませんわ』。ジユデイの自尊心は跡かたもなく消えていつた。グラデスが何と思はふが、パウネイ氏が何と云はふが、最早そんな事は問題でない。彼女の眼前には、クリストフアの窶れた顏が浮んでゐる。主義も標準も無い。只職業にありつきさへすればいゝ。そしてクリストフアに安心させさへすればいゝのである。

『さうだわ、私はこれから直ぐにパウネイさんのところへ飛んで行つて、もう一度雇つて貰ふやうに賴みませう……』ジユデイはすつかり赤旗を卷き下して了つた。

ジユデイはいよいよ月曜日から、パウネイ氏の許で、再び働く事になつた。彼女の腦裡にはクリストフアに對する樣々な計畫が走馬燈のやうにクルクル廻つてゐた。彼はどんなに安心するであらう！彼の輝いた顏を胸に描いてジユデイはすつかり幸福になつた。

ふと卓子の上へ眼をやると見馴れない筆跡の封書が置いてあつた。急いで封を切ると、クリストフアの署名がしてある。それは彼女が彼から受取つた最初の手紙であつた。

――親愛なるジユデイさん！　僕は殘念ながら今日の集會には出席出來ません。何故なら、僕は急にリード市の伯父の許へ歸る決心をしたからです。何卒僕を意氣地なしだなど輕蔑しないで下さい。僕は世の中を見て、少し大人になつたのです。殊に貴女に會つてから、僕の人世觀がすつかり變つて了つたのです。

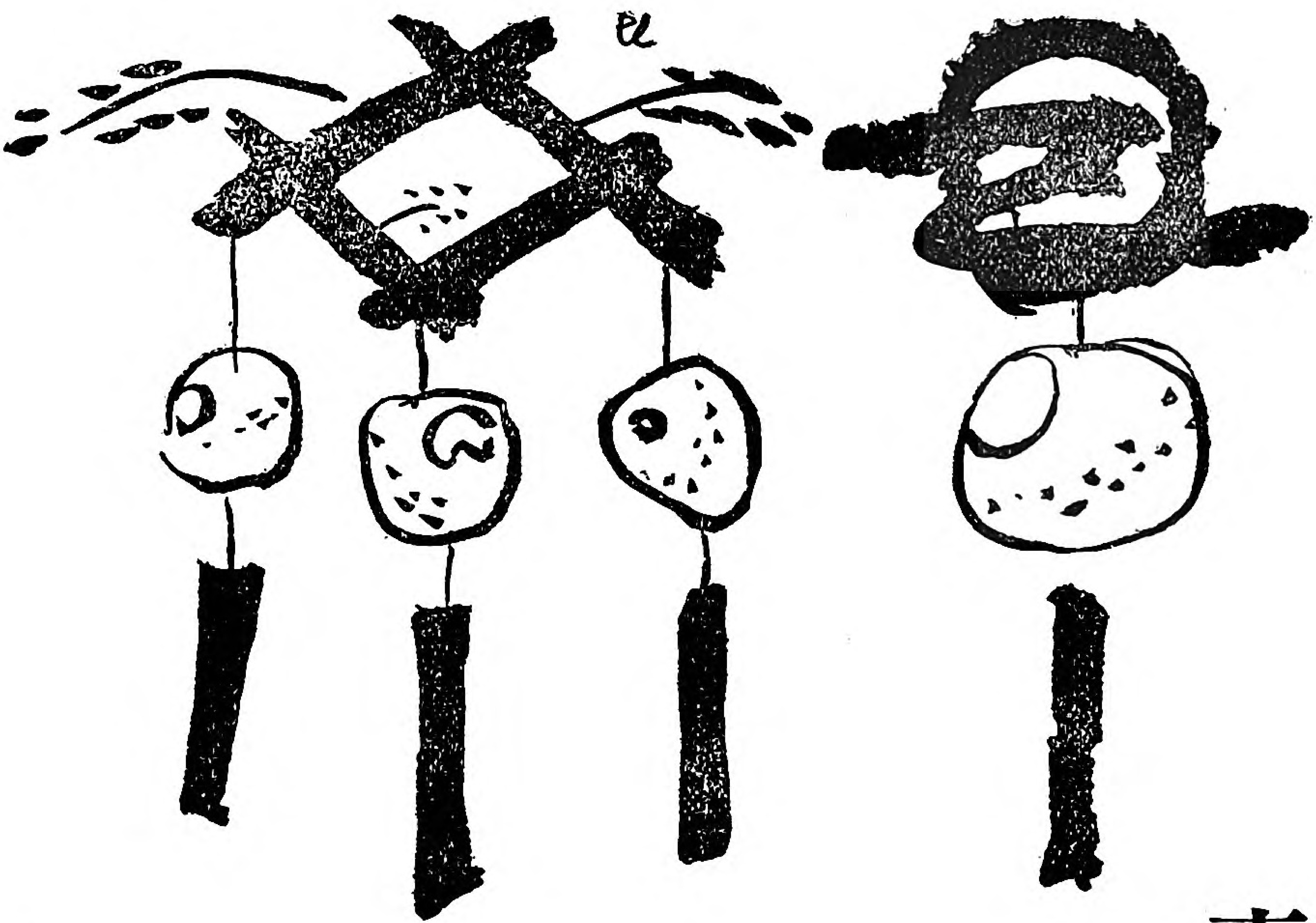
僕は貴女にいろいろな事がして上げたいのです。僕は貴女を貧しい生活に置くに堪えないのです。貴女を幸福にする爲に僕は善良な青年になつて、伯父のところへ歸るのです。

貴女は僕がどんなに深く貴女を愛してゐるか解つて下さるでせう！　僕はもつともつと早くこの事を貴女に云ひたかつたのです。僕は貴女を愛してゐます、今年いつぱいはまだ、貴女の浴用香水標準の生活に到達する事は出來ないでせうが、近い將來には必ず貴女を御滿足させる事が出來ると、自信をもつてゐます。

若し貴女が僕を愛して下さるなら、何時結婚して下さるか、聞かせて下さい。ジユデイさん！　愛するジユデイさん、何卒出來るだけ早く御返事を頂かして下さい。――クリストフアより。

ジユデイは此手紙を二度も繰返へして讀むだ。そして讀みゆくうちに涙がこみあげて來た。

『あゝ、クリストフアさん！　貴郎は私の爲に伯父樣のところへ降參しにいらしつたのね？　私も貴郎の爲に屈辱を忍んで、パウネイさんのところへあやまりに行つたんだわ。でもそんな事はどうでもいゝわ、お互の愛の爲めなら何だつて忍べるのよね……』ジユデイは自分とクリストフアとが期せずして、同じ途を辿つてゐた事を知つて泣笑ひをした。（完）



青葉の唄

——二幕五場——

木村富子

時　文政の頃　春の夕より盂蘭盆へかけて

所　第一場　島原揚屋丸屋の奥座敷
　　第二場　京に近き或る山道
　　第三場　青葉の部屋
　　第四場　引手茶屋桔梗屋の店先
　　第五場　青葉の部屋

人物

島原の遊女　青葉　　妹分　若葉
座頭　菊市　　禿　千彌
同　吉彌　　仲居　おもん
同　おせい　　一文字屋女房　おふみ
桔梗屋の亭主　與兵衛　　同　女房　おむら
同　娘　おてる　　同　女中　おまき
醫者　玄徳

第一場

島原の揚屋、丸屋の奥座敷、正面に床の間、違ひ棚、繪襖あり。座敷には、莨盆、脇息、褥などのほか、銚子、杯など其のまゝに取散らし、今し方客の立ちたる後の體よろしく、仲居のおもんとおせいがあたりを片附けて居る。晩春のくれ方。

（道中を知らせの拍子木が冴えて聞える。下手の廊下から、一文字屋の抱女青葉が、酔ひたる足どりにて入り來り、座敷の脇息の上へ、くづをれるやうに肱を突く。禿の吉彌が後から來て介抱する。おもんとおせいは眉をひそめる。）

おもん　もし、太夫さん、何うなされた。氣合でも悪うムんすかえ。

おせい　今日はいつもより、酒が過ぎたやうでムんすな。

（吉彌は氣遣はしさうに、青葉の背を撫でやうとする。青葉はその手を煩さゝうに振拂ふ。）

青葉　あい。わたしはもう〳〵最前から、氣上せがして成らぬところ……少しの間、此處で靜に休まして置いて下さんせ。

おもん　それは難儀な事でムんせう。そんなら何か藥でも……。

（ト立ちかける。）

青葉　いえ〳〵構ふて下さんすな。藥なら此處に酒がある。一人でじつとして居れば、ぢきに落付く私の病……。（吉彌に）さあ、汝も彼方の座敷へ往て、ひら様のお傍に附いて居や。

（おもんとおせいは目を合はして頷く。）

おせい　さういふ事なら一時ほど、此處にお寢つて居なさんせ。

（二人は枕と小揚巻を持つて來て、青葉を寢かす。）

おせい　ひら様の方は、みんなで好いやうに勸めて置きまする。

おもん　今し方三番の拍子木が聞えたゆゑ、もう道中も見ゆる時分……さあ〳〵、吉彌どのも一緒にムんせ。

おせい　今年は大阪屋の長門さまが傘止ぢや。

吉彌　太夫さん、そんなら後にえ。

二人は吉彌を急き立てゝ下手へ去る。青葉は起直る。

青葉　毎年同じ事を珍しさうに、道中が何ぢや。傘止の太夫が何ぢや。去年まではわたしもあゝして騒がれたが、落目に成れば目に見えて、此頃のしなしぶり……面當がましい今の言葉は……。

（青葉は腹の立つ思入。やがて懐中から讀みさしの文を出して讀み返し、それを疊の上へ打ちつけて泣く。此のうちに左の小唄が聞えてくる。）

唄〽人と契るなら薄く契りて末遂げよ、もみぢ葉を見よ、薄きが散るか、濃きが先づ散るものにそろ

（青葉は銚子杯を引寄せ手酌で飲む。廊下に足音がするのでそちらを見ると、座頭の菊市が入口に腰をかゞめて居

る。)

青葉　誰ぢやえ。

菊市　御免下さりませ。(ト中の樣子を窺つて膝を突く。)太夫さまお一人でムりますか。

青葉　菊市どのか。わたし一人ぢや。まあ、ずつと入りなさんせ。

菊市　有難うムります。(ト入る。)

青葉　久しう顔を見せなんだが、患ふてゞも居なさんしたか。

菊市　左樣な譯ではムりませぬが……急に、江戸へ行かねば成らぬことに成り今日はお暇乞ひに上りました。(ト淋しさうに言ふ。)

青葉　なに、江戸へ……。此の人さんも江戸へ行かれた。(ト以前の文を見て一寸思入。)江戸は其のやうに好い處でムんすかえ。

菊市　好いの惡いのと申したところで、私の爲には生れ故鄕。殘しておいた一人の母が、大病の知らせを聞き、息あるうちにひと目逢ひ、せめて末期の水なりと汲んで遣りたさ……それで參るのでムります。

青葉　(何か心に障つた體で)それは嘸かし心懸りな事であらう。したが、お門も多いに私の處へまで、わざ／＼暇乞ひに來なさんしても、知つての通り今の始末では、餞別して上げる工夫もなし……お氣の毒な事で　んすな。(トつんとする。)

菊市　もし太夫さまそりやまあ何を仰しやるのでムります。此の菊市は、其のやうな心で參つたのではムりませぬ。思違ひをして下さりまするな。(おろ／＼して言譯がましくいふ。)

青葉　ほゝゝゝゝ、勘忍して下さんせ。以前と違ひ此頃では、行きつまつた私の身の上。身體ばかりか親方の首尾もわるく、お前を初めあちら此方へ不義理も重なれば、何かに附けて氣が廻つて成りませぬ。さ、仲直りに一つ受けて下さんせ。(と無理に杯をさす。)是はひら樣が態々取寄せなさんした、伊丹の關菊といふ名酒とやら……。

菊市　有難うムります。(ト受けて)何にしても太夫さまの御機嫌が直り、やう／＼安心を致しました。ひら樣にはいつもながら御全盛な……おゝ、今日は道中を御見物でムりますな。わたくしも後にお目にかゝりませうが、それにつけて、近頃は清見の殿樣に、一向御意を得ませぬが、お便りでもムりまするか。

青葉　その清さまとは、退きました。

菊市　えゝツ。

青葉　最前から、言ふまい／＼と思ふても、どう堪へても、口より先に涙がこぼれる……。菊市どの、聞いて下され。私は清さまに捨てられました。(ト杯をおいて俯く。)

菊市　はゝゝゝゝ。太夫さまとした事が。てんごうばかり。見捨てるの、捨てられたのと、清さまと太夫さまとは、其のやうな水

臭い仲では厶りますまい。お仲が好すぎて痴話とやら…もし太夫さま盲には罪な話で厶ります。

青葉　何のお前に嘘を言はうぞ。鴨川の水が逆に流れても、誓つた言葉に嘘は無いと、今日が日まで心に極めて居た私の愚さ。數へて見れば三月ほど前から、文も首尾も果敢なく成り、此頃ではばつたり足が遠のいたを、案じ暮して居た處へ、馴染の小間物屋が、江戸からよこした此の文には、何時の間にやら清さまは、江戸のお屋敷へ戻らんして、今では立派な奥様までが有るとの事。怨みが一言いひたうても、儘ならぬ籠の鳥で、人に隠れて悶えるばかり…口惜しいやら恥しいやら…これ菊市どの。私は男の手管にのせられ、廓中の笑ひ草に成つたので厶んすぞえ。

　青葉は煙管を突く手の上に額をのせる。

菊市　思ひもよらぬ清さまのなされ方。あのお方には太夫さまも、内々身揚りまでしてお勤めなされた眞實を、今更と成り何といふ身勝手な…さぞお腹も立ちませう。お前さまのお心はお察し申して居りまする。

青葉　腹立たしう思ふ傍から、愚痴に成るのも女子の常。待宵なら、口紅の色も冴えやうに、今宵からは當もない一人旅で、田甫へ迷つて、日が暮れても、たよる灯影も見えぬやうな、淋しい身の上に成りました。

　暫時は二人とも無言に成る。騒ぎ唄の音が遠く聞える。

青葉　何が面白うて騒ぐのやら、あゝ、もう〳〵柳櫻を見るのも可厭、生きて居るのも可厭に成る…浮世の春も今年が見納め…（言ひかけて氣を變へる。）ほゝゝゝ。菊市どの、阿呆な女子ぢやと、たんと笑ふて下さんせ。さあ〳〵、もう陰氣な話は止めにして、めでたい門出ぢや、もう一つ受けて下され。それ注ぐぞえ。

　（青葉は銚子をとり上げる。菊市は其の手を押へて）

菊市　マヽヽヽ待つて下さりませ。もし、太夫さま。あんまり隔てが過ぎまする。何故打明けては下さらぬ。此の菊市は目が見えいでも、お前さまの今のお心の底の底まで、好う見抜いて居りまするぞ。（決心して）太夫さま。わしはもう江戸へは歸りませぬ。ふつつりと思ひ切りました。

青葉　そりや又何故で厶んすえ。

菊市　お前さまの身の上が、氣遣ひで成りませぬ。是まで力とお頼みなされた、清さまのお心變りは是非もないが、目の前に迫つた紋日の入費、わづかの金でもお前さまが怯を取らずに濟む事なら…もし、此處に五十兩ほど厶ります。さ、さ、何にも言はず此の金を、心置きなくつかふて下さりませ。

　菊市はあたりへ氣を配りながら、忙はしく取出した胴巻の金を、青葉の手へ無理に渡す。青葉はそのまゝじつと菊市の面を見る。

青葉　勾當とやらに成りたい望みから、はる〴〵京三界まで來たお前が、持つてゐた大枚のお金を、五兩へらし、十兩減らし、私へ貢いたその揚句、小判一枚殘らぬやうにして是から先、どう成らうと思はんす。

菊市　……。

菊市は唇をかみしめたまゝ、たゞ、ほろ〳〵と涙をこぼす。

青葉　堅いといふたら、壬生寺の地藏樣か島原の菊市かと、世間で言はれるほどのお前が、多くの客しゆに勸めるやうに、手管でいふた言葉を眞に受け、私といふものに近附いたのが一生の誤り、悔んでも怨んでも、もう取返しが附かぬぞえ。

菊市　手管で有らうと、口先ばかりであらうと、此の半歳このかたに、盡くして下されたお前さまの親切は忘られませぬ。片輪で一生涯淋しく暮らさうより、たとへ僅の間でも、生き甲斐のある月日を送つたと思へば、人間の望みは足りて居るはづ……もう此上はいつ何時、死んでも心殘りはムりませぬ。（ト思ひ入つた體で言ひ切る。）

青葉　もし、菊市どの。（ト熱心に摺り寄つて手を取る。）醉ふて管卷くと思はんすな。此の青葉は今初めて、男の眞實といふものが身に染みました。さ、私と一緒に死んで下され。

菊市　えゝッ。

青葉　今と成つて何の思案。私は疾うから死ぬ氣で居た。二人の覺悟が一つに成れば、恐ろしい事も何も無いはづ……それともお前は可厭でムんすかえ。

菊市　（狂喜してふるへながら）太夫さま。それは實際の事でムりますか。

青葉　まだ手くだぢやと思はんすか。

菊市　滅相もない、それが實際の事でムりますなら、何の否やがムりませう。心柄とは言ひながら、お前さまの情にほだされ、一人の親へは不孝を重ね、今更に成りをめ〳〵家へも行かれぬ身の上。太夫さまと御一緒なら、私は死花の咲く果報者、もう何處へなりと參りまする。

青葉　然う心が極まつたからは、明日とも言はず、道中の騷ぎを幸ひ、今宵のうちに此處を脱けて出るほどに、お前も人に悟られぬやう、四つの鐘を相圖に、西口へ廻つて居て下さんせ。道は知らぬが何處へなりと、私が手引をして立退かう。さ、此のお金は兎も角も、しつかりとお前の肌身に附けなさんせ。

（青葉は胴卷を菊市に渡す。菊市はふところへ仕舞ふ、此時仲居のおもんが燭臺を持つて來る。）

おもん　何時の間にやら暗う成つた。もし太夫さん、お照らしを持つて來ましたぞえ。

（おもんは座敷の入口で、探り出でんとする菊市に突當り、

灯を消してしまふ。青葉はそつと廊下へすりぬけ、菊市の耳へ何か囁く。）――道具廻る――

第二場

前の場と同日の深夜。京に近い或る山路で上手は崖、その下には流れのある心で、うすく水の音が聞える。崖端には松の木、其の下に菅笠をかむつた一基の地藏尊が有つて、草花がともしく供へてある。正面に低い山々があるが、あたりには霧がこめて、はつきりとは見えない。

吹流しに手拭をかむり、小褄をからげた青葉が、菊市の杖のはしを持つて出て來る。よき處へ立止り

青葉　まあ、恐ろしい霧ぢや。こゝらは雑木山と見えて、木の葉にたまつた雫が掛かつて、裾も袂もびつしよりに成つた。お前もさぞ氣味が悪うムんせうな。

青葉は菊市の肩を抱くやうに、後から兩袖でおほふ。

菊市　たとへどのやうに濡れそぼたうとも、死にゝ行く身の、厭ふ事では厶りませぬが、お前さまこそ盲の手引きで、石や泥の荒れた道に、足を痛めは成されぬか。

青葉　（淋しくほゝ笑む。）何のまだしも、針の山が目の前で厶んす。

此時、時鳥が啼いてすぎる。菊市は耳を傾ける。

菊市　もし、今のは、時鳥で厶りましたな。

青葉　（空を仰ぐ。）二人の爲には黄泉の知るべかも知れぬ。さう言へば、今の先に渡つた橋が、此の世を名殘りの、見返橋とでも言ふやうな……あれから餘程上つたせいか、流れの音が霧の底から、幽に聞えて來まするぞえ。

菊市　おゝ、ほんに……。したがお前さまは、京の街に名殘りが惜しうは厶りませぬか。此のやうな淋しい場所で死んで行くのが、悲しいとは思ひませぬか。

青葉　ほゝゝゝゝ。（ト冷やかに笑ふ。）戀しい浮世なら、何で此處まで脱けて來ませう。斯うまで成つて何の未練…末の末まで言交した男を、江戸の女子に取られた私が、其の江戸で明けくれ歸りを待つて居る母御の手から、お前といふものを取上げてしまふも何かの因縁。お互に一人づつ生まれて來た知らぬ同士が、十萬億土とやらの遠い旅へ、手を引合ふて行かうといふ、縁は不思議なものでムんすな。

青葉は地藏尊の前まで來て、あたりの様子をうかゞふ。

青葉　おゝ、此處にお地藏様がある。此の崖の下は谷川らしい……（ト水の音に耳を澄ます。）

菊市　お地藏さまの下が谷川とは、誂へたやうな死場所。此處までくれば、追手の人も氣が附くまい。もし太夫さま。

（菊市は立止つて青葉の袖をひかへる。青葉は頷く。）

青葉　何處まで行つても、死場所と定まつた處も有るまい。そんな

ら此處で……

（二人は身づくろひする。青葉は傍の草清水を手に掬つて飲み、菊市にも飲ませる。）

菊市　左様ぢや。死んで行く二人には用の無い此の金。未來をたのむお地藏様のお心任せに、お預け申して置くとしませう

菊市は探り手に、胴卷の紐を地藏尊の首へかけて合掌する。

青葉　さあ、其の杖の片端は、私に持たせて下さんせ。

青葉は杖の端を取る。折からさら〳〵と梢を鳴らす夜嵐の音を、追手と思つて菊市は慌てふためく。

菊市　誰やら來たのではムりませぬか。見とがめられては大事ぢや。もし太夫さま。かならず後れて下さるな。（トわなゝく足で崖端へ進み）南無阿彌陀佛。

菊市は杖を持つたまゝ飛び込む。激しい水の音。青葉も續いて飛込まうとする、がハッと氣後れがして、足は釘づけられたやうに成る。間。氣を取直して身構へたが、何物かにひかれるやうに、たぢ〳〵と後へよろめき、傍の松の幹で身體を支へる。

青葉　あゝ、死なれぬ、死なれぬ。今に成つて死なれぬとは淺ましい……。

三度飛込まうとして果さず、ぐつたりとして其處に座つてしまふ。霧が晴れて、薄月が出る。青葉は夢の覺めたやうに、ホッとしてあたりを見る。

青葉　是までに成つても死なれぬとは……（頷く。）所詮死におくれたとしたら、こりやいつそ思返して廓へ歸り、親方へ詫言するがよい分別……。（谷底へ向ひ手を合はせる。）これ菊市どの。どうぞ堪へて……。その代り此の金で、お前の後世は弔ひまする。約束事ぢやと諦めて下さんせ。

（青葉は立上り、以前の胴卷を取つて肌身につける。梢がそよいで雫が落ちる。）

青葉　あゝ又ばら〳〵と……。もしお地藏さま、此の笠もお借り申しますぞえ。（ト地藏尊の菅笠をとつてかざす。）誰が置いて行つたやら同行二人も今と成つては氣がさゝる事ぢや。

（青葉は再び上裱をからげ、探りながら元來し方へ引返す。うすく雨の音がして、ほとゝぎすの聲つゞいてきこゆ。）

——幕——

第三場

一文字屋の二階、青葉の部屋。二間續きの部屋で、正面には手摺附の緣側があり、軒には荵、風鈴などをつるし、青簾をかけ、その向ふは往來で柳の大樹が梢だけ見える。上の方の一間には、青葉が病臥してゐる心で蚊帳をつり、下の方

は廊下で、はしご段の下り口が見える。

座敷のよき處に籠行燈を置き、少し離れて醫者の玄德と一文字屋の女房お文が、莨盆を間に對座して團扇をつかつて居る。妹分の若葉は椽側で蚊遣りの支度をして居るなど。前幕と同じ年の盂蘭盆の夕暮の風情よろしく、大踊りの囃子の音きこゆ。

お文　お盆が來てさへ日のうちは、まだ〳〵暑い事でムります。その上此の日照り續きでは、御病家廻りもお大抵ではムんすまい。

玄德　其の代り明後日の晩は、大文字が好う拜めるといふもの……此の分では河原の納凉も、定めて賑はふ事でムらう（心付いたやうに）おゝ、賑はふと言へば、踊りの囃子がよう聞えまするな。

若葉　日が暮れるとすぐに初まりますが、此の上囃し立てられたら、いつそ上せて氣が狂ふかも知れませぬ。

玄德　では愚老が些と脈でも取つて進ぜやうかな。はゝゝゝゝ。（お文に）ところで、太夫さんの容體は如何でムるな。

お文　今すや〳〵と寢入つて居りますが、熱のせいか、時々妙なうわ言を申しますので、禿しゆも氣味惡がつて寄りつかず、ほんに困つて居りまする。

玄德　餘程心が疲れてお出でと見えまするな。どれ、お見舞申すといたさう。

お文　どうぞお願ひ申しまする。

（若葉が蚊帳をはづすまに、お文は玄德を病間へ案内する。）

若葉　もし、姉さま。お醫者さまが見えましたぞえ。（ト起こさうとする。）

玄德　いや、却つて其のまゝが宜しうムる。

玄德がしづかに枕邊へ進み寄り、青葉の脈を取らうとする時、青葉は不意に跳ね起きて、其の手をはらひ逃身に成る。

青葉　あれ、あれえ……恐い……恐い……勘忍して……。

玄德　これ〳〵、何も恐い事は無い。わしぢや。それ、玄德でムるぞ。

青葉は玄德の面をじつと見てホツと息をつき、淋しく笑ひながら、頰にかゝる亂れ毛を細い指でかき上げる。

玄德　はゝゝ、どうなされた。何ぞ恐ろしい夢でも見なされたか。いや、此の暑さでは、寢苦しいのも無理はムらぬ。（ト首ひつつ脈を取る事など宜しくあつて）幸ひ熱氣も取れたやうぢや。是からは一つ處にこもつて居ずと、折々は床を離れて、氣を晴らして見なさるが好い。

青葉　有難うムんす。おかげ樣と昨日今日は、頭の方の痛みも大分とれましたが、長く寢付いて居るせいか、夜に成ると身内が痛み、それに此處が術なうて成りませぬ。（ト胸を抑へる。）

玄德　それも皆熱の所業ぢや。藥も加減をして置くゆゑ、やがて一

日増しに快く成らう。必ずきな〳〵さつしやるな。

玄徳が言ひ聞かして居るうちに、青葉はあたりを見廻して、ふと、後の壁に大きく寫つた玄徳の影を見出で、アッと叫び忽ち袖で面を俺ふ。

青葉　あれ又あそこ‥‥(ト壁を指す。)

お文　あそこにとは‥‥。

若葉　もし姉さま。お前何を見やしやんしたえ。

(人々は不思議さうにあたりを見廻す。)

玄徳　おゝ、あれか。あれは愚老の影法師ぢや。何も怪しいものではムらぬ。はゝゝゝゝ。

(若葉は青葉の背を撫でさする。)

若葉　まあ、姉さまとした事が、此酷い息づかひわいな。些と落付いて居なさんせ。

玄徳　左様ぢや〳〵。成るべく落付いて寢んで居なさるが好い。では又明日伺ひまするぞ。

お文　御苦勞様でムりました。(若葉に)では太夫さんに隨分氣をつけて‥‥頼みましたぞ。

(お文は玄徳を送りながら、階段を下りて行く。何處やらから鉦を叩く音が聞える。青葉は苦しい息づかひで、胸をさすりながら)

青葉　寢れば夢、覺めては現とどうして斯う物におびえるやうに成つたやら‥‥あゝ息が切なうて成らぬ。若葉どの、お冷水を汲んで來て下さんせ。

若葉　あい〳〵。

(若葉は湯呑に水を汲み、盆へのせて持つてくる。青葉はその水を一口飲む。)

青葉　あゝ美味しい‥‥久振りで醉醒の水のやうに‥‥(軒端を透かして見て)まあ今夜は、お星様が一つも見えない、暗い晩だね。もう何どきぢややら‥‥(ト考へる。)

若葉　(そのまゝ青葉の背を撫でながら)さあ、かれこれ五つが鳴る時分でムんす。

青葉　まだ五つ前かえ。あんまり暗いので、わたしはもう引けすぎだと思ひました。それにしても、うと〳〵した間に、いろ〳〵な夢を見た‥‥

若葉　夢とは、どんな夢を見なさんしたえ。

青葉　私が山路を歩いて居るとね。かう、身體へすつかり、霧がかかつて‥‥遠くの空で、時鳥が啼いて居ました、ちりん〳〵つて涼しい聲で‥‥

若葉　また時鳥がちりん〳〵なんて‥‥ほゝゝゝゝ。それは大方、あの風鈴が、夢の中まで聞えたでムんせう。

青葉　風鈴‥‥(ト考へる)風鈴かしら‥‥それともお寺の鉦かしら‥‥。然う〳〵、先刻から鉦の音が聞えると思ふたら、今夜

お精靈さまの、お迎ひの晩でムんしたな。

(青葉は次第にうわがれ聲に成り、その様子も狂はしげに見える。)

青葉　お佛壇に…お燈明臺…蠟燭立に…お珠數の袋…(ト一つ〱頷きながら指をりかぞへる。)お位牌は、父さんのと母さんのと二つだけ…(不意に笑ひ出す。)ほゝゝ、忘れた〱、忘れてゐた。今年はもう一基殖えた筈ぢや。(ト目がすはる。)

若葉　あれ姉さま。何を其のやうな氣味の惡い事を言ひなさんす。

(若葉は後から、ソッと青葉の顔を覗込み、凄みに打たれて、腰を浮かす。)

若葉　お前、どうぞ成されたかえ。

青葉　(耳にもかけず)それ、それ〱、もう其所へお出でなされた。(ト片隅を指し)孝殼の杖を突いて…杖を…あゝ、杖を突・て、南無妙…(ト手を合はせ、やがて忙しく)さ、さ、私も早く着替へるのぢや。經帷子…經帷子を…早く着せて…(トすつくと立つ。)

若葉　(泣聲に成り)もし。姉さま、しつかりして…確乎して下さんせ。あれえ…誰か來て下さんせ。

(若葉は青葉の膝に取附いたまゝ、恐さに聲をあける此のもやう宜しく。)

――道具廻る――

第四場

引手茶屋桔梗屋の店先。門口に柳の大樹あり。すべて廓の盂蘭盆の夜の體よろしく。

主人の與兵衞と女房のお村が、軒下へ焙烙を持出し、迎ひ火の支度をして居る。

お村　さあ〱支度が出來ましたぞ。お照もおまきも、早う來やらぬか。

奥の方で、あい〱と返事をして、娘のお照は團扇を持ち、女中おまきは、種々の佛具をのせた盆を持つて出て來る。

與兵衞　二人とも、何をして居たのぢや。

お照　もし父さん。いま、おまきから聞きましたが…(ト聲をひそめ)此頃、逢魔が時に成ると、向ひの青葉さんの部屋の障子に、時々大きな坊さんの影が寫るといな。

與兵衞　何の事かと思ふたら、はゝゝゝ。

お村　又そのやうなてんごうばかり…一文字屋さんへ聞えたら惡いぞや。平常から汝が臆病ぢやと思ふて、そりやおまきが恐からすのぢや。

おまき　いえ〱何の嘘を申しませう。店の嘉助どのも、昨夜たしかに見たと言ひまする。

お村　恐がれば、しゆろ箒も鬼とやら、大方それは、何ぞの影の見違ひぢや。

（此のうちに風少し出で、柳がゆれる。）

お照　あれえ。

（お照は金切聲をあげて飛び退き、襟もとへ手をやる。）

お村　これ、どうしやつた。

與兵衞　さて／＼仰山な、柳の雫ぢや。其のやうに恐がつてばかり居ると、それ、蝙蝠が頰を舐めに來るぞよ。

お照　あれ可厭な父(とゝ)さんぢや。よう覺えて居なさんせ。（ト袂で打つ眞似をする。）

與兵衞　少し風が出て來たやうぢや。今の間早う初めたが好い。

お村　（風の向を考へて）そんなら此處から焚きますぞえ。

與兵衞　南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

（お村は燧石を鳴らして迎火を焚く。その煙の行くてに菊市の姿がしよんぼりと現はれる。）

お村　（身をひいて）そこへ來たのは誰さんぢや。

菊市　然う仰しやるは、桔梗屋のお內儀さま。菊市めで厶ります。

（ト小腰を屈める。）

與兵衞。おゝ、菊市か。

お村　（透かし眺めて）ほんまにこなたは菊市どのぢや。

お照　菊市どの、まあ此方へ來て掛けなさんせ。

菊市　これは、お照さまで厶りますか。恐入りまして厶ります。

（お照は菊市の手を取つて、店先へ掛けさせる。おまきは後を片附けて座敷へ上り、茶、莨盆などを運ぶ。）

與兵衞　たしか此の春、江戸へ行つたとは聞いて居たが、何時戻つて來なされた。

菊市　（改めて手を突く。）これは旦那樣、いつも御機嫌よろしう厶ります。御無沙汰を致しましたが、やう／＼今朝方、三條の宿へ草鞋を脫ぎまして厶ります。

與兵衞　何にしても疲れて居る事であらう。わしの處で、久振りで夕飯も喰べたり、又ゆる／＼と江戸の話を聞かせて貰ふたり‥‥

（おまきを顧る。）これ。すぐに支度をするが好い。

おまき　かしこまりました。

（おまきは答へて勝手へゆく。）

お村　日頃から、座敷の面白いこなたの事江戸へ行かれた後は何やら淋しうて、寄ると障るとこなたの噂‥‥（言ひかけて心附く。）見ればどうやら顏色もわるし、こなた、どうぞしなさんしたか。

（菊市は灯かげに背いて、淋しさうに我が頰をなでる。）

菊市　いえ、大方旅疲れでがな厶りませう。それに、道中で崖から落ち、少し身體を痛めまして‥‥。（ト肩から腕のあたりをさする。）

與兵衞　なに、崖から落ちた。それは飛んだ災難であつたな。

お村　定めて怪我もしたであらうが、もう痛みは取れたかえ。

菊市　はい。通りがかりの人の介抱受け、其のお人の世話で、暫くの間、大津のほとりで疵養生を致し居りましたが、どうやら元の身體に成りましたので、やう／＼戻つてまゐりました。

與兵衛　では通りがゝりの人の世話で…あゝ世間には、奇特なお人も有るものぢやな。

お村　兎も角も無事で戻らしやんしたのは何より幸福、それにつけても久しう聞かぬ、こなたの三味線…なあ、こちの人。

與兵衛　左様ぢや。飯の支度の出來る間、何ぞ一つ聞かせては下さらぬか。

菊市　はい。そのお望みなら易い事でムります。が、何時も／＼、氣の變らぬ古めかしいものよりも、大津に遊んで居りますうち、拙いながら文句を綴り、私が節附の新曲…それをお聞かせ申しませう。

與兵衛　いや、菊市の新曲とは面白い。何よりの事ぢや。早速ながら聞かせて下され。夏は端居が上席とやら…座敷を變へずと涼みながら、此處でゆつくり聽くとしやうか。

お村　ほんにそれは好い樂しみ…恰度今夜は店も休みぢや。皆も呼んで聽かせませう。（ト立つて奥へ行く。）

菊市　成るほど今宵は、亡き魂祭る盂蘭盆の事、せめては佛さまへも手向と成るやう…（ト悲しき思入。）

（此のうちにお村は三味線を持つて來る。）

お村　幸ひ皮も貼り替へたばかりぢや。

與兵衛　さあ／＼早く、聞かせた／＼。

人々は菊市を取りまく。菊市はしづかに三味線を取上げて調子を合はせる。これにて道具は前の場へかへる。

第五場

蚊帳を半分釣りかけた中に、青葉が布團の上で、夜具に依りかゝつて居る。禿の千彌と吉彌が、後から其の背をさすり、若葉は傍から團扇でしづかに煽いでゐる。あたりが靜に成つたので、蟲の音が耳に立つ。

若葉　もし姉さま。少し落附きなさんしたら、些と横に成つてはどうでムんす。

青葉　あい、左様しませう。先刻はお前にも心配をかけ、濟まぬ事でムんしたな。（禿達に）もう好いほどに、汝達も階下へ行つて休むがよい。さ、若葉どのも早う休んで下さんせ。

若葉　其の斟酌が身體の毒。何にも氣遣ふ事はムんせぬゆゑ、澤山澤山言ひたい事をいふて、昔の姉さまのやうに、氣を大きう持つて下さんせ。

青葉　いえ／＼、もう大丈夫でムんす。私も今から眠るほどに、何卒行つて休んで下され。

若葉　それほどに言はしやんすなら、階下へ行つても居りませうが

（禿に）では少しの間、お前方に頼みましたぞ。用が出來たら呼んで下さんせ。

青葉　お内儀さんへも、宜しういふて下さんせ。

若葉　合點して居ますわいな。

　若葉は階下へ去る。青葉は横に成りながら

青葉　これ千彌。其の行燈の灯も消して置きや。お前がたの影が寫つて淋しいほどに……。

千彌　あい〳〵。

　千彌は行燈の灯を吹消す。月の光がうすく流れ込んで、すだれ越しに、往來の柳のかげが、ほんのりと寫る。

青葉　あゝ、いつの間にやら、お月さんが上つたさうな……。

　青葉は其のまゝ力なく團扇をつかつて居る。其の顔に月かげがさして、一層蒼く淋しく見える。何處からか、しめやかな三味線の音が聞える。千彌と吉彌は、青葉を煽いで居た手をやめて、柱へ凭つて居眠る。やがて唄の聲がきこえてくる。

　唄へ荒磯に、世をうき舟の我ひとり、水にたゞよふ果敢なさは、西も東も白波に、よるべ定めぬうたかたの……

　青葉は枕をそばだてゝ聽く。

青葉　まあ、あの三味線の音〆の好さ。久しぶりで、髪の根までが締まるやうな……。

　へいつそ岩間に消えもせで、焦がれこがるゝいさり火の、よみぢ照らさむ甲斐もなく……

青葉　あゝ好い聲ぢや。今時分、誰の座敷で唄ふのやら……。

　青葉は次第に起上る。そして尚も耳を傾げる。やがて、唄聲に誘はれるやうに、ふら〳〵と立上つて椽側へ出る。唄は向ひの家の店先からと分るので、手摺に凭つて覗き込むが風にもまれる柳のかげに成つて居て、三味線の主は見えぬ心……そのまゝ凝と唄をきく。

　唄へ青葉〳〵と呼べども濱の、濱の松風音ばかり、松風濱の、濱の松風音ばかり……

　唄の中に、青葉と呼ばれるのでハッと成り、伸び上つて覗き込むと、そこに三味線を彈いてゐる菊市の姿を見とめる。

青葉　おゝ、菊市……。

　青葉は一言、悲痛な聲をあげたが、そのまゝ喪心してまつさか樣に往來へ落ちる。禿ふたりは青葉の聲に眼をさまし

千彌　あれ……。

吉彌　太夫さんが……。

　二人は手摺に走り寄つて下を見る。そして一時に聲をあげて泣く。此の模樣よろしく。――忽に幕をおろす――

無錢記

眞杉靜枝

明日H迄行きさへすればお金がもらへると云ふ日の前夜、うつかりアイスクリームをたべに入つて、勘定場に立つた私は外へ出るなり笑ひを爆發させました。

『あすこのアイスクリームは三十錢ですつて、一錢まではたいてしまつて、丁度足りました。』そこで、翌朝H迄の電車賃も無いと云ふわけです。私は直ぐロイド眼鏡の古本屋を思ひ出しました。ロイド眼鏡は、私の古い書籍を、ビール箱詰めのまゝ引きとつて行く時、『お宅には、色紙短册の類もおありのやうですね。一つわけて戴き度いので――』と云ふので『いくらで買ふ？』ときいたら

『夏目さんや一葉と云つたところの人でしたら、いゝ値で戴きますが、現代のA氏B氏C氏D女史と云つたところの人でしたら、まあ五十錢。』

『まあ五十錢。』私はその時あきれたのですが、今その五十錢があればいゝのだと思ひました。

家へ歸り、手文庫の中から短册を四枚ぬき出し、紙に包んでをいてねました。

翌朝になると、短册一枚持つて行けば足りるところを、四枚持つて、涼しい顏で本屋へ行かうとした、自身の虚榮が第一許せなくなり、次ぎに電車賃に短册は贅澤ではないかと思ひました。短册の筆者に知れても大へんだ。古本二三册持ち出せば足るわけだのに。でも、かうしなければ、今朝本當にどうにもならないのかしら、今更、そう思ひなほしてみると、全く一錢も無い事實と、Hへ行くべき時間がもう來てゐるのを知らねばなりませんでした。

端もの丶文學講義二册と古い幼稚な洋書二册、厚い辭書一册を押入れから探し出し、風呂敷包みにして、家の人に氣附かれないやうに、持ち出しつゝ、私は、これ丈けなら、一圓いくらになるにちがひない。心を使つた報酬だから、自動車でHへ行かう、なぞと思ひながら角の古本屋へ心に鞭打つて飛び込みました。と、正面に座つてゐるのは、ロイド眼鏡では無く、顏を知らぬ老眼鏡の爺さんです。

『ヤッ』。私は瞬間足を止めましたが、直ぐふるひ起した勇氣で、ツカ〳〵と爺さんの前へ進み

『本――』と云ひなり、風呂敷のまゝ、どさりと爺さんの前へおきました。

『へえ、どうも有難うムります』。いひつゝ爺さんは、さも樂しむやうにゆる〳〵包みを解き、一册々々ひねくり出しました。

私は目をそらして、ウロ〳〵と棚の本を眺めあるきました。

『これ一册ですね、戴けますのは。』爺さんは辭書丈けを持ちあげ、一方の手で老眼鏡をはづし、金箱を引きよせました。

あとの本は紙屑の値段だと云ひつゝ、八十錢を爺さんは机の上におきました。

『いゝのよ、いくらでも。』私は銀貨をさらふやうにして握るが早いか、矢のやうに表へ出ました。出會頭に、圓タクが誘ひかけるやうに徐行してきました。

『爺さん、蠅にたかられろ。』私は心で毒舌を吐きつゝ電車路へいそぎました。

○

あまり、度々不意に一文無しになるの

で、因業な氣を起して、廿五錢でおもちやの貯金箱を買つて來て、それに女中に渡した市場の買ひもの丶おつりや、時には、よく遊びに見える若いお客様に『晩御飯を召しあがつて行くなら、食料五十錢入れて頂戴』と云つて貯金箱をさしつけたりしました。

あまりそんな事をやつてゐたら、お客様の方で心得て仕舞つて、五十錢入れた顔して一錢入れておきます。

土曜日曜が一番困ります。何かで土曜日の午後になつてから不意に有り金を取られて仕舞ふと、もう月曜にならねば、どつからも一文も出ません。まる二日散歩も出來ずに閉じこもる事かと思ふと、家の中の空氣が急に炭酸瓦斯に變ります。こんな時讀書をすると、眼に入れた活字が、そのまゝ塵のやうに神經にこびりつきます。癇癪が起りそうになり、何か壞したくなつたりして、貯金箱を壞す名案が浮びます。

一ぱいにならねばあけられぬやうに出來てゐるのを開けるのですから、釘ぬき、火箸キリなぞを次ぎ〱持ち出し、やつと開けてみると、ボロ〱出て來るのは、皆赤い顏の銅貨ばかり、たまに間にはさまつて銀貨も出ます。が初め箱を手で振つてみた時の豫算では、五十錢入れた人の頭數やら、心覺えで、五圓はあると思つたのに、二圓あまりしか出て來ません。

『ずるいわ、あの人よ一錢しか入れなかつたのは屹度——』。

と云ふやうなところで、丁度夜の九時過ぎになります。もう今頃からどこへも出かけられはしない。先づ今夜はこれで、無錢無事、と云つたわけ。——

男二人かもじを賣りに行く

窪川いね子

「一錢も無かつた時の話」は私にとつて決して過ぎし日の思ひ出話ではないのであります。それは、思ひがけない災難でもなし、從つて非常に困つたといふやうな話でもありません。今日尚しば〱おこる現象なのであります。それだけに過去においてはいくたび出あつたことでせうか。とりたてゝ生々しく記憶に殘つてゐるといふことさへない程です。

もつとも一錢も無かつた時と思つてゐるうちには二錢位殘つてゐたこともあるかもしれません。またはちようど三錢あつたので油揚げ一枚買つたといふこともあらうし、六錢持つて行つてバットを買ひ、一錢借りになつてゐたといふやうなこともありませう。

話は古くなりますが、二年前の秋でした。私は今までゐた鶯谷から、淺草の清島町といふ所にある下駄職人の家の二階へ引移りました。私はもうその時、働いてゐた店は止めてゐたし、三吉のした仕事の金はまだは入らない。手許には金になりさうな物などもういよ〱無いのでした。

その頃清島町のあたりは區劃整理が濟んでゐて、本通りの道路だけ巾が廣くてなか〱立派なのですが、——通りは上野の山から淺草六區の瓢箪池へ眞直ぐに通じてゐる路でした。——立ち並ぶ家は實にせゝつこましく、たて込んでゐました。私たちの二階の部屋は六疊でしたが、疊一枚の大きさが普通よりずつと小さいのです。下町の立て込んだ所へ行くとよくそんな

のがあるのですが、六枚敷いてあるといふだけで、四疊半位しかないのです。その狹い部屋に、大きな男たちが二三人、ほとんど毎晩遊びに來ました。そのうちの一人はずつと泊つてゐたのですが、夜遲くあんまり騷々しいと言つては下の家からよく小言を言はれたものでした。朝早くから、二尺四方ほどの仕事場の中に桐の木屑を浴びながら、駒下駄の塔を作つてゆく下の親父さんは夜が早いのです。それにその二階といふのがまた、少し荒つぽく歩くと、まるで地震のやうにぐら〳〵搖れるのです。引越して來た晩に、二人の男が部屋の對角線の兩端に兩手を突いてはひつくばひ、「いち、に、さん」のかけ聲と共にその二階を搖すつたものです。下の親父さんといふのがまた義太夫でゝ語らうといふ下町かたぎのやかましやでしたから、文句の出たのも無理はありません。泊つてゐた一人ゝ、一番身體が大きいのですが、忍ばせても〳〵、薄い梯子段はぎいぎいきしむのでした。まじめなその樣子がおかしいと言つては、二階でまた笑つてしまふのです。

當時はみんな、まだ社會運動に關心を持ち始めたといふに過ぎない程度で、男たちは福本和夫の本を讀んでは盛んに議論をしてゐた頃です。男たちが家を出てゆくと、私もパンフレットなどを出して讀み始めます。向ひの家が、小さな鋲など作る製作所でしたが、少年工ばかり使つてゐて、夜八時過ぎまでも働かせてゐる、そのモーターの響きが、讀んでゐるものと一緒になつて私の頭に傳はつて來るのでした。祭日も休ませないと言つては、こちらの二階で一人ふんがいしたものです。

ある日、二人の男は、私の銀の平打を一本持つて金をつくりに出かけました。何か無いかと探した果、私は鏡臺の抽出しからそれを見つけたのです。

「こんなもの金になるかい。」

「私四五年前に二圓で入れたことがあるの。」

「しめ〳〵！」とも一人が叫びました。そして、ロイド眼鏡をかけた二人の男は、銀のかんざしを一本懷に入れて、ゆきつけの本郷のジーペンまで出かけてゆきました。

その朝は、ボール箱の中に二三本若めが殘つてゐて、やつと味噌汁が出來たのです。私は銀の平打を見つけ、すつかり安心してしまひました。そして「さう〳〵まだある」と思ひ出しました。

その四五日前のことですが、私はこんな夢を見たのでした。——まだこんなに金になるものがあつたのに——私はひとり言を言ひながら、何かをまとめてゐました。氣づいて見ると、私は自分の髮の毛を肩から前へ垂らして四つ組に編んでゐるのでした。——髮の毛では仕樣がない。——と私は言ひました。——頭の毛をまさかジーペンへ持つてゆけやしない。——

私はそれを初め何かの、まとまつた全集だと思つてゐたのでした。さうだ、かもじならいゝ、と私はいゝ思ひ付をしました。——かもじはどこへしまつたらう——その瞬間、私はうと〳〵としかけた眠りからあと戻りしたのでした。そして引越して來た新しい部屋を見まはしてかもじはどこへしまつたらうと考へました。

二三時間もして歸つて來た男二人は、部屋へ入るなり、あゝあと大聲にたんそくをあげてほこりだらけの足をふかうともせず横になつてしまひました。かんざしは金にならなかつたのです。行き歸り歩いた本郷までの道は可成りあるのでした。私は元氣をつけるやうに、さき程思ひついたかもじの話をしました。二人はまたそのかもじを持つて買ひ手を探しに出掛けました。然し結局、かもじ屋から屑やとむだに歩いただけで油がついてゐるからとの理由で金にならないのです。

「さういふものは屑やで買ふんですよつて、あの、かもじやの女房尚ぴしやに出やがつたな」の一人が思ひ出したやうに口惜しがれば、も一人はまた「ほんとにあのかもじは新しく買へば十圓ぐらひするんだらう」とさつき私の言つたことを聞きあらためては、十圓といふ價をせめてもの自らの慰めのやうに言ふのでした。

赤い裏のキモノ

しぐれ

一錢もなくなつてしまつて、立つて家のなかをお金になりさうなものはないかと見廻したことは幾度もある。私が自分の家に歸つてゐる間に三上氏もお辨當飯を辨當屋から運んでくれなくなつたことさへあつた。だが、一枚の紙ももたず、肌着の着代へさへなく、幾日間かの絶食といふやうな場合はなかつたから、切實な無錢記とはいえないともいえる。

數年前、上野の山下で、夜更けに屋臺店の大福を盜んで密行につかまつた男がある。その男が連れてゆかれる瞬間、暗から飛出して「父ちやん」と取り縋つた二人の子供があつた。父親の盜んだ譯もこの二人の子供からで、餓きつた二人の子供は、終日職をもとめて得ずに歸つた父親にむかつて、一本のバナナがほしいとねだつたのだが、貧しい父親にはどうしても求められなかつた。二人には今もつて來てやるからと慰めておいて、暗い上野の山内にはひつたが、いくら樹木はあつたつて、バナナの實つてゐやう筈がない。夜は更ける。餓た子のことは心にかゝる。死にも得ず子のそばへ歸つてゆく父親の、フラ〳〵した心の前に、溫たかげにふくれて燒けてゐる屋臺店の大福が目についたのである。

私はこの記事を新聞のはじつこの方に見出して忘れない。盜むのはあたり前だと思つた。

しかし私にも精神的にうけた一錢もない創痕がある——

今でも私は物質に執着がないが、十代のうちには病的に所有慾がなかつた。ほしいものがあつても父母に願ふことすらしなかつた。で、いつも身に餘分のものがなかつた、母もそれで安心してゐたかであつた。私に小遣ひがあれば、その當時では、餘でないことである書籍を買つて讀みふけるから——さうした彼女の意識のもとに、他家へかたづけられる時無錢政策がとられて、ふだんから空の財布の私は眞の一文なしであつた。あれなら何處へも行かれはしなからうといふことで——

東北の山の中に一人ゐる時だつた。私のために働いてくれる少女は、用をすまして村の小學校へいつてゐる留守だつた。雪もよひの午後で、私は氣候に當つて寢てゐたら、ごめんなさい〳〵といふ細い聲が訪れた。無錢旅行の祖母と孫の少年だつた。

困つたことに、例により私の財布は空つぽだつた。お婆さんが嘆くまでもなく私は何かあげたくて一ぱいだつた。子供には食物を包んでやつたが——金にかはる品はあれかこれかの果、寒げな姿だつたので、私は着てゐたねまきをあげた。赤い裏なので氣の毒だと思つたら、

「年とつても女子でござんすものよ、あね

さん。」
と老女は悅んですぐに着た。 ふりの長い、荒いがらではあつたが、私の子供も笑はなかつた。 よかつたとさへ思つた。
すこし安心した氣持ちで寢てゐると、大變な事が出來たと、雇つてゐた少女が飛んで歸つて來ていつた。
「村の酒屋で酒のんでゐた、 女の老人の乞食が、 盜みしたさうで――」
私はハッと胸に來た。
「おらが奧さんの品のふうで、おら飛んで見にかへつただ。」
私は大變なことになつたと思つた。雪はふりはじめてゐる。 私は、なぜ、 財布にすこしづゝの餘裕をつくつて おかなかつたかをくやんだ。
その悔は、今日でもおなじく繰返してはゐるが――

本當の事は知らない

若山喜志子

明治四十四年十月十五日、所は內藤新宿町二丁目――現今の四谷新宿――の森本といふ酒店の二階十疊の一間を電燈つき四圓五十錢で借り、竹行李一つと布團一組と机と、少しばかりの書物と針箱を持つて一人の女が身を落ちつけた――。
その日から私のほんとの自分で自分の膽をくらふ生活が初まつたのです。
私は實を云ふとその時分、二三年來身にまつはりついてゐて自分で自分をもて余してゐた戀愛事件をすつぽり振りすてたくてそんな生活を撰んだとも云へば云へるのです。 そしていろいろの 階級の社會相に觸れて見て、どん底から立ち上つた筆法の小說が書いて見たい、こんな野望に燃えてゐたものでした。
その頃今井邦子さんは 結婚生活に入るし、花世さんは時事新報だつたかの記者であつたし、水野仙子さんは盛んに小說を書いてゐた――私の友達と云つてもそれ位のものでしたが、皆同じ時代に同じやうな經路で出京してゐて それぞれに膽を甞めてゐたころでした。
私はさうした友達を見つつも實に一人異つた道を一人で歩んでゐました。
その頃の新宿は 二丁目から三丁目、追分にかけてずらりと 軒を並べて 妓樓がありました。その妓樓の內でも有力家であつたといふ家の主人は 私の鄕里のすぐ 隣家の出である事に思ひついて、ある日突然そののれんをくぐり、主人に面會を求めて、一人で生活がして見たいからどうか娼妓たちの 衣類を縫はして吳れるやうにと賴み込んだのでした。 H氏は私の 鄕里の家柄や 其他の事を知つてゐるので 突然の私の來訪さへ 不審であるのに 女一人で生活するなどの申出でを非常に 不安な表情できいてゐたらしかつたが、とにかく腕一本で 大きな妓樓の主人とまで 成つた程の人の事とて、すぐに快よく承諾してくれ、すぐ向ひ側の 酒店の二階を借りる事に話をすゝめてくれました。 それで私はその翌日から 針箱と裁板を 相手になまめかしい色彩 の中に埋まつて 一刻一刻を惜む針仕事に身をゆだねたのでした。
H氏はそれでも年ごろの女一人が、しかも鄕里の知人でもあり 恩人である 家の娘が一人で何だつて そんな變な生活をするべく自分を賴つて來たのかが腑におちず、

すぐに郷里の父に問合せの手紙を出したらしく、父からの返事を見てやうやく安堵したと數日後私にそれを自白し、それからは非常に特別な好意を寄せてくれ、三度の食事のおかずはいつも屆けてくれたり、お風呂も自分の家のに入るやうにすゝめてくれたりした。

さうして月末が來て、はじめて自分の力で稼いだ金で支拂をするといふ大きな誇りを知つたのでした。いろ／＼の支拂をすまして殘つたお金は二圓五十錢位であつた、最初の月は實に心細かつたこれが半月の間一刻をも惜しんで働いた骨折りの報酬かと思つた時は、前途の暗闇になつた思ひをした。しかしよくしたもので時々に一圓、五十錢と實際の仕立代より餘分に置いてゆく人などあつて次の月からは大分心丈夫で過されました。

さうした私の生活が二百日近くも續いたかしら(私はこの場合敢て日數で言ふ、それは實に一日一日が新らしい開拓の氣持であつたから)その翌年五月には――その間にはいろ／＼の複雜な經路がある――若山牧水と二人での起臥がその二階に初められた。彼はたつた身一つで私の處へ來た。そして惡く云へば放縱不覊な二人の生活がスタートを切つたのです。

私はもう賃仕事は自然放棄の形になり、生活力の非常に旺盛な一人の異性の隷屬の立場に陷ちてゐました。今迄一人の腕で稼いでゐた金の何倍かが私の手に握られはしても、忽ちに濫費されて無一物になる、かと思へばまた手に握る。といふ風な實に變轉極りない金錢の出入でした。

でそれから何年かの二人の生涯で家賃の拂へないといふ時期はあつたが、お米の一升買ひをしたとか質屋ののれんをくぐつたとかいふ事の經驗がないのだから私のびんぼう生活など人前に持ち出させるものではないのです。

しかし理屈は何とでも云へるものの、私が過去何年かの間に一錢もなかつたといふ時の經驗を持たなかつたのは、私の性格に、または夫の性質のどこかに用心深いところがあつたのかもしれない、またはあまりに自然な生活をしてゐたからなのかも知れない……。

ほんとに一錢もない、といふ日があるならこれから私の生活に來ることであらう今まで書いて來た事は皆對立の人のあつた時の事であるから……私のやうな性格の女は一錢もないやうな生活には實際堪へられない氣がする。

一錢もなかつたとき

望月百合子

小學校の頃、私の大好きな根津先生といふやさしい女の先生が私の生れた町から三里ばかり離れた韮崎と云ふ町の小學校に轉任された。それは春であつた。甲府盆地は一杯の櫻の花でかざられ、山々はのどかな霞で彩色されたが、私の幼い心は少しも慰さめられなかつた。私は毎日悲しく淋しかつた。そしてどうかしてもう一度根津先生にお會ひしたいと思つた。汽車に乘れば三十分程でその町まで行ける。けれども私には一錢のお金もなかつた。ある朝學校に行くつもりで家を出て、お城のところまで行くと、西へ行く汽車がピユーツと汽笛を鳴らし乍ら私の前を走り去

つた。私はたうくがまんが出來なくなつた。そしてそこから踵をめぐらして二里の田舍道をまつ直ぐにまつすぐに歩き出した。麥畑や菜の花畑の間を通つた。山を越した。川を渡つた。そしてお正午すぎにやつと韮崎の、古びた白壁づくりの小學校の門に立つた。

それから大きくなつて家庭をもつた。一錢もなくて可成り貧乏をした。けれども一錢もなくなる度に、親父さんのところに貰ひに行つた。だから私は殘念ながら、一錢もなくて、につちもさつちも行かなかつたといふ目にはまだ一度も會つたことがない。但しそれだけ私の生活が極度に物質的にきりつめたものであることは言ふまでもない。と正直な理由をくつつけてみたところで、どうも殘念だから、私はこゝに親父さんの貧窮ぶりを一寸つけ加へておく。私の親父さんこそは貧乏の總問屋とも言ふ徹底的な貧乏をした人で、一錢もなかつた時代なんかざらにある。一例を擧げると、お腹が空いたが一錢もない。そこで肺炎の子供をあんぼうしたこんにやくを食べることになつた。併しそのこんにやくを煮るべき炭も薪もない。誰かゞ垣根を壞して來た。それでやつとこんにやくを煮ることが出來た。

ある時はまた、貸ぶとんやから損料の蚊帳を二張り借りて來た。その一張りを質屋に持つて行つてその金で米を買つた。

友人と二人で住んでゐたとき、やはり一錢もない。而も二人の男で、浴衣が一枚しかない。そこで二人は交るぐくその一張羅の浴衣を着て金の工面に出歩いた。留守番に殘る方は、暑いのにどてらを着て、雨戸をしめて家の中にうづくまつてゐた。

まあざつと擧げてみてもこんな風な貧乏ぶり。その頃の貧窮ぶりに比べれば、いまの修道院のやうに簡素な生活でも天國程に樂な方らしい。併しこの天國は馬鹿に貧弱な天國だ。いつまた一粒の米もないやうな下界に逆戻りしないともかぎらない。そんな時は、畑一杯まいてある馬鈴薯ばかり食べてゐるさ。もとく馬鈴薯はあんまり好物ではないのに、いつ米が買へなくなるか分らない。米が食へないからと云つて節を屈したくはない。そんなときは馬鈴薯でも食べてゐるさ……といふつもりで、蒔いた薯だ。(おゝ馬鈴薯よ、たくさん、たくさん實をつけておくれ！)さてそれから少しばかり金が欲しかつたら、近所の人から片道十九錢也の電車賃を借りて、女人藝術社まで、生みたての卵を買つて貰ひに行くつもり。

アブノーマルな手紙二通

林芙美子

三上先生——私はかう書くと、先生と云ふ字が氣になつたので、三上於菟吉樣と書いて見た。

三上於菟吉樣

こんなに、ぶしつけな手紙をお許るし下さいませ。二日も絕食するめに會つて考へたのが、此手紙です。

兎に角何か食べたくてなりません。

くだらない日記を三册持つてゐますが買つて戴けませんか。

それが百圓に賣れたらどんなに素晴ら

しいでせう。でも拾圓でも五圓でもいゝのです。二日も何も食べないので、空のかなたのやうな貴方に、こんな手紙を書くのを思ひついたのです。

私の寝床のそばに散らかつた新聞の雑誌の廣告には、貴方のお名前でゐつぱいなんです。

此手紙は誰にでもよかつたかも知れませんが、新聞の上に散つてゐる貴方のお名前の活字は、空想家である私を有頂天にしてしまひました。

一錢もないので切手をはりません、失禮お許し下さいませ。

吉田絃二郎様

貴方は大變涙もろい方だと聞きました。今こゝに、二日も絶食のうきめにあつて御飯が食べたいよッ！　つて泣いてゐる不幸な女がゐるとしたら、貴方はすくつて下さいますか。

私の部屋は、小說的に屋根裏の三疊です。

私には、カフエーに喜こんではいるとか、惡口雜言を云つてまわる、友情のない女友達がありますけれど、今は喜こんではいる、カフエーの着物もないのです。とてもおなかゞすいて、今は貴方の戀人になつてもいゝ空想をしてゐるんですが……ところで、モデルを買つてくれませんか、私は御飯が滿足に食べられゝば、とてもいゝ詩をかくんです。

貴方はヤソ教ですか、涙の詩人だと聞きましたが…。

晝の寝床の中で、私はこんな手紙を二通書いた。

そして私はいくつも金と云ふ字を落書きしてみた。

これは四年も前の思ひ出です。

そこで結局吉田氏へ先きに手紙を出した私は、その返事がどんなに待ち遠ほしかつたらう。

四日目、私は鳥目のやうに、夜になると目がシパシパして私は寝たまゝ一人言を樂しんだ。

四日の間食べたのは、下で盜んだ味噌汁きりである。お金がないと皆の目が冷い。

四日目の夕方、たまりかねた私は、私の宿のそばの、池の端に住んでゐる、百瀬と云ふ人をたづねて行つた。この人はカクテールをつくる事がうまくて、カクテールをつくる本を出してゐた。風評の吉原のお女郎の寫眞がかざつてあるきりで、百瀬さんは留守だつた。本箱には、本がいつぱい埋まつてゐる。あの一冊を賣つてやろうかな。寒いので、ホコホコするものが食べたかつた。臆病者であつた私は、抜いた本を又もとへかへして、外へ出た。目頭があつくなつた。

五日目の朝、私は追ふやうにして、千駄木の萩原恭次郎の家へいつた。節ちゃんは沈默つてお膳を出してくれた。

味噌汁と御飯！　私は箸を持つたまゝ大聲で泣き出してしまつた。

凸坊も驚いて一緒に泣き出してしまつた。

あれからの私はみじめすぎた。

三上氏へ書いた手紙は私の放浪といつしよに失はれてしまつた。今考へると、出さなくてよかつたと思つてゐる。

今は、三上氏の夫人時雨さんのもとに原稿を送つて、此頃の私はほがらかである。

三上氏は、笑顔で私を歡迎して下さる。

萩原恭次郎よ、節ちゃんよ、凸坊よ、彼等の上に最大な祝福あれ！

無錢旅行

生田花世

お金が一錢もなかつた時の追憶にまづ最初に心にのぼるのは、十九歲の秋の時、當時小學校の敎師を故鄕の山峽の町でつとめてゐた私は十里ほどはなれた自分の村の父の家へと、どうしても至急に歸り相談しなければならぬことが起り、誰かに汽車賃を借りればよいのでしたが、妙に、金をかりるといふ事がいやでぢつと杜にもたれて考へること二十分ばかり……。バクハツ的に强い決心がうかびました。それは步いて歸らう、無錢旅行といふこともあるんだもの！とおもつたのです。それで仕度をして、二時頃山峽の町をたちました。步くこと三里、大河（吉野川）を渡舟でわたりまして、Y町へと出ました。相當にぎやかな町で、こゝにこの郡の郡役所があつて、私は小學校敎師を山峽の町へ奉職する時ここの町へその辭令をもらひに來たので、まづこゝまで來れば安心とホッとしました。しかしそれから私の村まで約七里、少しの間もやすまずY町をあとに桑畑の中の街道へと出ました。橋をわたり河原をあとに、又村に入り、桑畑道に入り、又橋を渡り、村に入るといふ風に私は三里位の間を小さい足でテクテクと步きつゞけましたらそのうちに足がいたくなり出しました。しかしまたのこり三里餘もありますので、急げるだけは急ぎたく、のどのかわきを森かげの淸水にうるほし、西に傾く夕陽を氣にしながら步きつゞけました。美馬郡、阿波郡、麻植郡、板野郡とかう四つの郡を、麻植郡のはづれまで來てもうあと二里といふ時にはもう完全に夜道で暗の中にたゞ道路のみ灰白く沈んでゐる上を、巡禮のやうな漂泊の心持で步きつゞけました。足はもう自分の脚ともおもはれぬ位に疲れて步くのをやめると、一ぺんにベタベタ坐りこみさうなので、やすんではならないと、步調をごくゆつくりと、しかし、たえざる步みで步きつゞけてゐました。夜の十時頃にもなつてゐたでせう。私は、あとからピタピタとついてくる足音におどろかされました。振向いて見ると、手拭で頰かぶりした若い村の男でした。

私はこちらから聲をかけました。

『今晩は』

『ああ、今晚は……』

私は先方の聲をきいて安心を覺えたのでいひました。

『私はね、××町の製絲工場へいつてたの、仕事があまりつらいから逃げ出して村へかへるところなの、このあたりに木賃宿ないの』

女工さんだと名のりをあげてかうたのむとこの善良な村の男、すつかり同情心をおこして、村はづれの藥屋へつれていつてくれて、

『をばさん、このねえさんはね、僕の知り合の家の娘なのだ、今夜、泊めてやつてくれないか、工場逃げ出して來たちうんだ、泊めてやつてくんな、ただでね』

『そうかいな、かわいさうに……』

まあ足を洗ふがいいといつて井戸を敎へてくれて盥をもつて來ました。男は、二言三言この家の小母さんと笑ひ話をして

『それぢやたのむよ』

それから、私の方へは

『こゝの小母さんはいい人だから安心しておやすみな』といつて立去りました。
私はこの農家で、その夜ずゐぶん足を痛めてゐたので、地獄で佛といふやうな感じを味ひつゝ身をやすめ、深い眠りにつきました。翌朝、朝日の美しい時分、麥の御飯を家内三四人と一緒に食べて、お禮には、そこの子供に雜誌を二三册あげて一里半のみちを自分の父の家へと爽かな氣持でかへりつきました。
この私の徒歩旅行、ずつと二十年間だれにも申さなかつたことです。今はじめて書くのです。これをもつて『一錢もなかつた時の事』のお話といたします。

断たれた兩面

八木秋子

松の根方に凭りかゝつて、眠らうと眼をとぢてみるが、神經はひどく疲れきつてゐるのに頭が妙に冴えて、どうしても駄目。しかしそれもまもなくで眠りともつかぬ昏沈とした中に意識がだんだん遠のいてゆく。が、チクリと刺す藪蚊でまた我にかへるのだつた。
枝を透してくる月の光りがだいぶ斜に動いたやうだ。森とした空氣の中へ偶に山下の上野驛の構内から、ぼう！とねむい汽笛が聞える。何にしても藪蚊のうなりごゑだけはうるさい。追つても、拂つても、耳もとへワンワン襲つてくる。
芝生におりた夜露が敷いた風呂敷をとほして、ひえびえと膝に浸みてきた。晝間の汗と露にぬれた浴衣が、べつとり皮膚に吸ひつき、惡感が重く背すじを流れる。
上野の杜の、かうして芝生へ座つてから何時間たつたらうか。とにかく
——今夜だけこゝで越せば——
とこんな決心も、しかしこの藪蚊と空腹の前には脆くも崩れた。まもなく彼女は、小さな風呂敷包みを抱えて、樹立の暗がりへ立ち上つた。一杯の水も、身を横へる一疊のたゝみのあてもないのだ——。
山下の廣場へ出て見ると、夜はもう遲いことを知つた。ぢつと立佇つて斑らに散つてゆく白地の行人の姿を見てゐると、みんな永久に何ごともなささうな姿だ。カフエーの明るく溢れた灯に美味しい食物の匂ひがあるらしい。喉へその美味い風がすうと吹きこむで浸みてゆくやうだ——。
朦朧と薄れて行きさうな意識の中で、ふと彼女は一人の友達の顏を捉へた。
——あ、S子さん、さうだ、あの人をどうしてわたしは忘れてゐたのだらう。
そして彼女が自分に氣がついた時は、電車へ乘つてしまつてゐた。一錢もないのに——。
五十日あまりの女中生活——そこは鶴見の山の手にある東京〇〇保險會社橫濱支店長の邸だ。絶え間ない勞働と、蚊帳の與へられない夜と、香のものばかりの食事。かうした日が續いたきのふの夜である一週間の豫定で家族が身延の本山へ出かけた留守、暗がりに立つてレールのやうに長い廊下の雨戸を締めてゐた彼女は、何時のまに歸つたのか、主人の脂肪にむくんだ兩手でいきなり背後から抱きすくめられた。眠らずに明し今朝暇をとる事を申出ると主人は、風の行衞をでも訊ねるやうな流眄できいて、しかし「家内がゐなく

ては、給金のことは僕には判らん」と冷たく宣言した。

省線でまつすぐ神田橋の職業紹介所へ來て見ると門が閉つてゐる。日曜を氣づかなかつたのだ。神田橋の石だたみに陽の照り返しがカッと熱く、そこに立佇つて濁つた壕の中に浮いてゐる浚渫船を眺めてゐた。ウヰンチがガラガラと鳴りひゞいて、のろく動くクレインの下に眞黒な泥が口を明けて吐き出される。――氷水を飲むとあとは二十錢だけ殘つた。上野廣小路へ――どういふわけか？――きて電車を下りると眼まひがして思はずよろ／＼した。久しぶりの都會はあまりに强い烈日のやうな刺戟だつた。そこで六錢で朝刊の殘り二枚買つて「案内欄」を展げて見た。女中入用――幸ひその中にはすぐ近い練塀町のある番地に、山川醫院といふ文字が拾ひ出された。道をたづね、たづね當てゝ臺所口からこゑをかけると、白い顔の看護婦が顔だけ覗いて、「もう先程きまりました」といふ。

彼女はふと松坂屋に近い所の大きな口入屋を思ひ出した。だが、その黒く垂れた暖簾の下へきて、「富士屋」といふ大きな文字を見上げた時、一錢もない事に氣がつき、あすの月曜を待つ事にして上野の山へ上つて行つた。汗と埃で工場の庭に生へた草のやうに萎んでゐたが、今夜を越せば――といふ呟きがあつたし、我から心を苛めつける小さい感傷も五十日の月日の中へ置いてきたつもりで、すたすたと足どりもたいして重くはなかつた。

S子は雨戸の隙から彼女を認めると、瞬間愕きの表情を花のやうにひらき、そしてすばやく心を構へた。落ちついた聲で「誰かと思つた。まあ、お上んなさい。」

向き合つて、彼女は罪を謝する囚人のやうに頭を下げた。

「いろ／＼御心配かけてしまつて、――でも急に來たくなりましたの」

S子は黒い瞳へ彼女の萎へた葉つぱのやうな姿を收めてしまふと、傍を向いて机かけの端をひつぱつた。

「A子さん、あなたがどういふ氣持からあたしの所へ來やうとしたんだか、私にはとても判りませんね、――とにかく、あれ以來どうしてゐるのだらうと案じてはゐたのだけど、まさか今頃、ねえ――」

「追々お話するわ、だけどお腹(なか)が空いて口が利けないの、御飯があつたら、頂いても可い？」

「ええ、しかし詳しい話なんか別にお訊きする必要もないわけね」

友達が食卓の用意に立つてゐる間彼女は壁に倚つて、空ろな眼を天井に投げてゐた。四年間の結婚生活を我から脫れ出た時、「最後の一錢になるまで私はあなたを投げずにはゐない」と自分のかくれ家へ、彼女を導いたのはS子だつた――世の中にたつた一人の友達と互にさう信じてもゐた。その友情に背いて夫の涙にまけて家へ戻り、再度の家出――道理からいへば再び合はせる顔はない筈だつた。S子の唇はいつものやうに瀬く滑かさうに光る。

「それんばかりの苦勞は充分覺悟の上だつたでせう。あなたは自分の意志のよはいことを、正しく認識しなければ――。だいいち、あなたが來たつてことが人に判れば、私の立場がないぢやありませんか？」

彼女は箸の手をやめてS子の顔へ眞直に向いた。

「……誰に對する立場が？」

「あなたの夫や、夫の兄弟や、――それから世間へ對しても。この近所だつてあの騷ぎ以來、みんな知つてゝよ」

「……」

「こんや一晩だけは泊まつてゆくの止むを得ないけれど、あすの朝は夜の明けないうちに出て下さいな、でないと私ほんとに

迷惑ですから。」
「すみません。――お臺所の窓から飛び下りて裏道づたいに行つてもいいですよ、囚人の逃亡といつた恰好で‥‥」と彼女はまじめにいつた。
S子は押入から一枚の藤色がかつた絽お召の單衣を持ち出してきた。忘れてゐたが、これは前にS子へ貸したことのある彼女の着物だ。その柄にも、襟のかすかな白粉のよごれにも、かつての人妻時代の生活の匂ひが殘つてゐる。S子はその着物の上へ五十錢玉をぽんと投げた。
「ぢや、この着物お返しするわ、あなたも着たまゝで困るでせうから。――しかしA子さん。あなたもこゝまで叛逆した以上は、どんな社會の迫害とでも、闘つて行く覺悟はあるでせうね。」
「‥‥‥‥‥」
彼女の前には過去の生活と現在の間に、大きな一斷面が諸土の腹を見せて横はつてゐる。完全に、一線で斷ち切られたのだ。古い家族制度と、社會の未來へ向ふ共同の道との間に――。
明日の朝は、さつそく紹介所へ行かう。
「ほんとに、自分にはその闘ひの强さがあるだらうか？」
から自ら問ふて見て、心が渚のやうに展け、水のやうに靜にひき締つてゆくのを感じた。隣家の柱時計がねむたく壁ごしに二時を知らせた。

藝術祭に行つて

麹町　小藤この

六月の日比谷公園の綠の中で、廣い空の下、ではじめてであらうところの女人藝術祭に一讀者の私もつらなりました。夕闇みが漂ひ、電燈の白い光りが綠に反映するところ、滿場をうづめた青年男女！　盛んなるあの光景を胸をとゞろかして眺めました。それにもまして官憲の白い服と腰の光るものが、そこ此處にきらめくのを、これも又不思議に盛んなる氣もちで見廻しました。寫眞や漫畫で知つた八木女史が司會をし、中本、上田氏がすむとあとは中止、中止、中止！　そのたびに白い服が右往左往、終に第一部の講演中止は、私の口をムツ〳〵させました。「警官横暴」と叫ぶ青年の叫びを私も叫びたかつた。

第二部の舞踊、音樂、演劇は定評あるものです。私はやつぱり第一部の講演を目ざして行つたのです。全く、今迄、この若い女性ばかりが、大空の下で、自由に、各自の心を述る試みが日本にありましたらうか？　私は寧ろ藝術祭といふ名にして第二部をつけなければならなかつたのすら實は不滿なのに、その不滿は翌日の都下の各新聞紙によつて遺憾なく充分にされました。なぜなら、最も進んだニユースでなければならない、この女人の動きを、一ツの社會面にも、ことに婦人欄をもつ社のにも報導されてゐないことです。これは現かな侮蔑ではありませんか。これは男子横暴と叫びたくなります。

板橋　寺本津留

女人藝術祭があんなにまで盛會だつたことにすつかり驚いて仕舞ひました。社長さんを初め社の皆様がどんなに悅んでゐらつしやるでせう。この度の催しに依つて女人藝術社が、そして女人の新らしい力をはつきりと解かることが出來たのは、嬉しいことだと思ひます。雜誌を通じての親愛なる皆さんの聲をきくことをどれ程樂しみにしてゐた事でせう。それなのにあの野蠻な野次、そしてわからずやの警官の爲に口を閉ぢさせられ、その上に演壇に上るのまで禁止する何て、それも何を話すか、どんな内容かも解からないくせに、皆様もさぞ殘念に思つていらつしやることゝ存じます。
も一遍口なほしに、純粹な讀者丈の講演會を催して下さいませ。澱んだ生活にしたり込んでゐる私達女人のために目を醒まさせて下さい。廣い世界のあるといふことを、あなた方の强い手で導き示して下さいまし。

婦人彙報

◇深夜業廢止の福音

法の上には明記されながら十八年間葬られて來て、英國より遲ること實に、九十五年——總にしかし七月一日を以て日本の工場法に一大轉期を畫した女工の深夜業廢止は全國的に大きな影響を及ぼしてゐる。この法令で救はれる女工さん十八萬、この喜びの日を記念する爲め國際勞働協會の婦人委員會は七月三日夜神田の東京女子基督教青年會館で講演會を催した河崎夏子市川房枝女史等の講演の中に田邊さんといふ紡績女工さんは立つて「夜業の體驗」と題して所感を述べた。尙ほ同委員會では賃金の減額食事時間配置の不整等により女工の不利益と苦痛を排除せよと決議をしたが、之等智識婦人の努力にも係らず、會社は實際に賃銀の値下げを巧妙にはじめ、各所に爭議が起つてゐるが、今後も尙ほこの種の爭議は頻發するものと豫想される。

◇文部最初の女督學官

勝田前文相は今度內閣を去る前これまでの學生の社會運動に彈壓を加へてきた罪滅しのためか、はた官學に花を持たせて益々思想善導に資するためか知らぬが三人の婦人の督學官を任命して置土產とした。堀口きみ子（東京女子高等師範學校敎授）成田順（同上）西野みよし（同上）であるが左の人々のうち堀口女史は女史敎育全般に亘り視察監督を、成田女子は裁縫を西野女史は家事の方面を、それぞれ擔當する事になつた。

◇田山花袋氏病む

我が文壇の大家田山花袋氏は去る一月自宅で卒倒して以來健康勝れず武藏野病院で診察の結果喉頭癌と決定、目下同病院でラヂウム療法を行つてゐるが、老齡ではあり難治の癌なので到底全快は難かしいものと豫想されてゐる。

◇女工さん命懸の逃走

福島縣平町磐城片倉製絲會社は操絲を始めたばかりなのに早くも幼年女工虐使問題が起つてゐる。事は、一日十時間契約で募集した女工二百餘名を一日十二時間に亘り酷使した爲め二十三日夜二人の幼年女工は堪えかねて逃去しその翌夜は十一名が嚴重な監視のすきを狙つて一丈餘のトタン塀を乘り越えて平驛まで逃げた所を取押へられた。一人の女工は塀を乘り越える際足に負傷したのを平署員が發見し、それの取調から女工酷使の事實が探知されたのである。

◇男子になるといふ挨拶狀

「女が嫌になつたから男になる」といふ挨拶狀を知人に送つて女の道具一切を賣り拂ひ頭は斷髮、大島絣にセルの袴中折帽にステッキで悠々と濶步し始めた娘さんがある。信州飯田町二本松の遊廓の娼で佐々木延子さんといふ廿五歲の婦人。その挨拶狀に曰く「野生儀かねて女性の砌は御交誼を賜り深謝奉候今回感ずる所あり女性を廢し男性と化する事に相成候、これ偏に女性を嫌惡するの情に他ならず須く男性たらずんば萬事不利に御座候」娼妓の血と肉で生活する家に育つた娘である所に、笑つてすまされない問題がある。

◇救はれた四人の日本婦人

支那人に誘拐され支那の奧地で酷使されてゐた日本婦人が八名日本の軍隊に救ひ出されて歸國した大抵の婦人は在日本の留學生と結婚して夫の郷里へ同行したが國情と言語の相違のために幻滅し虐待されてゐたものである。中で二人は私生兒をつれてゐる。この種の婦人は奧地にはまだかなり多くゐるらしい。

◇キク・ヤマダ女史歸る

父を日本人に、母を佛人に持つ山田菊子女史は巴里で日本文學を佛譯し紹介してゐたが、このほど歸朝した。女史はリオンで生れ一旦日本へ歸つて芝の聖心女學院をおへ、再び渡佛してパリ大學を卒業した。詩集や創作「日本八景」「靜御前」などの佛語の著書があり今度の歸朝も創作の材料を蒐集する目的である。

◇智識階級專門の授產場

東京市社會局では廿三萬一千圓の豫算で芝と小石川の二個所へ智識階級失業者專門の授產場を新設する事となつた。右は筆耕、設計製圖、廣告圖案文案、出張敎授、謄寫、タイプライティング、派出事務員、飜譯、速記、ガイド等それぞれ適應した職業を授けやうといふのであるが、授產中は一定の給與を行ふ事になつてゐる。

◇自殺女工の聲明書

長野縣諏訪郡岡谷山二笠原組製絲工場再操部女工中畑はな（一八）酒井ふくみ（一七）のふたりは十六日午後十時半頃同工場內病室で心中を計りホルマリンを飮んで絕命した。二人とも前途を悲觀したものであるが酒井ふくみさんは「自殺の聲明書」と題した長い遺書——工場生活の悲慘と無產者の呪ひ

をのこして死んだ。

◇少年配達夫の責任感

千葉縣市川局の電報配達夫西山政吉(一四)は八日行方不明になつたので同局員は警察署や青年團等と聯絡をもつて附近の空家から全部を搜索するなど近來にない騷ぎであつたが三日目の午後同地先市川橋の欄干にもたれて思案にくれてゐるのを發見し一同安堵の胸を撫で下して喜んだ。政吉少年が姿をかくした原因は電報二通を自轉車もろとも河の中に墜落した際流失させてしまつた責任感からである。

◇殉職者の遺族に恩典を

東京鐵道局では鐵道從業員の殉職者、公傷者、退職者等を救濟するために管下各驛の賣店を整理して之に代らせるために調査準備を進めてゐたが、當業者の猛烈な存置運動を押切つて斷行と決定、六月十七日命令を發したので當業者は大狼狽を極めてゐる。現在の驛賣店は非常に備りすぎて居り、殊に營業者は他に立派な店舖をもつて堂々と商賣をしてゐるのや利權屋に大分汁を吸はれてゐるのだつた。今度の擧によつて最近汐留驛で殉死した今井驛長の遺族は鎌倉の賣店を、東京驛で殉職した田邊機關庫助手の遺族は沼津の賣店を經營する事になつて生活の保證が與えられた他小島元神田驛長は大森・若月元八王子驛長は國分寺、田中元大船助役は新宿、富山元小田原驛長は有樂町、田村元富士驛長は下曾我の各賣店へと、頭株から先に浮上る事になつた。

◇社會學專攻の台灣女大生

日本女子大學の社會事業學部に社會學を專攻しつゝある四名の臺灣人がある。臺北の林氏品々さん綵峰の林氏關々さん、新竹の劉氏瓊英さん彰化の甘氏寶劍さんで四人とも夏期休暇を利用して實際を見學し研究中である。その中林品晶さんは文敎局社會課の杵淵囑託の指導をうけて研究に沒頭し近く全島を研究行脚すると意氣込んでゐる。

◇町　に當選して馘らる

玉川電車仕上工府下目黒町上目黒四四一目黒町會議員指宿源一氏は七日玉川電鐵から突然解雇の通知をうけた。同氏は町會議員に當選すると同時に會社から會社の勤務に影響するといふ理由で馘首されたのであるが、同氏の屬する工友會玉川支部では將來勞働者の政界進出に非常な影響を及ぼすものであるとの意見で、協議會を開き對策を決することにした。これに對し會社の重役は「同氏は二週間病氣と稱して缺勤中町議の候補に立ち奔走してゐるので注意したが肯かなかつた。社規を紊すものと認める」と。

◇支那の大飢饉慘絕

支那は全土を通じて飢饉であるがわけても狹西省は近年にない大飢饉で、救濟委員會の調査によると昨年十二月以來餓死せるものは合計卅萬七千二百三十七人に達し五月以降の死亡者はますます多く目も當てられぬ慘狀にある。國民政府の基礎が確立したといつても依然として軍閥の社會は到底これ等の慘狀が救はれる筈がなく、支那の勞働者農民は極度に苦しんでゐるのは確だが、全國的にまた世界的の問題にもならずに今日まで來た理由もこゝにある。

◇全町に死の影濃く

靜岡縣堀の内町の町役場落成祝賀式に出した折詰が腐敗してゐて中毒患者續出し、患者合計四百名に達し内十二名は死亡した。外に生命危篤のもの二十名重輕患者三百六十四名といふ狀態で六月廿九日の現在では益々猛烈となり全町に死の影濃く凄慘を極めてゐる。

◇洋畫壇に誇る二少女

新興美術協會洋畫展は六月廿五日から十六日間上野美術館で開かれてゐるが、應募總數千五百點中入選畫百點、その中に十四歲の少女が靜物二點を出して入選した。この少女は豐田博江さんといひ大阪の某女學校の一年生で幼時から畫を描いて天分を認められてゐたまた十六歲の拘康子さんは自畫像ほか一點を出して共に入選して氣を吐いたが尙ほ同展では靑木畫伯作の脚本を上演する事になつて、右の二少女も加はる筈であると。

◇ステッキガールの出願

一體あるのかないのか正體も判らなかつたステッキガールについて、最近丸の內の某所から日比谷署へこのガール營業認可を願ひ出てきた。田村署長も頭を捻つて考へこんでゐるが、その願書には日く勉強のお相手、觀劇のお相手、食事のお相手、散步のお相手――と營業科目を擧げ時間による一定の料金制度でそれぞれ適當な婦人を派出させるといふにある。

◇片山潛氏の令孃ロシア行

在モスクワ片山潛老の次女千代子さんは、國を追はれて二十年。故鄕懷しさと娘に會ひたい父親の氣持に動かされて、單身ロシアをさして父に會ひに行くことになつた

編輯後記

『女人藝術』の一週年の記念の會が小石川の植物園であつた日のこと、私は少し早くいつて白山御殿の瀧のあとといふ高臺のあづまやに腰をかけて會場の方を見下し、しづかないい心持で喫煙してゐた。そこへ白いひとへの青年がとほりかゝつて佇んで會場の方を見下して私にたづねる。『今日何かこゝで催しがあるのですか』『ありますよあそこへ女の人々が三四十人あつまります。詩を書く人、歌をよむ人、小說の方の人、戯曲、評論の方の人つていふ風に……』いつのまにかその青年は腰かけてゐた見よ、會場は御殿のやうに、その中に一人二人と登場する和服、洋裝とりどりの姿の印象的なことよ『モダンガールもゐますね』『ゐますとも、見てごらんなさい、女人藝術にあつまつて活動してる方々なのです。』『女人藝術ですか、僕の妹が買つて來てよんでゐましたよ』と青年はいつた。（花世）

夏が來たら社が越すかミスカレーターでも出來なければ堪らないと話しあつて居たのに、もうその夏が來てしまつた。と云ふのは皆樣御存じですか。此の社へ毎日通つて來るには九段坂より倍も急な坂をのぼつて來なけりやならないのです。おまけに日蔭が殆どないのですから、あながち私達が贅澤を云つてるとは仰やつて下さいますな。（優子）

藝術祭の二十八日はいいお天氣だつた。ビラを撒いた前の日は雨で心配したがその心配は無用だつた。會場の入口で切符を受取つてゐると、どうしたものか左の口から入る人が多い。いくら、どうぞこちらから、はい切符をいたゞきませう、といつても右はとかくとだえがちである。何か之は人間の習性なのかなと考へさせられる。が面白いことには右に入る人があると、しばらくは右の方ばかりつゞくのである。（みどり）

林芙美子さんと私とは本社から、早大夏期講演旅行の一行に加はつて九州へ行く事になりました。十四日八幡市、十五日福岡市、十六日佐賀市、十七日武尾町、十八日福岡市、十九日早岐町、廿日佐世保市、廿一日長崎市、（以下林さんだけ）廿三日熊本市、廿四日川内市、廿五日鹿兒島市、廿六日國府町、廿八日宮崎市、廿九日大分市？卅日別府といふ順序で。福岡市では辻山春子さん方のお骨折で聯盟支部が出來ました。十八日にはたぶん集會を開くことになりませう。（八木）

諸方からの希望もあり中本、上田兩新進の文藝時評、劇評を載せた。引つゞいて、新進女性の素晴らしい意氣と、時代に對する確實性を期待して頂きたい。永島女史の社會時評の尖銳さはすでに定評になりつゝある。本誌の特色であり度い。（素子）

藝術祭は社會に對して大きな渦を卷き起した。あれ程大きな會を女達の手ばかりにやつたのは日本に於ては最初である、新聞社にしても今までのありきたりの女の集團と思つてか一向に注意をしなかつたのは殘念でもありまた一面からみれば社會の人達に鼻を開かした事にもなる。（西村）

未墾の土を耕して一年、人は田ひがけぬ收獲と慶すが、當前のァととしか考へられない。寧ろまだ姉妹は力を出し惜みしてゐると思ふほどである。隱忍し、押殺してゐたものをもつと發揚すべきである。一人が土を破つて起きあがらうとする時、萬人が引上げ押上げて、一人は一人と高きにのぼつてゆかなければならぬ。我「女人聯盟」はさうした意圖のもとに聯盟綱をつくつてゐる。

今日から第二年目の未墾土に新らしき鍬を入れるのだ。なんと鍬の數のおびただしくましたことよ！女人聯盟員は全國的には、荒いカスリのやうに未だポチポチではあるが、五人三人と皆同時に鍬を振上げてゐる。――我等の上に陽は輝く！　やがて、この鍬の數が殖へていつたならば、どんなに目覺しい働きと收獲があるだらう。ここに、振りかへつて見た一年に對して、愛讀者、聯盟諸氏、私を助けてくださる編輯諸氏に心からのお禮を述べます（時雨）

昭和四年七月十五日印刷
昭和四年八月一日發行（毎月一回一日發行）

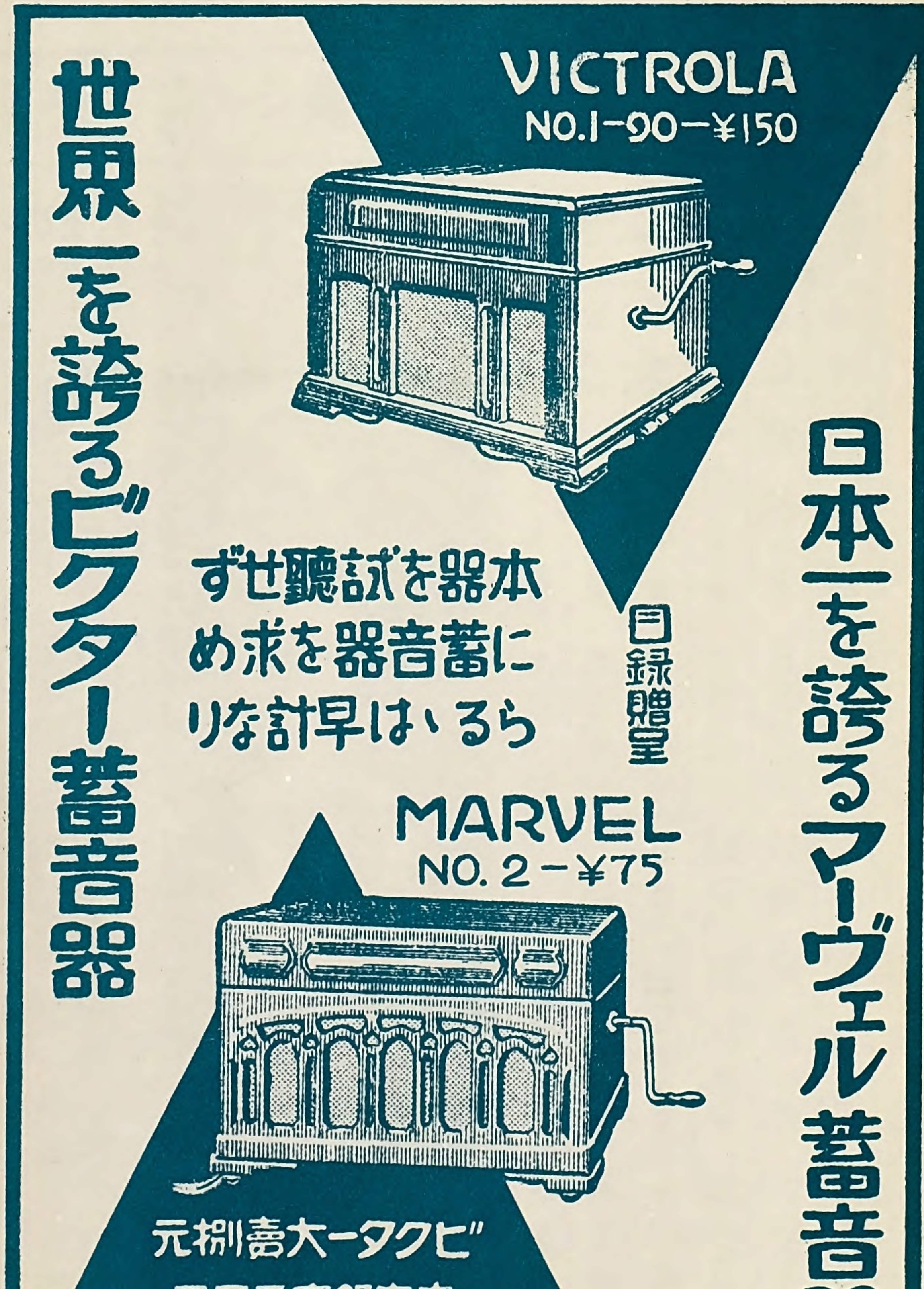
送料一部壹錢五厘

定價	
1部	40錢
6部	2.30錢
12部	4.50錢

□誌代の拂込みは成可く振替利用を乞ふ
□郵便切手代用は一割増の事。

發行者兼印刷者——長谷川時雨
編輯者——素川絹子
印刷所——秀英舍
大賣捌——東京堂　東海堂　大東館　北隆館　京北

發行所　東京市牛込區左内町三十一番地　女人藝術社
電話牛込(24)一七八九　振替東京七五八二五


世界一を誇るビクター蓄音器
VICTROLA
NO.1-90-¥150
本器を試聴せず
に蓄音器を求め
らるゝは早計なり
目録贈呈
日本一を誇るマーヴェル蓄音器
MARVEL
NO. 2-¥75
ビクター大賣捌元
東京銀座三丁目
十字屋楽器店

昭和三年九月六日第三種郵便物認可
昭和四年七月十五日印刷納本
昭和四年八月一日發行（毎月一回一日發行）

第二巻第八號

定價金四十錢（送料金一錢五厘）